

京都府遺跡調査報告集

第146冊

1. 松山遺跡第4次
2. 柿谷古墳・美濃山遺跡
3. 上狛北遺跡第1次・柳田遺跡
4. 椿井遺跡第3・4次

2011

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターは昭和56年4月に設立され、本年度で創立30年を迎えました。この間、当調査研究センターでは京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方のご理解とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

本書は『京都府遺跡調査報告集』として、平成21年度に京都府建設交通部の依頼を受けて実施した上狛北遺跡・柳田遺跡、平成21・22年度に京都府農林水産部の依頼を受けて実施した椿井遺跡、平成22年度に京都府農林水産部の依頼を受けて実施した松山遺跡、京都府建設交通部の依頼を受けて実施した柿谷古墳・美濃山遺跡の発掘調査報告を収録したものです。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深めるうえで、ご活用いただければ幸いです。

発掘調査を依頼された京都府建設交通部と京都府農林水産部をはじめ、京都府教育委員会・京丹後市教育委員会・八幡市教育委員会・木津川市教育委員会などの各関係機関、ならびに調査にご参加、ご協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成23年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理 事 長 上 田 正 昭

例 言

1. 本書に収めた報告は下記のとおりである。

松山遺跡第4次

柿谷古墳・美濃山遺跡

上狛北遺跡第1次・柳田遺跡

椿井遺跡第3・4次

2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者および報告の執筆者は下表のとおりである。

	遺 跡 名	所 在 地	調 査 期 間	経 費 負 担 者	執 筆 者
1.	松山遺跡第4次	京丹後市大宮町森本地内	平成22年5月25日～10月28日	京都府農林水産部	奈良康正・黒坪一樹
2.	柿谷古墳・美濃山遺跡	八幡市内里柿谷、美濃山大塚	平成22年7月26日～平成23年1月13日	京都府建設交通部	引原茂治
3.	上狛北遺跡第1次・柳田遺跡	木津川市山城町上狛宝本・西浦代ほか、椿井柳田	平成21年10月27日～平成22年2月25日	京都府建設交通部	筒井崇史
4.	椿井遺跡第3・4次	木津川市山城町椿井松尾・御霊後	平成21年10月28日～平成22年2月18日、平成22年8月10日～11月21日	京都府農林水産部	松尾史子・黒坪一樹

3. 本書で使用している座標は、原則として世界測地系国土地標第6座標系によっており、方位は座標の北をさす。また、国土地理院発行地形図の方位は経度の北をさす。

4. 本書の編集は、調査第2課調査担当者の編集原案をもとに、調査第1課資料係が行った。

5. 現場写真は主として調査担当者が撮影し、遺物撮影は、調査第1課資料係主任調査員田中彰が行った。

本文目次

1. 松山遺跡第4次発掘調査報告	1
2. 柿谷古墳・美濃山遺跡発掘調査報告	49
3. 上狛北遺跡第1次・柳田遺跡発掘調査報告	69
4. 椿井遺跡第3・4次発掘調査報告	81

挿図目次

1. 松山遺跡第4次

第1図 調査地及び周辺遺跡位置図	1
第2図 調査地区配置図	3
第3図 A・B地区遺構配置図	5
第4図 A地区東壁土層断面図	6
第5図 A地区東・南壁土層断面図	7
第6図 B地区東壁土層断面図	9
第7図 A・B地区溝SD01平面図	11
第8図 A地区土坑SK15、ピットSP16遺物出土状況図	12
第9図 B地区土坑SX07・SK08平・断面図	13
第10図 B地区土坑SK11平・断面図	14
第11図 C地区遺構配置図	15
第12図 C地区北・南壁、溝SD03土層断面図	16
第13図 D地区遺構配置図	17
第14図 D地区北・南壁土層断面図	18
第15図 D地区土坑SK01平・断面図	19
第16図 出土遺物実測図(1)	21
第17図 出土遺物実測図(2)	22
第18図 出土遺物実測図(3)	24
第19図 出土遺物実測図(4)	25
第20図 出土遺物実測図(5)	26
第21図 出土遺物実測図(6)	26
第22図 出土遺物実測図(7)	27
第23図 出土遺物実測図(8)	28
第24図 出土遺物実測図(9)	29

第25図	出土遺物実測図(10)	-----	30
第26図	出土遺物実測図(11)	-----	31
第27図	出土遺物実測図(12)	-----	32
第28図	出土遺物実測図(13)	-----	34
第29図	出土遺物実測図(14)	-----	35
第30図	出土遺物実測図(15)	-----	36
第31図	出土遺物実測図(16)	-----	38
第32図	出土遺物実測図(17)	-----	39
第33図	出土遺物実測図(18)	-----	39
第34図	出土遺物実測図(19)	-----	40
第35図	出土遺物実測図(20)	-----	41
第36図	出土遺物実測図(21)	-----	42
第37図	出土遺物実測図(22)	-----	43
第38図	出土遺物実測図(23)	-----	44
第39図	出土遺物実測図(24)	-----	45
第40図	出土遺物実測図(25)	-----	46

2. 柿谷古墳・美濃山遺跡

第1図	調査地及び周辺遺跡分布図	-----	50
第2図	調査区配置図	-----	51
第3図	柿谷古墳調査前地形図	-----	52
第4図	柿谷古墳地形図	-----	52
第5図	柿谷古墳断面図	-----	53
第6図	柿谷古墳第1主体部実測図	-----	55
第7図	柿谷古墳第2主体部実測図	-----	56
第8図	柿谷古墳第3主体部実測図	-----	57
第9図	柿谷古墳下層墳丘平面図	-----	58
第10図	美濃山遺跡B地区実測図	-----	59
第11図	出土遺物実測図(1)	-----	60
第12図	出土遺物実測図(2)	-----	62
第13図	出土遺物実測図(3)	-----	63
第14図	出土遺物実測図(4)	-----	64
第15図	出土遺物実測図(5)	-----	66
第16図	出土遺物実測図(6)	-----	67

3. 上狛北遺跡第1次・柳田遺跡

第1図	上狛北遺跡周辺主要遺跡分布図	69
第2図	調査区配置図	71
第3図	第1トレンチ上層遺構配置・土層断面図	72
第4図	第2・3トレンチ下層遺構配置・土層断面図	74
第5図	第1・2トレンチ出土遺物実測図	75
第6図	第4～6トレンチ平・断面図	76
第7図	第7～10トレンチ平・断面図	78
第8図	第4～10トレンチ出土遺物実測図	79

4. 椿井遺跡第3・4次

第1図	調査地及び周辺遺跡位置図	82
第2図	第3次調査トレンチ配置図	83
第3図	第3次調査1～3トレンチ平面図	84
第4図	1トレンチ土層図	85
第5図	土坑S X43実測図	85
第6図	溝S D44、土坑S K46実測図	86
第7図	掘立柱建物跡S B01・02、柵列S A01実測図	87
第8図	溝S D18実測図	88
第9図	第3次調査出土遺物実測図(1)	89
第10図	第3次調査出土遺物実測図(2)	90
第11図	第4次調査トレンチ配置図	90
第12図	1～3トレンチ平面図	91
第13図	方形周溝墓状遺構S X49実測図	92
第14図	土坑S K53・55実測図	92
第15図	溝S D80実測図	93
第16図	柵列S A03実測図	93
第17図	第4次調査出土遺物実測図(1)	94
第18図	第4次調査出土遺物実測図(2)	95
第19図	5トレンチ平面図	97
第20図	古墳1石室実測図	98
第21図	第4次調査出土遺物実測図(3)	99
第22図	古墳2周溝遺物出土状況実測図	100
第23図	古墳2石室実測図	101
第24図	第4次調査出土遺物実測図(4)	101

図版目次

1. 松山遺跡第4次

- 図版第1 (1) A・B地区全景(北東から)
(2) A・B地区全景(上が南東)
- 図版第2 (1) C・D地区全景(北西から)
(2) C・D地区全景(上が北西)
- 図版第3 (1) A地区溝SD01完掘状況(北西から)
(2) A地区溝SD01完掘状況(東から)
- 図版第4 (1) A地区溝SD01自然木出土状況(東から)
(2) A地区土坑SX02完掘状況(南から)
(3) A地区溝SD03完掘状況(北東から)
- 図版第5 (1) A地区溝SD03南壁土層断面(北東から)
(2) A地区土坑SK15遺物出土状況(北から)
(3) A地区土坑SK15完掘状況(北東から)
- 図版第6 (1) A地区ピットSP16遺物出土状況(南西から)
(2) A地区ピットSP16完掘状況(北西から)
(3) A地区南西部検出遺構完掘状況(南西から)
- 図版第7 (1) B地区東壁土層断面(北西から)
(2) B地区溝SD01a土層断面(北西から)
(3) B地区溝SD01b土層断面(北西から)
- 図版第8 (1) B地区土坑SX07・SK08完掘状況(北東から)
(2) B地区土坑SX07・SK08完掘状況(北西から)
(3) B地区土坑SK11完掘状況(北西から)
- 図版第9 (1) C地区全景(北東から)
(2) C地区全景(南西から)
(3) C地区南壁土層断面(北東から)
- 図版第10 (1) C地区溝SD03完掘状況(北西から)
(2) D地区全景(北東から)
(3) D地区全景(南西から)
- 図版第11 (1) D地区南壁土層断面(北東から)
(2) D地区土坑SK01完掘状況(南西から)
(3) D地区土坑SK01遺物出土状況(東から)
- 図版第12 (1) D地区上層遺構完掘状況(北西から)

- (2) D地区34号支線排水路地点全景(北西から)
- (3) D地区34号支線排水路地点南壁土層断面(北東から)

- 図版第13 出土遺物 1
- 図版第14 出土遺物 2
- 図版第15 出土遺物 3
- 図版第16 出土遺物 4
- 図版第17 出土遺物 5
- 図版第18 出土遺物 6
- 図版第19 (1)出土遺物 7
(2)出土遺物 8
- 図版第20 (1)出土遺物 9
(2)出土遺物10
- 図版第21 出土遺物11
- 図版第22 (1)出土遺物12
(2)出土遺物13

2. 柿谷古墳・美濃山遺跡

- 図版第 1 (1) 柿谷古墳・美濃山遺跡 A 地区調査前全景(西から)
(2) 柿谷古墳・美濃山遺跡 A 地区調査前全景(北西から)
- 図版第 2 (1) 柿谷古墳調査前全景(南西から)
(2) 柿谷古墳全景(西から)
- 図版第 3 (1) 柿谷古墳墳頂部石造物(北東から)
(2) 柿谷古墳墳丘南断面(西から)
(3) 柿谷古墳墳丘北断面(東から)
- 図版第 4 柿谷古墳第 1 主体部(西から)
- 図版第 5 (1) 柿谷古墳第 1 主体部(北から)
(2) 柿谷古墳第 1 主体部西側遺物出土状況(東から)
- 図版第 6 (1) 柿谷古墳第 2 主体部(西から)
(2) 柿谷古墳主体部完掘状況(南西から)
- 図版第 7 (1) 柿谷古墳第 3 主体部(東から)
(2) 柿谷古墳第 3 主体部甕棺内部(東から)
- 図版第 8 (1) 柿谷古墳・美濃山遺跡 A 地区(北西から)
(2) 柿谷古墳・美濃山遺跡 A 地区(南西から)
- 図版第 9 (1) 柿谷古墳第 1 主体部鉄製品出土状況(南から)
(2) 柿谷古墳旧表土上土器出土状況(東から)

- (3) 柿谷古墳下層墳丘(西から)
- 図版第10 (1) 柿谷古墳下層墳丘(南西から)
- (2) 柿谷古墳下層墳丘(北西から)
- (3) 美濃山遺跡B地区調査前全景(北西から)
- 図版第11 (1) 美濃山遺跡B地区(北東から)
- (2) 美濃山遺跡B地区土壙S K 7(北から)
- (3) 美濃山遺跡B地区溝S D17(南西から)
- 図版第12 出土遺物 1
- 図版第13 出土遺物 2
- 図版第14 出土遺物 3
- 図版第15 出土遺物 4
- 図版第16 出土遺物 5

3. 上狛北遺跡第1次・柳田遺跡

- 図版第1 (1) 調査地全景(南から)
- (2) 第1～3トレンチ全景(真上から：上が西)
- 図版第2 (1) 第1トレンチ上層遺構全景(東から)
- (2) 第1トレンチ土層断面(東から)
- (3) 第1トレンチ上層溝S D24遺物出土状況
- 図版第3 (1) 第1トレンチ作業風景(東から)
- (2) 第2トレンチ上層遺構全景(北から)
- (3) 第2トレンチ作業風景(北から)
- 図版第4 (1) 第2トレンチ下層遺構全景(北から)
- (2) 第2トレンチ下層溝S D21遺物出土状況(東から)
- (3) 第2トレンチ下層溝S D21遺物出土状況(東から)
- 図版第5 (1) 第2トレンチ下層溝S D21土層断面(北から)
- (2) 第3トレンチ上層遺構全景(南東から)
- (3) 第3トレンチ作業風景(南から)
- 図版第6 (1) 第3トレンチ下層遺構全景(西から)
- (2) 第3トレンチ下層溝S D21遺物出土状況
- (3) 第4トレンチ調査前状況(北から)
- 図版第7 (1) 第4トレンチ全景(北から)
- (2) 第4トレンチ西壁土層断面
- (3) 第5トレンチ全景(北から)
- 図版第8 (1) 第5トレンチ南端西壁土層断面(東から)

- (2) 第6トレンチ重機掘削作業(北東から)
- (3) 第6トレンチ北壁土層断面(南から)
- 図版第9 (1) 第7トレンチ全景(北から)
- (2) 第7トレンチ南壁土層断面(北から)
- (3) 第8トレンチ全景(南から)
- 図版第10 (1) 第8トレンチ断ち割り作業(南西から)
- (2) 第9トレンチ全景(南から)
- (3) 第9トレンチ北壁土層断面(南から)
- 図版第11 (1) 第9トレンチ作業風景(西から)
- (2) 第10トレンチ全景(南から)
- (3) 第10トレンチ北土層断面(南から)
- 図版第12 (1) 出土遺物1
- (2) 出土遺物2

4. 椿井遺跡第3・4次

- 図版第1 調査地近景(北東から)
- 図版第2 (1) 調査地近景(西から：奥は松尾神社)
- (2) 1トレンチ全景(南から)
- (3) 2トレンチ全景(南から)
- 図版第3 (1) 2トレンチ中央部(上空から)
- (2) 掘立柱建物跡S B01・02(南東から)
- 図版第4 (1) 溝S D49全景(東から)
- (2) 溝S D49完掘状況(東から)
- (3) 溝S D49断面1(北から)
- (4) 溝S D49断面2(北から)
- 図版第5 (1) 炉跡S X43上層柱穴群(北東から)
- (2) 炉跡S X43完掘状況(南東から)
- 図版第6 (1) 炉跡S X43上層遺物出土状況(北西から)
- (2) 炉跡S X43(北から)
- (3) 土坑S K46(北東から)
- 図版第7 (1) 3トレンチ全景(北から)
- (2) 溝S D18全景(北東から)
- 図版第8 (1) 調査地遠景(北から)
- (2) 調査地遠景(南から)
- 図版第9 (1) 1トレンチ全景(北から)

- (2) 方形周溝墓状遺構 S X 49 検出状況(南から)
- (3) 流路 S R 76 全景(東から)
- 図版第10 (1) 土坑 S K 53 遺物出土状況(北東から)
- (2) 土坑 S K 55 遺物出土状況(西から)
- (3) 溝 S D 80 遺物出土状況(南東から)
- 図版第11 (1) 2 トレンチ全景上層(南から)
- (2) 2 トレンチ全景下層(南から)
- (3) 3 トレンチ全景(北から)
- (4) 4 トレンチ全景(南から)
- 図版第12 (1) 5 トレンチ全景(西から)
- (2) 古墳 1 全景(西から)
- 図版第13 (1) 古墳 1 石室検出状況(南東から)
- (2) 古墳 1 石室全景(南東から)
- (3) 古墳 1 石室完掘状況(南東から)
- 図版第14 (1) 古墳 1 鉄鏃出土状況(南から)
- (2) 古墳 1 刀子出土状況(南から)
- (3) 古墳 1 須恵器出土状況(西から)
- 図版第15 (1) 古墳 2 全景(北東から)
- (2) 古墳 2 石室全景(南から)
- (3) 古墳 2 石室全景(北から)
- 図版第16 (1) 古墳 2 石室完掘状況(北から)
- (2) 古墳 2 周溝遺物出土状況(南から)
- (3) 古墳 2 周溝断面(南から)
- 図版第17 第 3 次調査出土遺物 1
- 図版第18 第 3 次調査出土遺物 2
- 図版第19 (1) 第 3 次調査出土遺物 3
- (2) 第 4 次調査出土遺物 1
- 図版第20 第 4 次調査出土遺物 2
- 図版第21 第 4 次調査出土遺物 3
- 図版第22 (1) 第 4 次調査出土遺物 4
- (2) 第 4 次調査出土遺物 5

施された。

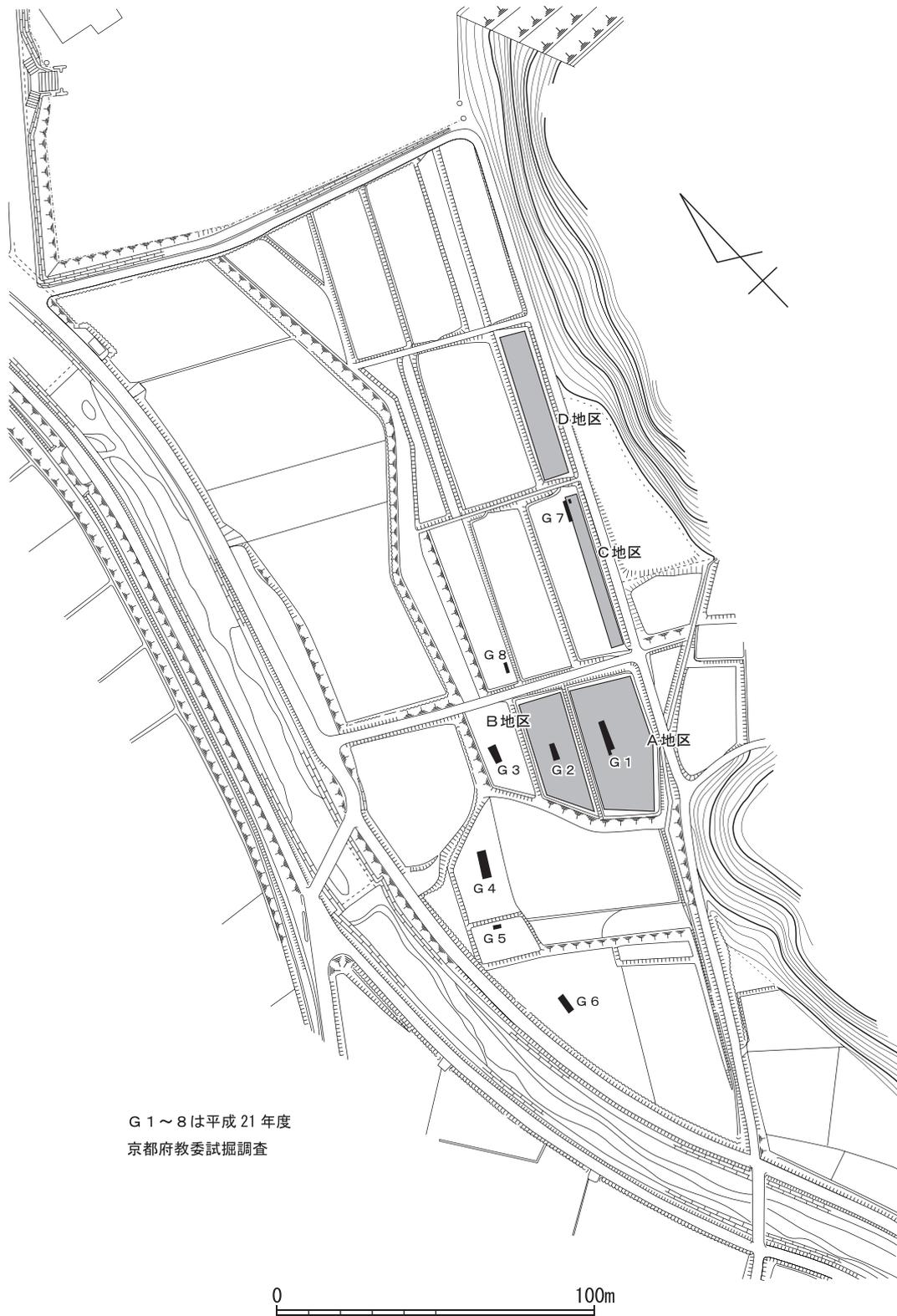
第1・2次調査は京丹後市教育委員会により、第3次調査は京都府教育委員会によりそれぞれ実施されている。^(注1)第1次調査は松山遺跡の南側、竹野川氾濫原と想定される低位部において、第2次調査は北側の丘陵裾部と第1次調査と同様に竹野川に近接する低位部において、それぞれ調査区を設定して行われた。調査の結果、低位部において遺跡の兆候は確認されなかったが、丘陵裾部においては、1.0mに及ぶ盛土層の下に、削平を受けながらも遺物包含層及び遺構面が残存することが確認されている。また、第3次調査は、遺跡のほぼ中央部付近において7か所(第2図G1～5、G7・8)にわたって試掘調査が行われ、竪穴式住居跡、流路跡等が検出され、縄文時代から近世に及ぶ遺物が出土している。なお、この際には京都府教育委員会により、マンジョウ寺遺跡においても同様に遺跡の範囲・内容を確認するための発掘調査(第2図G6)が実施されている。

今回の調査対象地の選定は、上記の第1～3次調査の成果に基づいている。

松山遺跡の立地する竹野川上流域の森本盆地には、多くの埋蔵文化財包蔵地が所在する。南側に隣接するマンジョウ寺遺跡では、多くのミニチュア土器が表採されており、いずれもが手捏ねの粗製品であると報告されている。^(注2)竹野川に面した立地をしており、水辺で執り行われた祭祀に関連する遺物と評価されている。南側丘陵上には宮ノ奥古墳群が所在する。方墳3基が完存しているが、これまでに発掘調査が実施されたことがなく詳細は不明である。また、大宮第三小学校をはさんで北側に所在する沖田遺跡では、平成12年度に今回と同様には場整備事業に伴って発掘調査が実施されており、縄文時代から中世にかけての遺物が出土している。周辺部において、各時期の集落が断続的ではありながら営まれていたことが判明した。^(注3)沖田遺跡の北西側には稲荷岡遺跡が所在する。当遺跡は、平成9年度に大宮町教育委員会(現京丹後市教育委員会)により実施された、沖田遺跡の範囲・内容確認調査により新たに確認された埋蔵文化財包蔵地である。^(注4)その調査の際には、弥生時代中期の遺物と、流路に伴う護岸施設等が検出されている。また、北東1.0kmの地点には延利遺跡が所在する。小規模なグリッドによる試掘調査が実施されているのみで、顕著な遺構は検出されていないが、弥生時代前～後期、古墳時代後期の遺物が出土している。竹野川左岸の微高地上には、当該期の集落が存在するものと推定されている。^(注5)

今回の調査は、ほ場整備事業に際し切土施工が計画されている地点のうち、先の範囲・内容確認調査の結果、遺跡に影響が及ぶ地点において実施した。事業地内に4か所の調査区を設定し、南からそれぞれA～D地区とした。なお、今回の調査は第4次となる。また、同事業に関連して、C地区の北西に隣接する地点において、京都府教育委員会並びに京丹後市教育委員会が、それぞれ発掘調査を実施しており、京都府教育委員会が第5次、京丹後市教育委員会が第6次である。調査成果に関しては、各調査実施機関の刊行する調査報告書を参照願いたい。

平成22年9月23日には調査成果に係る現地説明会を実施した。降雨の中、62名の参加を得た。また、同月28日には、京丹後市立大宮第三小学校の児童に対し、京都府丹後広域振興局地域づくり推進室と共同で遺跡発掘体験学習会を実施した。当日は19名の児童が熱心に学習した。



G 1～8は平成 21 年度
京都府教委試掘調査

第2図 調査地区配置図

本報告は奈良と黒坪一樹が執筆した。なお文責は文末に明記した。使用した国土座標は世界測地系である。土層の注記には『新版標準土色帖』を用いた。

現地調査に当たっては、京都府教育委員会並びに京丹後市教育委員会の御指導・御助言をいただいた。また、地元森林組合、各自治会には御高配を賜った。記して感謝します。

現地調査責任者 調査第2課長 肥後弘幸

調査担当者 調査第2課課長補佐兼調査第1係長 小池 寛

同 第2係長 森 正

同 主任調査員 引原茂治・戸原和人

同 調査員 奈良康正

調査場所 京丹後市大宮町森本地内

現地調査期間 平成22年5月25日～10月28日

調査面積 1,850㎡

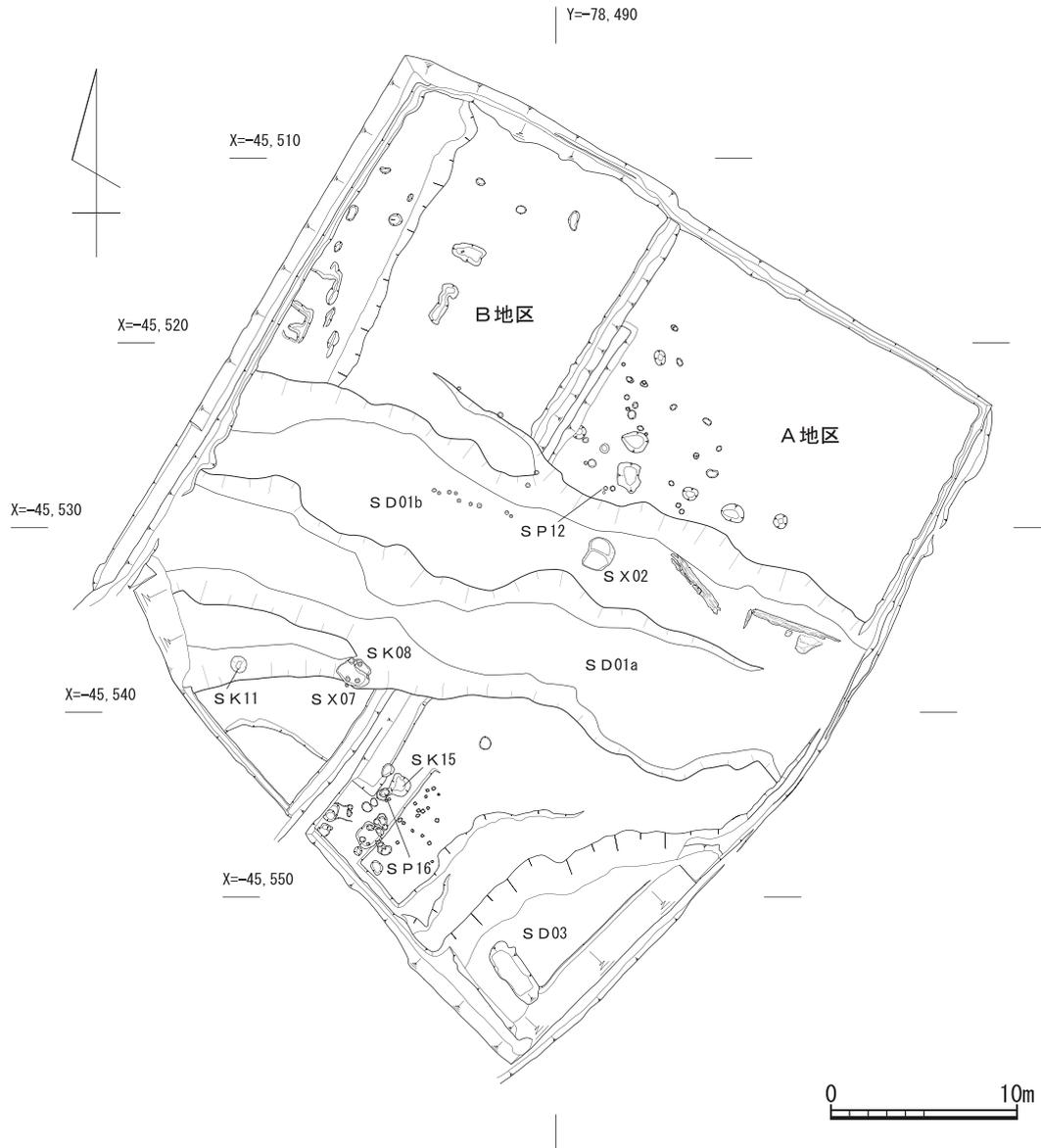
2. 調査成果

1) A地区

A地区は、京都府教育委員会の試掘調査G1の調査成果に基づき設定した。府教委の調査では、遺構を2面にわたって確認しており、上層では床土直下で各時代の遺物を含む流路、土坑、柱穴等を検出し、下層では古墳時代の竪穴式住居跡が確認されている。当該水田は全面にわたって0.92mの切土施工が計画されているため、筆全体を対象として調査を実施することとされた。調査地点の現標高は91.12mを測る。調査区は、設定に際し既存の畦畔に規制されたため、変則的な五角形となった。なお、調査の最終段階では、隣接するB地区へと遺構が続いていたため、該当部分の畦畔を取り払って調査を実施した。調査面積は751㎡である。

調査着手に先立ち、まず、重機により耕作土の除去を行った。その後、土層を確認しつつ後世の客土の掘削を行った。調査区北側では耕作土、床土直下で礫を多く含む明オリブ灰色砂質土となり、柱穴等の遺構を検出したため、この上面で重機による掘削を終了した。また、中央付近では、人力による精査を行った結果、溝S D01や土坑S X02を検出した。溝S D01は、京都府教育委員会が実施した発掘調査により、その一部が確認されていたもので、今回の調査によりその全容が判明した。溝の両肩部には黒褐色シルトが堆積しており、ベース面との強いコントラストによって、明瞭に把握することができた。幅はおよそ9.0～15.0mを測り、調査区内ではおよそ20mにわたって検出した。東壁際で行った断ち割りにより、2条の溝が切り合っていることが判明したため、南側をS D01a、北側をS D01bとした。調査区の南半部では、東端で溝S D03を検出した。南西部の平坦面では土坑、柱跡を検出した。

溝S D01 a 東端で約5.0m、西端で約12.0mの幅をそれぞれ測る。底面のレベルは東端で90.13m、西端で89.59mとなっていた。埋土は全体的に礫を多く含み、北半では褐灰色砂質土の堆積を基本としていたが、南半では浅黄色・灰黄褐色・灰オリブ色砂質土が堆積しており、肩



第3図 A・B地区遺構配置図

部には黒褐色シルトが堆積していた。また、埋土に含まれる礫の中には1.0mを超える巨礫も存在していた。今回の調査地は、東側に存在する谷の開口部に位置しており、現在でも豊富な湧水が絶えることなく流れ下ってきている。このS D01aは、谷の上側で発生した土石流が竹野川の流れる低位部へ向かって流れ下りた痕跡であると考えられる。内部からは多量の礫に挟み込まれるように、縄文時代から中世にかけての遺物が出土している。上・下層の別なく、新旧の時期の遺物が混在する状況であった。また、A地区で遺構検出面となったベース面は安定しておらず、広い範囲にわたって礫を多く含んでいることから、この谷自体を埋没させた古い時期の大規模な土石流によって形成されたと考えられる。

溝S D 01 b 南側をS D 01 aに切られているため規模は不明であるが、検出範囲では東端で約4.6 m、西端で約9.7 mの幅をそれぞれ測る。底面のレベルは東端で90.40 m、西端で90.12 mとなっていた。埋土は灰黄色砂質土がベースとなり、間に薄くにおい黄橙色砂質土や黒褐色砂

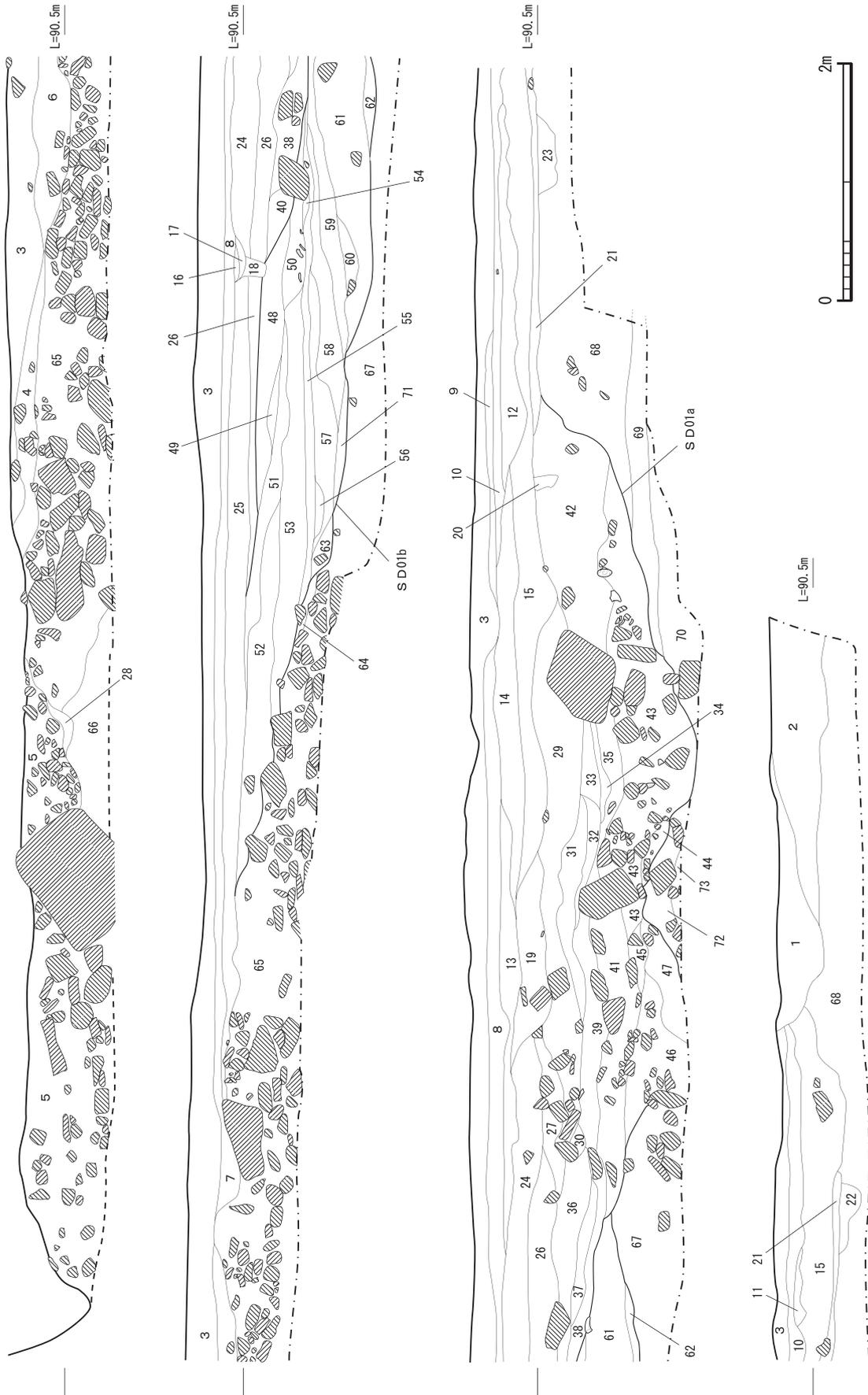


第4図 A地区東壁土層断面図



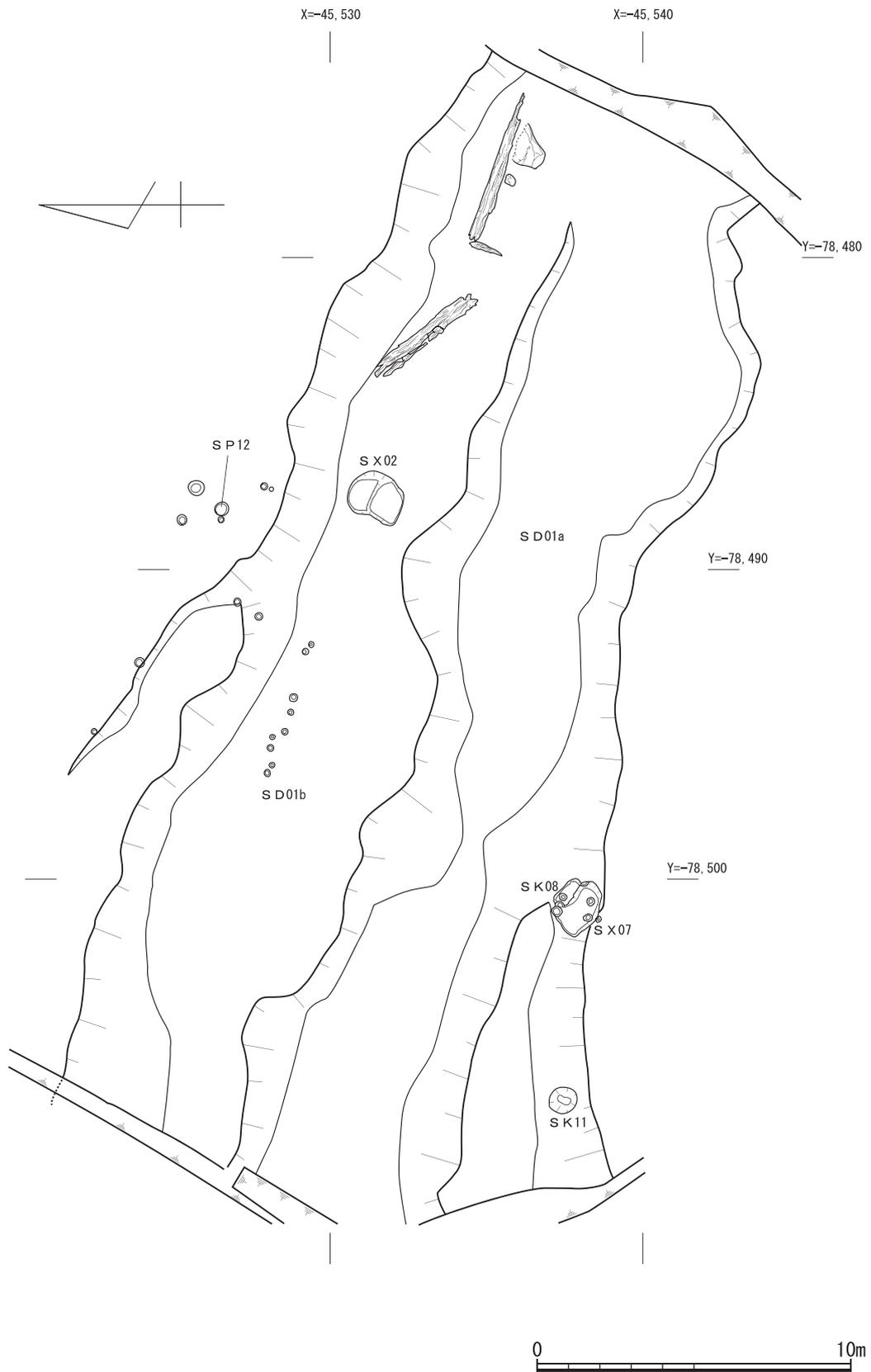
第5図 A地区東・南壁土層断面図

1. 耕作土
2. におい赤褐色(5YR5/4)砂質土(細～中砂)
3. 灰黄褐色(10YR4/2)砂質土(シルト～粗砂)
4. におい黄色(2.5Y6/3)砂質土(細～極粗砂)
5. 灰黄色(2.5Y6/2)砂質土(細～中砂)に黒褐色(10YR3/2)シルト塊が50%程度混入
6. におい黄橙色(10YR6/4)砂質土(シルト～細砂)
7. 暗灰黄色(2.5YR5/2)砂質土(シルト～中砂)
8. 灰黄色(2.5Y7/2)砂質土(細砂)
9. 褐灰色(10YR5/1)砂質土(細～粗砂)φ1～2cm程の礫を僅かに含む
10. 褐灰色(7.5YR4/1)砂質土(シルト～中砂)
11. 黄灰色(2.5YR5/1)砂質土(粗砂)φ1～3cm程の礫を多く含む
12. 褐灰色(7.5YR5/1)砂質土(中～粗砂)φ2～5cm程の礫を含む
13. 褐灰色(7.5YR4/1)砂質土(中～粗砂)
14. 浅黄色(2.5Y7/4)砂質土(粗砂)
15. 灰黄褐色(10YR5/2)砂質土(細～中砂)
16. 灰オリーブ色(5Y5/2)砂質土(極細～細砂)
17. 黒褐色(10YR3/2)シルト
18. 褐灰色(10YR4/1)砂質土(シルト～極細砂)
19. 青灰色(5GB6/1)砂質土(シルト～極細砂)
20. 暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土(シルト～細砂)に黒褐色(7.5YR3/1)シルト塊が50%程度混入
21. におい黄橙色(10YR6/3)砂質土(細～粗砂)
22. 灰黄色(2.5Y6/2)砂質土(細～粗砂)
23. 黒褐色(10YR2/2)砂質土(シルト)に青灰色(5GB6/1)砂質土(細砂)が層状に堆積
24. 22に同じ
25. 灰黄色(2.5Y7/2)砂質土(極細～中砂)に青灰色(5GB6/1)砂質土(細砂)を層状に含む
26. 黒褐色(10YR3/2)シルト、φ5～7cm程の礫を含む
27. 浅黄色(2.5Y7/4)砂質土(細～極粗砂)
28. 黄褐色(2.5Y5/3)砂質土(細～極粗砂)しまりなく、φ0.5～1cm程の礫を多く含む
29. 暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土(細～中砂)に黒褐色(10YR3/2)シルト塊が50%程度混入
30. 黄褐色(2.5Y5/3)砂質土(細～極粗砂)
31. 暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土(シルト～粗砂)
32. 灰褐色(7.5YR6/2)砂質土(シルト～中砂の互層堆積)
33. 黄灰色(2.5Y5/1)砂質土(極細～極粗砂)
34. 明黄褐色(10YR6/6)砂質土(中～極粗砂)
35. 灰黄褐色(10YR6/2)砂質土(細～中砂)
36. 灰黄色(2.5Y6/2)砂質土(シルト～細砂)
37. におい黄色(2.5Y6/3)砂質土(細～中砂)
38. におい黄橙色(10YR6/4)砂質土(シルト～極粗砂)
39. 灰黄色(2.5Y6/2)砂質土(シルト～極粗砂)
40. 灰黄褐色(10YR5/2)砂質土(シルト～中砂)に黒褐色(7.5YR3/1)シルト塊が30%程度混入
41. 灰オリーブ色(5Y6/2)砂質土(シルト～中砂)
42. におい黄色(2.5Y6/3)砂質土(シルト～細砂)に明赤褐色(5YR5/8)砂質土(細砂)を層状に含む
43. 明赤褐色(5YR5/8)砂質土(細～極粗砂)
44. におい黄橙色(10YR6/3)砂質土(細～中砂)ににおい赤褐色(5YR4/4)砂質土(中砂)を層状に含む
45. 灰色(10Y5/1)砂質土(シルト～極粗砂)
46. 灰黄色(2.5Y7/2)砂質土(細～粗砂)
47. 明赤褐色(5YR5/8)砂質土(細～中砂)とにおい黄橙色(10YR6/3)砂質土(中砂)の互層堆積
48. 暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土(シルト～粗砂)
49. 明緑灰色(10GY7/1)砂質土(細～極粗砂)
50. オリーブ灰色(5GY6/1)砂質土(細～極粗砂)φ1～3cm程の礫を多く含む
51. 青黒色(10GB2/1)シルト
52. 明オリーブ灰色(5GY7/1)砂質土(細～粗砂)に橙色極粗砂(7.5YR6/8)を層状に含む
53. 明黄褐色(2.5Y7/6)粘質土
54. オリーブ黄色(5Y6/4)砂質土(シルト～極粗砂)
55. 明褐色(5YR5/8)砂質土(中～極粗砂)
56. 暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土(シルト～中砂)
57. 灰黄褐色(10YR4/2)砂質土(細～極粗砂)
58. におい黄色(2.5Y6/3)砂質土(細～中砂)
59. 明赤褐色(5YR5/8)砂質土(シルト～粗砂)
60. 58に同じ
61. 59に同じ
62. 暗赤褐色(5YR3/2)砂質土(極細～粗砂)
63. 62に同じ
64. 黄褐色(2.5Y5/3)砂質土(細～粗砂)に黒褐色(7.5YR3/1)シルト塊が10%程度混入
65. 灰黄褐色(10YR4/2)砂質土(中～極粗砂)
66. におい褐色(7.5YR5/4)砂質土(中～粗砂)

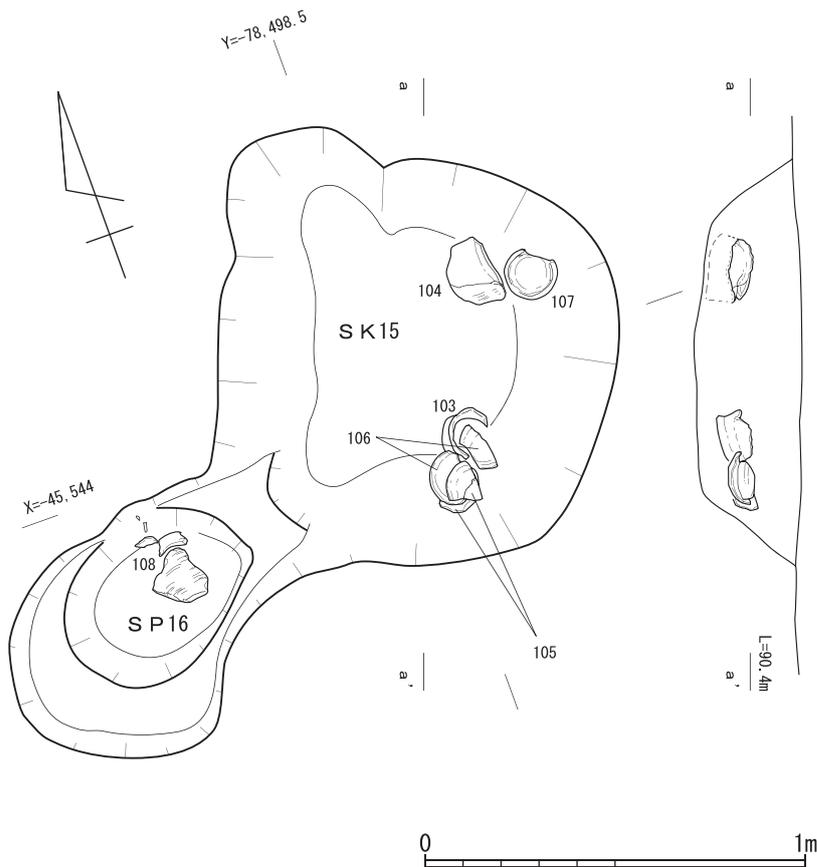


第6図 B地区東壁土層断面図

1. 攪乱
2. 灰黄色(2.5Y6/2)砂質土(細～粗砂)
3. 2に同じ
4. 黄灰色(2.5Y4/1)砂質土(極細～中砂)
5. 灰黄褐色(10YR6/2)砂質土(細砂)に褐色(7.5YR4/4)砂質土(細砂、 ϕ 0.1～1m超の礫を多量に含む)が40%程度混入
6. 黒褐色(2.5Y3/1)砂質土(極細～中砂)
7. にぶい黄色(2.5Y6/3)砂質土(細砂～粗砂)
8. 7と同一層
9. 7に同じ
10. 灰褐色(7.5YR5/2)砂質土(極細～粗砂)
11. 灰褐色(7.5YR5/2)砂質土(シルト～中砂)に明褐色(7.5YR5/8)砂質土が全体的に混入
12. 11に同じ
13. 灰色(5Y6/1)砂質土(極細～極粗砂)に明黄褐色(2.5Y6/8)砂質土が全体的に僅かに混入
14. 灰黄褐色(10YR4/2)砂質土(シルト～極粗砂)
15. 褐灰色(10YR4/1)砂質土(シルト～中砂)
16. にぶい黄褐色(10YR6/4)砂質土(極細～細砂)
17. 黄灰色(2.5Y5/1)砂質土(極粗砂)下層は ϕ 0.5cm程の垂円礫となる
18. 暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土(中～極粗砂)
19. 暗褐色(10YR3/3)砂質土(シルト～中砂) ϕ 0.5～1cm程の礫を僅かに含む
20. 暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土(細砂) ϕ 0.5cm程の礫を僅かに含む
21. 黒褐色(10YR3/2)砂質土(シルト～細砂)に黒色(10YR2/1)砂質土(シルト～極細砂)が50%程度混入
22. 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)砂質土(細～中砂)
23. 22に同じ
24. 灰黄褐色(10YR4/2)砂質土(極細～粗砂)
25. 24に同じ
26. 黒褐色(10YR3/1)砂質土(細～粗砂)
27. 灰黄褐色(10YR5/2)砂質土(シルト～粗砂)
28. 浅黄色(2.5Y7/4)砂質土(シルト～粗砂)
29. 暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土(シルト～中砂)
30. 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質土(細～粗砂)
31. 褐灰色(7.5YR5/1)砂質土(シルト～極細砂)
32. 褐灰色(10YR5/1)砂質土(極細～中砂)
33. 褐灰色(10YR4/1)砂質土(シルト～細砂)
34. 黒褐色(10YR3/1)砂質土(細～粗砂)
35. 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質土(中砂)
36. 灰黄色(2.5Y6/2)砂質土(細～中砂)
37. 黒色(10YR2/1)砂質土(シルト～極粗砂)
38. 褐灰色(10YR4/1)砂質土(シルト)に灰色(5Y6/1)砂質土(中砂)を層状に含む
39. 灰オリーブ色(5Y5/2)砂質土(中砂) ϕ 0.5～1cm程の礫を含む
40. 黒褐色(10YR2/2)砂質土(シルト～細砂)
41. にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土(中～極粗砂)
42. 黒色(10YR2/1)砂質土(シルト～細砂)
43. 暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土(中～極粗砂) ϕ 5～80cm程の礫を多量に含む
44. 明赤褐色(5YR5/6)砂質土(極粗砂) ϕ 2～10cm程の礫を多量に含む
45. 44に同じ
46. 灰色(5Y5/1)砂質土(極粗砂) ϕ 5～10cm程の礫を多量に含む
47. 黒褐色(2.5Y3/1)砂質土(シルト)
48. 灰黄色(2.5Y6/2)砂質土(中砂)に明赤褐色(5YR5/8)砂質土と黒褐色(2.5Y3/1)砂質土が30%程度混入
49. 灰色(5Y6/1)砂質土(中～粗砂)
50. 明赤褐色(5YR5/8)砂質土(中～極粗砂) ϕ 1cmの礫を多く含む
51. 暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土(シルト～粗砂)に黒色(2.5Y2/1)砂質土が30%程度混入
52. 黄灰色(2.5Y5/1)砂質土(シルト～極粗砂)に黒色(2.5Y2/1)砂質土が30%程度混入
53. にぶい黄色(2.5Y6/3)砂質土(中～粗砂)に灰黄色(2.5Y7/2)砂質土を層状に含む
54. 黄灰色(2.5Y4/1)砂質土(粗砂)
55. 灰白色(2.5Y7/1)～黄灰色(2.5Y6/1)砂質土(シルト～中砂)
56. 灰黄色(2.5Y6/2)砂質土(シルト～中砂)に黒色(2.5Y2/1)砂質土が40%程度混入
57. 灰黄色(2.5Y6/2)砂質土(極細砂)
58. 明赤褐色(5YR5/8)砂質土(極粗砂)ににぶい黄色(2.5Y6/3)砂質土を層状に含む
59. 55に同じ
60. 暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土(極粗砂) ϕ 1～5cm程の礫を多く含む
61. 明赤褐色(5YR5/8)砂質土(粗～極粗砂)・灰黄色(2.5Y7/2)砂質土(中～粗砂)・灰白色(2.5Y7/1)砂質土(粗～極粗砂)の層状堆積
62. にぶい黄色(2.5Y6/3)砂質土(極粗砂)
63. 黒色(10YR2/1)砂質土(シルト)
64. 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質土(粗～極粗砂)
65. 黄褐色(2.5Y5/3)砂質土(粗～極粗砂) ϕ 0.1～0.7m程の礫を多量に含む
66. にぶい黄色(2.5Y6/3)砂質土(細～極粗砂)
67. 明赤褐色(5YR5/8)砂質土(粗～極粗砂)・黄灰色(2.5Y6/1)砂質土(粗～極粗砂)・黄灰色(2.5Y5/1)砂質土(粗～極粗砂)の層状堆積
68. にぶい黄色(2.5Y6/3)砂質土(細～粗砂)
69. 灰黄色(2.5Y6/2)砂質土(中～極粗砂)
70. 灰白色(2.5Y7/1)～黄灰色(2.5Y6/1)砂質土(シルト～細砂)
71. にぶい黄色(2.5Y6/3)砂質土(極細砂)に明褐色(7.5YR5/8)砂質土(極粗砂)を層状に含む
72. 69に同じ
73. 70に同じ



第7図 A・B地区溝S D01平面図



第8図 A地区土坑S K15、ピットS P16遺物出土状況図

質土が挟み込まれるように堆積している。また、北肩部には黒褐色シルトが厚く堆積していた。このことから、北岸は緩やかな傾斜となっており、穏やかな流れが想起される。この黒褐色シルトと、その下層に堆積した浅黄色砂質土中から遺物が多く出土した。遺物の出土する範囲はY = - 78,480 ~ - 78,490 に概ね集中する傾向を示しており、破損率の少ない弥生時代後期後半を中心とする時期の土器である。また、北岸東半部には、溝の流れに沿うように自然木が2

本埋没していた。上半はすでに消失していたが、埋没した下半は丸い輪郭を留めていた。なお、試掘調査G1で古墳時代の竪穴式住居跡と報告されていたのは、北肩部に堆積した埋土の一部であった。

土坑S X02 調査区中央の西寄りの地点で検出した。S D01bが埋没した後に掘削されており、南北3.6m、東西2.7mを測る不整形円形を呈する土坑である。埋土は上層がオリーブ黒色砂質土にふい赤褐色砂質土が混入しており、下層は灰黄色砂質土となる2層の堆積であった。上層のオリーブ黒色砂質土には、層状に炭化物が多く含まれていた。脆弱で取り上げることは叶わなかったが、加工を受けた板状に見受けられ、埋没に伴って混入したものと考えられる。底面には段差があり、南側が北側に比して0.1m程度深くなっていた。北端から高杯の杯部(102)が出土している。

溝S D03 調査区の南東隅で検出した溝である。調査区内には西肩部の一部がかかるのみで、全容は不明である。検出範囲では東西幅が最大で約14mを測り、南北18mにわたって確認した。西肩部は2段掘りの様相を呈しており、端から3mほどは検出面からの深さが0.2m程下がる平坦面となっており、その先は急激に深くなっていた。サブトレンチを設け、検出面から-2.2mまで掘削したが、底面の検出には到らなかった。安全性を考慮し、それ以上の掘削は実施しなかった。掘削に際し、遺物等は出土しておらず、時期に関しては不明である。

ピットSP12 調査地区の北半部西寄りで見出した。直径0.5mを測る円形のピットである。深さは検出面から0.15mを測る。埋土から中世の土師器皿(90)が1点出土した。

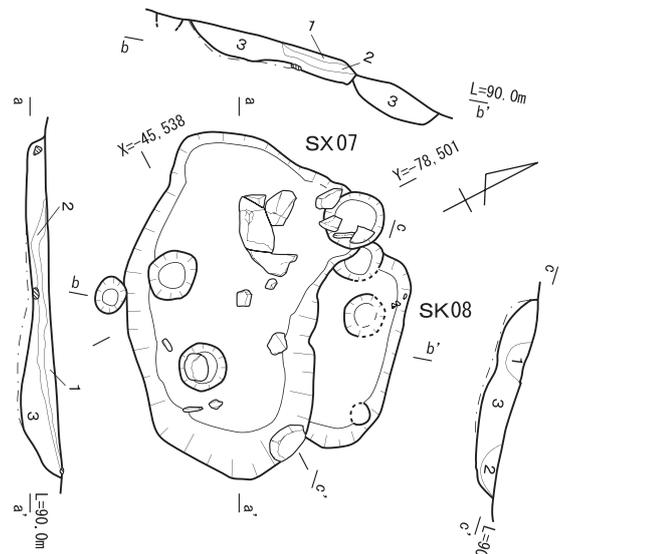
土坑SK15 調査区の南西隅付近で見出した。北隅部がやや突出した隅丸方形を呈する土坑である。東西1.1m、南北1.1m、深さ0.3mを測る。埋土は暗褐色砂質土の単統一層であった。東辺斜面に張り付くように土師器甕2点(103・104)、須恵器杯蓋2点(105・106)、杯身1点(107)が出土した。

ピットSP16 SK15の南西側で見出したピットである。北東隅でSK15と切り合い関係にあったが、明確に掘削の前後を確認できなかった。東西0.8m、南北0.4～0.6mを測る不整楕円形を呈し、さらに中央部は東西0.6m、南北0.4mの規模で2段に掘削されている。深さ0.3m程を測り、埋土はSK15と同様に暗褐色砂質土の単統一層であった。中央部には、底から0.1m程浮いた深さから土師器の壺(108)が出土している。

2) B地区

B地区は、京都府教育委員会の試掘調査G2の調査成果に基づき設定した。このトレンチにおいても試掘調査の結果、遺構は2面にわたって確認されており、上層は試掘トレンチG1と同様であるが、下層では弥生時代終末期の竪穴式住居跡が検出されている。当地点についても、当該水田は東側1/3が0.41mの、西側2/3が1.7mの切土施工が計画されているため、筆全体を対象とし調査を実施することとされた。調査地点の現標高は90.61mを測る。調査面積は519㎡である。A地区での遺構面の検出状況を考慮しつつ、重機により耕作土を除去した後、下層の掘削を行った。A地区と同様に、床土直下で礫を多く含む明オリーブ灰色砂質土となったが、西へ掘削範囲を広げると共に礫の混入がなくなり、調査区の1/4程から西側では、締まりのないぶい黄色砂質土の堆積となっていた。また、西端1/4の地点からは、およそ0.5mの段差を有して低くなっており、後世に盛土を行って耕作地を拡張していたことが判明した。精査を行った結果、北半部では遺構の検出には到らず、南半部ではA地区からの延長部で溝SD01a・bを、SD01bの南肩部付近で土坑数基を検出した。

溝SD01a A地区から北西方向へ伸びてきた溝は、B地区との境界付近から、弧を描いて



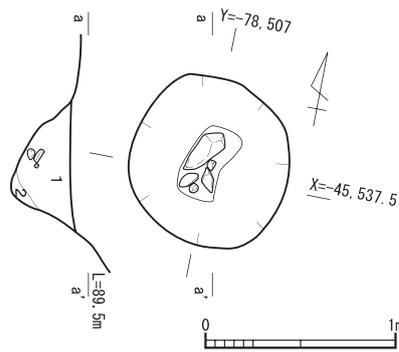
SX07

1. 暗褐色 (10YR3/3) 砂質土 (シルト～細砂) 焼土塊・炭化物を僅かに含む
2. 炭化物堆積
3. 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 砂質土 (シルト～極粗砂) 焼土塊・炭化物・黄褐色 (10YR7/6) 粘質土塊を7%含む

SK08

1. 灰オリーブ色 (5Y4/2) 砂質土 (シルト～細砂) 炭化物を含む
2. 褐色 (7.5YR4/4) シルト、微細な焼土塊を含む
3. 暗褐色 (7.5Y3/3) 砂質土 (シルト～中砂)

第9図 B地区土坑SX07・SK08平・断面図



1. 褐灰色(7.5Y4/1)砂質土(シルト～粗砂)
2. 黒褐色(7.5Y3/1)砂質土(シルト～極粗砂)

第10図 B地区土坑S K 11平・断面図

なる。そのことに比例して、遺物の出土量も格段に少なくなる。なお、試掘調査G 2で弥生時代終末期の竪穴式住居跡と報告されたものは、S D 01 bの南肩部の一部を検出していたことが判明した。

土坑 S X 07 調査区の南東部で検出した。東西約1.9m、南北約1.1mを測る楕円形を呈する土坑である。S D 01 aの南肩部と重複しており、S D 01 aに切り勝っていた。内部を掘削した後、底面の南側でピット2基が検出された。また、北半には石材がかたまって埋没していた。埋土は3層に分かれ、1層の暗褐色砂質土と3層の暗オリーブ褐色砂質土の間は、炭化物の堆積が5～6cmにわたって確認された。また、1層も焼土塊、炭化物をわずかながら含んでいた。時期を確定する遺物等は出土していない。

土坑 S K 08 S X 07の北東側で検出した土坑である。南側をS X 07に、北西端をピットに切られており、全容は不明であるが、東西1.1m、南北0.45m以上を測る。埋土には微細な炭化物を含んでいた。遺物は出土しておらず、時期等は不明である。

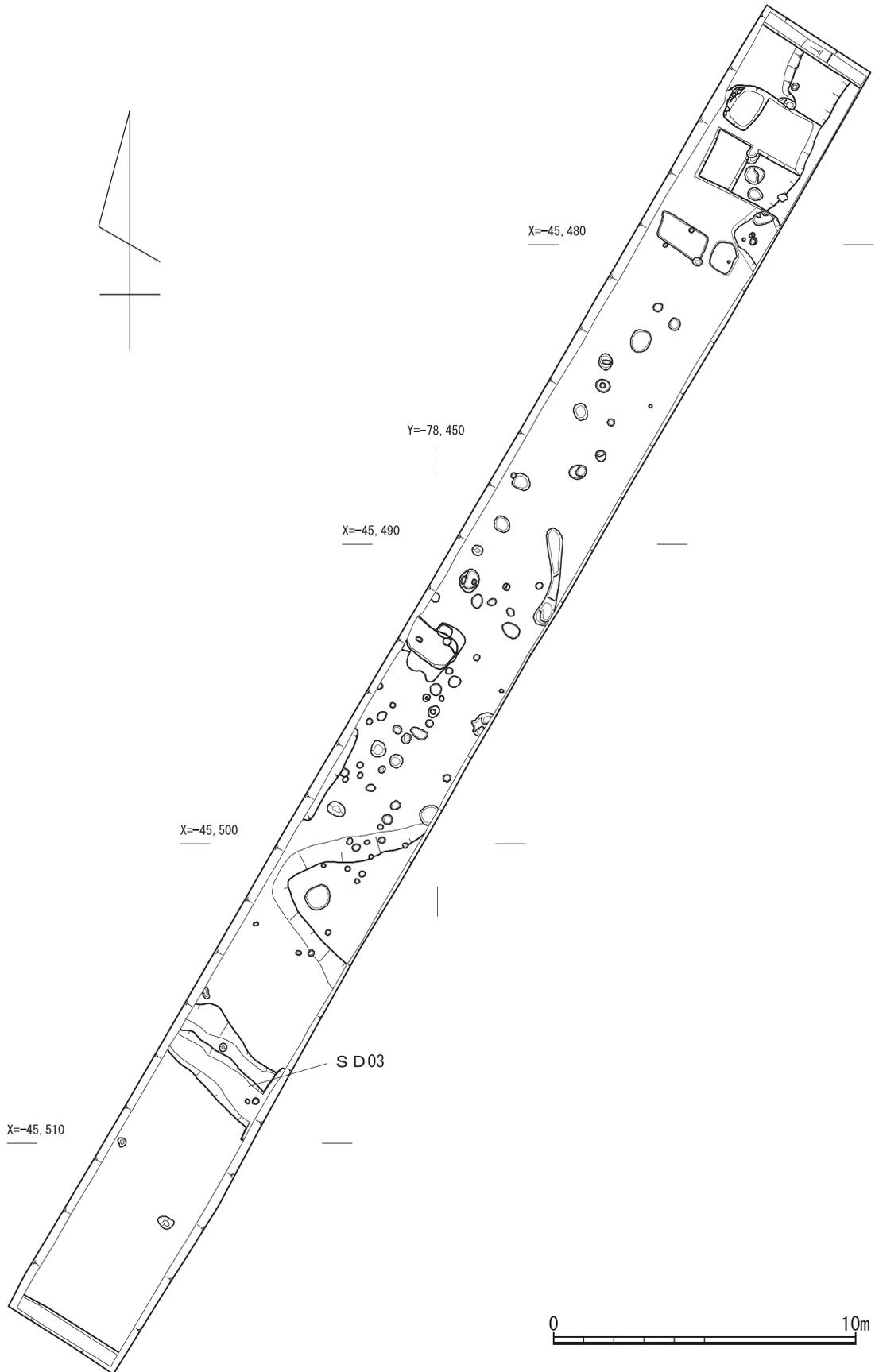
土坑 S K 11 調査区の南端中央付近で検出した。S D 01 bと重複していたが、S D 01 bに切り勝っていた。南北0.9m、東西0.85mを測る円形の土坑である。検出段階で上層から銭貨が6点(343～346)まとまって出土した。埋土は褐灰色砂質土と黒褐色砂質土の2層の堆積となっていたが、銭貨以外の遺物は出土しなかった。

3) C地区

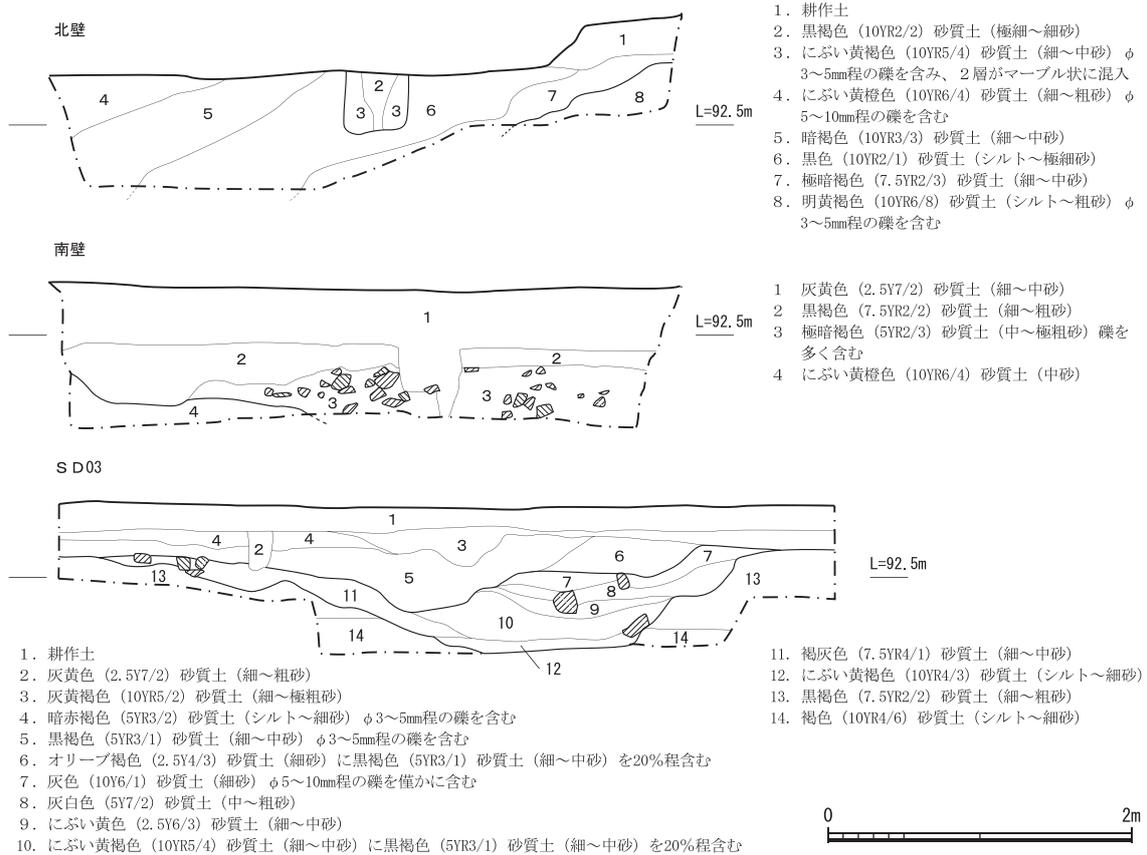
C地区は、京都府教育委員会の試掘調査G 7の調査成果に基づき設定した。当地点では大型の土坑から古墳時代前期後半の土師器が出土したため、調査対象地とされた。調査地点の現標高は93.01mを測る。当地点では0.3mの切土施工が計画されていたが、試掘調査の結果、西側の竹野川に向かって地形が大きく傾斜して下がっていることが確認されていた。そのため、当該水田の東側のみを調査対象として、東西50.0m、南北4.0mの調査区を設定した。調査面積は200㎡である。耕作土、床土を重機により除去した後、人力により精査を行い遺構の検出に努めた。床土直下には灰黄色砂質土が堆積しており、その下層に黒褐色砂質土の遺物包含層が確認できた。この遺物包含層は調査区の北端付近では残っていなかったが、それ以外の地点では良好に残存し、古墳時

徐々に西へと傾いていく。調査区の南西隅部付近では平坦面が新たに派生し、溝底のレベルも88.41mと深くなって調査区外へと続いてゆく。

溝 S D 01 b A地区との境界から北西側では、北側にわずかながら段差が残存している。本来はこの溝が北側へ広がって流れていたが、後世の削平により消滅した可能性を示すものであろう。底面のレベルは東端で90.20m、西端で89.26mとなっており、竹野川が現流する低位部に向け傾斜が強まっている。A地区の北岸に厚く堆積していた黒褐色シルトも、当地区では薄くなり、東半部のみにはしか存在しな



第11図 C地区遺構配置図



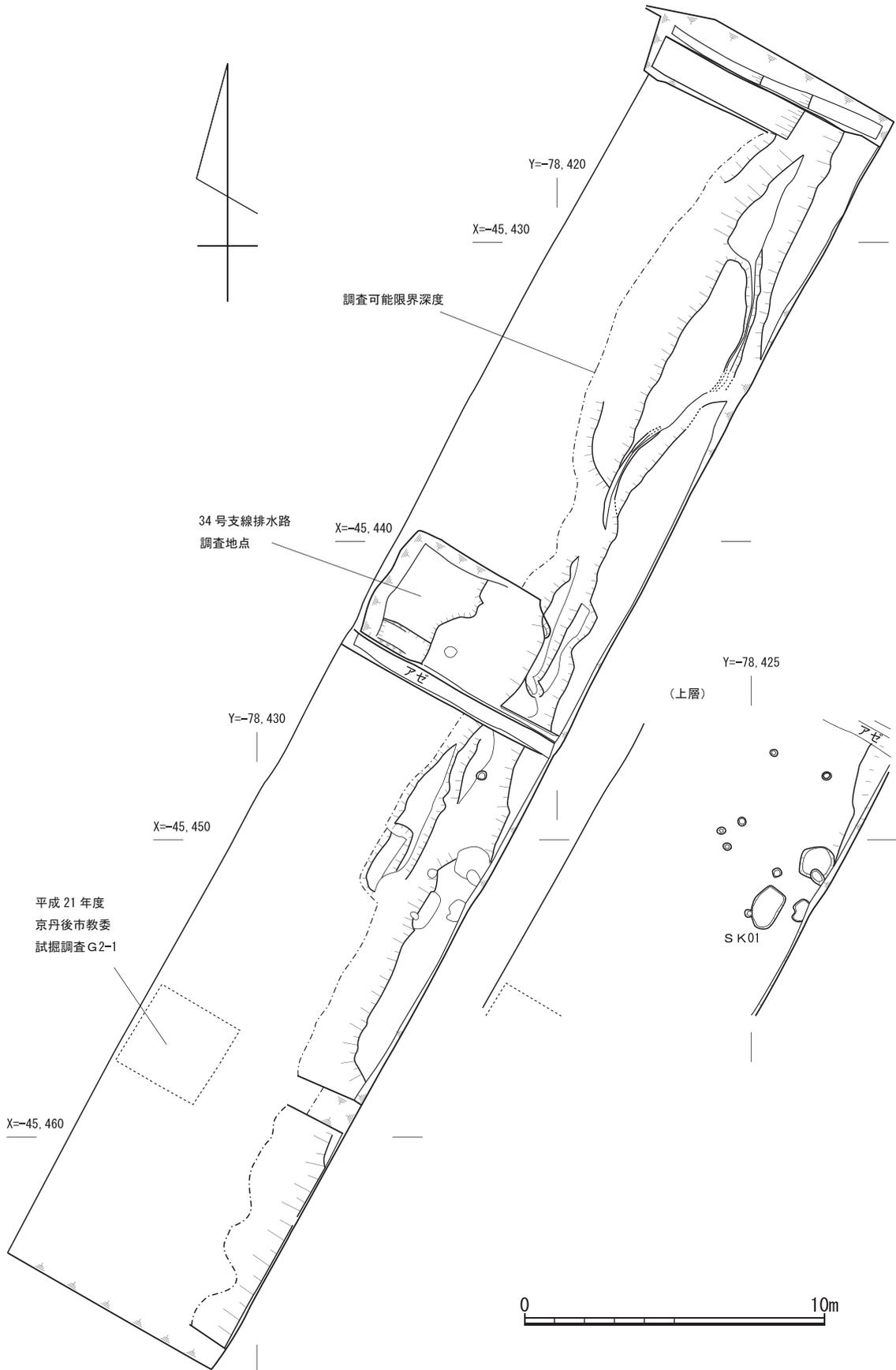
第12図 C地区北・南壁、溝S D 03土層断面図

代から中世の遺物が出土している。北端からおよそ5.0mの範囲では、明黄褐色砂質土を呈するベース面が検出された。これは東側から延びる丘陵の裾部と考えられる。後世に耕作地とされた際に、削平を受けたと考えられる平坦面が幅0.5m程度、長さ7.0mにわたって調査区の北東隅部で検出された。西側に向かって急激に傾斜し、南側ではこの張り出しは東へと屈曲して調査区外へと延びていくことが確認された。この西側への急傾斜地点に黒色砂質土の遺物包含層が堆積しており、古墳時代前期後半から中期を中心とする遺物が多量に出土した。調査は、ほ場整備事業の施工による完成標高から保護層相当分を差し引いた高さを限度に、包含層遺物を取り上げながら掘り下げを行った。X = -45,480から南側では、黒褐色砂質土の遺物包含層の下層に堆積する極暗褐色砂質土上面において、東西方向の溝1条、土坑、柱穴等を50基あまり検出したが、南へ行くほどに遺構は希薄となっていた。

溝S D 03 調査区の南側で検出した南東から北西方向に流れる溝である。北肩部は2段掘り状を呈し、幅0.3～0.6mの平坦面が存在する。溝幅は1.8～2.3mを測り、調査区内では4.0mにわたって検出した。底面のレベルは東端で92.03m、西端で92.02mとなっており、検出範囲ではほぼ水平となっていたが、本来的には北西へと流れ下っていたものと考えられる。遺物は土師器、須恵器の細片等が出土しているが、時期の特定には到っていない。

4) D地区

D地区は、京丹後市教育委員会の試掘調査G 2 - 1・2の調査成果に基づき設定した。京丹後

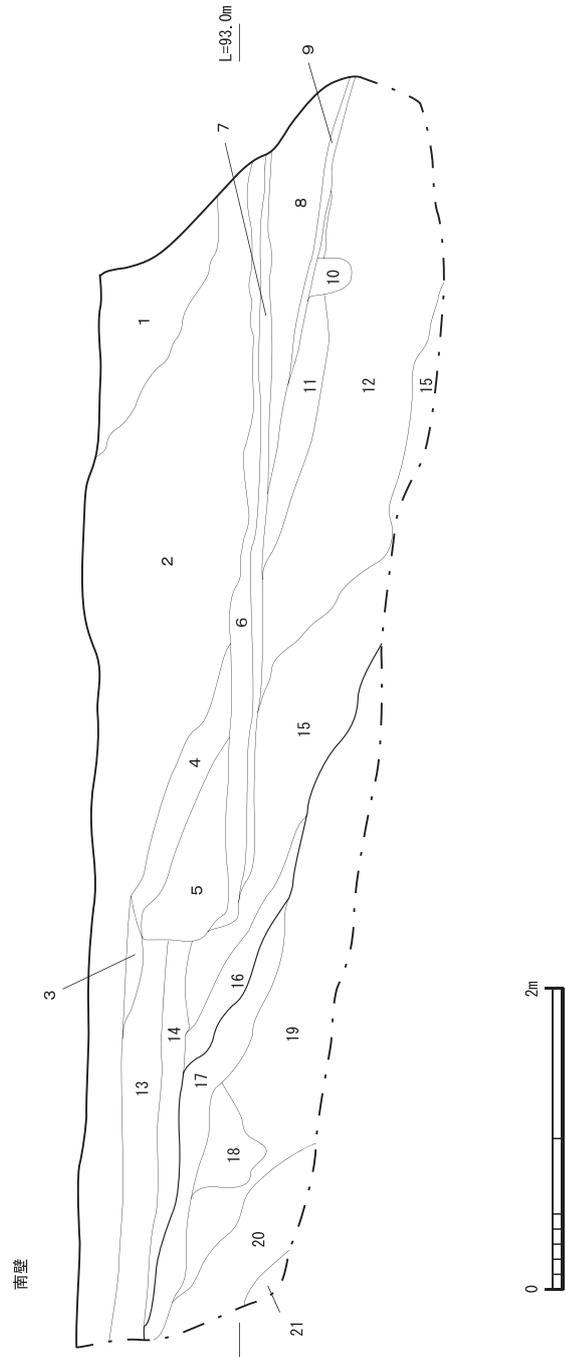


第13図 D地区遺構配置図

1. 耕作土
2. 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質土 (細～中砂)
3. にぶい黄褐色 (10YR5/3) 砂質土 (細～粗砂) φ2~3mm程の礫を含む
4. オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 砂質土 (中～極粗砂)
5. 黄褐色 (10YR5/6) 砂質土 (細～極粗砂)
6. 暗褐色 (7.5YR3/3) 砂質土 (細砂)
7. にぶい黄褐色 (10YR7/3) 砂質土 (粗砂)
8. 灰褐色 (7.5YR4/2) 砂質土 (細～粗砂)
9. 褐色 (7.5YR4/3) 砂質土 (細～粗砂)
10. 黒褐色 (7.5YR3/2) 砂質土 (細～極粗砂) φ5~10mm程の礫を多く含む
11. 褐灰色 (5YR4/1) 砂質土 (シルト～極粗砂)
12. 暗赤褐色 (5YR4/2) 砂質土 (シルト～粗砂)
13. 灰褐色 (5YR4/2) 砂質土 (シルト～粗砂) φ2~3mm程の礫を含む
14. にぶい赤褐色 (5YR4/3) 砂質土 (シルト～粗砂) φ3~5mm程の礫を含む
15. 暗赤褐色 (5YR3/4) 砂質土 (シルト～細砂)
16. 暗褐色 (7.5YR3/3) 砂質土 (シルト～極細砂)
17. 黒褐色 (5YR2/1) 砂質土 (シルト～極細砂)
18. にぶい赤褐色 (5YR4/4) 砂質土 (シルト)
19. 褐色 (7.5YR6/6) 砂質土 (シルト)
20. にぶい黄褐色 (10YR6/4) 砂質土 (中～粗砂)
21. にぶい黄褐色 (10YR6/4) 砂質土 (中～粗砂) 人頭大の角礫を多く含む

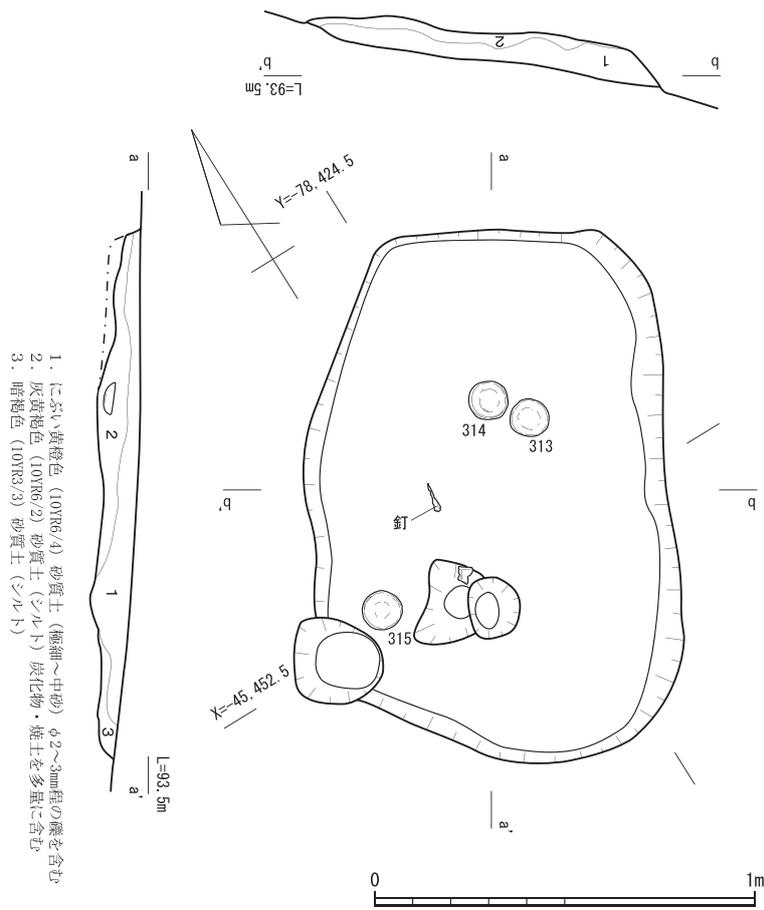


1. 明黄褐色 (10YR6/6) 砂質土 (細～中砂) φ3~5mm程の礫を含む
2. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 砂質土 (シルト～粗砂)
3. 褐灰色 (7.5YR4/1) 砂質土 (細～粗砂)
4. 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質土 (細～中砂) φ5~8mm程の礫を含む
5. 褐灰色 (10YR6/1) 砂質土 (シルト～極粗砂) に混入
6. 灰色 (N5) 砂質土 (シルト～細砂)
7. にぶい褐色 (7.5YR5/4) 砂質土 (シルト～中砂)
8. 褐灰色 (7.5YR5/1) 砂質土 (細～極粗砂)
9. 灰褐色 (5YR6/2) 砂質土 (極細～中砂)
10. 黄灰色 (2.5Y4/1) 砂質土 (シルト～細砂)
11. 褐灰色 (10YR4/1) 砂質土 (細～中砂)
12. オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 砂質土 (シルト～粗砂)
13. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 砂質土 (中～極粗砂)
14. 灰黄色 (2.5Y6/2) 砂質土 (細～極粗砂)
15. 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 砂質土 (シルト～粗砂)
16. 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 砂質土 (シルト～粗砂) に黒色 (2.5Y2/1) シルト塊と明黄褐色 (10YR7/6) シルト塊が60%混入
17. 黄灰色 (2.5Y4/1) 砂質土 (細～極粗砂) が40%混入
18. 黄褐色 (2.5Y5/3) 砂質土 (シルト～極細砂) に黒褐色 (2.5Y3/1) シルト塊が10%混入
19. 黒色 (10YR2/1) 砂質土 (シルト)
20. 暗褐色 (10YR3/3) 砂質土 (シルト～中砂)
21. にぶい黄褐色 (10YR6/4) 砂質土 (シルト～中砂)



第14図 D地区北・南壁土層断面図

市教育委員会の調査では耕作地への改変に伴う客土が厚く、旧耕作土上に1.0m以上の盛土がなされていたことが確認されたが、その下層に遺物包含層及び遺構を検出したため、本調査を実施することとなった。当該水田は北側が1.41m、南側が1.51mの切土施工が計画されているため、筆全体を対象とし調査を実施することとされた。また、調査区中央を34号支線排水路が横断することから、その地点に関しては、ほ場整備事業施工による完成標高よりも深く掘削を行うこととされた。調査地点の現標高は94.22mを測る。調査区は南北47.5m、東西8.0mに設定した。調査面積は380㎡である。



第15図 D地区土坑SK01平・断面図

調査区は丘陵裾部に盛土を行って造成されたことが判明していたため、重機により耕作土を除去した後、その盛土層を除去し、包含層遺物を人力により回収しつつ、ほ場整備事業施工による完成標高から保護層相当分を差し引いた高さを限度に、掘削を行うこととした。34号支線排水路の施工地点については、排水路の掘削深度から保護層相当分を差し引いた高さまで調査を実施した。調査の結果、34号支線排水路施工地点の北側では、盛土層の直下で、東側に存在する丘陵の裾部と考えられるにぶい黄褐色を呈するベース面を検出し、これが北西に向かって傾斜して下っていくことを確認した。そのため、西半では今回の調査での掘削深度が盛土層の中に収まることとなり、遺物包含層の掘削にまで到らなかった。南側でも、北寄りの地点ではにぶい黄褐色を呈するベース面を検出したが、 $X = -45,460$ 付近で南東へと屈曲し、調査区外へ延びていくことが判明した。また、上層遺構として、 $X = -45,450$ 付近で、表土、床土直下の黒色砂質土(遺物包含層)上面で土坑4基、ピット7基を検出した。これらの遺構の記録を作成した後、遺物包含層の掘削を行ったが、西側1/3に関しては、今回の調査での掘削深度を超えることから、それ以上の掘削は実施せず、調査を終了した。また、34号支線排水路の施工地点では、他の調査区よりも深く遺物包含層の掘削を実施した。東側丘陵からの傾斜は一旦緩やかとなり、狭い平坦面を形成していることが判明した。さらに、その平坦面は、調査地点の西側1/3で、再度急な傾斜で西側

へ下っていくことを確認した。しかし、施工深度との関係から、その先でベース面を確認するには到らなかった。

土坑SK01 上層遺構である。調査区の中央東寄りの地点で検出した土坑である。後世の削平を大きく受けており、0.1m程の深さを残すのみであった。長軸1.4m、短軸0.8～1.0mを測る隅丸長方形を呈し、南西隅を小土坑により切られていた。埋土は3層に分かれ、最下層に堆積した第2層には、炭化物、焼土塊が多量に含まれていた。内部からは同一規格の土師器皿3点(313～315)と、鉄釘4点(316～319)が出土している。以上のことから、この土坑は火葬墓と考えられる。

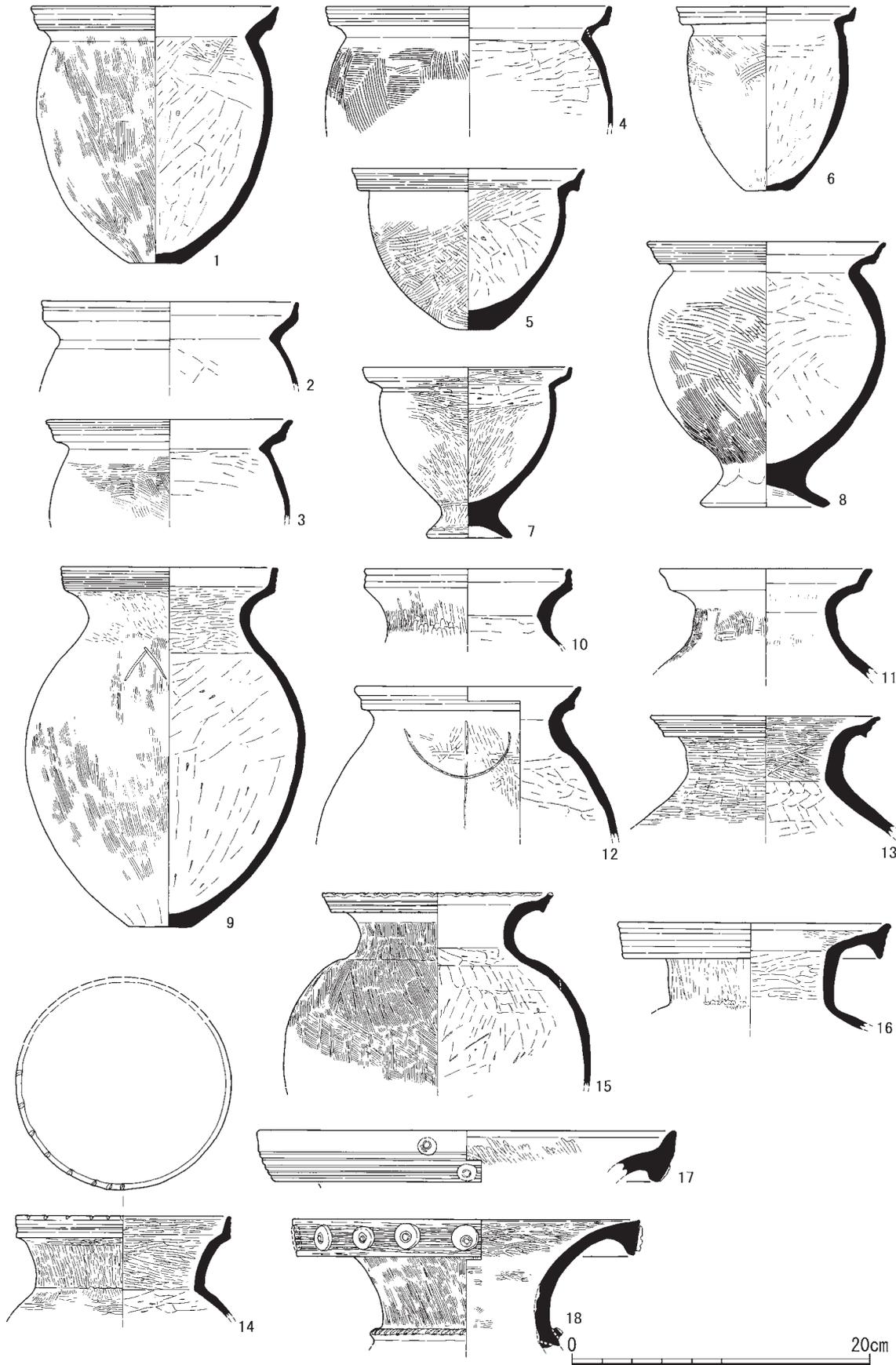
3. 出土遺物

1) 土器

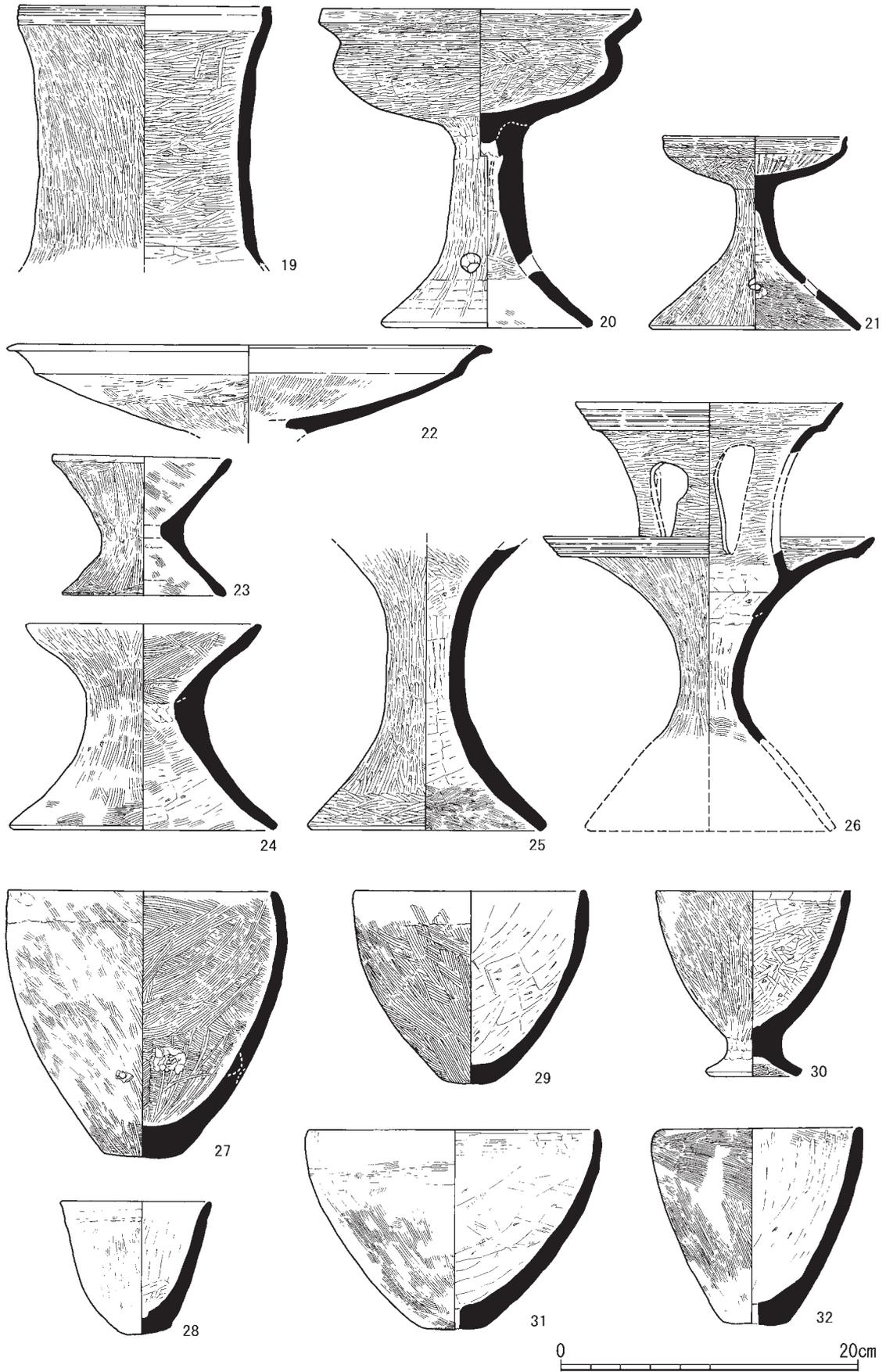
今回の調査では、整理箱にして300箱分の遺物が出土した。

1～108はA地区から出土したものである。1～50がSD01bから、51～89、91～101までがSD01aから、90はSP12、102はSX02、103～107はSK15、108はSP16からそれぞれ出土している。SD01aから出土している遺物に関しては、弥生時代後期後半、古墳時代、古代、中世、近代とその時間幅は広く、東側丘陵谷部において発生した土石流の影響によるものと考えられる。しかし、SD01bからの出土資料は、土石流の影響を被っていない北岸部分から出土しており、弥生時代後期後半を中心とするまとまった資料群となっている。

1～8は甕である。1は器高17.4cm、口径16.6cmを測り、口縁部外面に擬凹線文を施している。体部外面はハケ調整、内面は頸部までケズリ調整で仕上げられ、体部下半には使用に伴う煤の付着が観察される。2～8に関してもほぼ同様の調整により仕上げられているが、口径17～18cm前後の一群と、やや小振りの12cm前後の一群に分別され、それぞれに7・8の様に脚台部を作り付けるものがある。口縁部に関しても、1・2・4・6・7の様に直立するものと、3・5・8の様に外反するものが存在し、7の様に擬凹線文を施さないタイプも散見される。また、体部の形態に関して、5・7のように頸部の窄まりが弱いものも見受けられる。9～18は広口壺、19は長頸壺である。9は体部のほぼ中央が最大径となり、短い頸部に直立する口縁を持ち、外面には擬凹線文を施す。頸部内外面はミガキ、体部外面はハケ後ナデ、内面はケズリ調整により仕上げている。また、肩部に山形の線刻(記号文)が認められる。10・11・12も同様の仕上がりとなるが、11・12は口縁部が外反し、11には擬凹線文が認められない。12には円弧と直線を組み合わせた線刻(記号文)が施されていた。円弧が直線を切っていた。13は口縁部を強く外反させ擬凹線文を施す。体部外面、頸部内面はミガキ調整により仕上げられ、体部内面はケズリ調整が認められる。14・15は口縁部に擬凹線文を施すとともに端面にキザミを有する。14ではキザミの間隔が狭く施された部分があり、そこから先にはキザミが認められず、全周はしないと考えられる。15では肥厚した口縁部下端にもみられる。16～18は外反する頸部を屈曲させ、口縁端面を下方に肥厚し擬凹線文を施す。さらに17・18では、円形浮文を貼付している。また18は頸部と体部の境

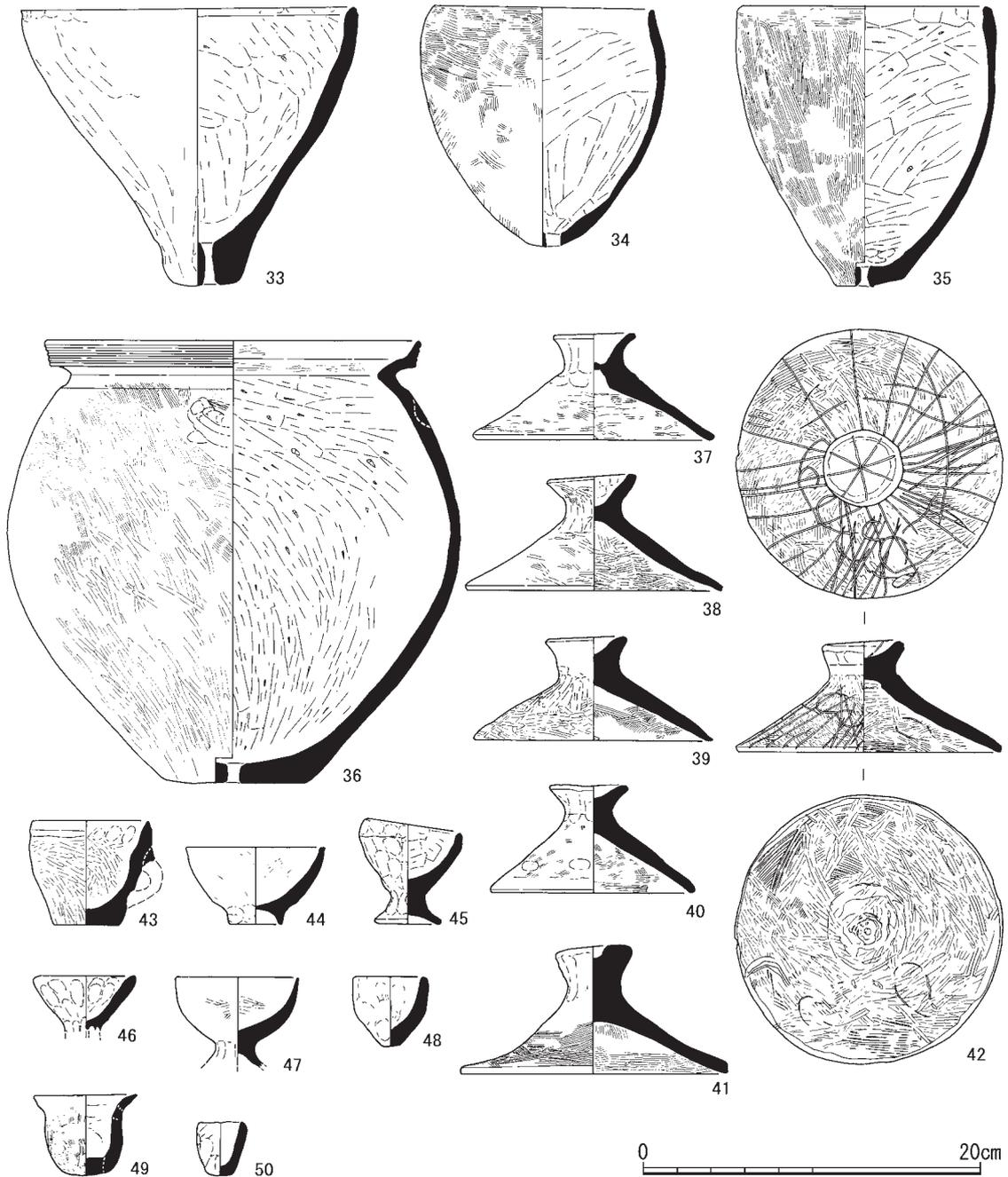


第16図 出土遺物実測図(1) A地区：土器



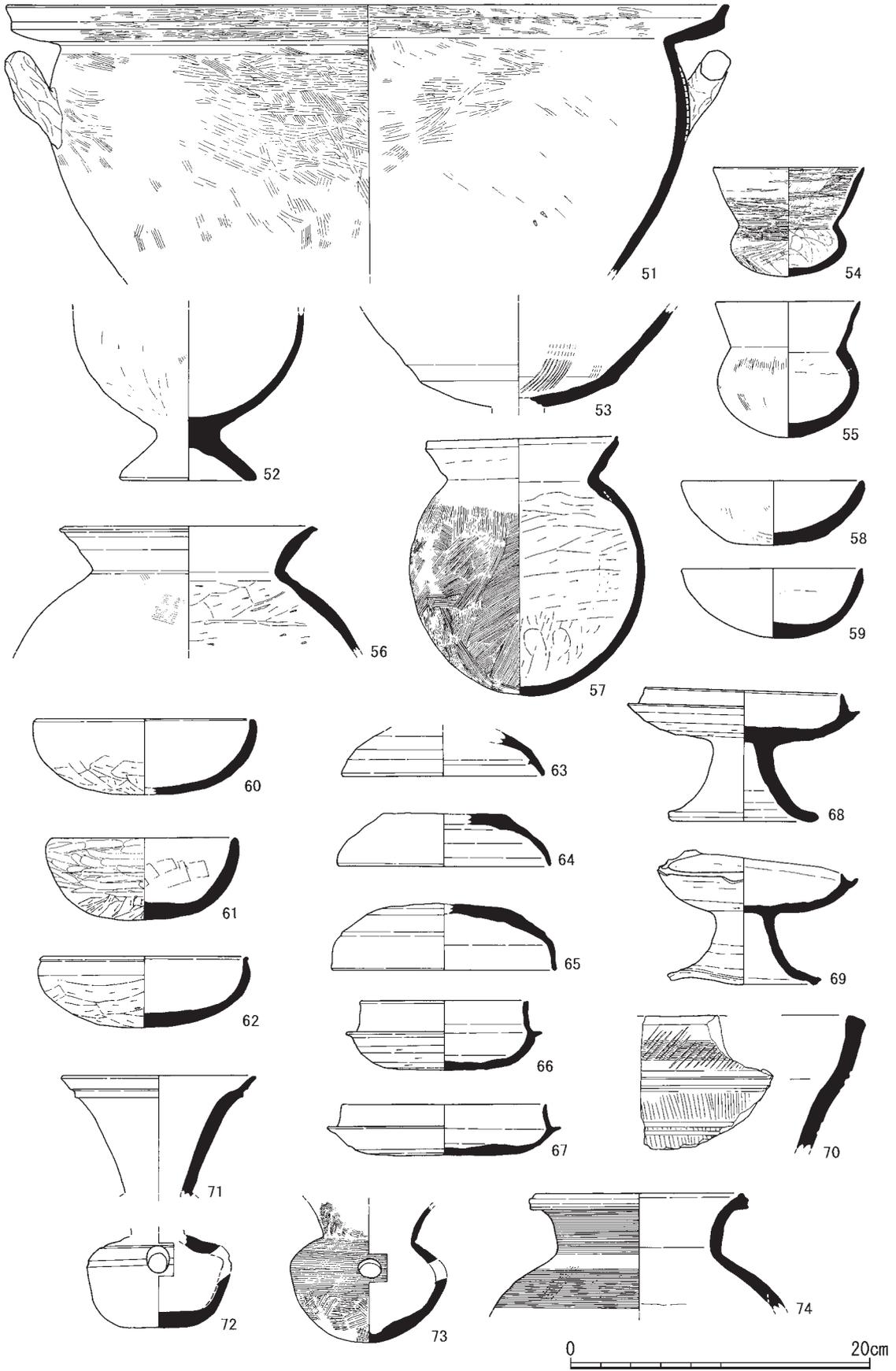
第17図 出土遺物実測図(2) A地区：土器

界に1条の突帯を設け刺突文を廻らしている。19は内外面ともに細かなミガキ調整により仕上げられており、端部外面には擬凹線文が施される。20～22は高杯である。20は椀状の杯部から口縁部が外方に屈曲し端部は短く直立する。脚柱部は直線的に延び、下部1/3程の位置に3か所の穿孔が施され、そこから大きく外方へと開く。内外面ともに細かなミガキ調整により仕上げられている。21は浅い椀状の杯部を呈し、口縁端部をわずかに外上方につまみ上げている。脚部裏面はハケ、その他の内外面は細かなミガキ調整により仕上げられており、杯部内面には暗文様に放射状のミガキが認められる。穿孔は1か所のみである。22は浅い皿状の杯部を呈し、口縁部が外反気味に立ち上がる。内面はハケ、外面はミガキ調整で仕上げられている。23～26は器台である。23は受け部と脚部が「く」字状に屈曲する。内外面ともハケ調整で仕上げられており、口縁端部はナデにより丸くおさめている。受け部の比率が脚部を凌駕している。24も23と同様に受け部と脚部が「く」字状に屈曲するが、その屈折は緩やかで円弧を為す。内外面ともハケ調整により仕上げられ、口縁端部はやや内弯している。25は受け部を欠くが脚柱部以下、丁寧にミガキ調整が施されている。26は装飾器台である。受け部の上にさらに受け部を作り付けており、上段の受け部には不均等な水滴型の透かし孔が5方向に穿たれている。受け部の口縁外面にはそれぞれ擬凹線文が施され、丁寧なミガキ調整で仕上げられている。27～30は鉢である。平底で砲弾型を呈する。27は内外面ハケ調整の後、疎らにミガキ調整を施している。28・29は外面ハケ調整、内面はケズリ調整である。28は小型で口縁部がやや外反する。30には脚台が作り付けられる。外面ハケ調整、内面は丁寧なミガキ調整である。27は調整が他とは異なる。31～35は有孔鉢である。いずれもが外面はハケ調整、内面はケズリ調整である。31は器高に比して口径が大きく、33は体部下半が窄まり安定感を欠く。また、34のみ平底とはならず尖底気味である。36は底部に穿孔を有する甕である。口縁部外面に擬凹線文を施しており、肩部に把手の剝離痕跡が確認できる。31・33・35・36には底部並びに外面下半に使用に伴う煤の付着が認められる。37～42は蓋である。表裏ともにハケ調整が施されている。42には表裏面に線刻が確認される。表面は中央で交差する直線を粗雑に描き、それとともにやや崩れたアルファベットの「C」形を連ねて描き込んでいる。裏面には「C」形が3か所に描き込まれている。43は小型鉢である。手捏ねにより成形されており、内外面は丁寧にミガキ調整されている。体部は底から斜め上方に延びた後、口縁部は若干の内弯傾向を呈する。上端内面には指頭圧痕が残る。把手が1つ付けられていたものと考えられ、剝離痕跡が確認できる。44～50はミニチュア土器である。44～48・50は鉢形を呈し、44は内弯気味に大きく開く体部に高台が付く。45～47は脚台が作り付けられ、45・46は全体に指頭圧痕が明瞭に残る。47はナデの後、ミガキ調整が施される。48・50は砲弾形を呈し、平底・丸底と底の形状がそれぞれ異なる仕上げとなっている。49は口縁部を大きく外反させ、甕形としている。51は鉢である。口径が48cmを測る大型品である。口縁部を大きく外方に屈曲させた後、端部を上方に拡張している。口縁部外面に擬凹線文は施されていない。体部外面はハケ調整の後、疎らにミガキ調整を施しており、肩部には把手の剝離痕跡が認められる。現状では1か所が確認できるのみであるが、対面する位置に計2か所取り付けられていたものと考えられる。52は壺ないし

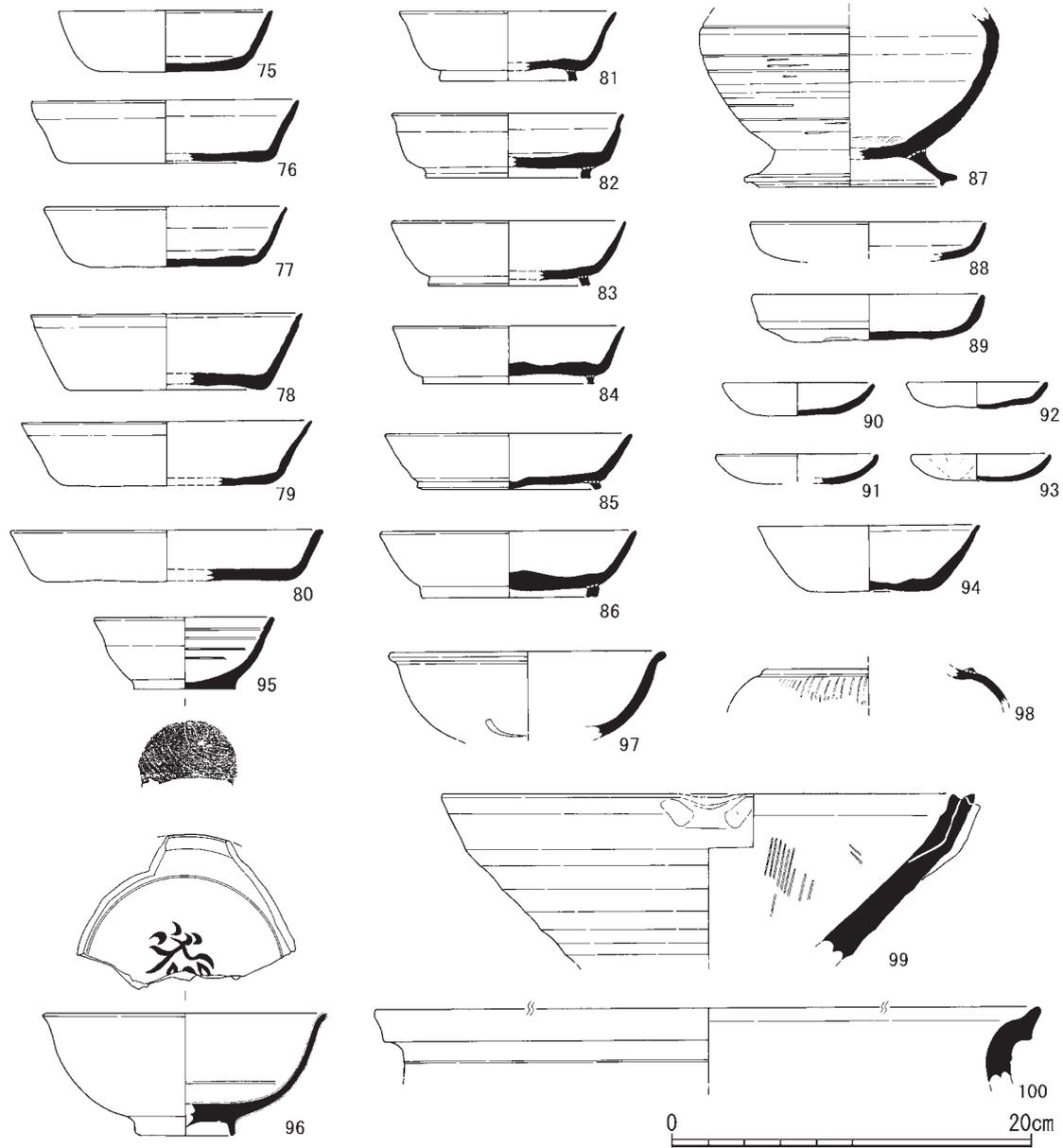


第18図 出土遺物実測図(3) A地区：土器

は甕の脚台部、53は高杯の杯部である。54・55は小型丸底壺である。54は小さな体部に大きく開く口縁部を有し、体部内面はケズリ調整、体部外面・口縁部内外面は丁寧なミガキ調整により仕上げられている。器壁も薄く、非常に繊細な印象を受ける個体である。55に比して古相の特色を有する。55は体部の比率が口縁部を凌駕し、その器壁も厚く外面調整もハケである。56・57は甕である。内面をケズリ、外面をハケ調整で仕上げている。57では口縁端部を上へつまみ上げている。外面には煤の付着が認められる。58～62は土師器杯である。60～62は下半をケズリ、上半をナデにより仕上げている。60・61は口縁端部が内弯する。62は口縁部を直立させた後、端部をわずかに外反させる。底部中央に黒斑が認められ、見込みを除く内面と、外面上半に赤色顔料が

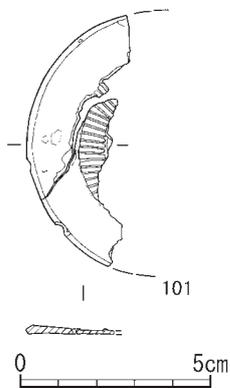


第19図 出土遺物実測図(4) A地区：土器



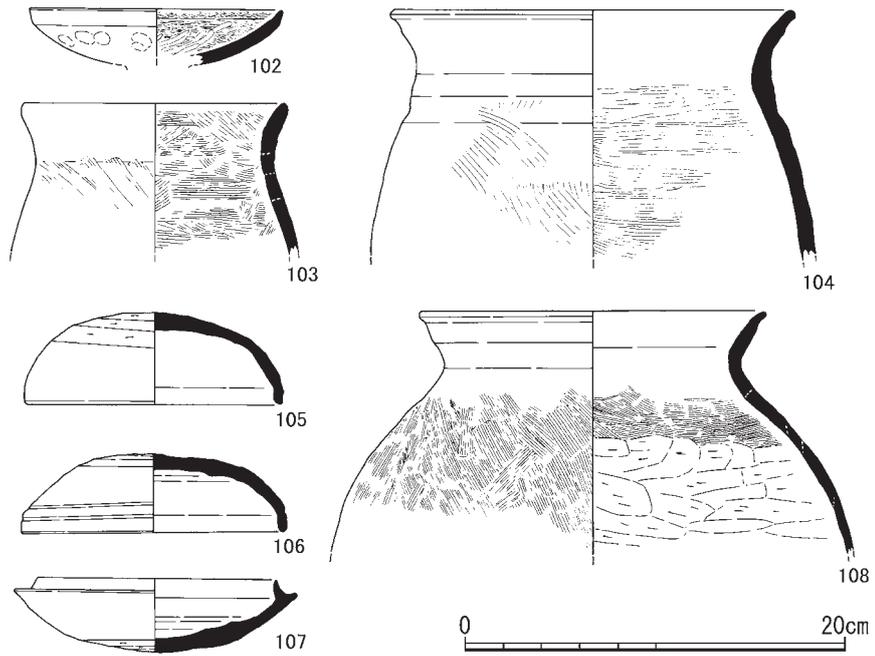
第20図 出土遺物実測図(5) A地区：土器

残存する。63～65は須恵器杯蓋、66・67は杯身、68・69は高杯である。69は大きく焼け歪んでおり、近隣に未確認の須恵器窯の存在が窺われる。70は甕の口縁部である。2条1単位の凹線を2段にわたり施している。71～73は甕の口縁部と体部である。71は内面に自然釉が厚くかかる。72は平底を呈し、張った肩部に穿孔している。73は口縁接合部が太く、やや古相を呈する。74は甕である。75～80は須恵器杯Aである。81～86は須恵器杯Bで、いずれも高台を貼り付けている。87は壺である。88～93は土師器皿である。90はS P12から出土した。口径8.3cm、器高1.9cmを測る。ナデ調整により整形されている。13世紀代に属すると考えられる。94・95は須恵器碗である。96・97は青磁碗である。96は削り出し高台で、



第21図 出土遺物実測図(6) A地区：鏡

見込みに刻花文を有する。98は須恵器である。長頸壺の頸部突帯付近と考えられる。胎土は精良で、焼成も非常に堅緻である。ヘラ描きによる装飾が認められる。99は越前焼の播り鉢である。片口で、脆弱ではあるが7条1単位の播り目が刻まれている。100は丹波焼の甕口縁

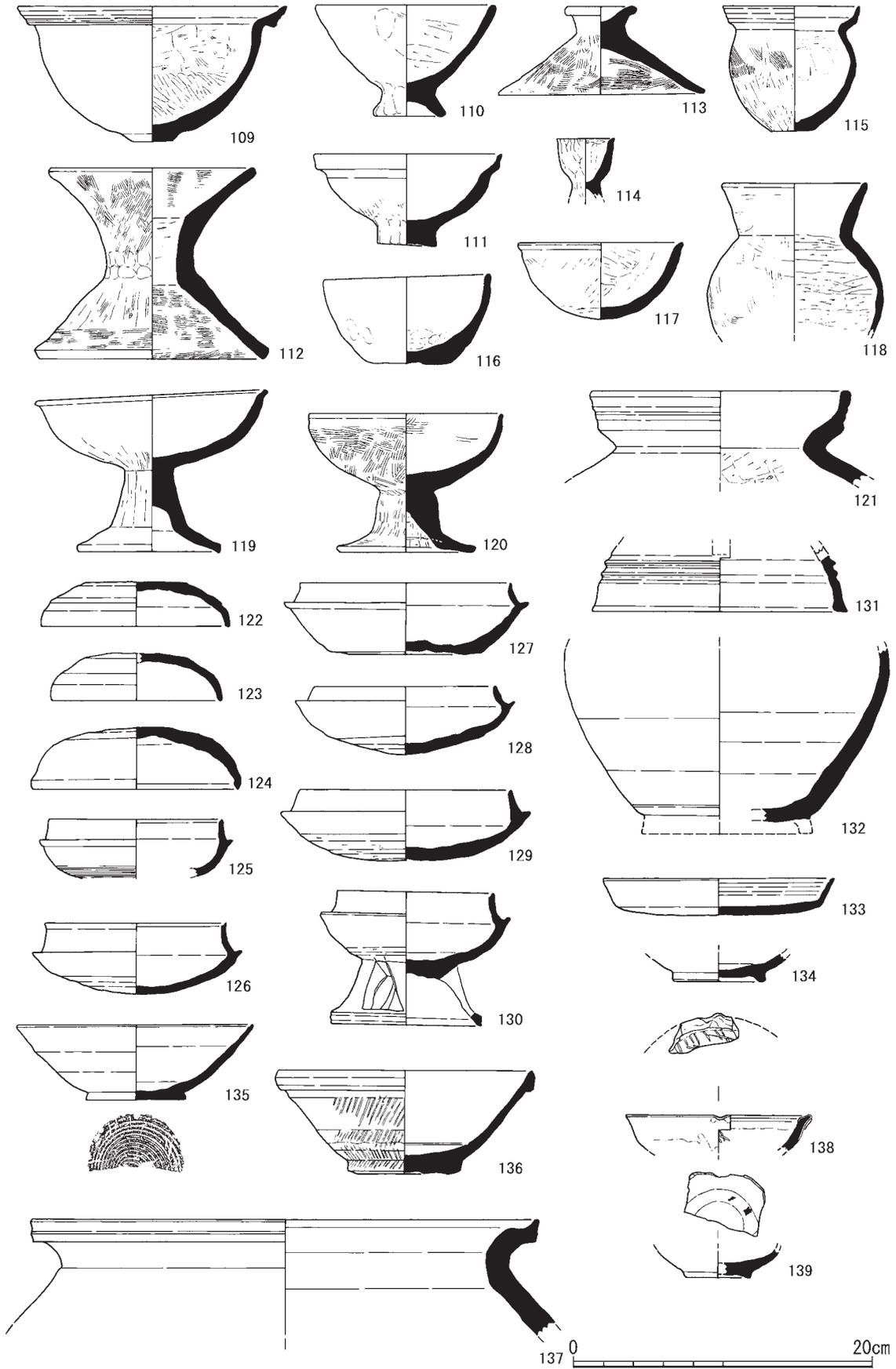


第22図 出土遺物実測図(7) A地区：土器

部である。101は小型彷彿鏡である。S D01aの埋土中から出土した。縁辺部が1/3程度残存するのみで、外区の櫛歯文を確認できるが、内区や紐は残存していない。直径は7.0cmに復元可能である。102はS X02から出土した土師器高杯の杯部である。外面は摩滅が激しく調整は不明であるが、内面はミガキ調整で仕上げられている。103～107はS K15から出土した。103・104は土師器の甕である。いずれも下半は残存していない。内外面ハケ調整、口縁部外面はナデ調整で仕上げている。105・106は須恵器杯蓋、107は須恵器杯身である。108はS P16から出土した土師器の壺である。外面ハケ調整、内面頸部以下はケズリ調整である。

109～140はB地区から出土したものである。109・113・116～139はS D01a、110～112、114・115・140はS D01bから出土している。

109～111は鉢である。109は口径17.8cm、器高9.2cmを測り、平底を呈する。口縁部を水平に屈曲させた後、斜め上方へ拡張し、外面に擬凹線文を施している。外面調整は摩滅が激しく不明であるが、内面は下半がミガキ、上半がケズリ調整で仕上げている。110・111は脚台を有する。110は、ユビオサエによって輪状に高台を作り出しているが、111は円柱状に突出させ、側面をユビオサエにより整形している。平底である。また、口縁部は外反させた後、上方に屈曲させ面を作っているが、その部分に擬凹線文を施すことはしていない。110・111ともに外面に煤の付着が認められる。112は器台である。大きく開く受け部と脚部の間に短い柱状部が存在する。外面上半にはハケメが残るが、下半はきれいにナデ調整で仕上げられている。113は蓋である。全体をハケ調整で仕上げている。114はミニチュア土器である。手捏ねの粗製品で口縁端部をつまんでわずかに外反させている。脚部を欠損する。115は小型の甕である。口縁部外面に擬凹線文を有する。外面は上半がハケ、下半がケズリ、内面は頸部以下をケズリ調整により仕上げている。



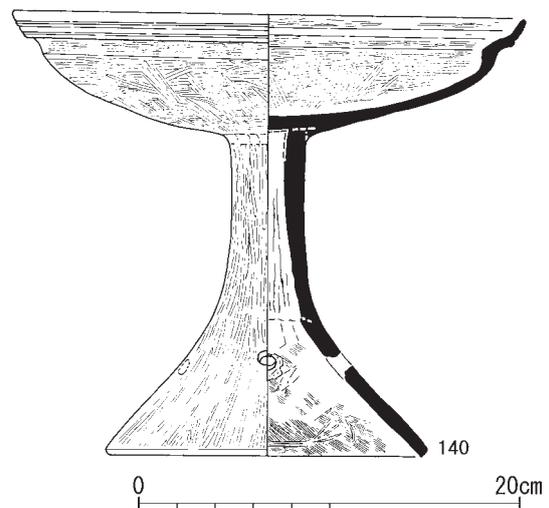
第23図 出土遺物実測図(8) B地区：土器

116は鉢である。内面は不均一のナデ調整により凹凸が激しく残っている。140は弥生土器の高杯である。口径は26.9cm、器高は23.6cmを測る。浅い椀状の杯部から口縁部が水平に屈曲した後、端部は斜め上方へ延びる。口縁部外面には擬凹線文が施される。脚柱部は直線的に延び、1/2程度から大きく外方へと開く。下部1/3程の位置に4か所の穿孔が施される。内外面ともに細かなミガキ調整により丁寧に仕上げられている。以上が弥生時代に属する遺物である。

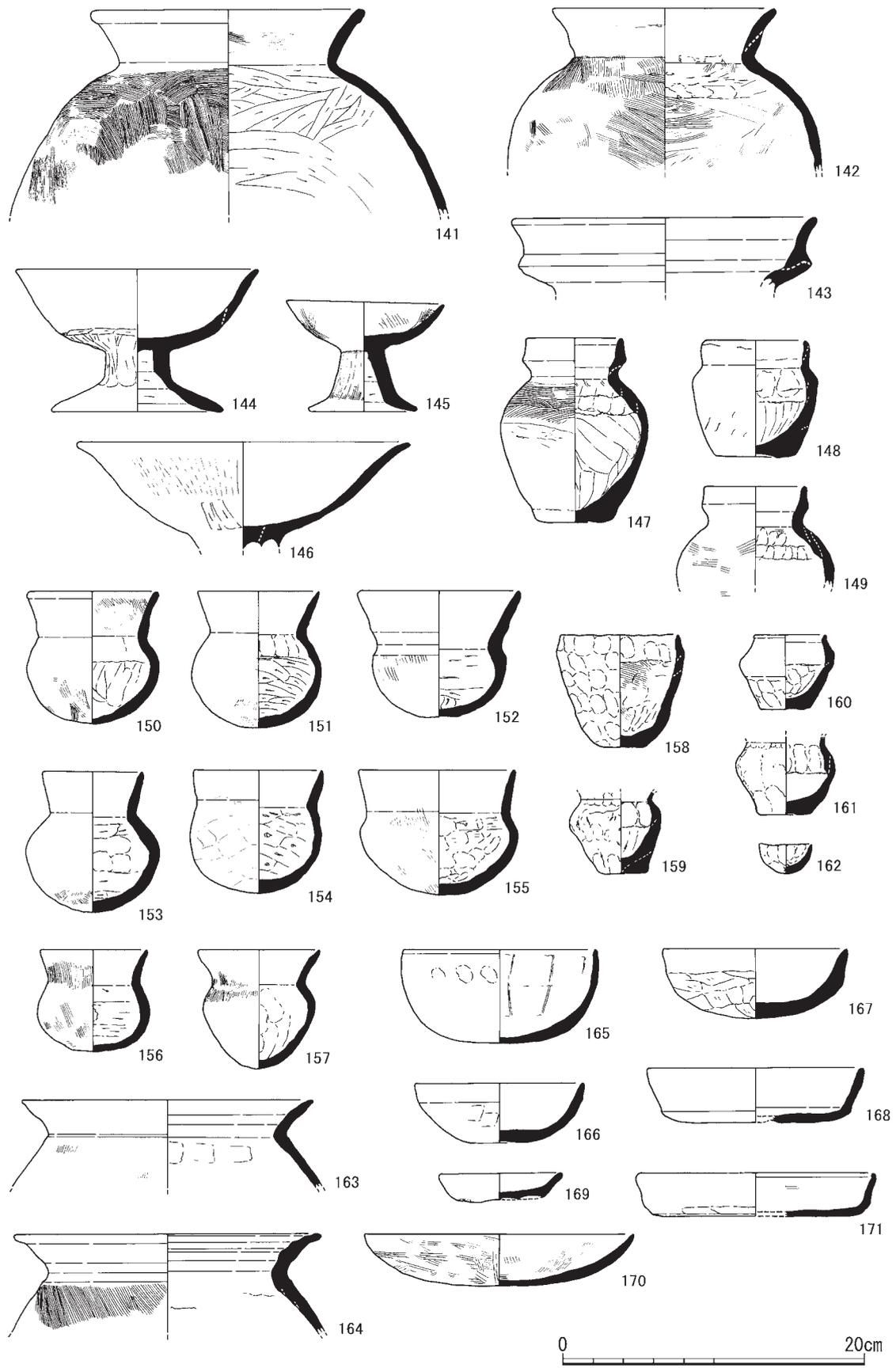
117は土師器の杯である。口径10.9cm、器高5.2cmを測る。口縁端部をわずかに外反させている。118は土師器の壺である。球形の体部に外方へ開く口縁部を有する。外面に黒斑が認められる。119・120は土師器の高杯である。119は椀状の杯部を呈し、口縁端部を外反させる。脚柱部はやや短く、裾部は大きく開く。120も椀状の杯部を呈し、口縁端部を強くナデ、直立させる。脚柱部は太く短く、端部に向かう屈曲もややきつめである。121は土師器の壺である。短い頸部に直立する口縁を持つ。122～124は須恵器杯蓋である。125～129は須恵器杯身である。130は須恵器高杯である。三方に方形の透かし孔を穿つ。131は須恵器器台の脚部である。方形の透かし孔を有し、その下部に突帯2条を設ける。以上が古墳時代に属する遺物である。以下、古代から中世に属する遺物について記述する。

132は須恵器の壺である。下半が残存するのみである。高台は剥離して欠損する。133は須恵器の皿である。胎土は精良で焼成も堅緻である。134は緑釉の椀である。胎土は精良で焼成は硬質である。見込み部分が1/2程度出土しているに過ぎないが、高台は削り出しており、畳付きにも釉が認められる。135は須恵器の椀である。口径は15.6cm、器高は5.1cmを測る。突出した平底を側面を削ることにより成形している。底面には明瞭な回転糸切り痕が認められる。136は白磁椀である。口径は16.8cm、器高は7.0cmを測る。口縁端部が玉縁状となり、高台は削り出しているが、突出はわずかである。見込みには一条の圈線がめぐり、体部外面には成形の際の工具痕が残る。外面下半は露胎である。137は丹波焼の甕である。口径33.8cmを測る。138は古瀬戸の皿である。口縁部が1/12程度残存するのみであるが、口径は12.2cmに復元できる。薄く灰釉が掛けられ、淡い緑灰色を呈する。片口で、内面におりし目を刻んでいる。14世紀の所産である。139は朝鮮王朝陶器の皿である。見込み付近が1/3程度残存している。高台は削り出しており、見込みには目痕が2か所確認できる。内外面共に灰色の釉薬が畳付きを含めて全面に施釉されている。16世紀頃と考えられる。S D01 aからは、弥生時代後期、古墳時代、古代～中世に到るまで広い時期の遺物が出土している。

141～185はC地区から出土したものである。先述したように遺物包含層からの出土である。

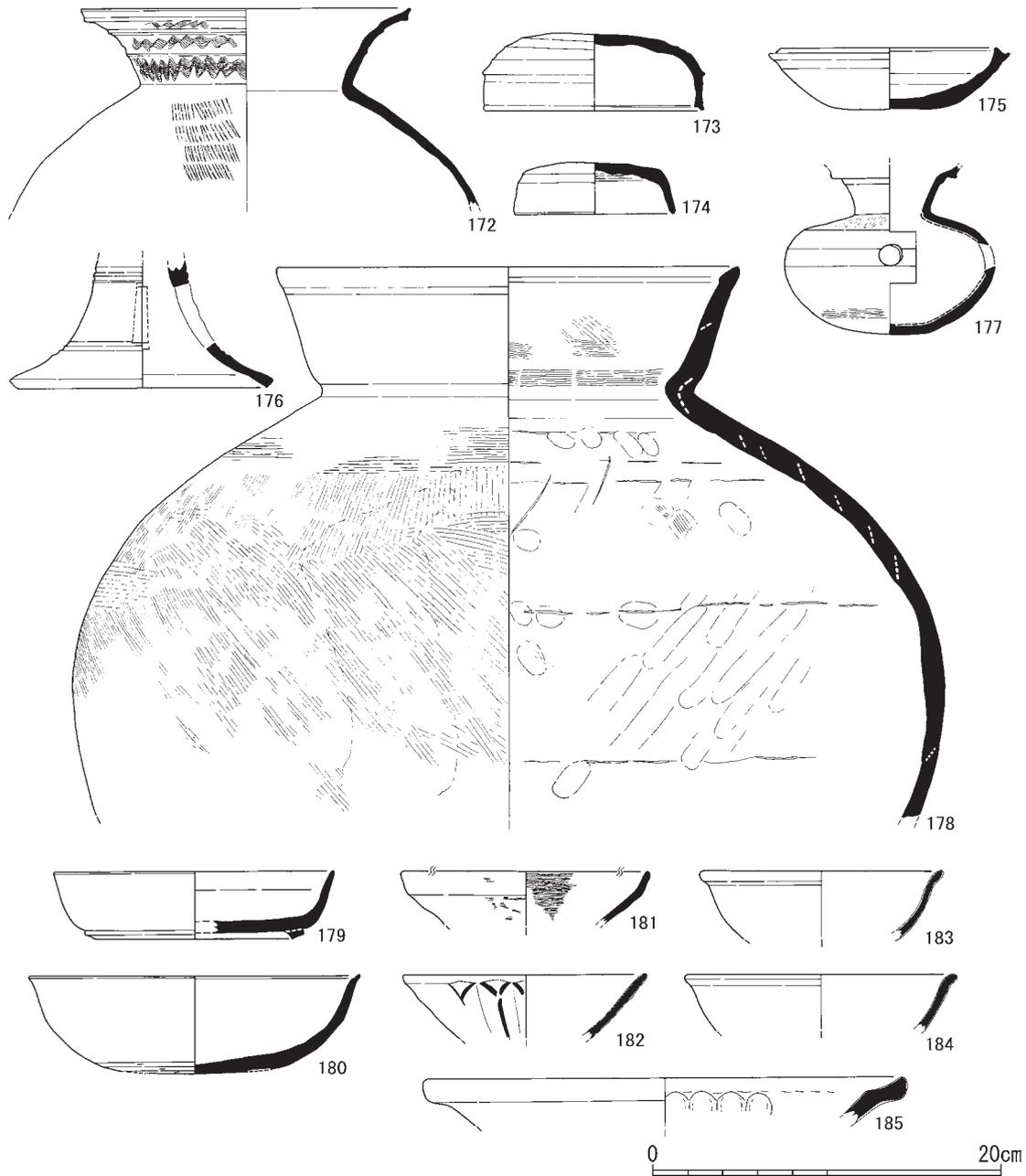


第24図 出土遺物実測図(9) B地区：土器

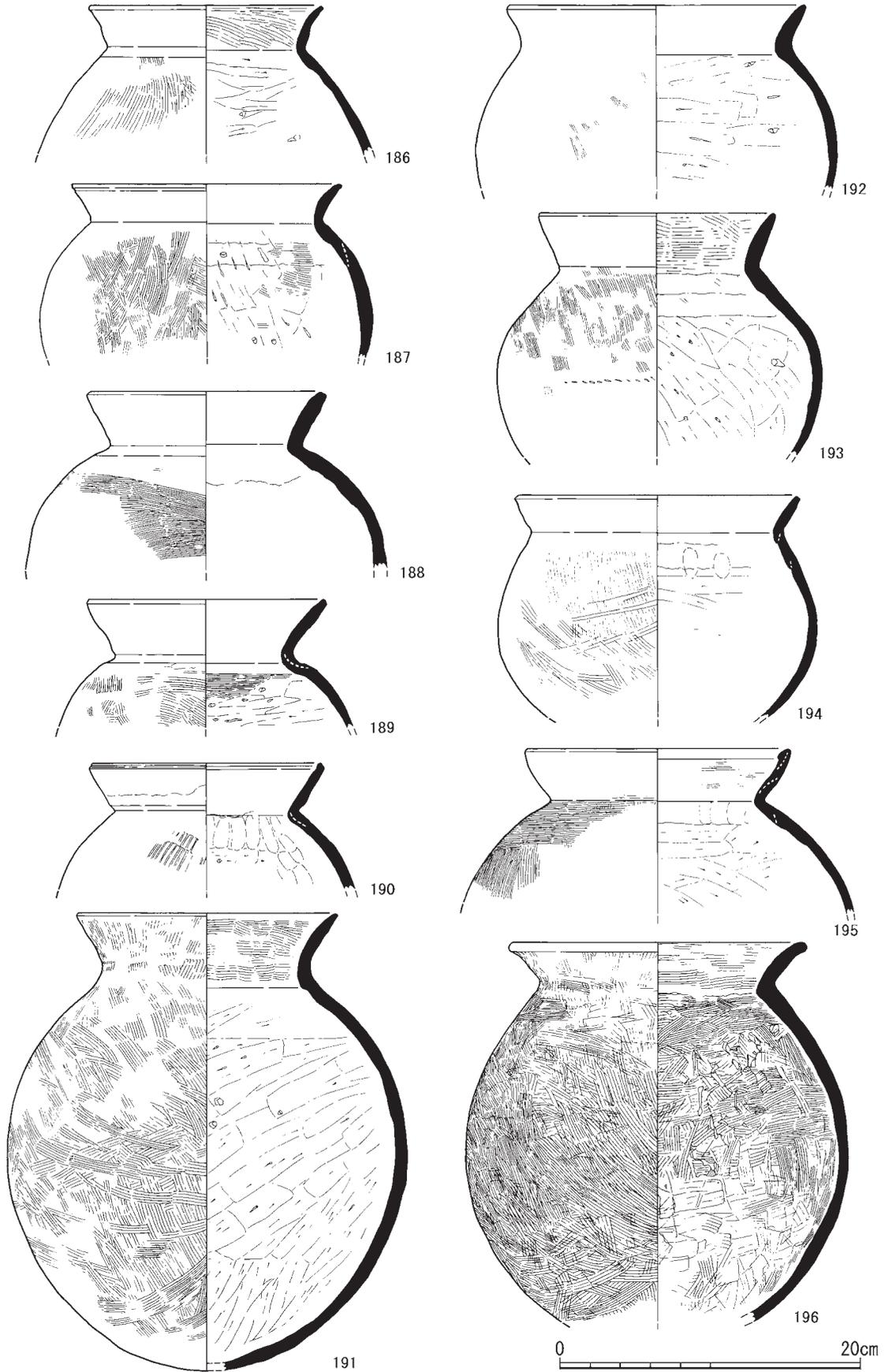


第25図 出土遺物実測図(10) C地区：土器

141・142は甕である。口縁部はナデ、体部外面はハケ、頸部以下の内面はケズリ調整により仕上げている。143は壺である。口縁部のみが残存している。144～146は高杯である。147～149は小型の壺である。147は器高12.4cm、口径6.2cmを測る。短く外反する頸部から口縁部を直立させている。口縁部はナデ調整、体部外面はハケ調整の後、下半をナデにより磨り消している。平底を呈し、外面下半に黒斑が認められる。148は斜め上方に伸びた体部が肩部で内向きに屈曲し、口縁部を短く直立させる。149は下半を欠損するが、147と同様の形態である。150～157は小型丸底壺である。152は体部上半の内弯が弱く、口縁部が大きく外へ開く。154・155は体部の窄まりが弱く、口縁部が直立気味となっている。156は完形で出土しているが、器高7.1cm、口径6.9cm



第26図 出土遺物実測図(11) C地区：土器

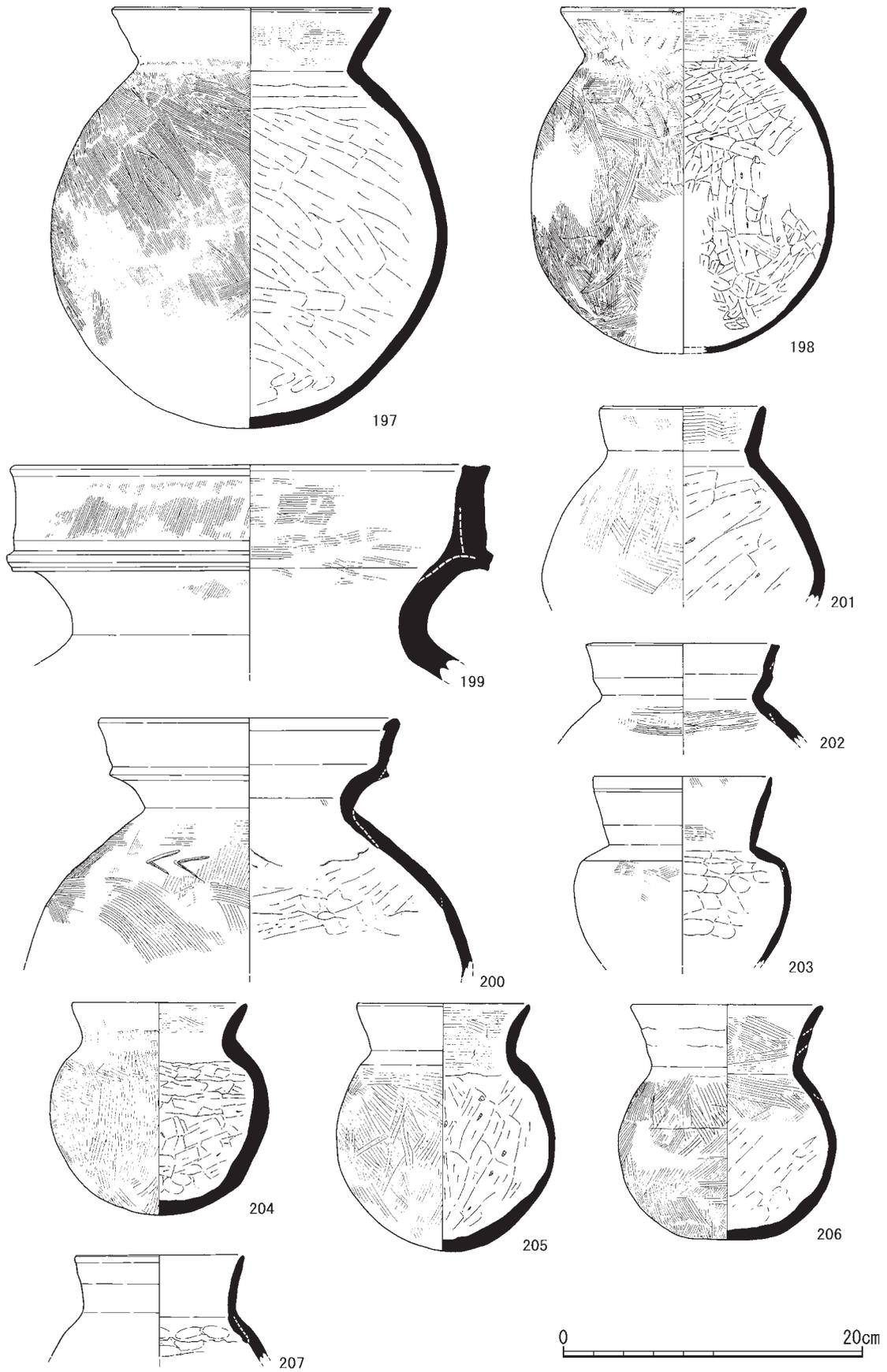


第27図 出土遺物実測図(12) D地区：土器

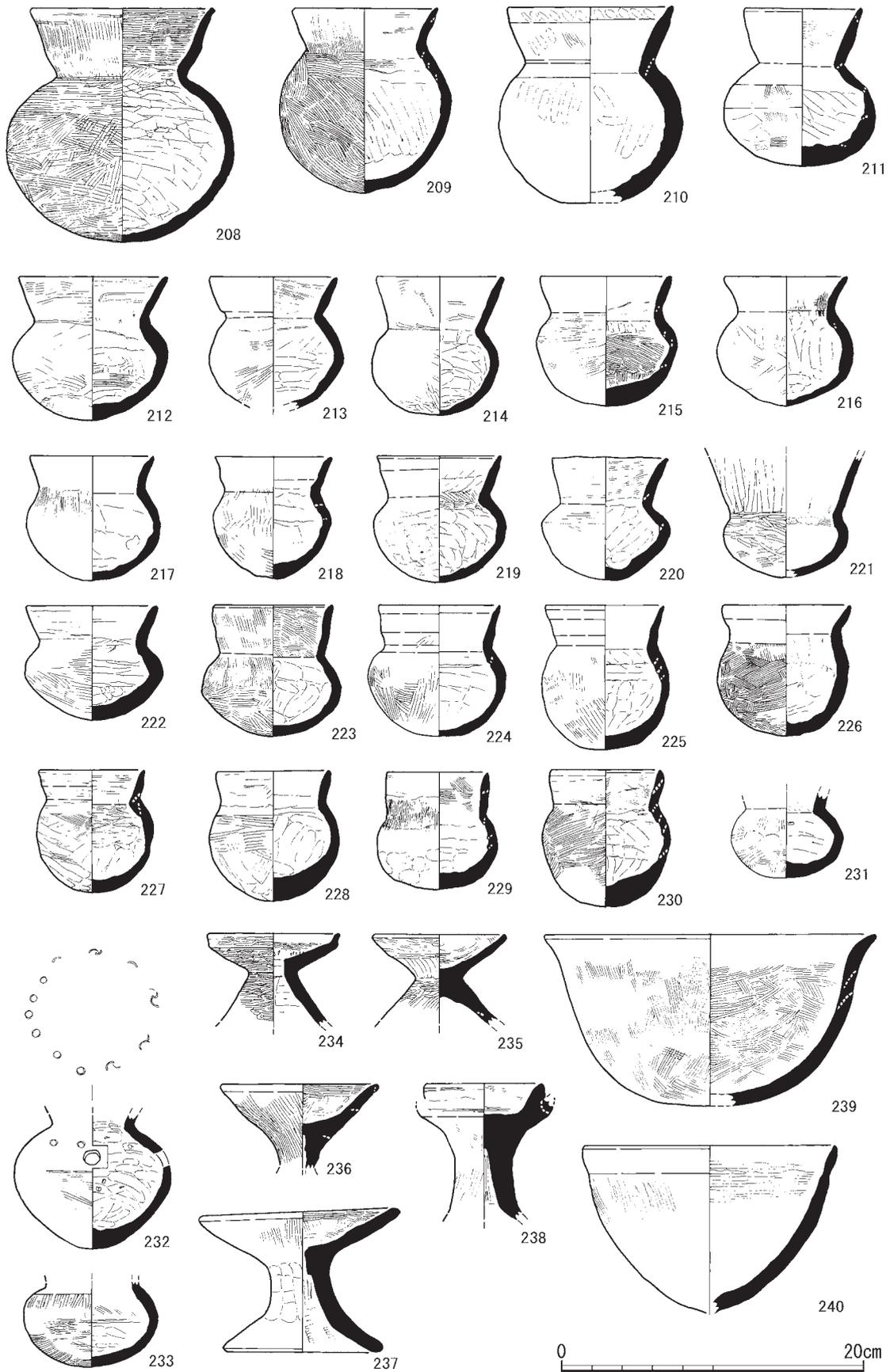
を測り、他例よりも小型である。157は尖底である。小型丸底壺は完形率が高く、埋没に際して、あまり距離を動いていないものと考えられる。158～162はミニチュア土器である。手捏ねの粗製品で、158は成形の際の指頭圧痕が外面に明瞭に残る。159～161は、平底を呈し、内弯する体部に短く外反する口縁部を呈する。内外面共に指頭圧痕が明瞭に残る。162は半球形の体部を呈する鉢である。口径3.5cm、器高2.0cmを測り、器壁も非常に薄い小型品である。163・164は甕である。頸部以下は残存しない。164は口縁部に強いナデによる凹凸が認められ、「青野型甕」である。^(注6)165～168は土師器杯である。165は全体の1/3程度が残存しており、口径12.6cm、器高6.3cmを測る。外面は摩滅が激しいが、内面には赤色顔料が塗布されている。166は厚い器壁を呈し、外面下半はケズリ調整で仕上げている。168は口径14.2cm、器高3.7cmを測る。169～171は土師器皿である。169は口径8.0cm、器高1.8cmを測る。170は口径17.8cm、器高3.5cmを測る。胎土は精良で、焼成も良好である。171は口径15.5cm、器高2.9cmを測る。172は須恵器甕である。頸部を突帯で3段に区画し、それぞれに波状文を施す。173・174は須恵器杯蓋である。175は須恵器杯身である。176は須恵器高杯の脚部である。177は甗である。口縁部を欠損する。178は土師器の壺である。口縁内面端部を肥厚する。大型品で、口径26.2cm、最大径50.0cmを測る。下半部は欠損する。179は須恵器杯Bである。180は須恵器椀である。高台は欠損する。181は瓦器椀である。口縁部付近が1/10程度残存する。体部が屈曲しており、その上部と内面は丁寧にミガキが施される。復元口径は14.0cmである。12世紀後半の所産で、丹後地域での出土は稀有な例である。182～184は青磁椀、185は青磁盤である。いずれも龍泉窯産である。182は1/8程残すのみであり、下半は欠損する。口径は13.8cmを測る。外面に蓮弁文を施す。183・184は無紋の椀である。185は、口縁端部付近が1/10程残存するのみである。口径は27.2cmに復元可能である。内面に蓮弁文を施す。

186～319はD地区から出土したものである。313～319はS K 01から出土したが、それ以外は調査区南半において検出した遺物包含層から出土したものである。

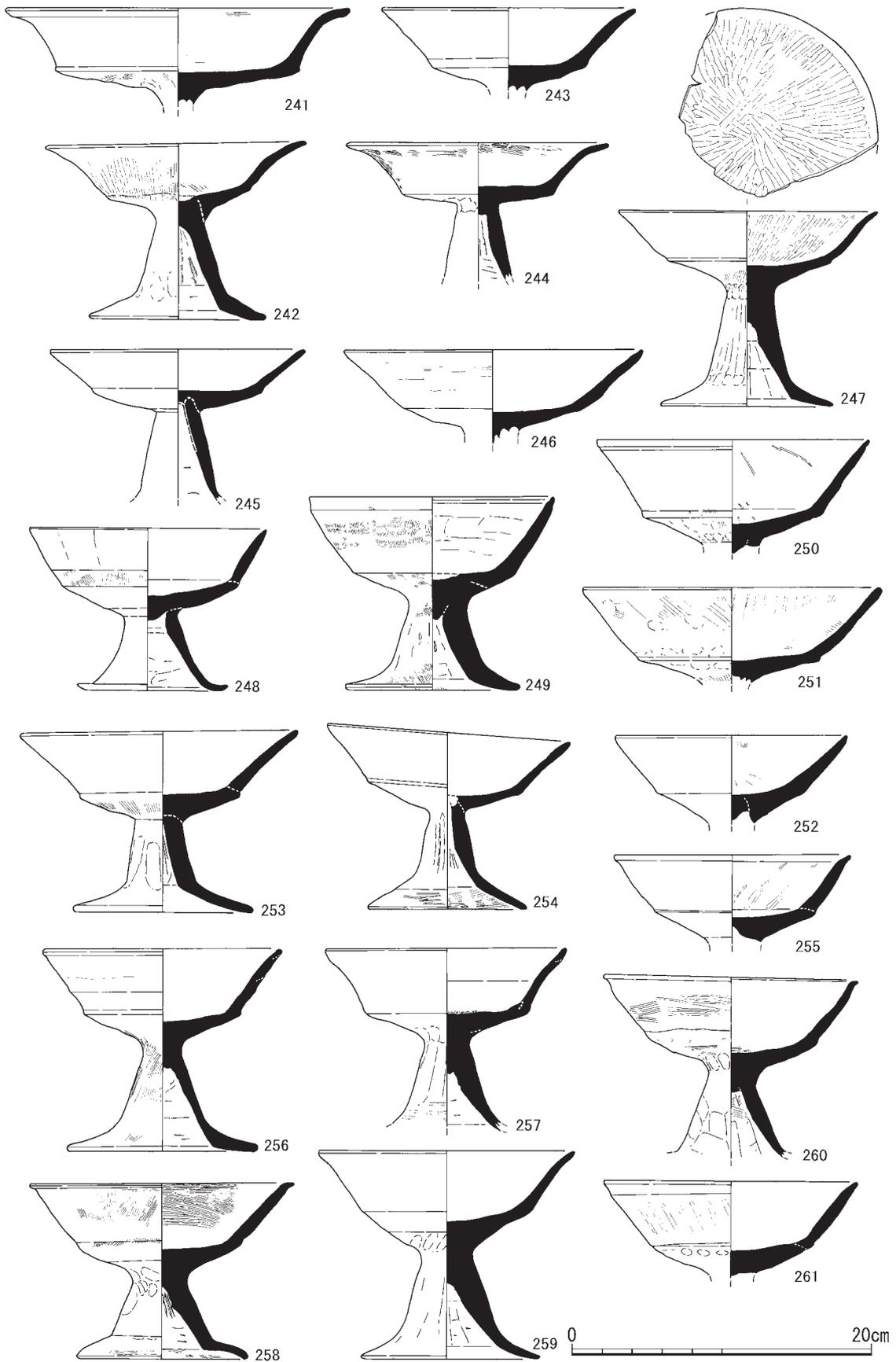
186～198は甕である。基本的に球形の体部を呈し、頸部が「く」字状に屈曲して口縁部に到る。外面はハケ調整、内面は頸部以下をケズリ調整により仕上げている。186は口径15.2cmを測り、198は口径16.3cmを測り、底部を一部欠損するが残存器高は23.4cmを測る。肩部の張りがなだらかで、体部はやや楕円形を呈する。187は口径17.8cmを測り、192は口径19.6cm、194は口径18.4cmを測る。以上3点に関しては、口縁部は外反するが、その立ち上がりが短く、体部最大径に比して、頸部の径が大きいタイプである。188は口径15.4cmを測る。189は口径15.6cmを測り、191は口径17.2cm、底部を一部欠損するが残存器高は30.8cmを測る。口縁部は体部から丸みを有してなだらかに接続し、外上方へと延びる。190は口径15.2cm、195は口径17.6cm、197は口径18.3cm、器高28.5cmを測る。以上の3点は、口縁部の端面内側を肥厚させる布留型の甕である。196は、口縁部を外反させながら強く屈曲させる。口径19.3cmを測り、内外面ともにハケ調整で仕上げている。199～211は壺である。199・200は二重口縁壺である。199は頸部から上側のみの出土であるが、器壁も厚い大型品である。200は肩部にヘラ描きによる簡素な羽状文が刻まれる。



第28図 出土遺物実測図(13) D地区：土器

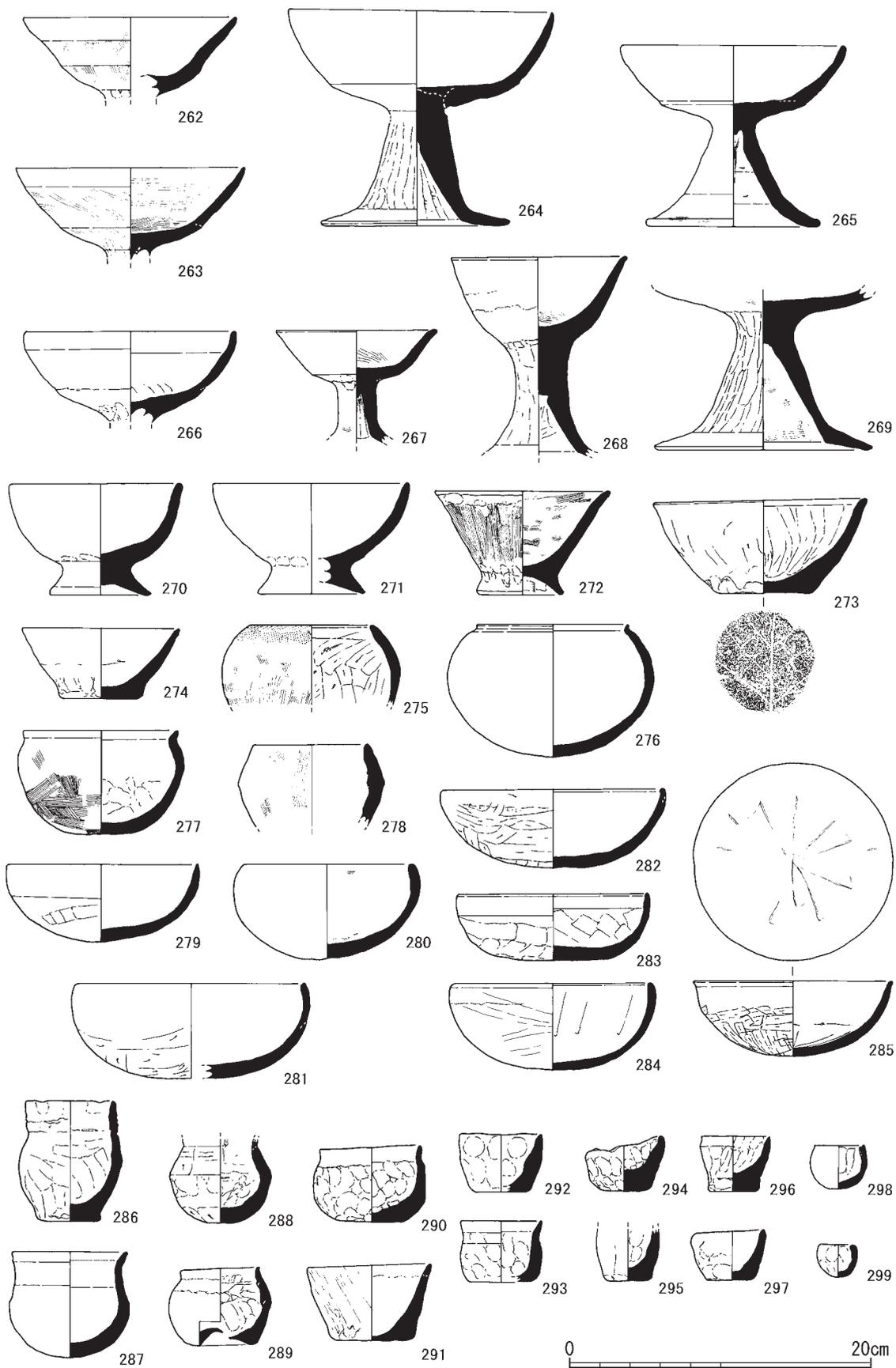


第29図 出土遺物実測図(14) D地区：土器

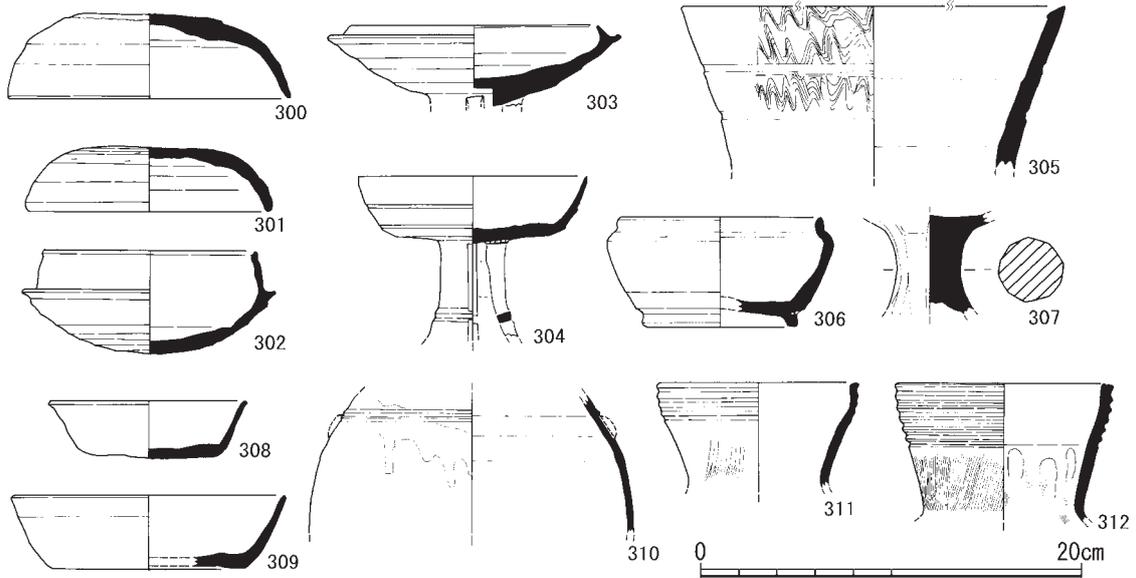


第30図 出土遺物実測図(15) D地区：土器

201は短頸壺である。なで肩で最大径が体部下半にある。体部外面はハケ、内面は頸部以下をケズリ調整で仕上げている。202～210は広口壺である。203は肩が張る形となっている。下半に黒斑を有する。204～210は、球形の体部に外上方に開く口縁部を有する。体部外面はハケ、内面はケズリ調整による仕上げを基本とする。205・209・210には、下半に煤の付着が見られる。212～233は小型丸底壺である。器高、口径共に9.0cm前後の製品が多く、規格性が想起される。211は成形後、頸から差し入れた工具が届く範囲で体部内面を削り取っており、器壁の厚みはバラつきが大きい。212～220・223・228・229はほぼ完形で出土している。221は全体の1/2程が残存するのみであるが、口径7.4cm、器高8.2cmに復元可能である。体部は横位のミガキ調整で仕上げている。小振りな体部に大きく開く口縁部を呈し、やや古相の特色を有する。228～230は口縁部が大きく外反せず直立気味に立ち上がる。230は口縁端部がやや内弯している。231～233は口縁部を欠損する。232は体部径は10.4cmを測り、体部最大径やや上寄りに焼成前穿孔を施す。また、この穿孔の対面には、打ち欠きによると思しき小穴が穿たれているが、本来の穿孔か、調査に際し後出的にできたものか判断が難しい。肩部には竹管文が巡る。2/5は円形となっているが、3/5は半截したものを互いにずらして連結し施している。214・219・222は体部下半に煤の付着が認められ、他の個体に関しても、同様の使用を推測できるのではないか。234～238は器台である。234・235は浅い皿状の受け部を呈し、脚部が大きく開く。234は受け部先端を屈曲して直立させ、体部は円孔を貫通させている。237は受け部の径が脚部のそれを凌駕している。238は受け部が二重に作られているが外側の受け部は残存していない。239・240は鉢である。239は口径21.8cm、器高11.5cmを測る。内外面共にハケ調整で仕上げられており、口縁部は外反する。体部下半には煤が付着している。240は口径16.5cm、器高11.3cmを測る有孔鉢である。体部下半には煤が付着している。241～269は高杯である。241～244は浅い杯部を呈し、杯部が大きく外反する。242はほぼ完形で出土しており、口径16.9cm、器高11.9cmを測る。脚部は裾で大きく屈曲する。245～247は浅い杯部を呈し、杯部は外反せず直線的に延びる。247は杯部内面を放射状のミガキ調整で丁寧に仕上げられており、端部のみをわずかに外反させている。248～252は深い杯部を呈し、杯部は直線的に延びる。248は口径15.8cm、器高11.0cmとやや小型で、脚部の器壁も薄くなっている。253～257は深い杯部を呈し、杯部がわずかに外反する。258～262は深い杯部を呈し、杯部は直線的に延びる。杯部の屈曲が角を成しておらず、稜線が明瞭ではない。258は脚裾部が内弯して丸みを帯びている。263～266も杯部の屈曲が角を成しておらず、稜線が明瞭ではない。杯部は内弯傾向を示している。267は小型品である。口径は10.4cmを測る。脚部下半を欠損する。268は杯部が深い椀型を呈する。口径も11.5cmと小振りである。270～278は鉢である。270～272は脚台を有する。270・271は内弯する椀状の体部を呈しており、272は外上方に直線的に延びた後、端部を外反させる。273は口径13.8cm、器高6.3cmを測る。底面に木葉痕が認められ、体部外面には黒斑を有する。274は273と同一形態を呈するがやや小型で、口径10.3cm、器高4.8cmを測る。275～278は内弯する丸い体部を呈する。275は下半部を欠損するが、口径8.0cmを測り、口縁端部外面に刺突列点文を施す。276はほぼ完形で出土しており、口径9.9cm、器高8.9cmを測る。

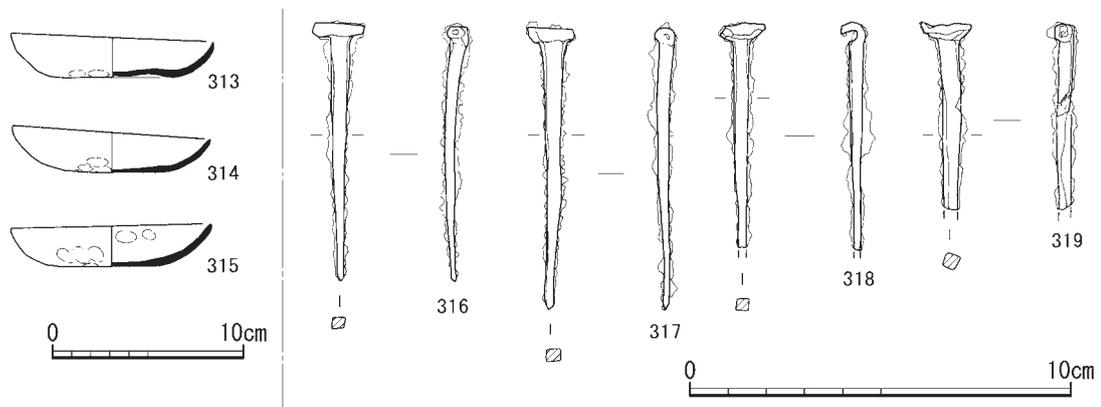


第31図 出土遺物実測図(16) D地区：土器

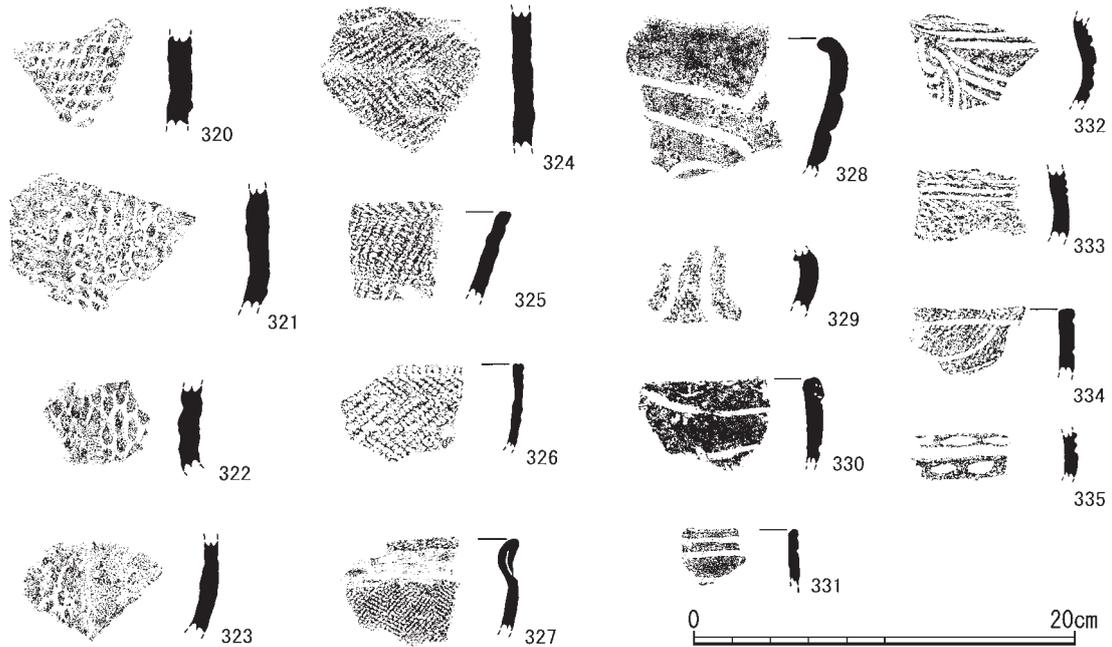


第32図 出土遺物実測図(17) D地区：土器

口縁端部を小さく摘み、外反させている。赤色顔料の塗布が認められ、体部上半に黒斑が観察される。277は内湾する体部に、口縁部をわずかに外反させている。279～285は杯である。282・283には赤色顔料の塗布が認められる。284は完形で出土している。口径12.9cm、器高5.9cmを測り、外面には黒斑が見られる。286～299はミニチュア土器である。286は器高8.1cm、口径5.7cmを測る。平底を呈し、やや内湾する体部から口縁部を短く直立させている。手捏ねの粗製品である。287は小型丸底壺を模して作られている。288～290は球形の体部に外反する短い口縁を呈する平底の鉢である。289の底部は外側から窪まされており、中央部に孔が開いている。291～297は底部から外上方に開く体部を有する鉢である。291は外面をケズリ調整で仕上げしており、その他は、内外面共に指頭圧痕が明瞭に残されている。298・299は体部が半球形を呈する鉢である。口径、器高共に3.0cm前後を測る小型品である。300・301は須恵器杯蓋である。302は須恵器杯身である。303・304は須恵器高杯である。303は有蓋高杯で方形の透かし孔が穿たれている。304は無蓋高杯で長脚二段透かし孔を有する。305は須恵器壺である。口縁部だけの出土であるが、沈線で3段



第33図 出土遺物実測図(18) D地区：土器・鉄釘



第34図 出土遺物実測図(19) 縄文土器

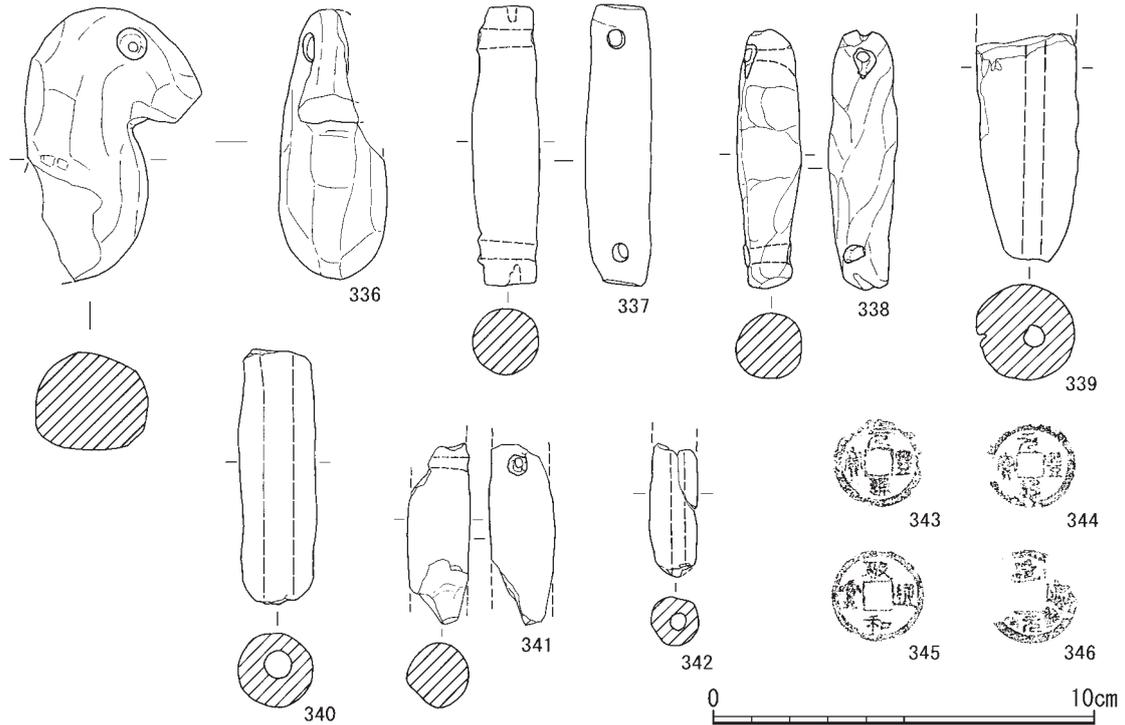
に区画し、最上段には二条の、中段には一条の波状文を施す。306は須恵器壺Eである。1/2程が出土している。口径10.4cm、器高5.8cmを測る。307は土師器高杯である。脚柱部以外は欠損する。多角形に面取りされており、断面形は十角形となっている。外面には赤色顔料が塗布されている。308・309は須恵器杯Aである。310は青磁の壺である。肩部付近が出土しており、耳の剝離痕が確認できる。鉄釉を流し掛けている。長沙窯産もしくは龍泉窯産と考えられる。311・312は弥生土器壺である。凹線文が施されており、IV様式と考えられる。313は口径10.3cm、器高2.2cmを測る土師器皿である。314は口径10.4cm、器高2.2cmを測る土師器皿である。315は口径10.5cm、器高2.0cmを測る土師器皿である。以上3点はS K01から出土しており、埋葬に際し供えられたと考えられる。316～319は鉄釘である。残存長は5.0～7.6cmである。棺材に使用されていたものと考えられる。

320～331は縄文土器である。326～334はA地区S D01 a、320・324・325・335はB地区、321～323はC地区からそれぞれ出土している。320～323は早期の押型文土器である。縦方向を主軸とするポジティブな楕円形文である。324～326は前期の縄文である。325は口縁部と考えられ、端面に刻み目を有する。328は後期初頭の縁帯文土器である。口縁部は内弯傾向を示す。329は中期末の北白川C式であると考えられる。327・330～335は後期に属すると考えられる。ヘラ描き沈線が施されており、沈線の間隔には粗密があり、配置にも単純な平行線や、複雑な文様を構成するものがある。335では沈線の上下に横長の刺突を連ねている。

2) 土製品・銭貨

336～342は土製品である。336はD地区、338～341はA地区S D01 a、337・342はB地区S D01 aからそれぞれ出土している。

336は鳥形土製品である。頸部から上側のみが出土している。左側頭部を大きく欠損するが、

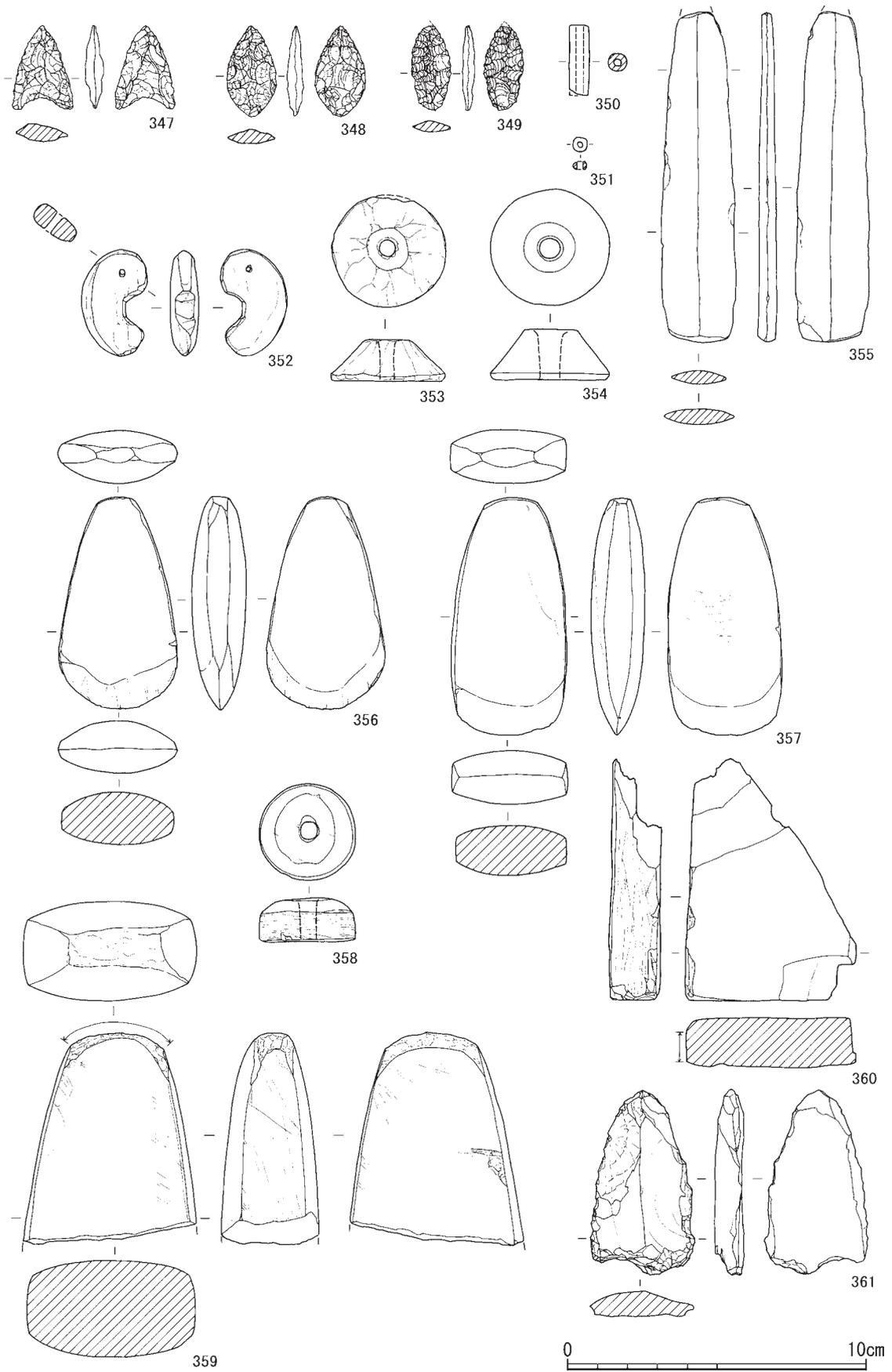


第35図 出土遺物実測図(20) 土製品・銭貨

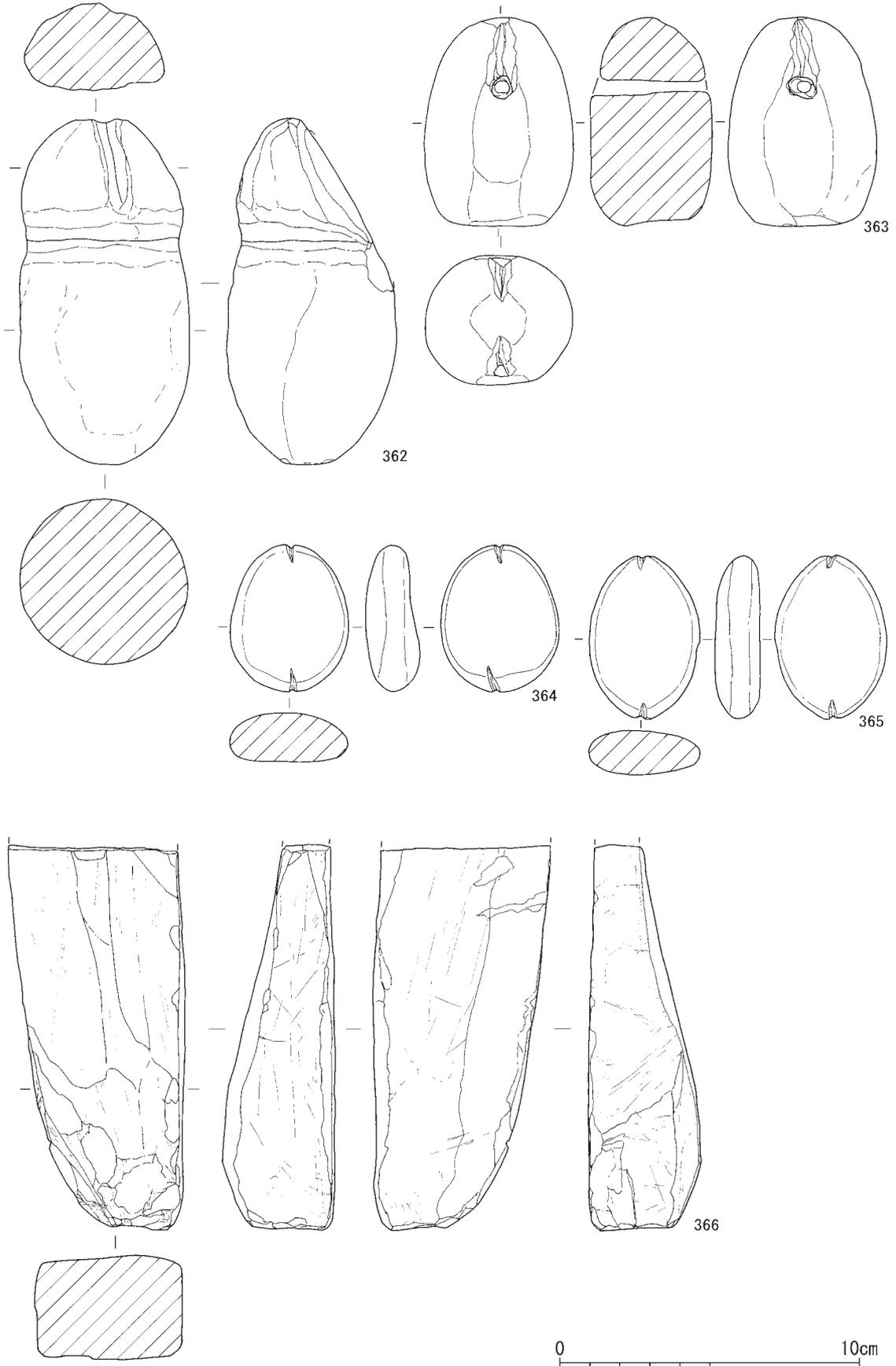
残存する右目は丸く押し窪めている。嘴を作り出しているが、先端は欠損する。その形状から水鳥を表現しているものと判断される。337～342は土錘である。337～339は須恵質、340～342は土師質に焼成されている。337は長さ7.4cm、径1.8cm、重量27.5gを測る。上下端面の中心に小穴を穿っている。338は長さ6.9cm、径1.8cm、重量22.1gを測る。上下端面に切り目を入れている。341は欠損部分があり全容は不明であるが、残存長4.8cm、径1.7cm、重量13.1gを測る。以上3点は上下端に横方向から孔を穿つタイプである。339も欠損部分が大きく全容は不明であるが、残存長6.1cm、径2.6cm、重量44.1gを測る。340は長さ6.8cm、径2.0cm、孔径0.8cm、重量26.2gを測る。342は大半を欠損する。残存長3.5cm、径1.1cm、孔径0.4cm、重量5.6gを測る。これら3点は中心に孔を穿つタイプである。343～346は銭貨である。343・344は「元豊通寶」(1078年初鑄)である。345は「政和通寶」(1111年初鑄)である。344と345は裏面同士が癒着している。これ以外に2枚が表面同士を癒着させて出土している。この他に図を示すことができなかったが、B地区の遺構精査中に「熙寧元寶」(1068年初鑄)、「皇宋通寶」(1038年初鑄)が出土している。

3) 石製品

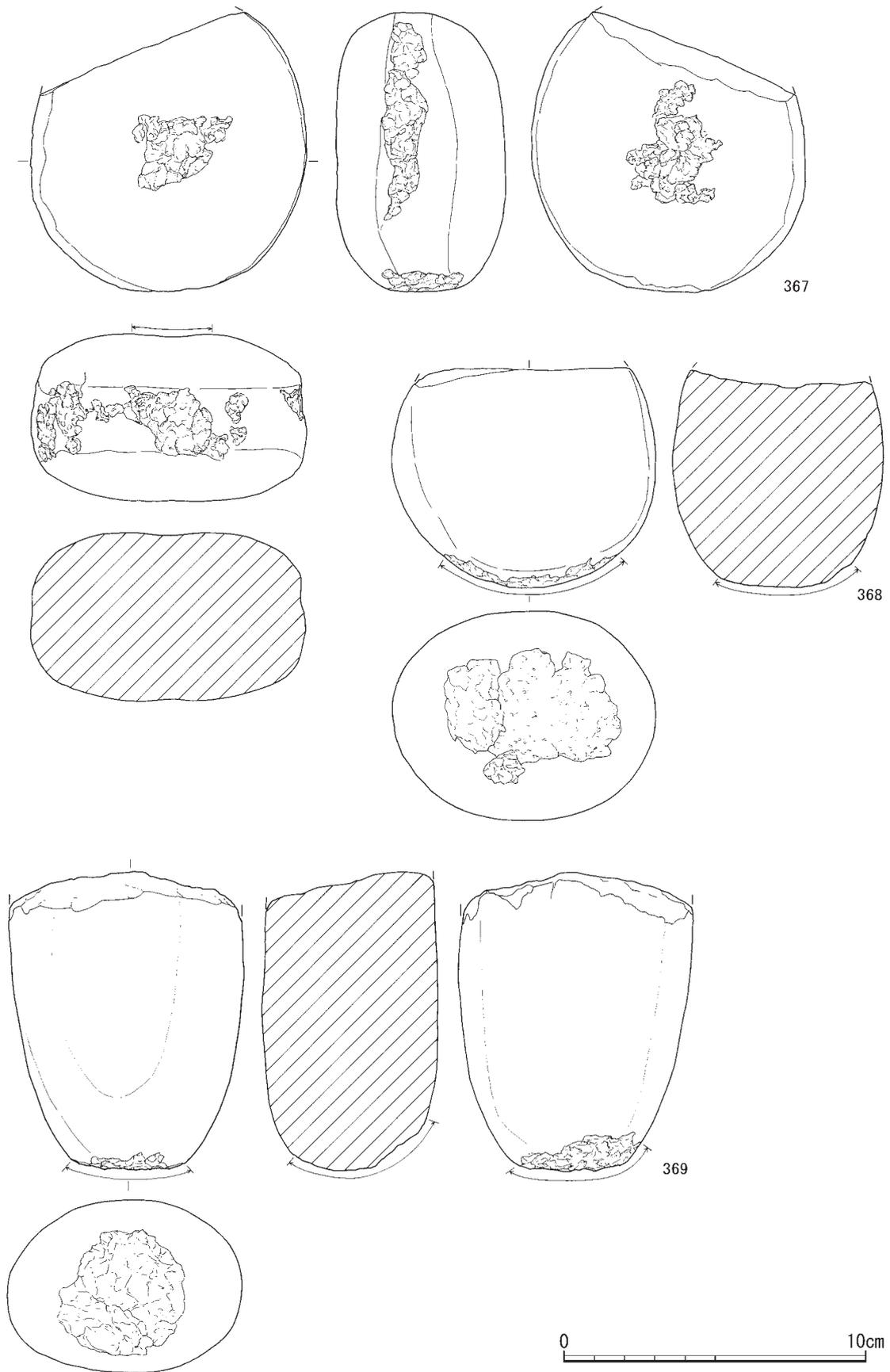
347～374は石製品である。347・348・353・355～358・360・361・363～369・371・374はA地区から出土しており、355がS D01 bから、それ以外はS D01 aからの出土である。359はB地区のS D01 aから、351・352・370はC地区から、349・350・362はD地区から出土した。347は凹基無茎の石鏃である。全長2.9cm、厚さ0.6cmを測り、重量は2.2gである。石材はサヌカイトである。348・349は凸基無茎の石鏃である。348は全長3.1cm、厚さ0.5cmを測り、重量は2.2g。349は先端部をわずかに欠損する。残存長2.9cm、厚さ0.4cmを測り、重量は1.3gである。石材は348



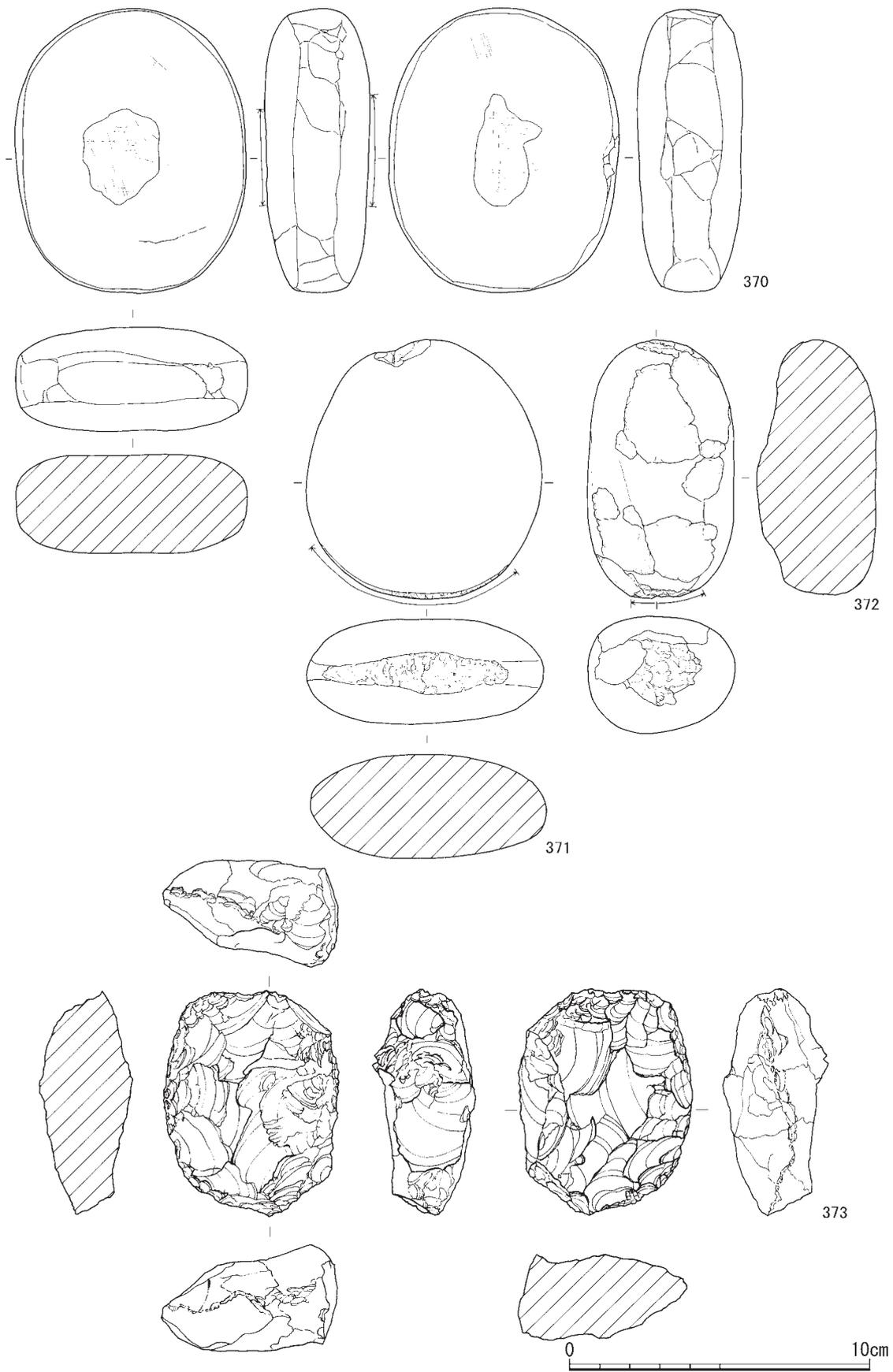
第36図 出土遺物実測図(21) 石製品



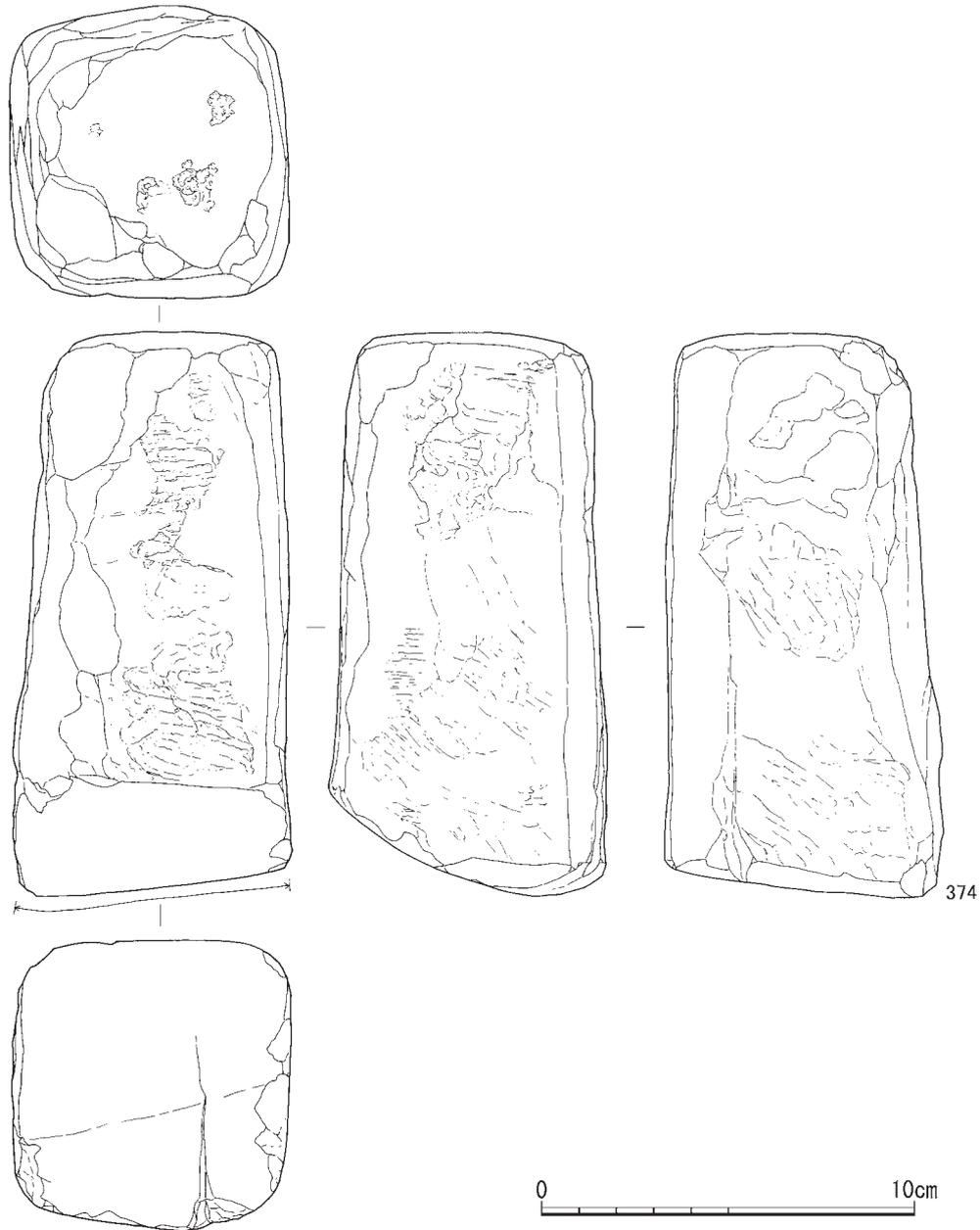
第37図 出土遺物実測図(22) 石製品



第38図 出土遺物実測図(23) 石製品



第39図 出土遺物実測図(24) 石製品



第40図 出土遺物実測図(25) 石製品

が玄武岩、349はチャートである。350は緑色凝灰岩製の管玉である。端部をわずかに欠損するが、残存長2.4cm、径0.65cmを測る。351は滑石製の白玉である。352は蛇紋岩製の勾玉である。両側から穿孔されている。353・354・358は紡錘車である。いずれも滑石製である。353は、頂部径1.4cm、底部径3.7cm、高さ1.4cmを測る。重量は17.9gである。354は、頂部径1.7cm、底部径3.9cm、高さ1.7cmを測る。重量は32.4gである。358は頂部径2.0cm、底部径3.2cm、高さ1.5cmを測る。重量は26.1gである。355は粘板岩製の磨製石剣である。切先を欠損し、残存長11.2cmを測る。刃部から基部まで鏑を有し、基部両側に関を削り込む。このサイズから、短剣又は槍先の可能性もある。356は磨製石斧である。長さ7.2cm、厚さ1.8cm、重量75.2gを測る。357も磨製石斧である。長さ8.1cm、厚さ1.8cm、重量97.2gを測る。359は磨製石斧である。刃部を欠損する。残存長7.2cm、幅5.8cm、

厚さ3.3cmを測る。重量は202.2gである。以上の3点はヒン岩製で、いずれも縄文時代に帰属するであろう。360は砥石である。硅質頁岩製である。361は打製石剣である。先端部のみの出土である。片面のみに鑿が確認できる。残存長は6.3cm、幅3.5cm、厚さ0.9cmを測る。石材は粘板岩である。362～365は石錘である。362は上端部及び胴部上半に切り込みを有する。重量は400gを測る。山陰東部から丹後地域に特有の石錘である。363は両側から穿孔されており、裏面では場所を違えて複数回の穿孔を試みた痕跡が確認できる。穿孔から上端に向け切り込みを有する。重量は209.7gである。364・365は扁平な楕円形を呈する。上下両端に切り目を有する。重量は364が46g、365は43.8gである。362・363は安山岩製、364・365は砂岩製である。縄文時代に属すると考えられる。366は砥石である。全面において使用痕が確認できる。硅質頁岩製である。367・370は磨石である。367は一部を欠損する。直径9.0cm前後の円形を呈し、厚みは5.6cmを測る。重量は700gである。全周に擦痕が確認できる。安山岩製である。370の平面形は扁平な楕円形を呈し、長軸9.6cm、短軸7.7cm、厚さ3.5cmを測る。重量は407gである。厚みも薄く、堅緻な花崗岩の全周が平滑になるまで使い込まれていることから、石器等の調整に用いられていた可能性が考えられる。368・369・371・372は敲石である。368はやや扁平な球形を呈するが、上部を欠損する。重量は585gである。安山岩製である。369は、截頭形の円錐状を呈するが、端部を欠損する。重量は710gである。花崗岩製である。371は扁平な楕円形を呈し、上下端部に敲打痕が認められる。重量は360gである。ヒン岩製である。372は俵型を呈する。重量は245gである。上下両端面に敲打痕が認められ、胴部は打撃によると考えられる剝離痕が認められる。砂岩製である。374は石杵である。全長17.5cm、厚さ7.5cmを測る。重量は1450gである。砂岩製である。(奈良康正)

373は厚みのある礫素材の石核、または表裏面を入念に加工した両面調整石器である。長さ7.6cm、幅5.8cm、厚さ3.5cm、重さ164.3gを測る。石材は玉髓あるいは鉄石英である。相対する縁辺部の稜線が打撃により潰れ、それとともに表裏面に連続する剝離面及び打裂痕が形成されている。これは両極技法として楔形石器にみられる形態と使用痕である。強烈な打撃により縁辺部に潰れ痕、剝離痕が、そして片側側面に特徴的な裁断面が形成されている。なお、本素材は所属時期を考えると、旧石器時代の石核とするには、縦長の剝片剝離がみられないし、楔形石器は旧石器時代には一般的なものとはいえない。従って縁辺部の剝離形状からみて、縄文時代における石器製作技法が駆使されたようで、石鏃などの小型石器の素材を得る目的で調整・成形されたものと理解しておきたい。(黒坪一樹)

4. まとめ

今回の調査では、A・B地区で弥生時代後期の溝1条と古墳時代の土坑、土石流の痕跡等を、C・D地区では古墳時代の良好な遺物包含層を検出した。また、D地区では中世の火葬墓を検出した。

A・B地区で検出した溝S D01bは、南側を土石流である溝S D01aにより切られており、全容を明らかにすることはできなかった。しかし、北半は良好に残存しており、その地点からは弥生時代後期後半を中心とする良好な資料を得ることができた。遺物は、黒色を呈するシルト層の

中に埋没しており、摩滅もほとんどみられず、完形率も比較的に高いものであった。その出土状況から、北岸の淀んだ流れに土器を投棄していた様子を窺い知ることができ、当該期の集落が今回の調査範囲の東側に広がる丘陵裾部に展開する可能性が極めて高いと言えるだろう。これまで遺跡の内容に関しては詳しいことが不明で、散布地とされていた松山遺跡の性格を大きく変更する成果と言えるであろう。また、溝S D01aから出土した遺物群は、縄文時代から中世に到るまでの広い時期幅を有することから、当地において、縄文時代から現代に到るまで、断続的に人々の生活が営まれていたことが判明したのみならず、焼け歪んだ須恵器が含まれていることから、須恵器窯等の生産遺跡の存在をも窺い知ることができる貴重な成果である。D地区を中心にC地区の北端部にまで及ぶ遺物包含層は、古墳時代前期～中期にかけての遺物を中心とする。その内容は小型丸底壺、ミニチュア土器、高杯等の器種が数量的に圧倒し、赤色顔料を塗布したもの、2次的に火を受けたものも少なからず確認される。このことから、極めて祭祀的性格の濃い遺物群であると評価できる。これらの遺物は大きく破損することなく、完形率が比較的高いことから、埋没に際し、大きく距離を動いたとは考えられない。西側で実施された京都府教育委員会並びに京丹後市教育委員会の調査では、古墳時代前期後半から中期前半の竪穴式住居跡が検出されている。この集落の成員により、東側に存在する丘陵裾部において、何らかの祭祀を実施した場が存在することが想定される。また、具体的な遺構に伴ってはいないが、緑釉椀、龍泉窯産青磁、長沙窯産青磁等が出土しており、京丹後市教育委員会が実施した発掘調査においても、円面硯が出土している。^(注7)古代ないし中世段階に、この種の遺物が持ち込まれる施設の存在が想起される。

(奈良康正)

- 注1 福島孝行「府営農業農村整備事業関係遺跡平成20・21年度発掘調査報告Ⅱ平成21年度の調査〔1〕松山遺跡第3次・マンジョウ寺遺跡」(『京都府埋蔵文化財調査報告書(平成21年度)』京都府教育委員会)2010
- 注2 安藤信策「丹後の祭祀遺跡」(『丹後郷土資料館報』第6号 京都府立丹後郷土資料館)1985
- 注3 石尾政信「沖田遺跡第2次」(『京都府遺跡調査概報』第99冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2001
- 注4 橋本勝行「沖田(稲荷岡)遺跡発掘調査概要」(『大宮町文化財調査報告』第16集 大宮町教育委員会)1999
- 注5 細川康晴「府営農業基盤整備事業関係遺跡平成5年度発掘調査概要〔3〕延利遺跡」(『埋蔵文化財調査概報(1994)』京都府教育委員会)1995
- 注6 石崎善久「『青野型甕』について」(『京都府埋蔵文化財論集』第3集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1996
- 注7 京丹後市教育委員会「松山遺跡第6次調査関係者説明会資料」2010.8.31

2. 柿谷古墳・美濃山遺跡発掘調査報告

1. はじめに

今回の発掘調査は、八幡インター線道路整備促進業務に伴うもので、京都府山城北土木事務所の依頼を受けて実施した。調査地は、八幡市の南側丘陵地の縁辺部に位置する。柿谷古墳は美濃山遺跡の範囲内にあり、道路予定地で遺跡の範囲にかかる部分については、古墳の周囲を含めて調査することとなった。付近には、狐谷横穴群、女谷・荒坂横穴群、王塚古墳、美濃山廃寺跡などの遺跡が分布している。

柿谷古墳は八幡市教育委員会により測量調査が行なわれており、直径10m前後の円墳と考えられていた。また、墳丘が腰高であることから、主体部が横穴式石室である可能性も考えられていた。美濃山遺跡は、弥生時代後期から奈良時代にかけての集落遺跡である。今回の調査地の西側に隣接する地点で、八幡市教育委員会が発掘調査を行っており、古墳時代の溝等が確認されている。

現地表面の観察から、調査対象地の中央部分は造成のために大きく削平を受けていると推察されたため、今回の調査では、その北と南にA・Bの2地区を設定して調査を行なうこととした。

調査にあたっては、京都府教育委員会や八幡市教育委員会、地元内里・美濃山の自治会などにご協力いただいた。また、各大学の学生諸君や地元有志の方々の参加があった。感謝したい。この報文は、引原が執筆した。なお、調査に係る経費は、すべて京都府山城北土木事務所が負担した。

現地調査責任者 調査第2課長 肥後弘幸

調査担当者 調査第2課課長補佐兼調査第1係長 小池 寛

同 次席総括調査員 伊野近富

同 主任調査員 引原茂治

同 主査調査員 柴 暁彦

同 調査員 松尾史子

調査場所 八幡市内里柿谷、美濃山大塚

調査期間 平成22年7月26日～平成23年1月13日

調査面積 柿谷古墳1基

美濃山遺跡 400㎡

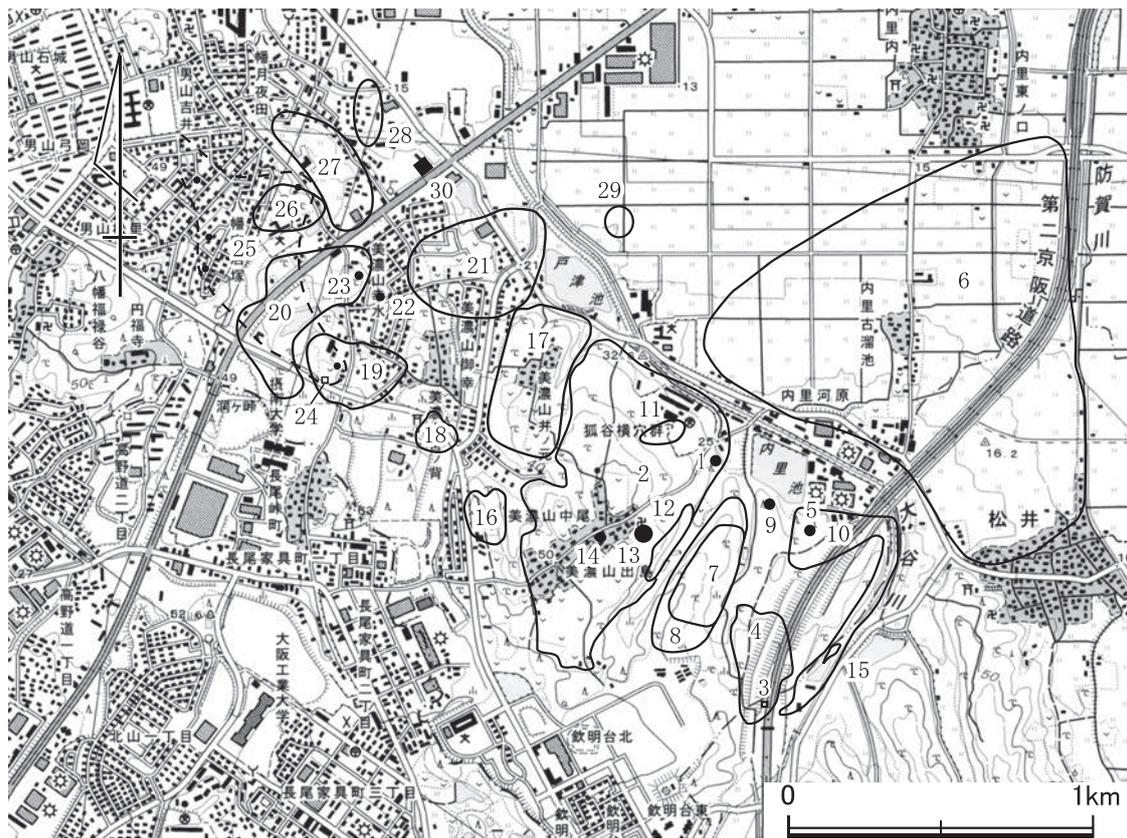
2. 位置と環境

柿谷古墳・美濃山遺跡の所在する八幡市は、京都府南部の山城盆地西部に位置する。市の西側

には、大阪府との境となる男山丘陵・美濃山丘陵が南北に横たわる。東および北側には、木津川が湾曲して流れる。この美濃山丘陵の北東側縁辺部に、柿谷古墳、美濃山遺跡が位置している。

八幡市における旧石器時代の遺跡としては、ナイフ形石器が出土した金衛門垣内遺跡や荒坂遺跡及び宮ノ背遺跡がある。縄文時代の遺跡としては、金衛門垣内遺跡や晩期の土器が出土した内里八丁遺跡がある。弥生時代以降は、遺跡の確認例が増える。弥生時代中期では、集落跡として内里八丁遺跡、金衛門垣内遺跡、方形周溝墓群が調査された幸水遺跡がある。弥生時代後期では、備前遺跡、西ノ口遺跡、宮ノ背遺跡、美濃山廃寺下層遺跡などがある。これらの中には、「戦乱」に対応するため高所に営まれた「高地性集落」に類する遺跡もある。

古墳時代前期から中期にかけては、男山丘陵周辺に、石不動古墳、茶臼山古墳、西車塚古墳、東車塚古墳などの前方後円墳・前方後方墳が築造される。王塚古墳は、古墳時代前期末から中期初頭頃に築造された前方後円墳と考えられている。また、ヒル塚古墳は、粘土槨を主体部とし、方格規矩鏡や武器類を副葬する大形の方墳である。後期には、美濃山丘陵を中心に女谷・荒坂横穴群や狐谷横穴群などの横穴墓が多数営まれる。同時期の集落跡としては、木津川河床遺跡や内



- | | | | |
|--------------|--------------|----------------|-----------|
| 1. 柿谷古墳 | 9. 内里池南古墳 | 17. 金右衛門垣内遺跡 | 25. 南山古墳群 |
| 2. 美濃山遺跡 | 10. 女谷・荒坂横穴群 | 18. 宮ノ背遺跡 | 26. 南山遺跡 |
| 3. 御毛通古墳 | 11. 狐谷横穴群 | 19. 西ノ口遺跡 | 27. 山田遺跡 |
| 4. 荒坂遺跡 | 12. 美濃山横穴群 | 20. 備前遺跡 | 28. 山田東遺跡 |
| 5. 荒坂古墳 | 13. 王塚古墳 | 21. 幸水遺跡 | 29. 五反田遺跡 |
| 6. 新田遺跡 | 14. 小塚古墳 | 22. 東二子塚古墳 | 30. ヒル塚古墳 |
| 7. 美濃山廃寺 | 15. 御毛通遺跡 | 23. 西二子塚古墳 | |
| 8. 美濃山廃寺下層遺跡 | 16. 宮ノ背西遺跡 | 24. 西山廃寺（足立寺跡） | |

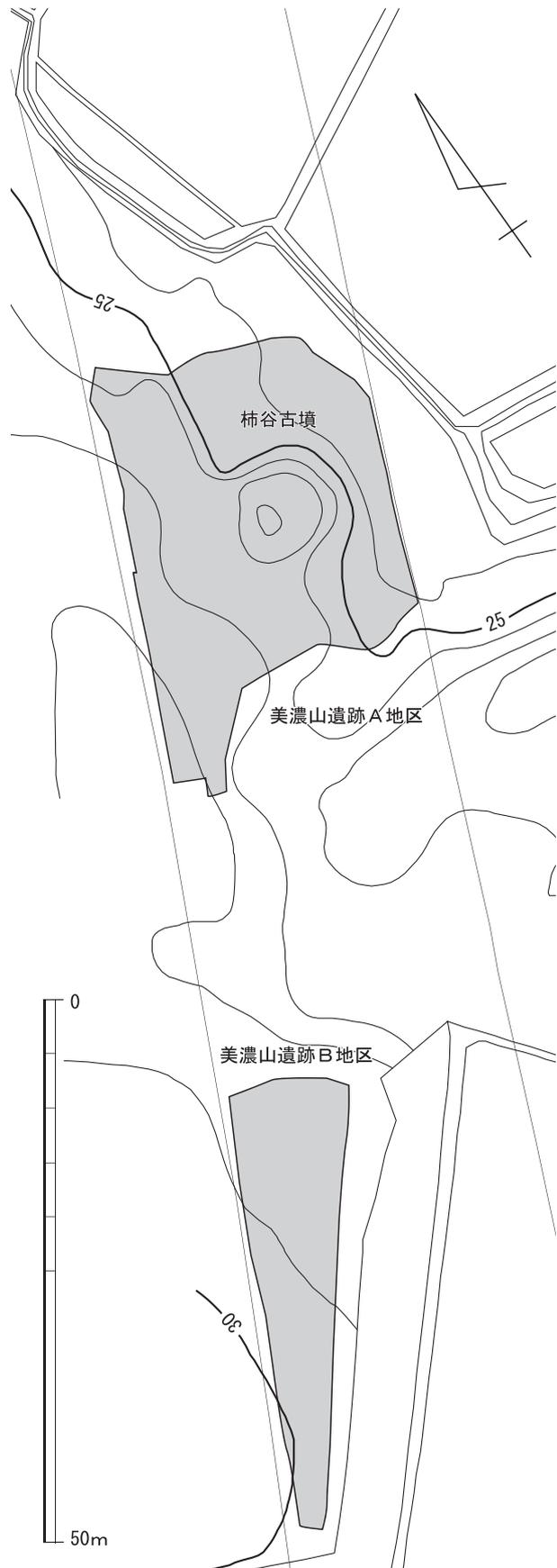
第1図 調査地及び周辺遺跡分布図

里八丁遺跡などの、低地に位置する遺跡がある。

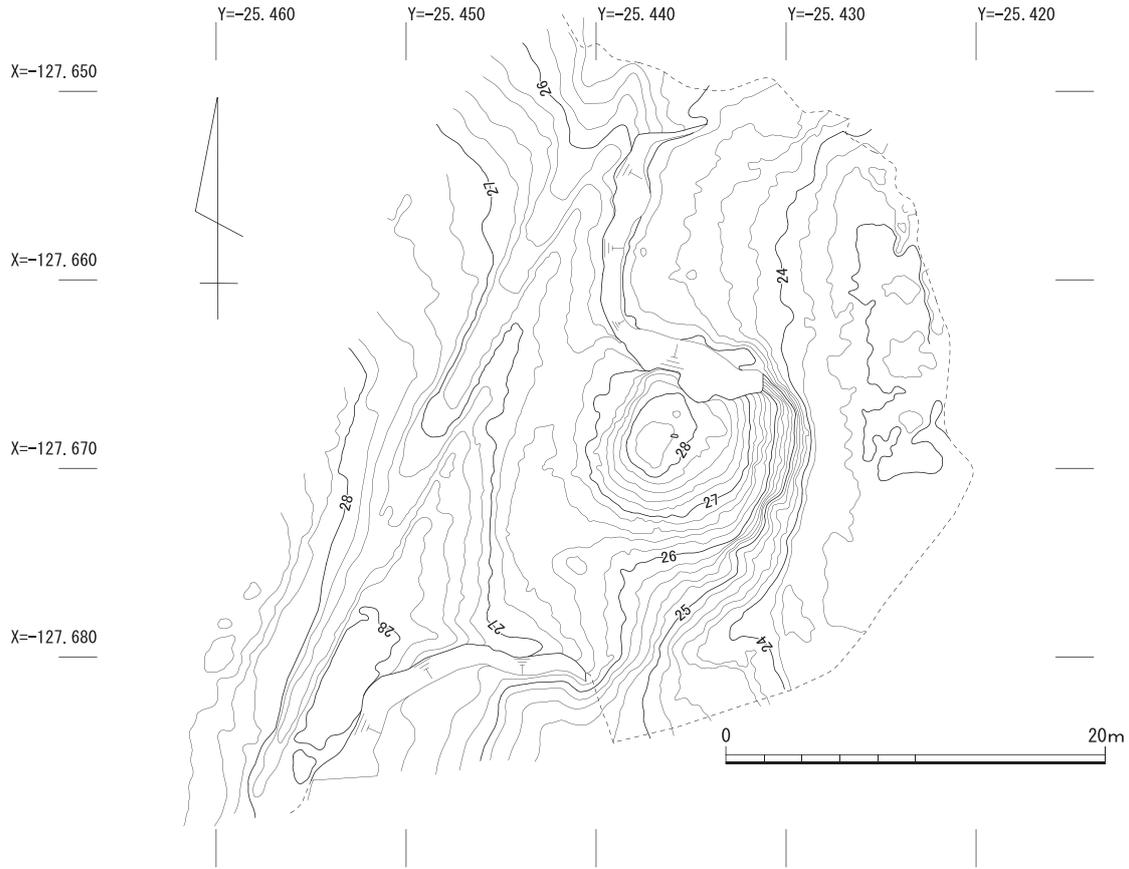
志水廃寺、西山廃寺では、堂塔跡や瓦窯跡が確認され、7世紀後半から末頃の創建と考えられている。美濃山廃寺では、建物跡や溝などが検出され、奈良三彩壺片などが出土している。集落跡としては、内里八丁遺跡、上奈良遺跡、女郎花遺跡、荒坂遺跡などがある。内里八丁遺跡では、瓦や墨書土器などが出土しており、注目される。また、中国唐時代の絞胎陶枕片なども出土しており、遺跡の性格を考える上で示唆的である。上奈良遺跡は、『延喜式』に記載されている「奈良園」の候補地とみられており、則天文字などを記した墨書土器が出土している。生産遺跡としては、四天王寺の創建瓦を焼成した平野山瓦窯がある。また、平安時代には、木津川に面した男山丘陵北側の頂部に、石清水八幡宮が勧請される。中世の遺跡としては、内里八丁遺跡、上奈良遺跡、上津屋遺跡などがある。上奈良遺跡では、中世の井戸跡から木造仏座像の膝部が出土している。

3. 調査経過

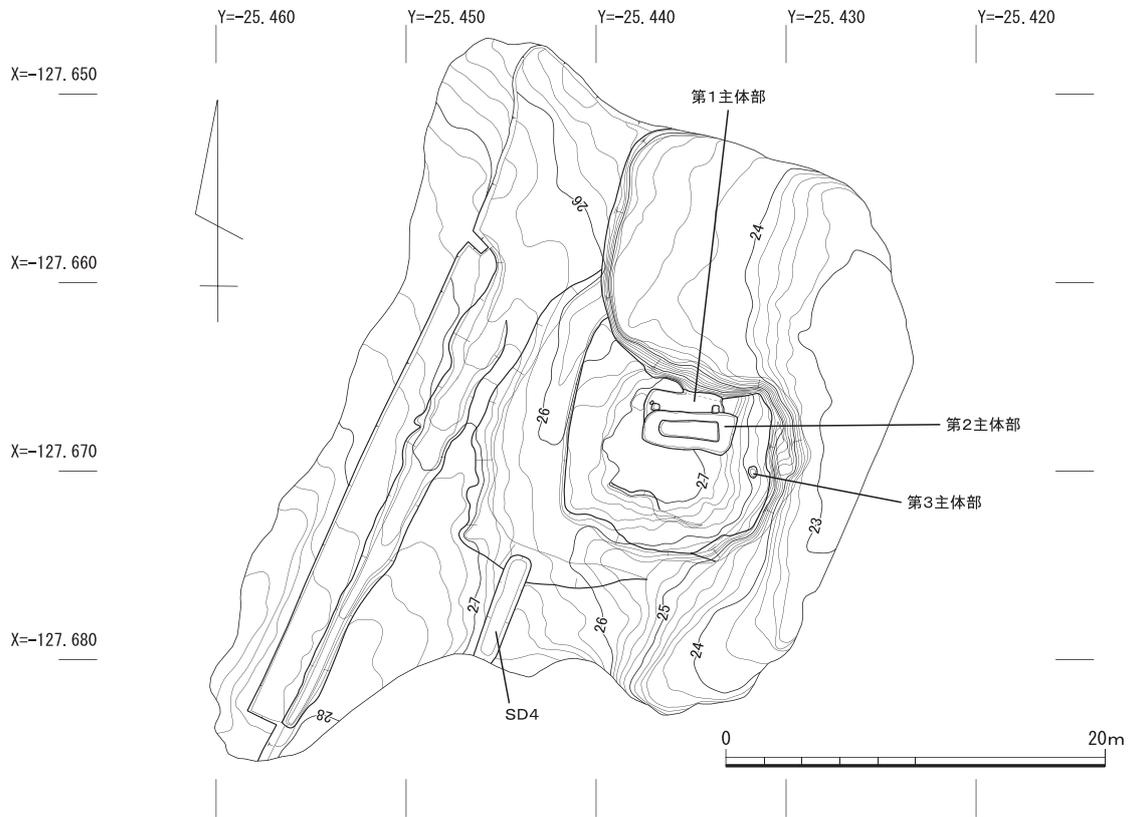
今回の調査は、平成22年7月26日から開始した。調査地は、南東から北西に伸びる丘陵の北東側斜面に位置しており、一帯は竹林および荒蕪地となっている。柿谷古墳の調査を行うためには竹林を広く伐採する必要があったので、まず、伐採の必要のない美濃山遺跡B地区から調査を開始した。この地区では古墳時代から中世にかけての土坑・溝等の遺構を検出した。その後、美濃山遺跡A地区でも、竹の無い部分につ



第2図 調査区配置図



第3図 柿谷古墳調査前地形図



第4図 柿谷古墳地形図

いて人力で掘削を開始した。

伐採の終了を待って、柿谷古墳と美濃山遺跡A地区を一体化して重機掘削を開始した。柿谷古墳の墳丘については、すべて人力で掘削・精査を行なった。その結果、柿谷古墳は古墳時代後期の方墳であることが判明した。また、埋葬施設として木棺直葬の主体部2基と甕棺墓壙1基を検出した。最終段階で、墳丘下部から古墳築造時の祭祀に関係すると考えられる小墳丘を確認した。同時に美濃山遺跡B地区の埋め戻しを行ない、平成23年1月13日に現地調査を完了した。この間、平成22年12月23日に現地説明会を実施した。73名の方々が参加された。

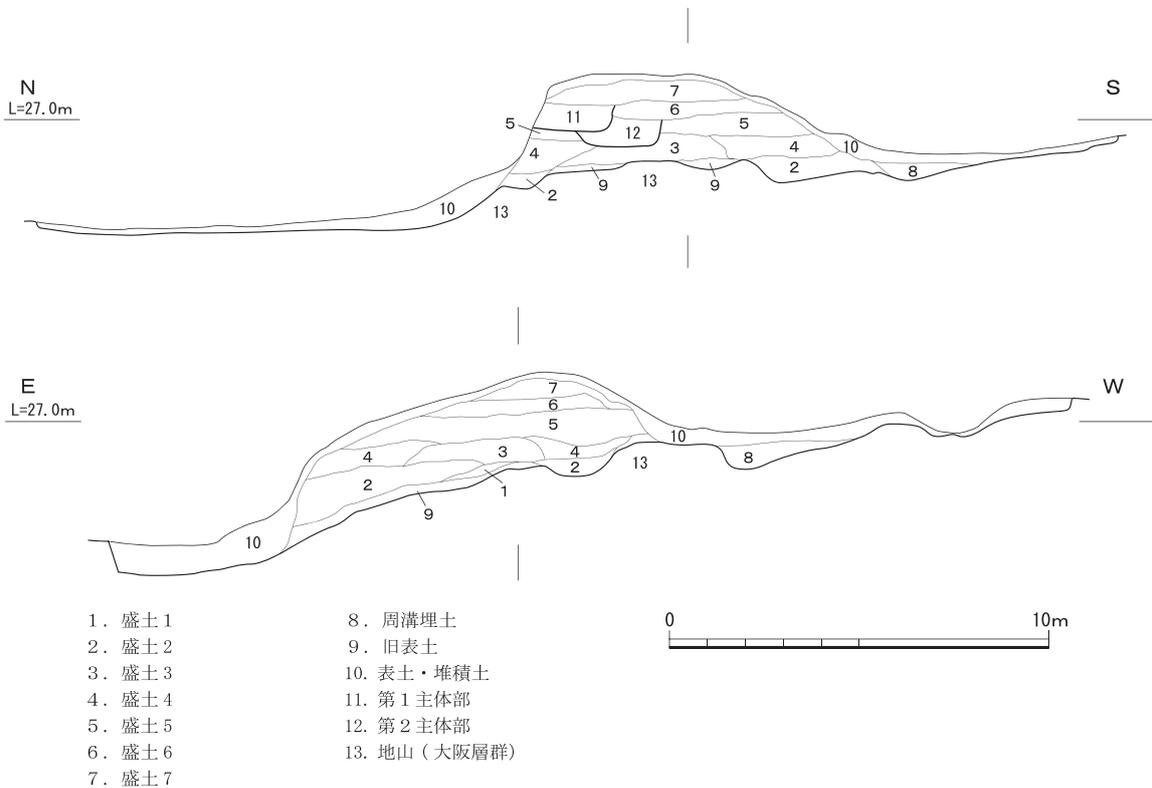
4. 柿谷古墳の調査

調査前の古墳の墳頂部には、中世後期頃以降のものと思われる石造五輪塔の水輪部や一石五輪塔の水・地輪部があり、下部に中世の墓壙などがあることも予想された。調査の結果、そのような遺構は確認できず、付近にあった石塔が、古墳上に集められて祀られていたものと推測される。

この古墳は、後世の開墾などで周囲を削り取られている。特に、北側では著しい。元の状態が比較的良く残っている西側では、墳丘の裾が直線的に延びており、一辺約12mの方墳と考えられる。西及び南側では、3～5mの周溝が残存している。この古墳では、埋葬施設として、墳頂部で木棺直葬の埋葬主体部を2基、墳丘東裾部から甕棺墓壙1基を検出した。第1主体部の調査段階で都出比呂志理事に現地指導をしていただいた。

1) 層序

古墳築造前の旧地形は、西側から東側に向かって下降する斜面地である。この斜面地に「コ」



第5図 柿谷古墳断面図

字状の溝を旧表土上から掘り込んで、一辺6mの方形区画を設ける。盛土1が部分的に盛られ、小墳丘状を呈する。この小墳丘に伴う埋葬施設はなく、その性格は不明である。旧表土上から須恵器が出土しており、墳丘築造時の祭祀などに係るものである可能性も考えられる。この小墳丘については、「下層墳丘」として、後に記述する。

小墳丘上に盛土2を置いて、上面をほぼ水平にする。この盛土は、東側では1m以上に及ぶ。この平面上のほぼ中央に、盛土3を山形に盛る。粒子の細かいシルト状のよく締った盛土で、盛土の単位は細かい。さらにその周辺に盛土4を盛って、上面をほぼ水平にする。この平面上に盛土5を置き、その上面から第2主体部の墓壙を掘り込んでいる。

第2主体部の埋葬後に、盛土6を盛って墳頂部を整える。粒子の細かいシルト状の盛土である。追葬の第2主体部の墓壙は、この盛土上面から掘り込まれる。第2主体部の埋葬後に、盛土7で墳頂部を覆っているものと考えられる。その上を、腐食土系の表土が覆っている。

2) 第1主体部

墓壙は、長さ4m、幅2mを測る。主軸方向は、N-87.5°-Wで、ほぼ東西方向である。墳丘全体から見れば、やや北側寄りに位置する。この墓壙内に、長さ2.9m、幅1mの「H」字形の組合せ式木棺を埋葬する。木棺の木口板を粘土塊で押える。

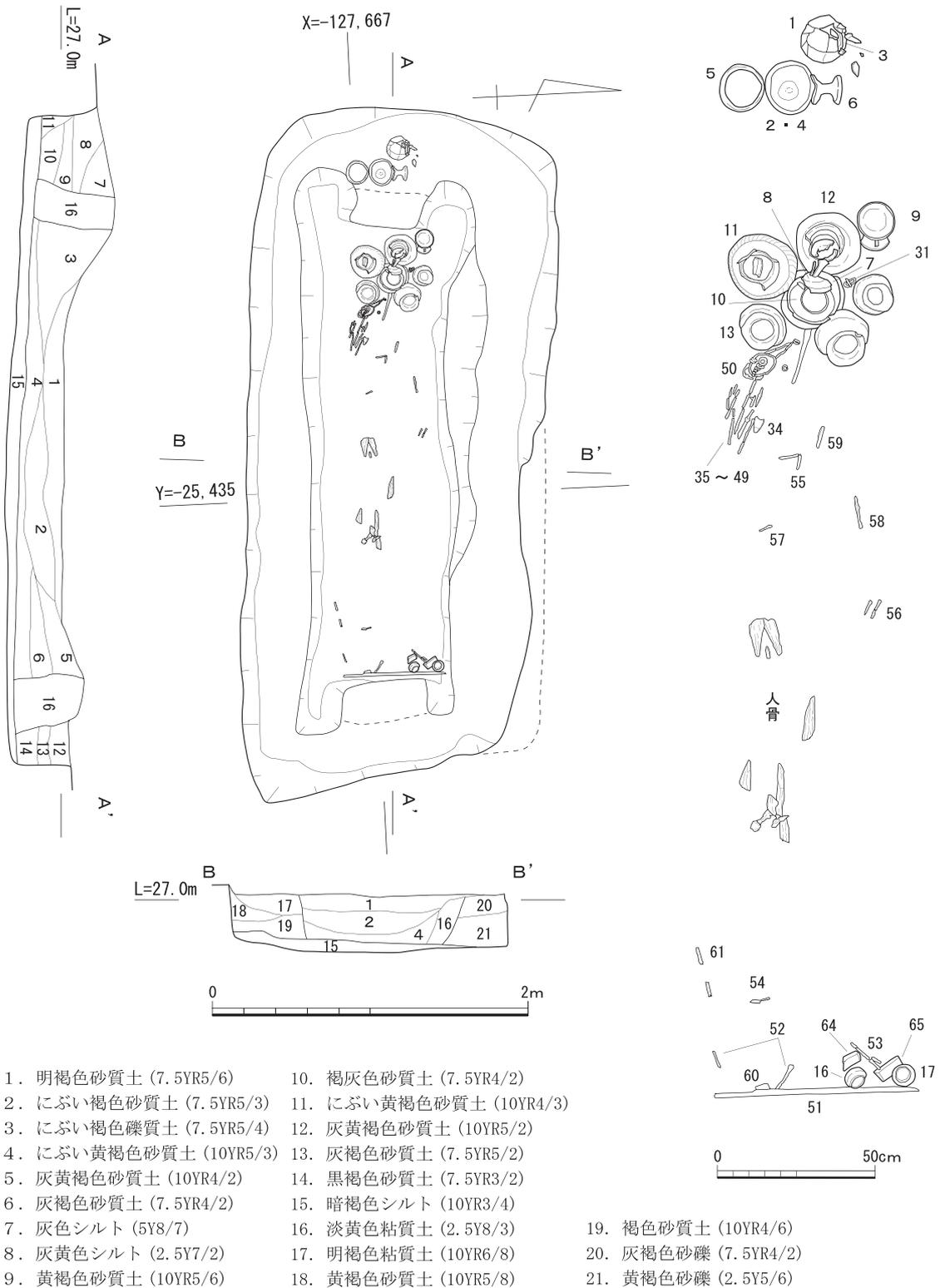
棺内西側から、須恵器壺6点や高杯2点、鉄製馬具の轡、鉄地金銅貼胡籙の一部や鉄鏃などが出土した。須恵器は、短頸壺を乗せた高杯を中心に、5個体の壺が取り巻くように配置される。その北西側に高杯1個体が配される。短頸壺上からさらに1個体の高杯が割れた状態で出土している。あるいは、短頸壺の蓋に転用されたものとも考えられる。鉄地金銅貼胡籙は、これらの須恵器の間に落ち込んでおり、棺上に置かれたものが棺の腐朽に伴って転落した可能性もある。棺中央部付近では、人骨の一部が残存していた。良好な残存状況とは言い難いが、大腿骨や骨盤の一部かと考えられる骨もある。遺存状況が悪く、確実なことはわからないが、人骨の配置にやや乱れが認められ、再埋葬された可能性も考えられる。棺東側木口付近からは、鉄剣1振、須恵器小壺2点、砥石2点等が出土した。剣は、木口に沿って置かれていた。全体的にみると、西側の方に副葬品が集中しており、遺体の頭位は西側の可能性もある。

また、棺西側木口外側で、木口板押えの粘質土の上面付近から須恵器高杯1点や杯蓋2点、杯身3点が出土しており、棺埋納後に置かれたものとみられる。この主体部から出土した須恵器は、陶邑編年のTK43型式期並行期のものとみられ、6世紀後半頃と考えられる。

3) 第2主体部

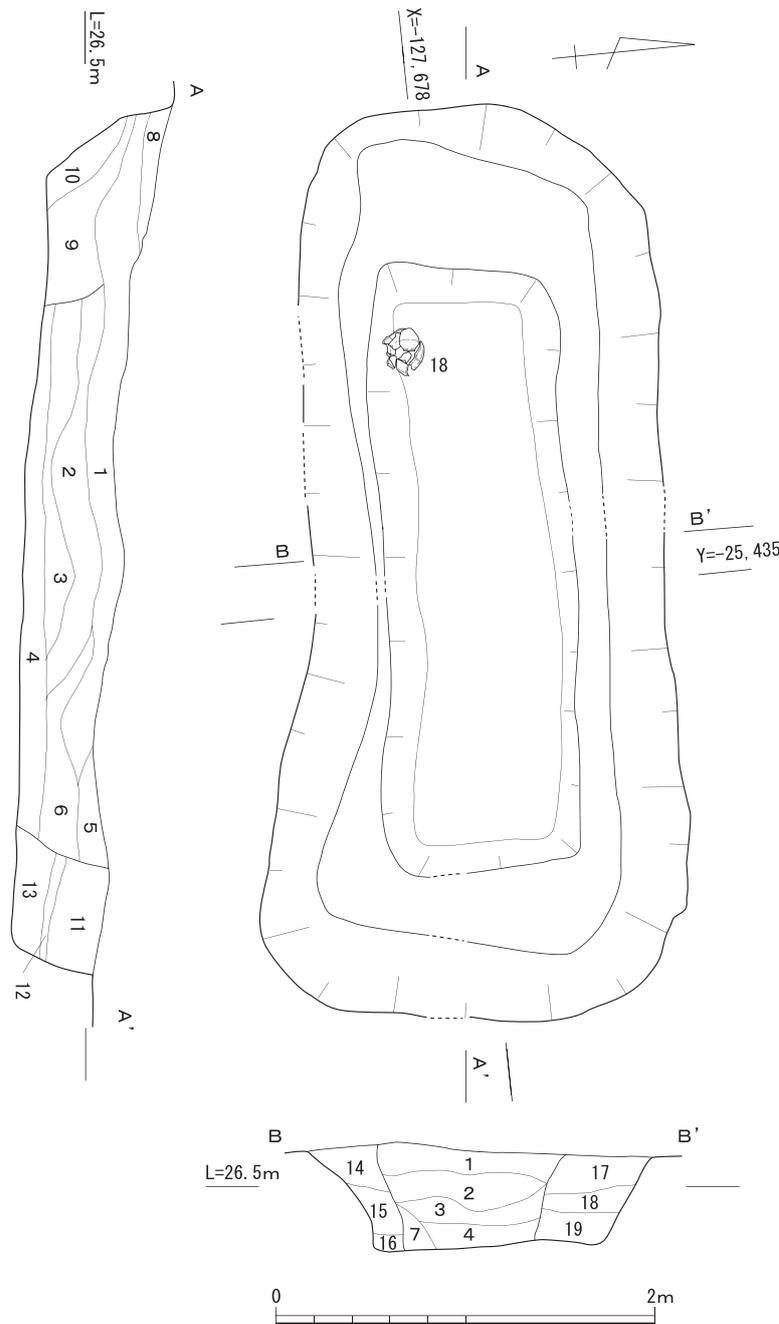
第1主体部の下から検出しており、それより古い主体部と考えられる。墓壙の主軸方向は、N-8°-Wで、ほぼ東西方向である。長さ4.8m、幅1.8～2.2mを測る。墳丘全体から見れば、ほぼ中央に位置する。この墓壙内に、長さ2.8m、幅1mの箱式木棺を埋葬する。木棺の西側木口板を礫混じりの土で押える。棺内西側から須恵器壺1点が出土した。棺底部からの出土ではないので、棺上に置かれていたものが転落したのと考えられる。

4) 第3主体部



第6図 柿谷古墳第1主体部実測図

墓壙は、墳丘の東側裾部付近に設けられている。後世の削平によって東半部を欠くが、直径1.3 mの土壇に、須恵器甕を埋納していたものと考えられる。須恵器甕は、底部の破片がなく、人為的に打ち欠かれたものとみられる。このような状況から、須恵器甕は甕棺として使用されたものと考えられる。甕内部から、須恵器短頸壺2点、高杯1点が出土した。



- | | |
|------------------------|-------------------------|
| 1. 赤褐色砂質土 (5YR4/6) | 11. 灰褐色砂質土 (7.5YR4/2) |
| 2. にぶい褐色砂質土 (7.5YR5/3) | 12. 灰白色シルト (5Y7/2) |
| 3. 明赤褐色砂質土 (7.5YR5/6) | 13. 橙色砂質土 (7.5YR6/8) |
| 4. 黄褐色砂質土 (2.5Y5/3) | 14. 黄褐色砂質土 (2.5Y5/3) |
| 5. 黒褐色細砂質土 (10YR3/1) | 15. にぶい赤褐色細砂質土 (5YR5/4) |
| 6. にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/3) | 16. 明灰黄色砂質土 (2.5Y5/2) |
| 7. 暗褐色砂礫 (7.5YR5/6) | 17. にぶい褐色砂質土 (7.5YR5/3) |
| 8. にぶい赤褐色砂質土 (5YR5/4) | 18. 明褐色砂質土 (7.5YR5/8) |
| 9. にぶい褐色砂質土 (7.5YR5/3) | 19. にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/4) |
| 10. 明赤褐灰細砂質土 (5YR4/6) | |

第7図 柿谷古墳第2主体部実測図

5) 下層墳丘

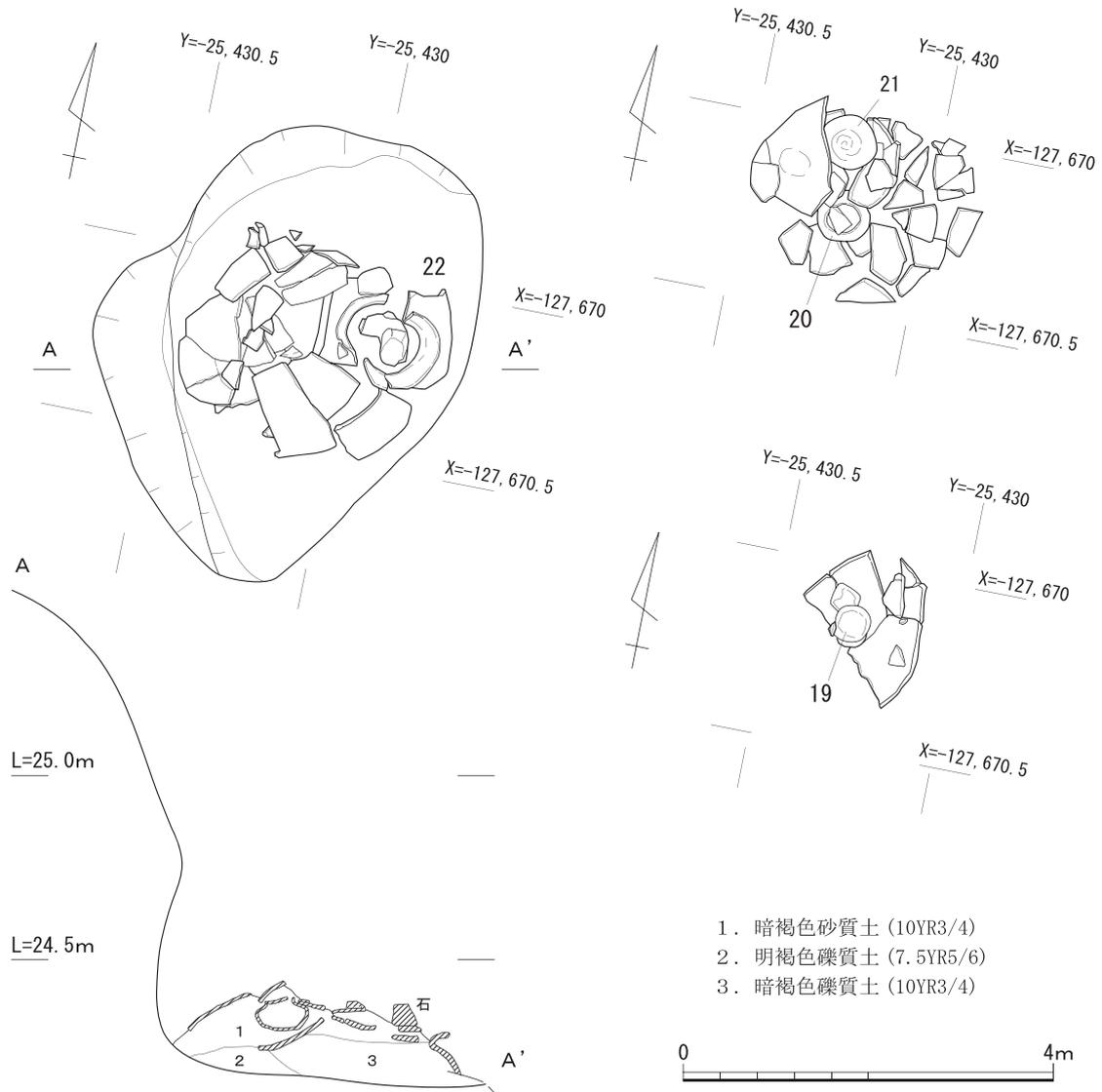
墳丘の断ち割りで、古墳築造以前の旧表土と考えられる層上から、須恵器短頸壺1点と杯蓋・杯身それぞれ1点が置かれたような状態で出土した。そのため、墳丘盛土を除去して調査したところ、幅1.6m、深さ0.3mの周溝を巡らせた一辺6mの小墳丘を検出した。この墳丘に伴う埋葬施設は無く、古墳築造に関する祭祀遺構の可能性が考えられる。須恵器は、陶邑編年のTK10型式期並行期のものとみられ、6世紀中頃のものと考えられる。この古墳および第2主体部の築造時期を示すと考えられる。

5. 美濃山遺跡の調査

今回の調査地は、美濃山遺跡のなかでも東側の縁辺部にあたる。調査対象地に2か所の調査区を設定した。A地区は、柿谷古墳調査地の南西側にあたるので、古墳の調査地と一体化してほぼ同時に調査を行なった。B地区は、A地区から小さい谷状地形を隔てて南側の平坦地に設定した。

1) A地区

この地区の調査では、須



第8図 柿谷古墳第3主体部実測図

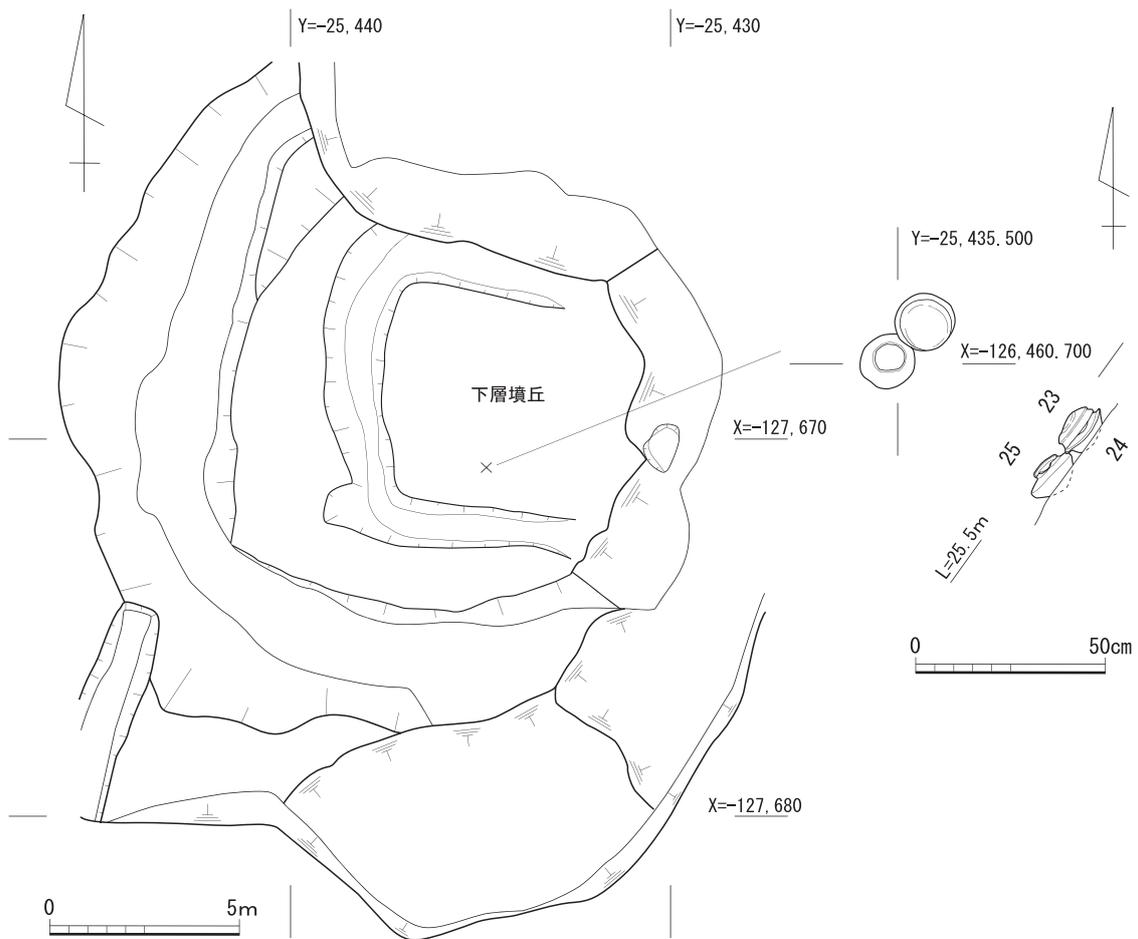
恵器や中国製白磁、石錐や剝片等の遺物が出土したが、顕著な遺構はなかった。

溝SD4 調査地南東側で検出した。幅1.4m、深さ0.8mを測る断面形箱形の溝である。ほぼ南北方向に延びる。柿谷古墳の周溝が埋まってから掘削された溝である。不明鉄製品などが出土したが、明確に時期を示す遺物は出土していない。周辺に残る地境溝と方向がほぼ揃っており、あるいは近世以降の遺構の可能性も考えられる。

2) B地区

当初、遺構面は浅い位置にあると想定していたが、近年の盛土やバラスによる厚い整地層があり、遺構面までの掘削深度は1m以上に及んだ。また、調査区中央付近では、大きく攪乱された部分もあった。この地区では、古墳時代から中世頃の遺構を検出したが、遺構密度は疎である。

土壙SK7 調査区中央西寄り検出した。直径0.4mの不整形土坑で、深さは0.23mである。土師器大型壺の胴部片が出土した。遺構の性格は不明であるが、古墳時代前期頃の遺構とみられる。



第9図 柿谷古墳下層墳丘平面図

溝SD15 南西から北東にかけて延びる溝で、幅1m、深さ0.15mを測る。土師器小片などが出土したが、時期等は不明である。溝SD17は、南西から北東にかけて延びる溝で、幅1.8m、深さ0.24mを測る。糸切高台の須恵器小壺や布目瓦片などが出土した。9世紀頃の遺構か。

溝SD13 南西から北東にかけて延びる溝で、幅0.5m、深さ0.2mを測る。南西部が溜り状になる。瓦器小片が出土しており、中世の遺構とみられる。付近の溝SD13・14もほぼ同時期の遺構とみられる。

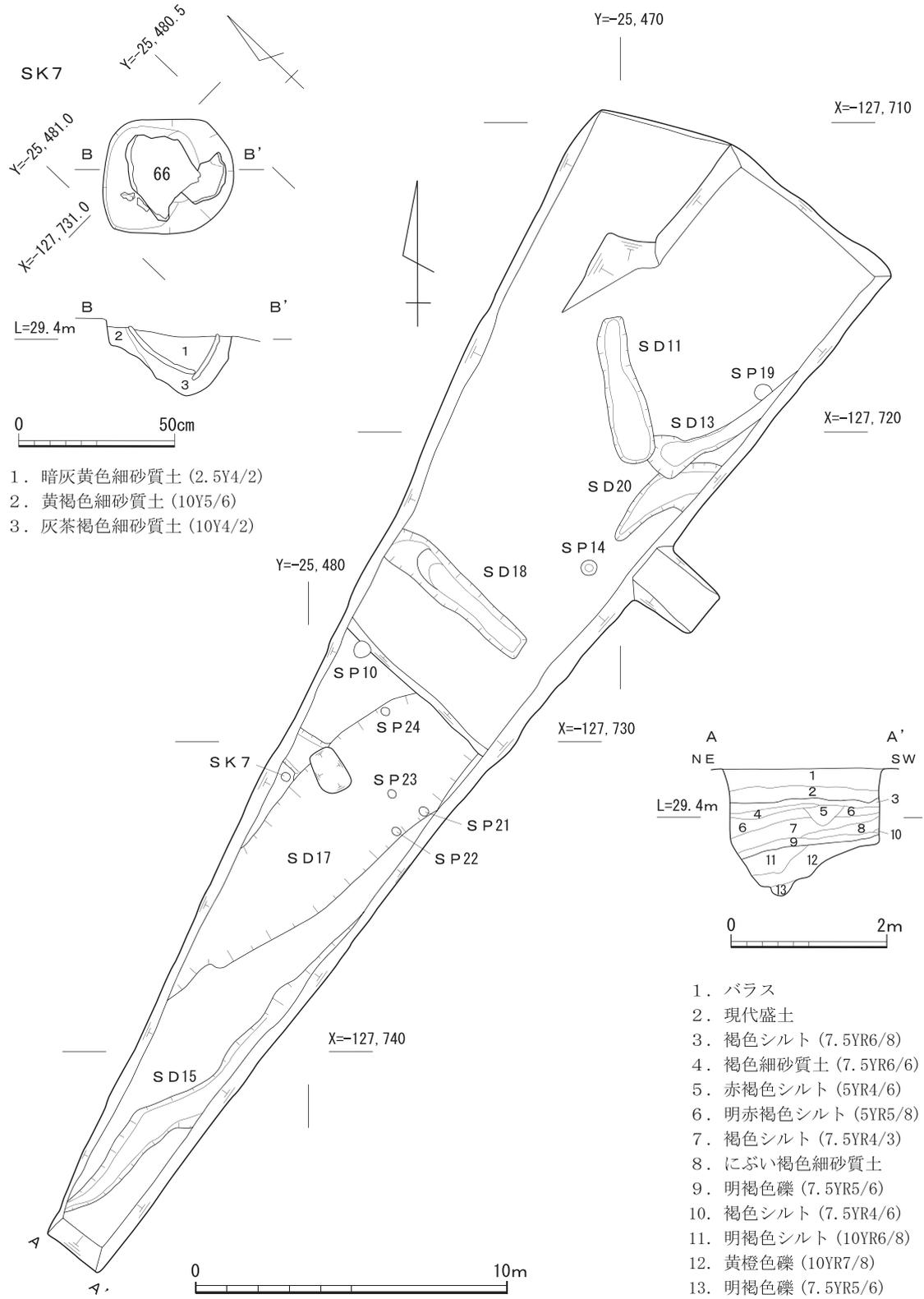
溝SD18 近年の攪乱と方向が揃っており、新しい時期のものと考えられる。その他、小ピット等を検出しているが、建物等としてまとまるものはなく、時期も、中世以降と考えられる。

6. 出土遺物

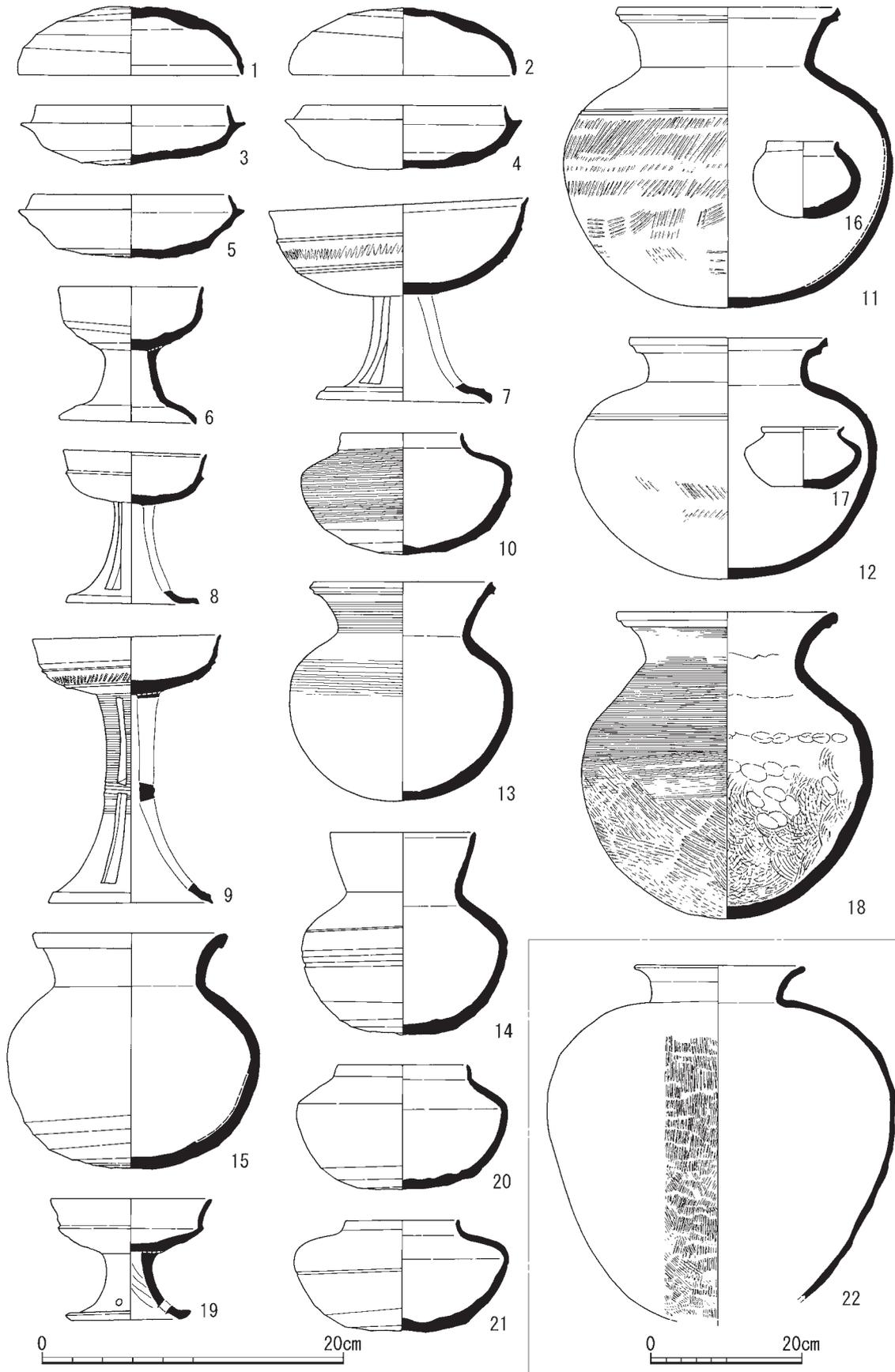
今回の調査では、須恵器や鉄製品をはじめ、様々な遺物が出土した。ここでは柿谷古墳の出土遺物を中心に、美濃山遺跡出土遺物や古墳墳頂部に置かれていた石塔残欠も含めて報告したい。なお、今回の調査で出土した遺物は、整理箱15箱である。

1) 第1主体部

(1) 土器 1～6は、棺西側木口外側から出土した。1・2は須恵器杯蓋で、天井部が丸味を



第10図 美濃山遺跡B地区実測図



第11図 出土遺物実測図(1) 柿谷古墳主体部：土器

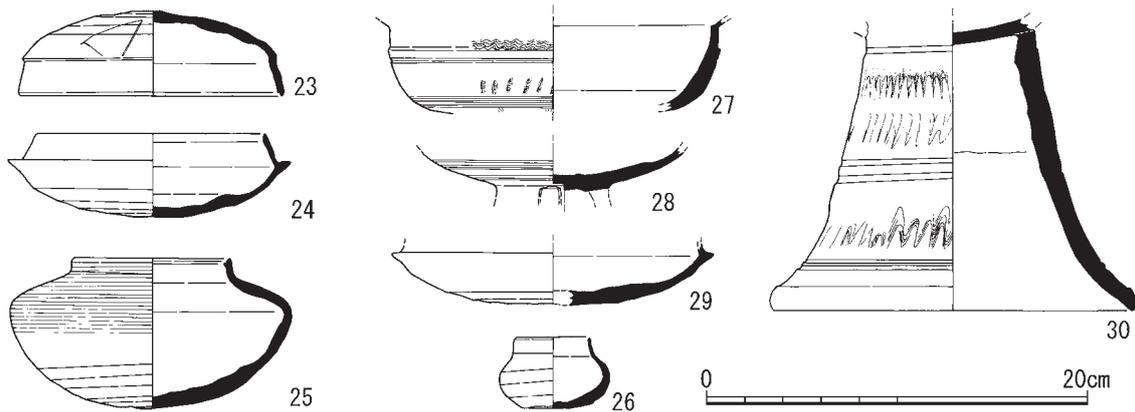
もち、端部は丸く終わる。天井部と口縁部の境に稜をもたない。1は口径14.8cm、器高4.6cm、2は口径14.7cm、器高4.5cmを測る。3～5は須恵器杯身で、口縁部は斜め上方に直線的に立ち上がる。口縁端部には段をもたない。3は口径12.6cm、器高4cm、4は口径13.3cm、器高4.4cm、5は口径13cm、器高4.3cmを測る。以上の杯身・杯蓋は、陶邑編年のTK43型式期並行とみられる。6は須恵器無蓋高杯で、脚は端部付近で内湾気味に屈曲し稜をなす。脚部にスカシはない。口径9.4cm、器高9.1cm、脚径9cmを測る。

7～15は、棺内西側木口付近から出土した。7は須恵器無蓋高杯で、杯部は椀形である。杯部の口縁部と底部の境に稜を巡らし、その下部に2条の沈線を巡らす。稜と沈線の間には波状文を施す。脚部には3方向に長方形のスカシを施す。脚端部付近に稜をもつ。口径17.3cm、器高13.4cm、脚径11.6cmを測る。8は須恵器無蓋高杯で、杯部の口縁部と底部の境に稜をもち、口縁端部にわずかな段がある。脚部には3方向に長方形のスカシをもつ。口径9.4cm、器高10.3cm、脚径8.8cmを測る。9は須恵器無蓋高杯で、長脚二段スカシである。長方形のスカシを3方向に施す。脚部上半部はカキ目調整である。杯部は、口縁部と底部の境に稜をもち、その下部に沈線を巡らす。稜と沈線の間には刺突列点文を施す。口径12.5cm、器高18cm、脚径11cmを測る。10は須恵器短頸壺で、やや扁平気味の器形である。肩部から腰部にかけてカキ目調整である。口径8.1cm、器高8.2cmを測る。11は須恵器広口壺で、口縁端部は屈曲して外反しさらに斜め上方に短く屈曲して受口状になる。肩部に2条の沈線が巡り、沈線以下は細かい平行タタキのナデ調整である。内面はタタキ目を丁寧にナデ消す。口径14.7cm、器高20.2cmを測る。12は須恵器広口壺で、器形・調整は11とほぼ同様である。外面胴部のナデ調整は丁寧に、タタキ目がほとんど消えている。口径13cm、器高16.2cmを測る。13は須恵器広口壺で、頸部および肩部にカキ目調整がみられる。口径11.8cm、器高14.7cmを測る。14は須恵器直口壺で、口縁端部は丸く終わる。肩部に細い1条の沈線、胴上部に太めの沈線2条が巡る。口径9.6cm、器高13.6cmを測る。15は須恵器広口壺で、口縁端部が玉縁状になる。口径13.7cm、器高15.8cmを測る。

16・17は、棺内東木口付近から出土した。16は須恵器小形短頸壺で、器胎は厚目である。焼成は軟である。口径4.6cm、器高5.1cmを測る。17は須恵器小形広口壺で、口縁端部は受口状になる。算盤玉形のやや扁平な器形であり、底部は平底である。口径5.5cm、器高4.2cmを測る。

(2)鉄製品 31～33は、出土状況から一連の胡籙金具とみられる。棺内西側木口の須恵器群の間から出土した。31は胡籙本体と吊提げ用ベルトを連結するための鉸具とみられる。長さ5cm、幅2.5cmを測る。32は鉸を打った金具である。幅2.6cmを測る。33は鉄地金銅貼の飾金具である。胡籙本体の木部が付着して残存する。金箔貼銅版と鉄板を重ね、さらに布を挟んで、胡籙本体に2列の鉸で打付けている。鉸は32よりも小振りである。線彫はない。金具の外側に均等にはみ出した布が部分的に残る。金具は残存長34cm、幅2.4cm、厚さ0.15cmを測る。

34は腸袂をもつ平根式の鏃である。残存長4.05cm、幅2.25cm、厚さ0.4cmを測る。35～49は長茎鏃で、胡籙金具付近から出土した。残存状況が良好な36は、長さ19.6cm、厚さ0.3cmを測る。茎部に木質が付着して残存している。



第12図 出土遺物実測図(2) 柿谷古墳墳丘ほか：土器

50は素環鏡板付轡で、銹着のため、復元展開図を掲載した。棺内西側木口の須恵器群のすぐ東側から出土した。鏡板は、直径0.8～1cmの鉄棒を楕円形に成形する。左側の鏡板は長径8.4cm、短径7.1cmを測る。右側の鏡板は長径8.8cm、短径7.5cmを測る。銜は二連銜で、左側が9.4cm、右側が10.2cmを測る。引手は、左側が17.2cm、右側が17.8cmを測る。兵庫鎖が付属する。51は剣で、棺内東側木口から出土した。全長65.2cm、刃部長53.7cm、茎部長11.5cmを測る。刃部幅3.2～3.4cm、茎部幅2.2cm、刃部厚0.6～0.8cm、茎部厚0.45cmである。

52～59は長茎鏃で、棺内に西半部に散乱して出土した。残存状態が良好な52は、長さ17.8cm、厚さ0.2～0.3cmを測る。55・56のように、折れ曲がったものもある。60は鎌と考えられ、棺内東側木口から出土した。端部を折り曲げる。残存長6.5cm、幅2.7cm、厚さ0.2cmを測る。61は刀子で、棺内西半部から出土した。長さ14.2cm以上、幅1.15cm、厚さ0.25～0.35cmである。

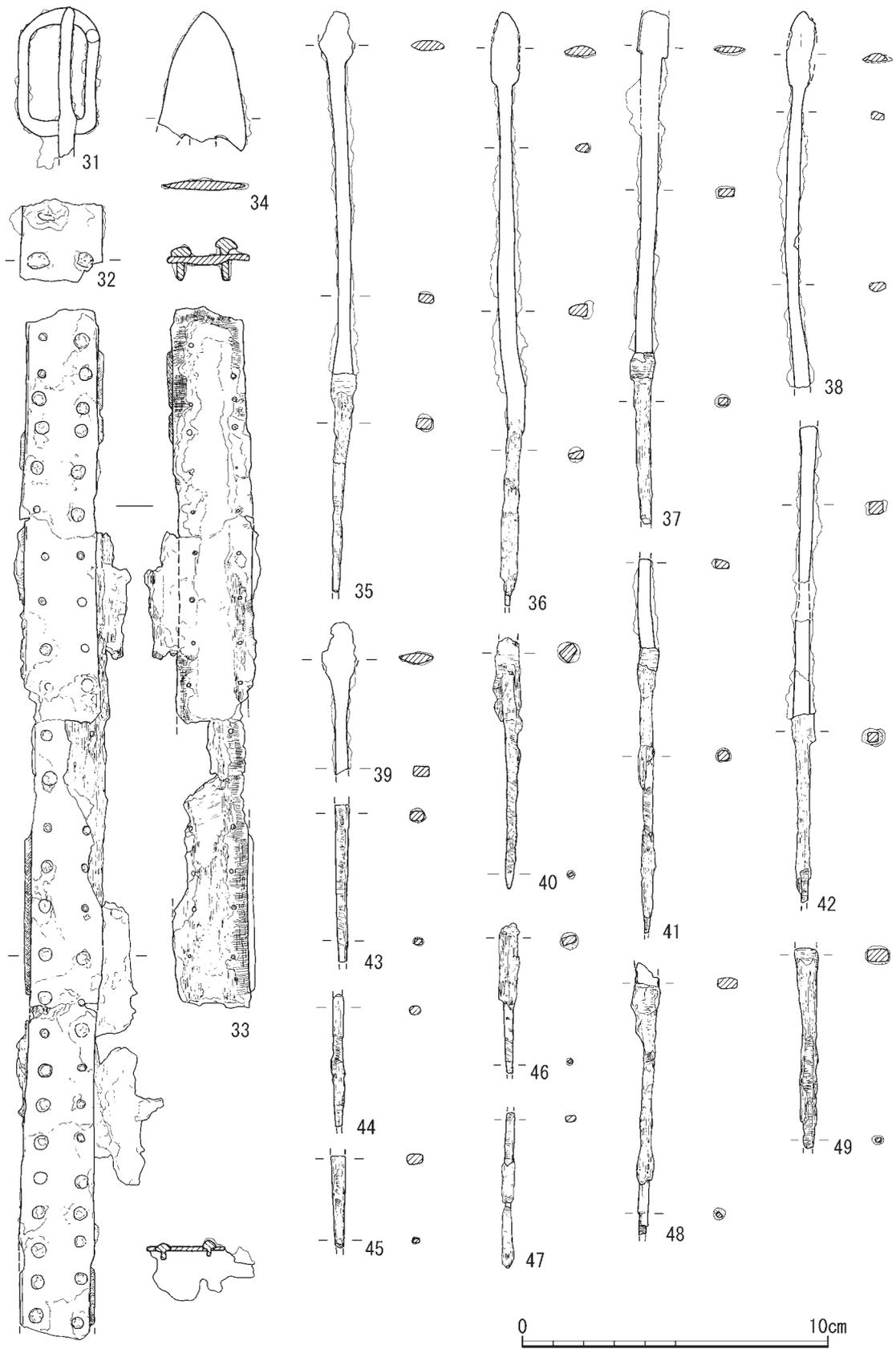
(3)石製品 64・65は砥石で、棺内東側木口から鉄剣や須恵器小壺などとともに出土した。64は長さ6.3cm、最大幅3.4cm、厚さ2.2cm、重さ79.8gを測る。65は長さ10.2cm、最大幅4.6cm、厚さ1.1cm、重さ101.7gを測る。石材は、砂岩系である。

2)第2主体部

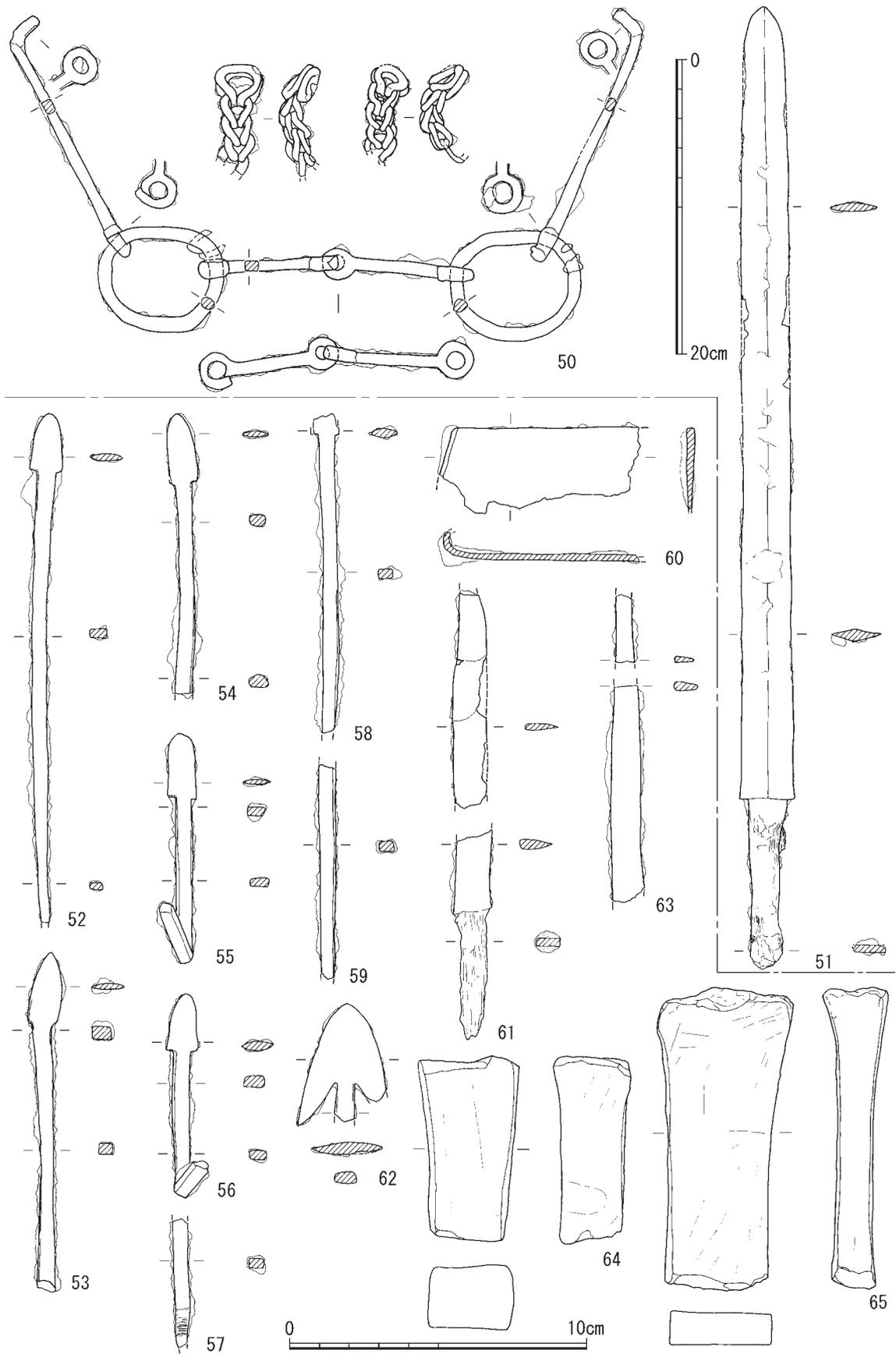
第2主体部からは、棺内南西側から須恵器1点が出土したのみである。18は須恵器広口壺で、胴部外面下半には平行のタタキ目が、上半部から頸部にかけてはカキ目調整がみられる。内面下半部には同心円状のタタキ目が残る。

3)第3主体部

甕棺を埋納した主体部である。22は須恵器甕で、棺として使用されたものとみられる。底部は、使用時に人為的に欠いたものとみられ、残存していない。口縁部は外反し、端部は丸く終わる。胴部外面には平行のタタキ目がみられる。内面は、ナデ調整によりタタキ目を消している。口径22cm、残存高50.5cmを測る。19～20は、須恵器甕に入れられていたものである。19は須恵器無蓋高杯で、杯部は底部から口縁部が外反して立ち上がり、境が稜になる。脚部には円形のスカシを3方向に施す。口径10.8cm、器高8.2cm、脚径7.3cmを測る。20は須恵器短頸壺で、肩部と胴部の境がやや角張り気味になる。口径8.6cm、器高8.4cmを測る。21は須恵器短頸壺で、やや扁



第13図 出土遺物実測図(3) 柿谷古墳主体部：鉄製品



第14図 出土遺物実測図(4) 柿谷古墳主体部ほか：鉄製品

平気味の器形である。口径7.6cm、器高7.5cmを測る。

4)下層墳丘

下層墳丘築造前に、旧表土の上に置かれたと考えられる土器である。23は須恵器杯蓋で、天井部と口縁部の境に形骸化した稜をもち、口縁端部は段状になる。天井部に三角形のヘラ描きがある。口径13.7cm、器高4.5cmである。24は須恵器杯身で、口縁部が斜め上方に直線的に立ち上がる。口縁端部内面にごく浅い沈線が巡る。口径12cm、器高4.5cmを測る。以上の杯蓋・杯身は、陶邑編年のTK10型式期並行と考えられる。25は須恵器短頸壺で、やや扁平気味の器形である。頸部から肩部付近にカキ目調整を施す。口縁端部に段をもつ。

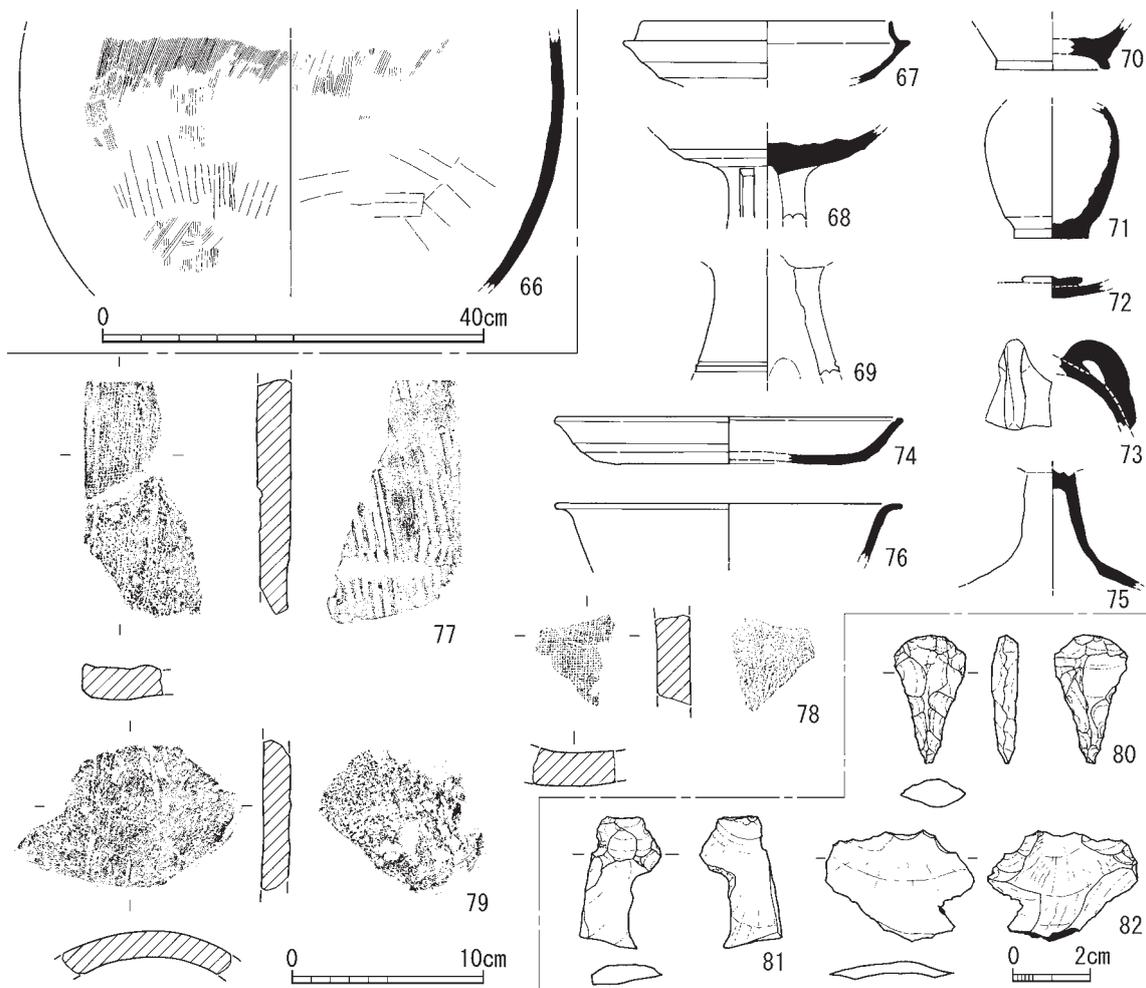
5)墳丘

墳丘盛土・墳頂部および墳丘斜面などから遺物が出土している。26は須恵器小形短頸壺で、内面に自然釉が付着する。口径3.9cm、器高3.8cmを測る。墳丘盛土からの出土であるが、旧表土に近い層位から出土しており、下層墳丘に関連するものの可能性も考えられる。27は須恵器高杯の一部で、口縁端部は外反する。外面に波状文・刺突列点文・カキ目などを施す。胎土は暗紫色で、焼成は良好である。陶邑窯の製品か。TK208期並行と考えられ、今回出土した須恵器では最古である。南側周溝埋土から出土した。28は須恵器高杯の一部で、脚部に方形のスカシをもつ。胎土・焼成が27と類似しており、出土地点も近い。あるいは、同一固体か。29は須恵器杯身片で、墳丘東側から出土した。やや扁平気味の器形である。30は須恵器器台の脚部で、墳頂部から出土した。中央に2条の沈線を巡らし上下2段に分け、それぞれに波状文を巡らす。スカシはない。脚径19cm、残存高15.5cmを測る。62は鉄鏃で、腸袂のある平根の鏃である。残存長4.05cm、幅2.25cm、厚さ0.4cmを測る。墳丘東側の表土掘削中に出土した。

6)美濃山遺跡

(1)土器・陶磁器 66は土師器壺の胴部で、復元最大胴径は57cmであり、大型の壺である。古墳時代前期頃のものと考えられる。B地区の土壌SK7から出土した。67は須恵器杯身で、B地区から出土した。口径13cmを測る。陶邑編年のTK43型式期平行か。68は須恵器高杯で、脚部にスカシをもつ。A地区出土である。69は須恵器高杯脚部で、スカシをもつ。B地区出土である。70は須恵器壺底部で、張付高台をもつ。高台径6cmを測る。8世紀頃の製品か。B地区出土である。71は須恵器小形壺で、胴部が卵形を呈する。高台は糸切で、高台径3.6cmを測る。9世紀頃の製品か。B地区溝SD17から出土した。72は須恵器蓋で、扁平な宝珠つまみを付す。A地区から出土した。73は須恵器瓶の肩部で、肩部に紐状の耳を付す。B地区から出土した。74は土師器皿で、口縁端部が段状になる。口径18cm、器高3cmを測る。8～9世紀頃の製品か。B地区出土である。75は土師器高杯脚部で、A地区出土である。76は中国製白磁鉢で、口径18cmを測る。A地区出土である。77は平瓦で、上面に布目、下面に粗い平行タタキ痕が残る。B地区溝SD17から出土した。78は平瓦で、上面に布目、下面に縄タタキの痕跡が残る。B地区溝SD17出土である。79は丸瓦で、下面に布目痕が残る。B地区溝SD17出土である。

(2)石器・鉄製品 80は縦長剥片の周縁を調整して作られた涙滴形の打製石錐である。バルブ

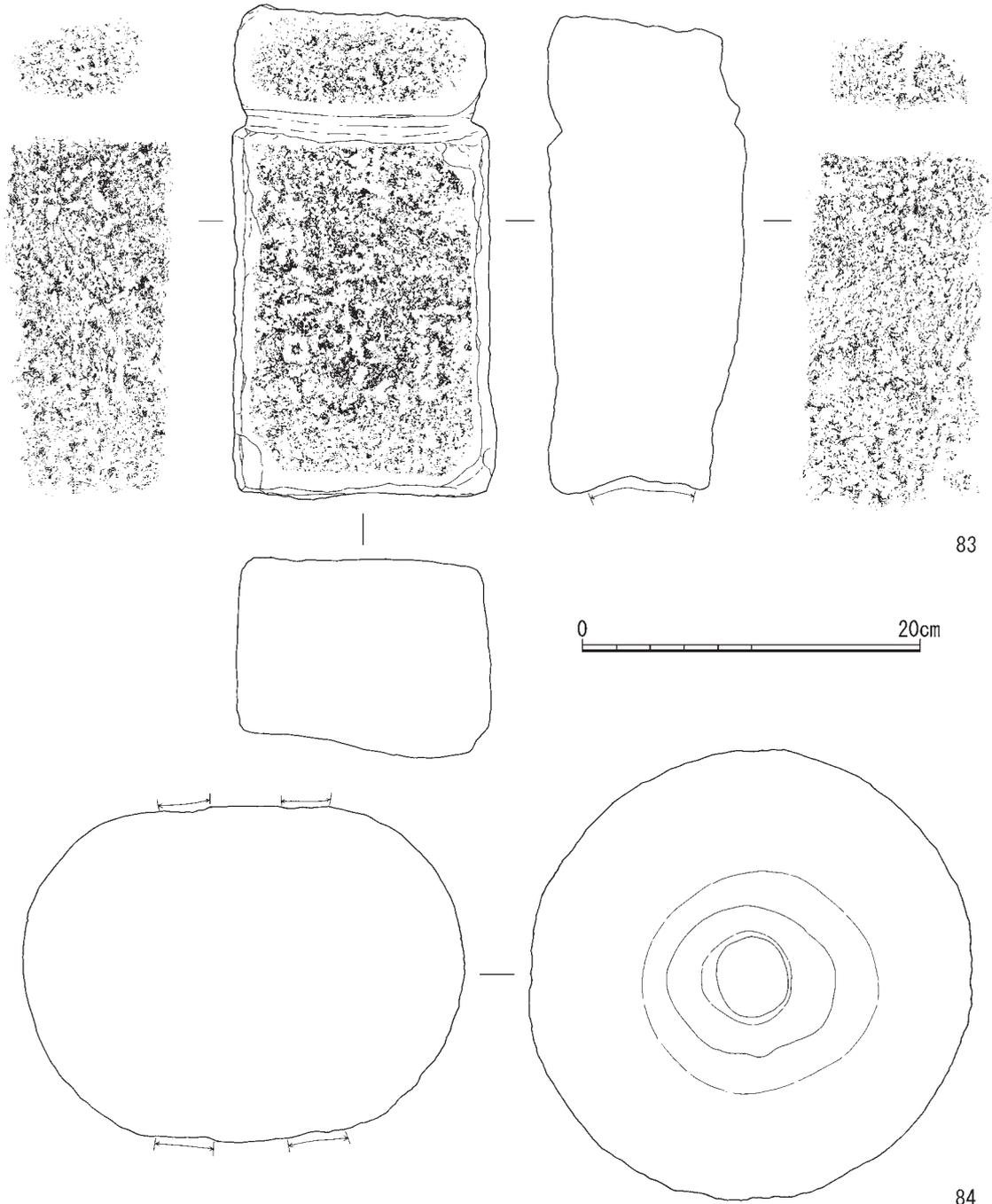


第15図 出土遺物実測図(5) 美濃山遺跡

を頭部に用い、剥片先端を錐部としてこしらえている。頭頂部に剥片剥取時の打面、b面に主要剥離面が残る。全長3.4cm、頭部幅1.85cm、錐部幅0.3cm、厚さ0.75cm、重さ3.6gを測る。サヌカイト製である。製作時期は不明である。A地区出土である。81は剥片で、全長3.5cm、幅1.8cm、厚さ0.5cm、重さ3gを測る。サヌカイト製である。A地区出土である。82は剥片で、全長2.9cm、幅3.9cm、厚さ0.3cm、重さ3.6gを測る。A地区出土である。63は不明鉄製品で、断面の形状から、刀子の可能性もある。幅1cm、厚さ0.25cmを測る。A地区溝SD4出土である。

7) 石造五輪塔

柿谷古墳墳頂部に2点の石塔残欠が置かれていた。83は一石五輪塔の地・水輪部で、花崗岩製である。断面長方形の石材を用いており、やや扁平な石塔である。正面および左右面は平滑に調整されているが、背面は粗く仕上げるのみである。地輪正面中央上部には梵字の「ア」が刻まれる。梵字の下には3行の刻銘があるものとみられる。中央部分の刻銘は不明である。右側には年号が、左側には月日が刻まれているとみられるが、判読できない。地輪左右面ではそれぞれの中央上部に梵字があり、左面は「アン」とみられる。水輪正面にも梵字の「バ」が刻まれている。左右面にも梵字があり、左面には「バン」が刻まれている。地輪の下部6cmは平滑になってお



第16図 出土遺物実測図(6) 石造五輪塔

らず、地中に埋め込まれる部分と考えられる。残存高28.8cm、幅14.8cm、厚さ11.2cmを測る。中世末期から近世初頭頃のものと思われる。84は別石五輪塔の水輪で、花崗岩製である。上下両面に低い臍がある。表面がやや荒れており、梵字等の有無は不明である。直径24.8cm、高さ20cmを測る。中世後期以降のものと考えられる。

7. まとめ

今回の調査で、柿谷古墳は、古墳時代後期の6世紀中頃に築造された古墳であることが判明し

た。この古墳は、木棺を直葬する方墳で、横穴式石室を導入していない点で保守的な様相がみられる。ただ、鉄製馬具や鉄地金銅貼胡?などを副葬しており、当時のこの地域の有力者の墓と考えられる。

第1主体部では、棺内西側木口に高杯上に短頸壺を乗せたものを中心に5個体の壺を配する土器配置がみられた。古墳における供献の形態を示すものとして、興味深い。また、墳丘下層で、小墳丘の存在を確認した。古墳築造に伴う祭祀に関係する遺構の可能性もあり、古墳築造の過程を考えるうえで、興味深い遺構と言えよう。

この古墳の周辺には古墳の分布が少ない。周辺地域は、横穴の密集地域であり、この古墳に追葬が行なわれた6世紀後半期には、女谷・荒坂横穴群で横穴の築造が始まる。その後、7世紀前半頃にかけて横穴の築造が盛んになるのに反して、この時期以降に築造された古墳は現状では確認されていない。背景には、古墳を作る風習をもった集団の勢力が衰退し、替って、横穴を作る風習をもつ集団が新たに台頭して勢力範囲を拡大していった、というようなことがあった可能性もある。古墳時代後期に、この地域に何らかの変化があったのではないか、というようなことを想起させる。このように考えると、柿谷古墳は、この地域で最後に造られた古墳とも考えられる。八幡地域における数少ない後期古墳の調査例であり、この地域の古墳時代を考える上で、重要な資料と言えよう。

美濃山遺跡では、古墳時代から中世にかけての遺構を確認した。遺構密度は疎らであるが、それは、調査地点が集落遺跡の縁辺部であることも関係しているものと考えられる。調査範囲も限られており、今後、また調査が広範囲に行なわれることがあれば、さらに多くのことが解明されよう。今後の調査に期待したい。

参考文献

八幡市教育委員会『ヒル塚古墳発掘調査概報』1990

八十島豊成「美濃山遺跡(第2次)発掘調査報告」(『八幡市埋蔵文化財発掘調査報告』第50集 八幡市教育委員会)2008

大洞真白「王塚古墳範囲確認発掘調査(第1～3次)報告書」(『八幡市埋蔵文化財発掘調査報告書』第54集 八幡市教育委員会)2010

岩松保ほか「女谷・荒坂横穴群」(『京都府遺跡調査報告書』第34冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2004

3.上狛北遺跡第1次・柳田遺跡発掘調査報告

1. はじめに

この発掘調査は、主要地方道上狛城陽線の建設工事に伴い、京都府建設交通部の依頼を受けて実施したものである。上狛北遺跡・柳田遺跡とも木津川右岸の沖積地に位置し、調査前の現況は水田であった。両遺跡とも土師器や須恵器、瓦などが表採されており、遺物散布地として周知されていた。

今回、両遺跡を南北に縦断して、主要地方道上狛城陽線が計画されたことから調査に至ったもので、両遺跡ともはじめての調査である。

現地調査にあたっては、京都府教育委員会、木津川市教育委員会のご指導・ご協力を得た。記して感謝したい。当報告は筒井が執筆した。なお、本報告記載の国土座標値については、日本測地系を用いた。調査にかかる経費は、全額、京都府建設交通部が負担した。本報告は筒井が執筆した。

現地調査責任者 調査第2課長 肥後弘幸

調査担当者 調査第2課主幹調査第3係長事務取扱 石井清司

同 専門調査員 竹井治雄

同 調査員 筒井崇史

調査場所 上狛北遺跡 木津川市山城町上狛宝本・西浦代ほか

柳田遺跡 木津川市

山城町椿井柳田

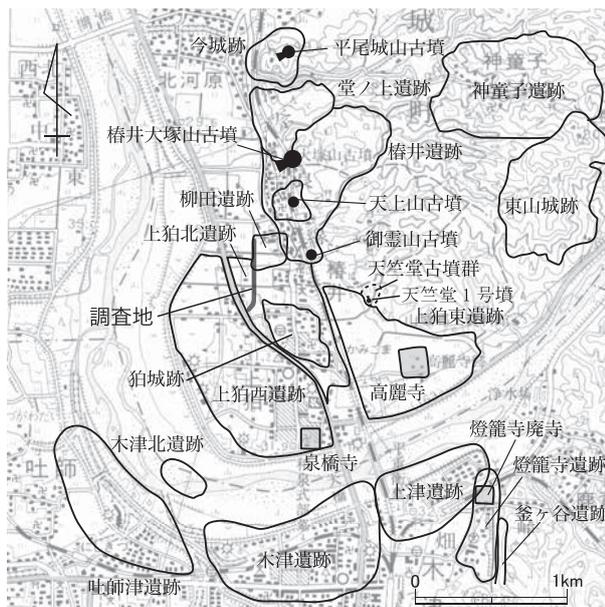
現地調査期間 平成21年10月27日～平成22年2月25日

調査面積 1,000㎡

2. 位置と環境

上狛北遺跡・柳田遺跡の所在する木津川市山城町は京都府南部、木津川の右岸に位置する。両遺跡の周辺は、木津川によって形成された沖積平野が広がっており、現在水田が営まれている。

木津川市山城町には南山城地域を代表する遺跡が多数所在する。以下、両遺跡の周



第1図 上狛北遺跡周辺主要遺跡分布図
(国土地理院 1/50,000 奈良)

辺の山城町域における代表的な遺跡について概観する(第1図)。

山城町域では旧石器時代・縄文時代に属する遺跡はそれほど多くない。しかし、弥生時代になると、中期の湧出宮遺跡、後期の堂ノ上遺跡・椿井遺跡・上狛西遺跡などがある。いずれも竪穴式住居跡が確認されている。

古墳時代になると、三角縁神獣鏡が30面以上出土した椿井大塚山古墳(前方後円墳、全長175m)が築造される。しかし、椿井大塚山古墳を築造したと考えられる集団の集落は今のところ未確認である。また、椿井大塚山古墳に引き続き平尾城山古墳(前方後円墳、全長110m)が築造されるものの、その後は全長100mを越えるような大型前方後円墳は築造されなくなる。中期末には上狛北遺跡の北東の丘陵上に小規模ながら前方後円墳である天竺堂1号墳(全長27m)が営まれる。山城地域では、埋葬施設として横穴式石室を採用したもっとも古い古墳の1つとされる。このほか、後期群集墳として車谷古墳群(総数40基以上)などがある。これに対して、古墳時代の集落はあまり知られておらず、上狛東遺跡では古墳時代前期の土器がまとまって出土しているものの竪穴式住居跡などは未確認である。

飛鳥時代になると、古代寺院の1つである高麗寺が造営される。また、高麗寺伽藍整備期の瓦を焼いた高麗寺瓦窯跡なども確認されている。しかし、この時期の集落は未確認である。なお、高麗寺は中世前期まで存続した可能性が高い。

奈良時代になると、上狛北遺跡周辺は、具体的な遺構は未確認であるが、恭仁京右京推定地とされている。引き続き平安時代・中世も遺物の出土はみられるものの、具体的な遺構が検出された遺跡は少ない。

3. 調査経過

上狛北・柳田両遺跡は、これまで発掘調査が行われたことはなく、調査対象地周辺でも具体的な調査成果が少なく、木津川の旧河道などの存在が予想された。このため、遺跡の全容が十分に明らかになっていないため、まず、遺構・遺物の状況を把握するための確認調査を実施した。

調査は平成21年10月27日から調査地周辺の整備・トレンチ設定に着手し、11月2日から重機による調査区の掘削を行った。

調査は、対象地の南端に位置する第1トレンチから開始し、順次、北に調査区を移動していくこととした。調査区は周辺の水田の状況や畦畔などを考慮して、規模がまちまちであるが、合計10か所のトレンチを設定した(第2図)。このうち第1～6トレンチが上狛北遺跡、第7～10トレンチが柳田遺跡に該当する。

第1トレンチでは調査開始早々、中世の遺物が多数出土し、溝や柱穴などの遺構の存在を確認するに至った。一方、第2・3トレンチでも中世の耕作溝を多数確認するとともに、その下層で南北方向に延びる奈良時代の溝を確認した。

第4～10トレンチは、おおむね同じような土層が堆積をしている。耕作土・床土を除去すると、砂質土・砂層が厚く堆積しており、安定した遺構面を確認することはできなかった。この砂質土・

砂層からは少量ながらも弥生時代から中世にかけての遺物が出土した。砂層より下層の状況を確認するため、重機による断ち割りを行ったが、粘土層が厚く堆積していることを確認したにとどまり、遺構面を確認するには至らなかった。この粘土層からの遺物の出土は認められなかった。

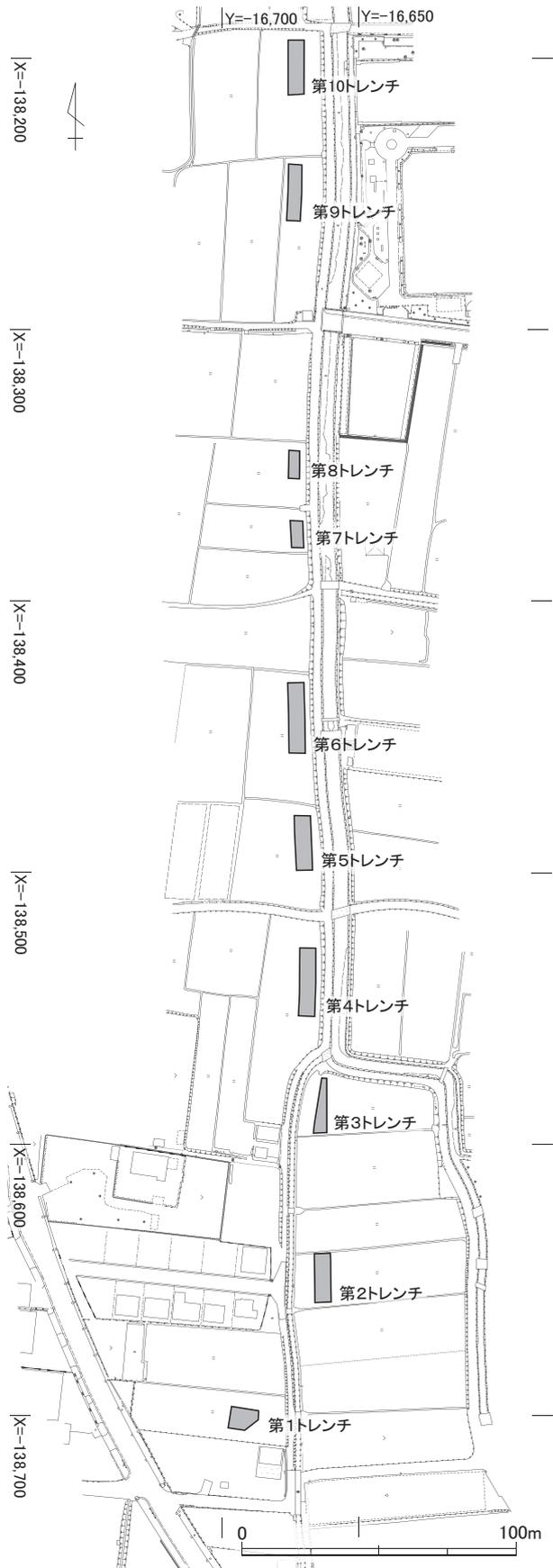
第4～10トレンチについては、以上のような状況のため、重機による掘削後、人力による精査、出土遺物の採集、重機による断ち割り、全景の写真撮影を行い、すべての作業の終了後、安全に配慮して、埋め戻しを行った。

第1～3トレンチは、下層の調査後の平成22年2月9日にラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行った。その後、遺物の取り上げ、図面作成等を行い、2月25日にはすべてのトレンチの埋め戻しを終了した。さらにトレンチの周囲に進入防止等のための安全対策と、若干の遺物整理作業を行った後、機材や事務所を撤収し、3月1日にすべての作業を終了した。

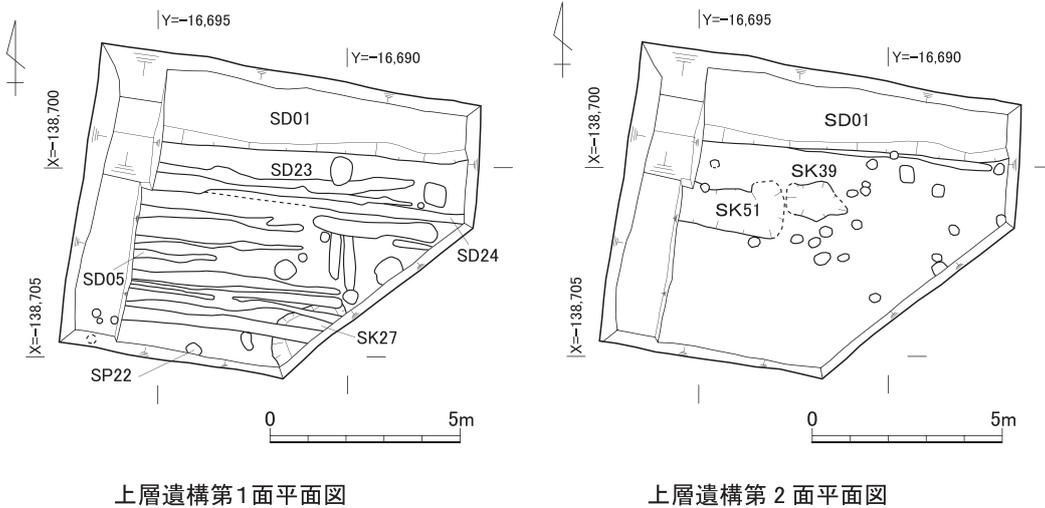
今回の調査で出土した遺物の総量は整理箱にして、15箱である。このうち、第4～10トレンチで出土した遺物は2箱にとどまる。

4. 調査成果

10か所の調査区を設定して調査を行ったところ、第1～3トレンチについては顕著な遺構・遺物とも確認できたため、平成22年度に対象地全体の調査を行うことになった。以下では、第1～3トレンチについては概略を述べるにとどめ、詳細は平成22年度の調査成果と併せて行う。第4～10トレ

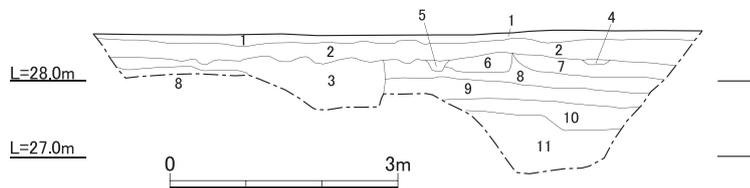


第2図 調査区配置図



上層遺構第1面平面図

上層遺構第2面平面図



- | | |
|---------------------------|------------------------|
| 1: 暗灰色粗砂 | 7: 明灰色細砂ないし砂 (溝SD01埋土) |
| 2: 灰色粘質土 (細砂を含む) | 8: 茶褐色粘質土 (細砂を多く含む) |
| 3: 淡黄茶色砂質土 | 9: 淡茶褐色粘質土 |
| 4: 暗灰色粘質土 (中世の遺構埋土) | 10: 暗灰黄色粘質土 |
| 5: 黒灰色粘質土 (中世の遺構埋土、遺物あり) | 11: 青灰色粘土 (遺物を含まない) |
| 6: 暗茶褐色粘質土 (中世の遺構埋土、遺物あり) | |

西壁土層断面図

第3図 第1トレンチ上層遺構配置・土層断面図

ンチについては調査成果を述べることにする。

第1トレンチ(第3図) 調査対象地のもっとも南に位置する調査区である。平面形は不整形な五角形を呈し、北辺で10mを測る。調査面積は80㎡である。現地地表下約0.5mで遺構面(上層遺構面)を検出した。検出した遺構としては、柱穴30基以上、溝15条、土坑3基などがある。調査区の北辺では、現在の水田畦畔にほぼ平行する幅2m以上の溝SD01がある。SD01の南側には幅15~30cm、深さ5~10cmの溝と直径20~30cm程度の多数の柱穴を検出した。これらの遺構は大きく2時期に分けることができる(上層遺構第1・2面)。第1面は東西方向の溝が多数掘削される段階で、柱穴がほとんどみられない。第1面の溝群を除去すると(5~10cm掘り下げると)、第2面の柱穴や土坑を検出することができた。第2面の柱穴は列状に並ぶものも認められるが、調査範囲が狭いため、建物跡に復原できるかどうかは明らかでない。しかし、柱穴が多数認められることから集落の一面の可能性はある。

以上の上層遺構群は西壁土層断面図の8層上面に相当し、5~7層の遺構が存在する。また、8・9層には少量の遺物を含むことから下層遺構の存在が予想される。

これらの遺構から土師器・瓦器・陶磁器などが出土した(第5図1~10)。1~5は土師器、6~10は瓦器である。1は、いわゆる「て」字状口縁を呈する皿である。2・3・5は、口縁

部外面に2段のヨコナデ調整を施す皿である。2は小型品、3・5は大型品である。4は口縁部外面にヨコナデを施す皿である。6～10は瓦器碗である。6はやや厚手の個体で、口縁部が内湾気味に立ち上がる。口縁端部内面に沈線を1条施す。内外面とも密にミガキ調整を施すが、見込みに暗文は認められない。外面のミガキ調整に先行して器表面にケズリ調整を施している。高台は断面逆台形を呈する。7～9は底部から内湾気味に立ち上がった後、口縁部がわずかに外反する。内面に密にミガキ調整を施し、外面に粗いミガキを施す。これに先行して成形時のユビオサエの痕跡がみられる。口縁端部内面に沈線を1条施す。8・9は底部を欠損するが、7の高台は断面三角形を呈する。10は底部の破片で、高台の断面形は台形を呈する。内面にミガキ調整を密に施し、見込みには回転数の多い連結輪状の暗文を施す。

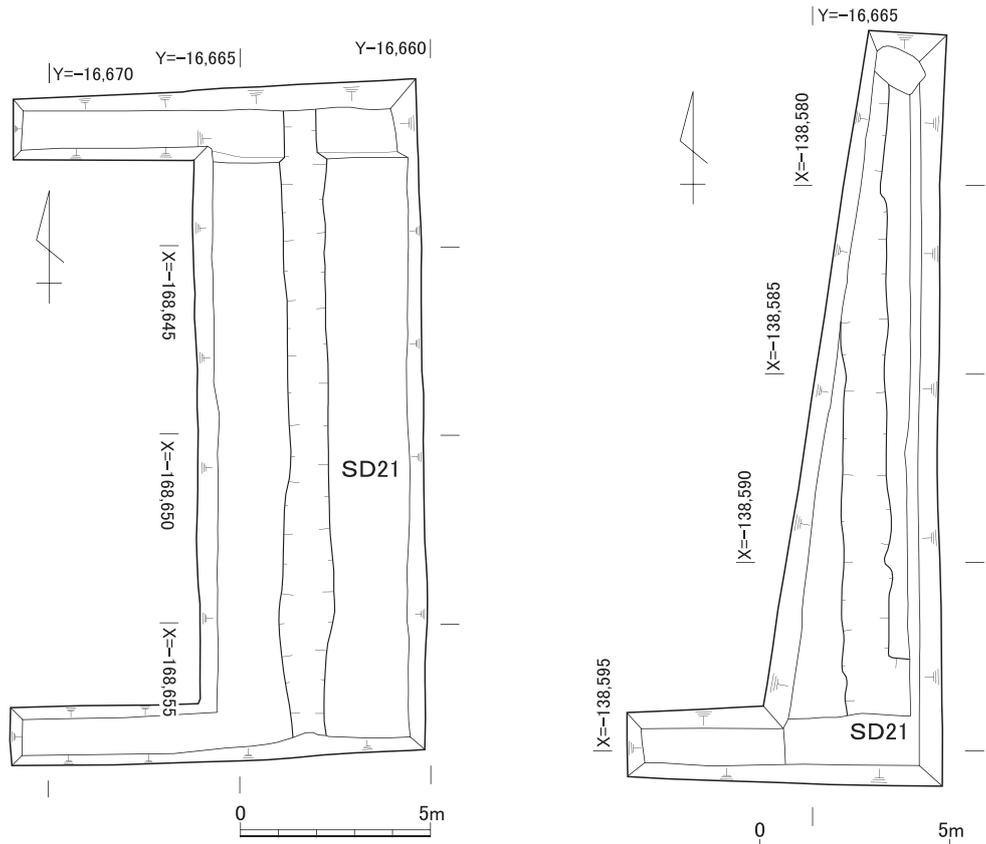
各土器の出土遺構は、1・6が溝SD05、2・4・5・7・8・10が溝SD24、3が溝SD23、9が柱穴SP22である。

第2トレンチ(第4図) 第1トレンチの北東45m位置し、長辺17m、短辺6mを測る。遺構の広がりを確認するための追加トレンチを加えて、調査面積は115㎡である。現地表下約0.6～0.8mで遺構面を検出した(上層遺構面)。遺構としては、耕作に伴うと思われる溝11条を確認した。上層遺構面から10～15cm下げて、下層遺構面を検出した。検出遺構としては、主軸をほぼ南北方向とする溝を1条を検出した(SD21)。溝SD21からは、須恵器や土師器、瓦などが多数出土した。

各遺構面を北壁土層断面図で確認すると、上層遺構面は8層上面に相当し、各溝は4層を埋土とする。5～7・10層の遺構も8層上面から掘り込まれている。下層遺構面は14層上面に相当する。下層遺構包含層は8・9層に相当するが、奈良時代の土器などとともに瓦器碗の破片の出土もみられる。また、14層からは、下層の状況を確認するための断ち割りの際に、古墳時代の土器が出土した。

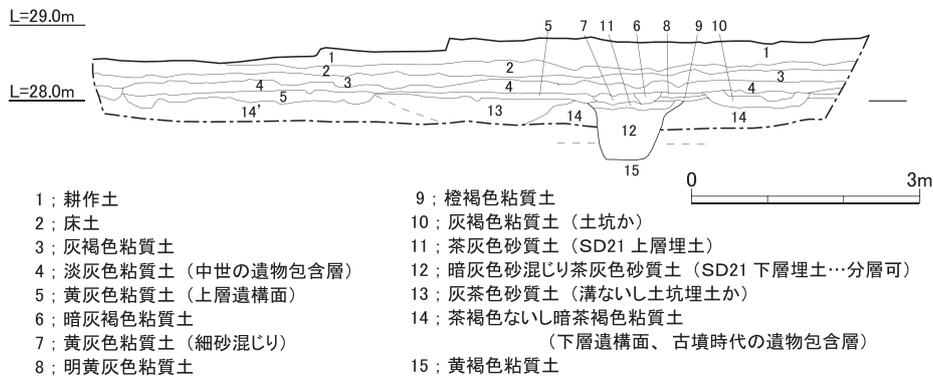
溝SD21は土師器・須恵器・瓦などが多数出土した。ここでは代表的な遺物を報告する(第5図11～24)。11～18は土師器、19～24は須恵器^(注1)である。11は杯B蓋である。外面を4分割したミガキ調整を密に施す。12は杯Aである。13・14は皿Aである。14は内面に斜放射状の暗文を施す。15・16は壺Bである。口縁部にヨコナデ調整、体部外面にユビオサエ、ナデ調整を施す。15の内面はナデ調整、16の内面にはハケ調整を施す。17は高杯の脚部である。脚部外面は面取りを行う。18は甕である。口縁端部内面はつまみ上げ気味に肥厚する。体部外面にハケ調整、体部内面にナデ調整を施す。19・20は杯Aである。21は杯Bである。22は杯Lで、底部から内湾気味に立ち上がって、口縁部が大きく外反する。体部下半から底部にかけての外面に、回転ヘラケズリ調整を施した後に高台を貼り付ける。23は皿Bである。高台の端面は外傾しており、外端部が接地する。24は壺Eである。22と同様に体部下半から底部にかけての外面に、回転ヘラケズリ調整を施した後に高台を貼り付ける。

第3トレンチ(第4図) 第2トレンチの北45mに位置し、長辺20m、短辺のうち南辺は4.5m、北辺は2mを測る。遺構の広がりを確認するための追加トレンチを加えて、調査面積は80㎡であ



第2トレンチ平面図

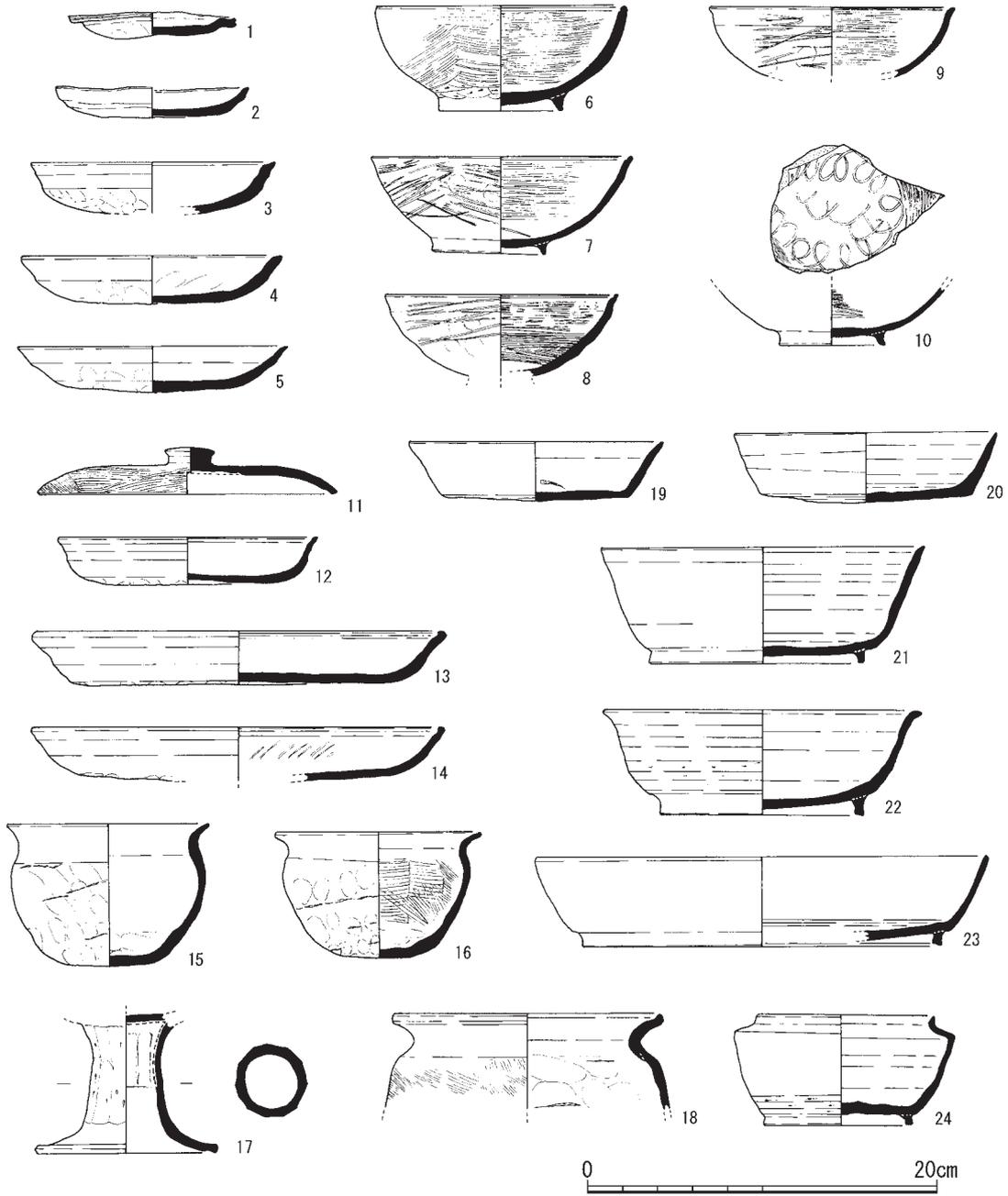
第3トレンチ平面図



第2トレンチ北壁土層断面図

第4図 第2・3トレンチ下層遺構配置・土層断面図

る。調査区の状況は第2トレンチに類似しており、現地地表下約0.5～0.6mで遺構面を検出した。遺構としては、耕作に伴うと思われる溝12条を確認した(上層遺構面)。これらの溝からは少量ながらも瓦器・土師器などの土器片が出土した。上層遺構面から約10～15cm下げて、下層遺構面を検出した。検出遺構としては、第2トレンチと同様に、主軸をほぼ南北方向に持つ溝を1条(溝SD21)を検出した。この溝は、第2トレンチで検出した溝SD21の中心座標値Y=-16,663.35に対して、ほぼ同じY=-16,663.50が中心座標値であることから、北への延長上に当たり、一連のものと考えられる。仮に連続する1条の溝であるとするれば、少なくとも総長80mに達すると考えら



第5図 第1・2トレンチ出土遺物実測図

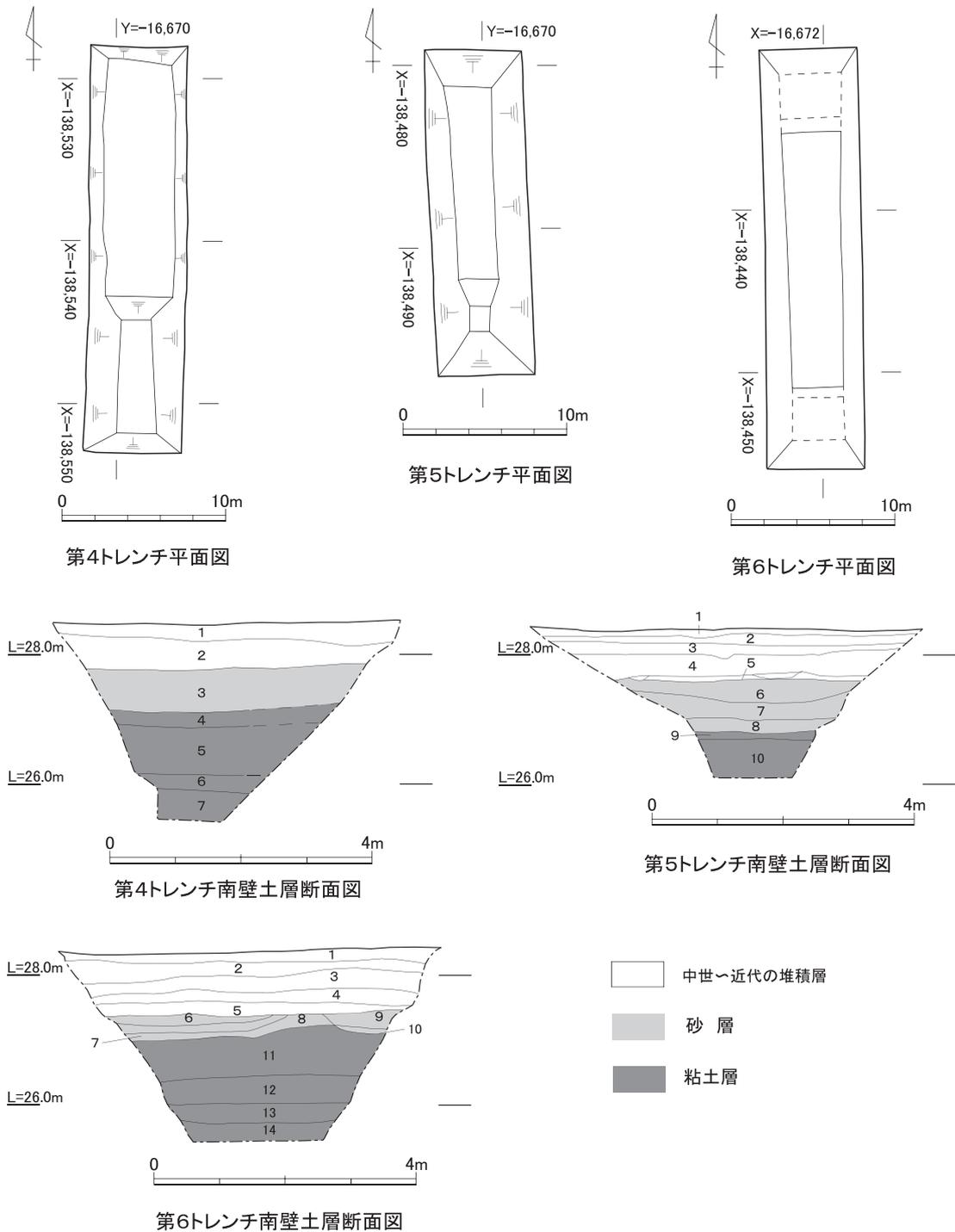
れる。

溝S D21からは奈良時代の土師器・須恵器などが出土したが、実測図の掲載は平成22年度の調査成果と併せて行うので、今回は割愛した。第2トレンチの溝S D21出土の土器類とほぼ同じ時期、同じ内容である。

第2・3トレンチで検出した溝S D21は、奈良時代において南北方向に直線状に延びる溝であることから、公共性の強い施設に伴う区画溝や排水路などの可能性が考えられる。このほか、下層遺構面よりも下層から古墳時代の土器が出土した。

第4トレンチ(第6図) 第3トレンチの北24mに位置し、長辺25m、短辺6m、調査面積150

m²を測る。現地表下約1.8mまで掘削し、砂層の堆積を確認した。砂層を人力で掘削したが、顕著な遺構は検出されなかった。また、調査区の一部で深掘りを実施し、砂層の下には粘土層が厚く堆積している状況を確認した。第4トレンチの堆積状況は、耕作土・床土(1層)、中世～近代の堆積層(2層)、奈良時代の遺物を含む砂層(3層)、遺物を含まない粘土層(4～7層)となる。砂層・粘土層ともにラミナなど、水の流れたような痕跡は認められなかったことから、池状の地形が存在したと考えられる。^(注2)



第6図 第4～6トレンチ平・断面図

出土遺物としては、砂層から土師器・須恵器・瓦器・瓦などが出土した。25～30は土師器、31は須恵器、32は灰釉陶器である。25～27は小破片であるが奈良時代の杯Aである。28～30は口径の復原の困難な甕である。いずれも時期は奈良時代と思われる。31は杯B蓋である。32は碗の底部である。

砂層からは奈良時代の遺物の出土が多いが、瓦器碗の破片も含むことから、中世(12・13世紀頃)の洪水に伴う堆積である可能性が高いと考えられる。

第5トレンチ(第6図) 第4トレンチの北29mに位置し、長辺20m、短辺6m、調査面積120㎡を測る。現地表下約2.0mまで掘削し、土層の堆積状況、遺構の有無の確認を行った。第4トレンチ同様、砂層を確認後、人力で掘削したが、顕著な遺構は検出されなかった。また、調査区の一部で深掘りを実施し、砂層の下に粘土層の堆積を確認した。土層の堆積状況は第4トレンチとおおむね同じである。

遺物は少ないが、砂層から土師器・須恵器・瓦器などが出土した。33は土師器の鉢もしくは碗である。大きく内湾する器形を呈するが、詳しい時期は不明である。34は須恵器杯Aで、奈良時代のものである。なお、粘土層からの出土遺物はない。

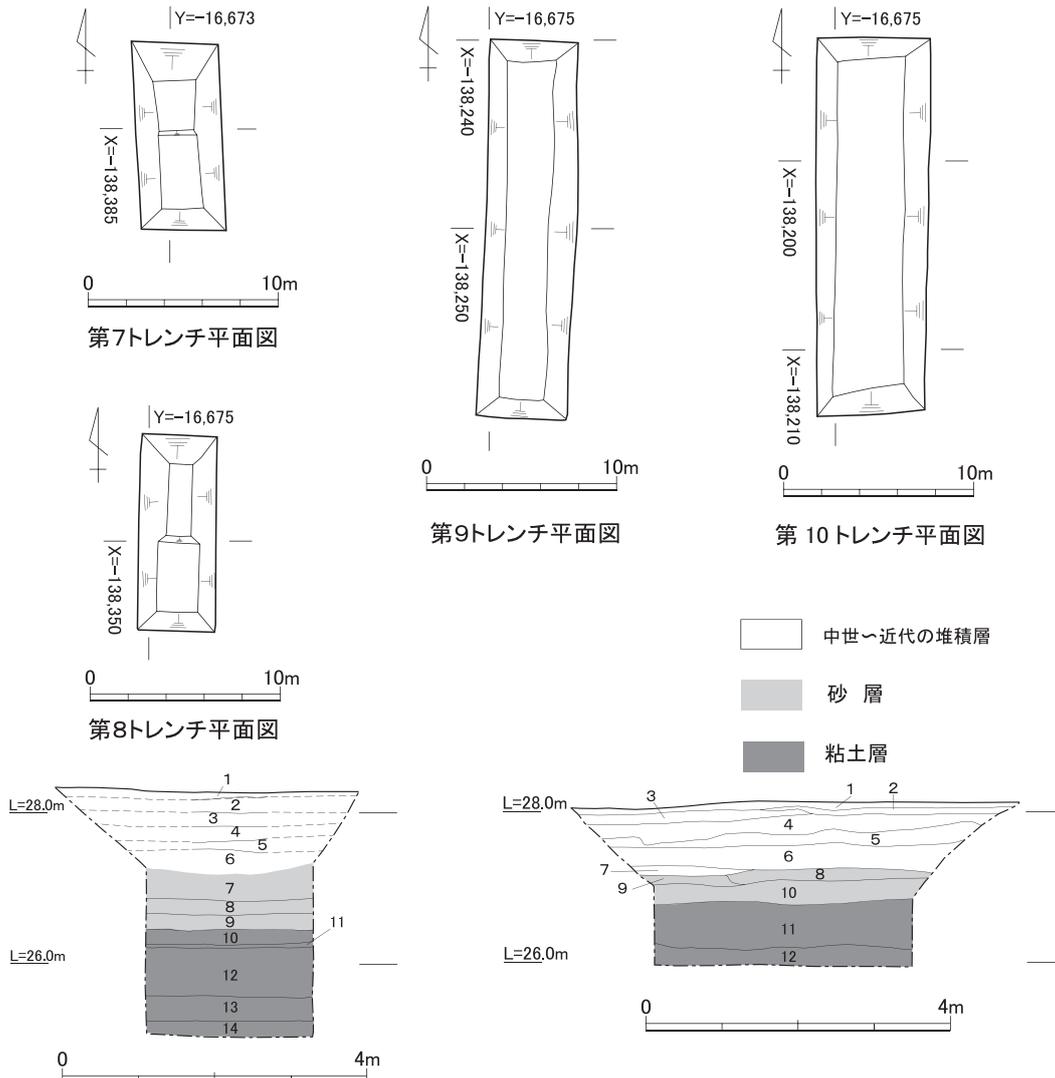
第6トレンチ(第6図) 第5トレンチの北23mに位置し、長辺25m、短辺6m、調査面積150㎡を測る。現地表下約2.0mまで掘削し、土層の堆積状況、遺構の有無の確認を行った。第4・5トレンチ同様砂層を確認後、人力で掘削したが、顕著な遺構は検出されなかった。ただし、調査区の北壁ならびに西壁北半部で、調査区の北西側に広がる落ち込みを確認した(図中の破線の範囲に広がると推定)。落ち込みの上端の標高は27.5m前後である。また、調査区の一部で深掘りを実施し、砂層の下に粘土層の堆積を確認した。土層の堆積状況は、上記落ち込みを除けば、第4トレンチとおおむね同じである。

出土遺物としては、砂層から土師器・須恵器・瓦器などが出土した。35・36・41は須恵器、37～39・42・44は土師器、40は瓦質土器、43は瓦器である。35は杯B蓋、36は杯Aである。37は杯A、38は杯Aもしくは碗Aである。39は甕で、体部内外面にハケ調整を施す。35～39は奈良時代と思われる。41は古墳時代の杯蓋の破片である。40はすり鉢である。内面に摺目が5条確認できる。42は碗もしくは杯である。形態的に瓦器碗に類似するが、酸化焼成で橙褐色を呈する。43は碗の底部である。44は小型の皿である。40・43・44は中世のものである。42は奈良時代のものか中世のものか判断がつかない。

第7トレンチ(第7図) 第6トレンチの北50mに位置し、長辺10m、短辺4.5m、調査面積45㎡を測る。現地表下約1.7mまで掘削し、土層の堆積状況、遺構の有無の確認を行った。第4～6トレンチ同様、砂層を確認後、人力で掘削したが、顕著な遺構は検出されなかった。また、調査区の一部で深掘りを実施し、砂層の下に粘土層の堆積を確認した。

遺物は少ないが、砂層から土師器・須恵器・瓦器などが出土した。46～48は土師器杯A、49は土師器甕で、いずれも奈良時代の土器である。46・48は内面に斜放射状の暗文を施す。

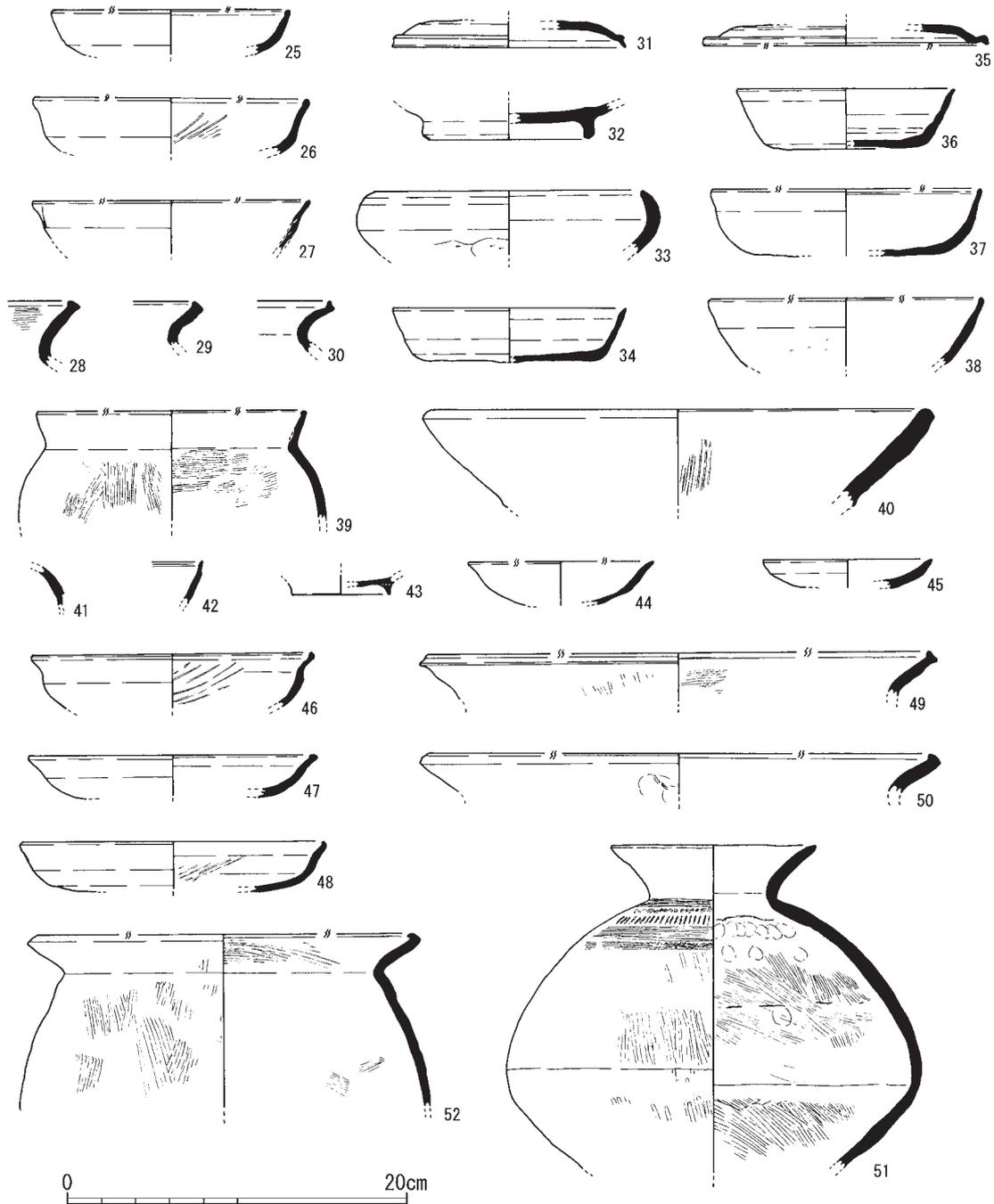
第8トレンチ(第7図) 第7トレンチの北15mに位置し、長辺10m、短辺4m、調査面積40㎡



を測る。現地表下約1.8mまで掘削し、土層の堆積状況、遺構の有無の確認を行った。第4～7トレンチ同様、砂層を確認後、人力で掘削したが、顕著な遺構は検出されなかった。また、調査区の一部で深掘りを実施し、砂層の下に粘土層の堆積を確認した。土層の堆積状況は、耕作土(1層)、床土(2層)、中世～近代の堆積層(3～6層)、遺物を含む砂層(7～9層)、遺物を含まない粘土層(10～14層)である(第7図左下)。

遺物は少ないものの、弥生土器片がややまとまって出土したほか、土師器・須恵器・瓦器などもある。50は土師器甕で、奈良時代のものである。51は広口壺で、弥生時代後期ないし古墳時代初頭ものと考えられる。口縁部は磨滅気味で、特に端部は磨滅が著しい。体部は下半に最大径をもつ玉葱形を呈する。頸部の立ち上がり部から肩部にかけて、上から直線文・刺突文・波状文を施す。なお、実測図は各部の破片から図面上で復原したもので、径や傾きについては必ずしも正確でない部分がある。

第9トレンチ(第7図) 第8トレンチの北83mに位置し、長辺20m、短辺5m、調査面積100㎡を測る。現地表下約2.0mまで掘削し、土層の堆積状況、遺構の有無の確認を行った。第4～



第8図 第4～10トレンチ出土遺物実測図

8トレンチ同様、砂層を確認後、人力で掘削したが、顕著な遺構は検出されなかった。また、調査区の一部で深掘りを実施し、砂層の下に粘土層の堆積を確認した。

出土遺物は非常に少なく、土師器や須恵器の破片が出土したにすぎない。52はやや大型の土師器甕の破片である。口縁部内面と体部外面にハケ調整を施す。奈良時代のものであろう。

第10トレンチ(第7図) 第9トレンチの北26mに位置し、長辺20m、短辺6m、調査面積120㎡を測る。現地表下約2.0mまで掘削し、土層の堆積状況、遺構の有無の確認を行った。第4～9トレンチ同様、砂層を確認後、人力で掘削したが、顕著な遺構は検出されなかった。また、調査区の一部で深掘りを実施し、砂層の下に粘土層の堆積を確認した。土層の堆積状況は、耕作土

(1層)、床土(2・3層)、中世～近代の堆積層(4～7層)、遺物を含む砂層(8～10層)、遺物を含まない粘土層(11・12層)である(第7図右下)。

出土遺物は第9トレンチ同様、非常に少なく、土師器や須恵器の破片が出土したにすぎない。45は土師器皿である。中世のものであろう。

5. まとめ

調査の結果、第1～第3トレンチでは古墳時代・奈良時代・中世の各時期の遺構・遺物を検出した。これらについては、関係機関と協議の上、平成22年度に調査区を拡張して全面的な調査を実施することになった。平成21年度の調査成果の詳細については、平成22年度調査の成果と合わせて改めて報告することにしたい。なお、第1～3トレンチは上狛北遺跡の範囲内に収まる。

一方、第4～10トレンチにかけては、耕作土・床土の下層で、厚い砂層(0.5～0.8m)・粘土層(1.5m以上)の堆積を確認するとともに、砂層から少量の遺物が出土した。この砂層の堆積は、洪水等によって調査地の周辺から流れ込んだものと思われることから、出土遺物も同様と考えられる。また、安定した遺構面も確認できなかった。以上のような調査成果から、第4～10トレンチにかけては、木津川などの旧河道もしくは池状の地形を呈していたと考えられるが、遺物の出土から調査地周辺に遺構・遺物の広がりが見込まれる。

注1 奈良時代の土器の器種分類については、奈良文化財研究所の分類を用いた。

奈良文化財研究所編『平城宮発掘調査報告XVI』(『奈良文化財研究所学報』第70冊)2005ほか

注2 第4・5トレンチの堆積状況については、当調査研究センター理事増田富士雄氏よりご教示を得た。当該調査区周辺が、河川の旧流路などではなく、池状の地形であったことは増田理事の指摘による。

4. 椿井遺跡第3・4次発掘調査報告

1. はじめに

今回の調査は、平成21年度及び同22年度府営基幹農道整備事業山城2期地区に係る埋蔵文化財発掘調査に伴い、京都府農林水産部の依頼を受けて実施したものである。

椿井遺跡は、木津川市山城町椿井に所在する縄文時代から近世にかけての複合遺跡である。これまで当該事業に伴い過去2回の発掘調査が実施されており、今回の調査は第3・4次調査となる。第1・2次調査では、縄文時代後期の墓と考えられる土坑や弥生時代後期の竪穴式住居跡、土坑などが確認されており、弥生時代後期の高地性集落として注目されている。

調査の結果、第3次調査では弥生時代の土坑、飛鳥時代の溝・建物・柵列のほか中世以降のピットや土坑を、第4次調査では弥生時代の方形周溝墓・土坑・溝、古墳2基、中世の柵列や土坑を検出した。

調査に係る経費は、全額農林水産部が負担した。報告に使用した座標系は、日本測地系の第VI系である。調査にあたっては、京都府教育委員会、木津川市教育委員会、地元自治会をはじめ多くの方々にご指導・ご協力をいただいた。記して、謝意を表します。

各年度の調査体制等は以下のとおりである。本報告は松尾・黒坪が執筆した。

現地調査責任者 調査第2課長 肥後弘幸

調査担当者 第3次調査 調査第2課主幹調査第3係長事務取扱 石井清司

同調査員 松尾史子

第4次調査 調査第2課課長補佐兼調査第1係長 小池 寛

同調査員 松尾史子

調査場所 第3次調査 木津川市山城町椿井松尾

第4次調査 木津川市山城町椿井御霊後

現地調査期間 第3次調査 平成21年10月28日～平成22年2月18日

第4次調査 平成22年8月10日～11月21日

調査面積 第3次調査 1,200㎡

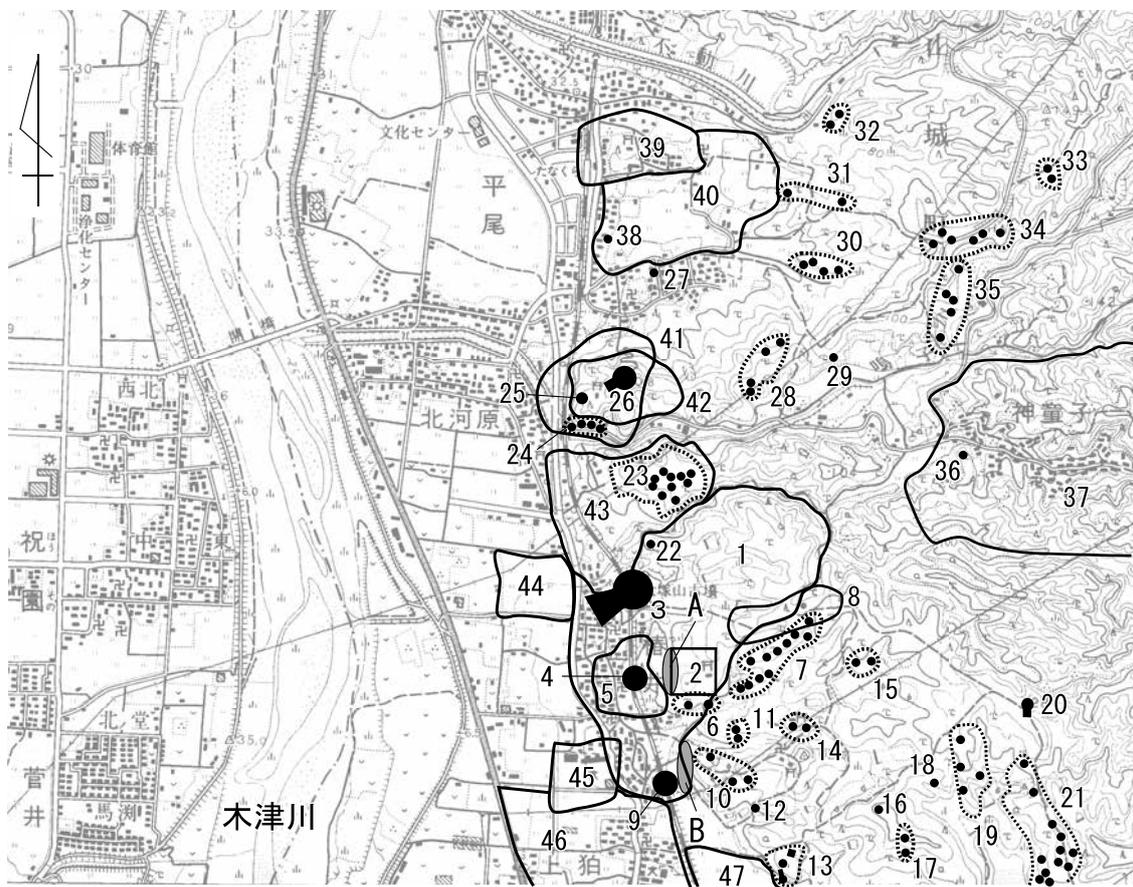
第4次調査 1,050㎡

2. 位置と環境

椿井遺跡は、木津川市山城町の南東部の丘陵および河岸段丘上に立地する。周辺の遺跡を見ても、縄文時代草創期の尖頭器が千両岩遺跡から出土している。同遺跡からは縄文時代早期の押型文土器も出土している。前期には湧出宮遺跡で集落が形成され、後・晩期の土器が堂ノ上遺

跡や椿井大塚山古墳の盛土内から出土している。弥生時代の遺跡には中期の湧出宮遺跡、後期の
上狛西遺跡、綺田柏谷遺跡、蟹満寺境内がある。

古墳時代前期には椿井大塚山古墳、平尾城山古墳、椿井天上山古墳、北河原稲荷山古墳、椿井
御霊山古墳などの大型の前方後円墳が築造されるが、中期には古墳築造がこの地域では見られな
くなる。古墳時代後期には横穴式石室を埋葬施設とする群集墳が造られる。南山城でいち早く横
穴式石室を導入したと考えられている椿井天竺堂古墳をはじめ、上狛千両岩1号墳(TK47)、綺
田山際1号墳・車谷2号墳(MT15)は畿内系横穴式石室導入期の古墳である。松尾古墳群、寒光
坊古墳群、宮城谷古墳群などの群集墳が数多く分布する。同時期の集落については旧山城町内
ではこれまで未確認であったが、上狛北遺跡で古墳時代中期から後期の集落が見つかった。白鳳期
には狛氏により高麗寺が造営され、奈良時代には山城国府や恭仁京が置かれたと考えられている。



A : 第3次調査地 B : 第4次調査地 0 2km

- | | | | | |
|------------|------------|-------------|------------|-----------|
| 1. 椿井遺跡 | 11. 切ヶ敷古墳群 | 21. 蓮池古墳群 | 31. 墓谷古墳群 | 41. 今城跡 |
| 2. 松尾廃寺 | 12. 天敷堂古墳 | 22. 野田尾古墳 | 32. 笛吹古墳群 | 42. 城山遺跡 |
| 3. 椿井大塚山古墳 | 13. 天竺堂古墳群 | 23. 西ヶ峰古墳群 | 33. 鳴子谷古墳群 | 43. 堂ノ上遺跡 |
| 4. 椿井天上山古墳 | 14. 高築山古墳群 | 24. 北谷横穴群 | 34. 相応谷古墳群 | 44. 阪ノ下遺跡 |
| 5. 椿井城跡 | 15. 田護平古墳群 | 25. 稲荷山古墳 | 35. 稲葉古墳群 | 45. 柳田遺跡 |
| 6. 松尾古墳群 | 16. 小杉谷古墳 | 26. 平尾城山古墳 | 36. 心経塚 | 46. 上狛北遺跡 |
| 7. 宮城谷古墳群 | 17. 袋谷古墳群 | 27. 越中谷古墳 | 37. 神童子遺跡 | |
| 8. ムナガイ遺跡 | 18. 金村古墳 | 28. 北原古墳群 | 38. 三所塚古墳 | |
| 9. 御霊山古墳 | 19. 猿谷古墳群 | 29. 萩谷古墳 | 39. 湧出宮遺跡 | |
| 10. 寒光坊古墳群 | 20. 桜谷古墳 | 30. 南萩ノ谷古墳群 | 40. 丹夕遺跡 | |

第1図 調査地及び周辺遺跡位置図(国土地理院 1/25,000 田辺)

中世には山城国一揆の舞台となったことで有名であるが、今城跡、椿井城跡などの山城が築かれている。また、近世まで大里環濠集落として栄えていた。

3. 第3次調査

1) はじめに

第3次調査地は椿井遺跡の南西部の丘陵上に位置する。弥生時代後期の竪穴式住居跡などが検出された椿井遺跡第1・2次調査地点の南方約300mの地点にあたる。平野側には椿井天上山古墳、南西の谷には松尾古墳群が所在し、東側には松尾廃寺と松尾神社が隣接する。松尾神社の境内は京都府文化財環境保全地区となっており、平成7年度の表門の解体修理に伴う発掘調査で、土堀が鎌倉時代に遡ることが明らかになった。ほぼ同じ場所にあったと考えられている松尾廃寺は古代の寺院跡で、松尾神社の土堀中から古代(白鳳期～平安時代初期)の瓦が出土している。平成11年度の調査では、鎌倉期の寺域西辺の築地雨落ち溝が確認された。近世には松尾神社の神宮寺である松尾山角之坊伝興寺があったと伝えられている。また、平成13年度の山城町教育委員会の椿井天上山古墳の発掘調査では、弥生時代後期の「V」字の区画溝や土坑が見つかり、今回の調査地はその区画溝の内側になることから弥生時代の集落跡が見つかることが予想された。

調査にあたっては、道路の路線内に3か所の調査区を設定し、それぞれ北から1～3トレンチとした。なお、2トレンチには平成11年度の山城町教育委員会の調査区(M-103・M-104tr)が含まれ、M-102trで確認された松尾廃寺の西辺溝より西側に位置する。また、3トレンチの南側斜



第2図 第3次調査トレンチ配置図



第3図 第3次調査1～3トレンチ平面図

面には松尾古墳群が分布する。調査の結果、弥生時代の土坑1基、飛鳥時代の溝2条、建物2棟、柵列1条、中世の柱穴や土坑を確認した。

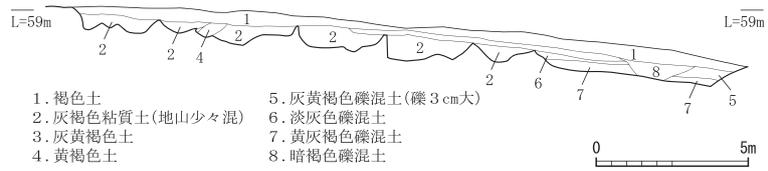
2) 検出遺構

(1) 1 トレンチ 調査地は南から北側の谷に向かって傾斜する地形である。表土である筍栽培に伴う置土を50cmほど除去するとすぐに黄褐色の地山に達した。筍栽培による掘削が全体に及んでおり遺構は皆無であった。出土遺物としては、攪乱から弥生土器と思われる小破片が少量出

土しただけである。

(2) 2トレンチ 調査前は柿の木畑であった。表土直下で遺構面となる黄褐色粘土に達した。トレンチ北部で土坑S X43や柱穴群、中央部で飛鳥時代の

1tr断面図



第4図 1トレンチ土層図

溝S D44や掘立柱建物跡S B01・02、柵列S A01のほか、中世以降のピットや土坑を確認した。トレンチ南部では近世以降の削平により顕著な遺構は確認されなかった。

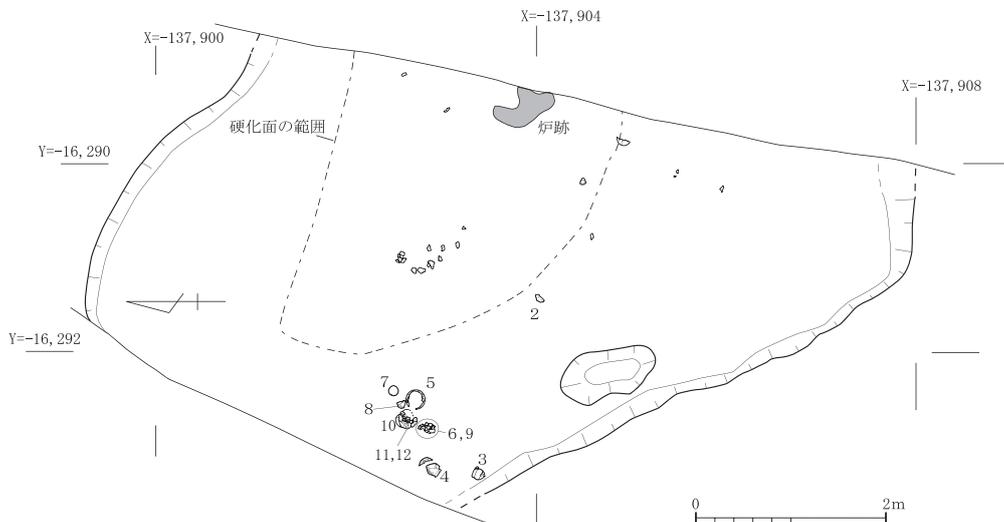
土坑S K46 長軸1m、短軸0.7m、深さ5cmの不整形な土坑である。炭と多量の拳大の円礫により埋まっていた。中世の瓦が出土した。

土坑S K09 長軸4m、短軸3m、深さ10cmの不整形な土坑である。トレンチ中央南西部で検出した。埋土は黄灰色砂質粘土混淡灰褐色土で、鎌倉時代の瓦(第10図33)や土師器などが出土した。

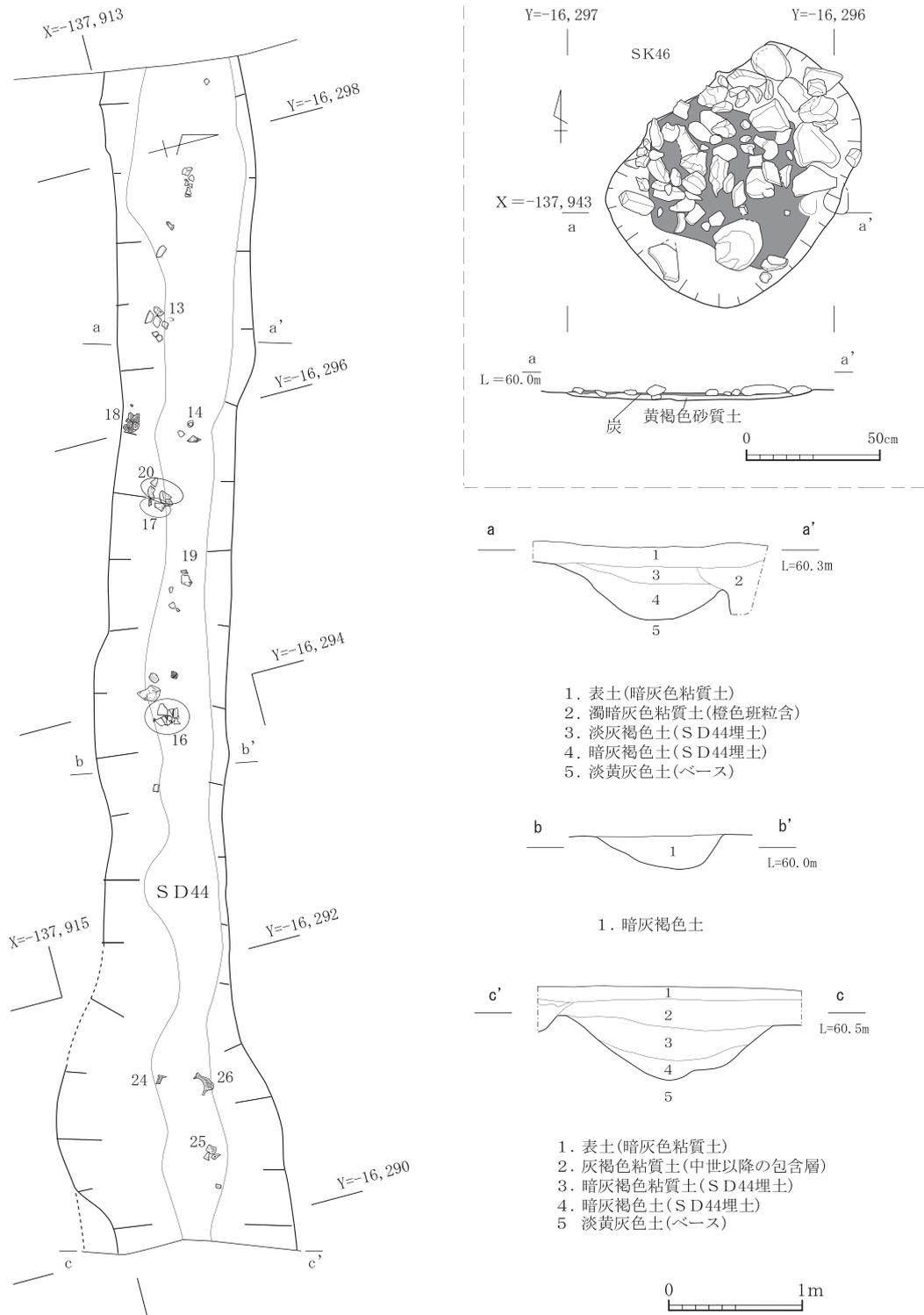
溝S D44 トレンチ北部で検出した東西方向の溝である。幅0.6～1.6m、深さ40cmで、断面は浅い「U」字形である。9m分を検出した。東西とも調査地外に続く。埋土は淡灰褐色土及び暗灰褐色土で、7世紀前半の須恵器や土師器が出土した。須恵器には杯や甕がある。杯には杯Gの身は見られない。土師器は甌や甕など煮炊具が目につく。

掘立柱建物跡S B01(第7図) S D44の南側で検出した東西棟の掘立柱建物跡である。梁間2間(3.6m)、桁行2間(4.2m)以上で、東側は調査地外に続く。建物の主軸は西で北に15°傾く。柱間は不揃いである。建物の柱穴は、直径30～50cmの不整円形で、深さは20～40cmと一定でない。出土遺物は時期不明の土師器片のみである。

掘立柱建物跡S B02(第7図) S B01の南で検出した東西棟の掘立柱建物跡である。梁間2間(4.7m)、桁行3間(6.2m)以上で、建物の東側は調査地外に続く。建物の主軸は西で北に10°傾く。柱間は不揃いである。建物の柱穴は、直径30～50cmの不整円形で、深さは10～60cmと一



第5図 土坑S X43実測図



第6図 溝SD44、土坑SK46実測図

定でない。出土遺物は時期不明の土師器片のみである。

柵列SA01(第7図) SB02の南西で検出した南北方向の柵列である。主軸は北で西に3°傾く。2間分(5.3m)を確認した。柱間は1.5~2mと不揃いである。出土遺物は弥生土器片および時期不明の土師器片である。

土坑SX43(第5図) 5×7m、深さ約0.2mの長方形の土坑である。調査地北端で検出した。

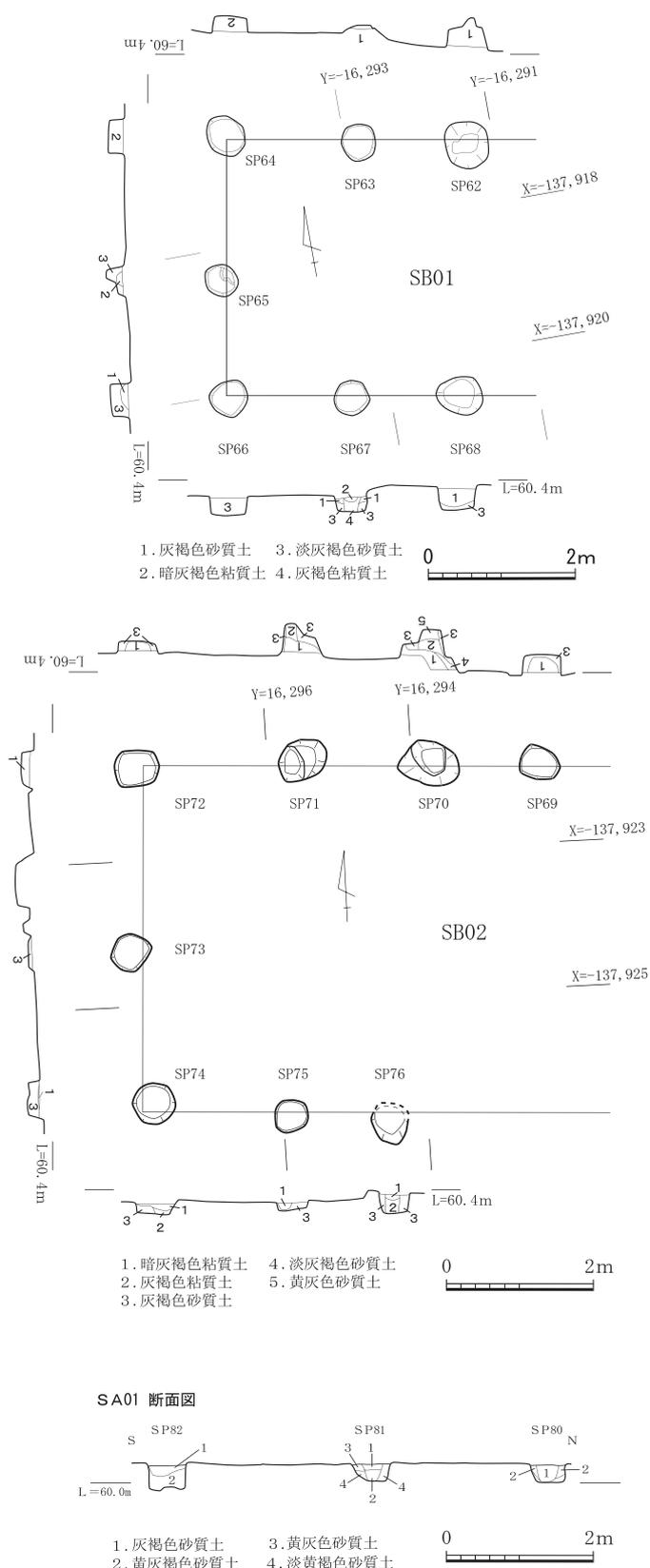
調査地内では北西および南西のコーナーを確認しており、東側は調査地外へ続く。なお、土坑の上層では弥生土器がまとめて出土した。弥生土器の出土したレベルで、部分的ではあるが硬化面もみられ、一部被熱による赤変が認められた。赤変部分は炉跡である可能性が高い。このことから竪穴式住居であった可能性がある。

(3) 3トレンチ(第3図) 表土直下で遺構面となる黄褐色粘土となる。調査前は畑で、トレンチ北半では畑作に伴う溝が多く見られた。トレンチ中央部西側で飛鳥時代の溝SD18を検出したほか中世以降のピットや土坑を確認した。ピット群はほとんどが直径15～20cmの円形で、埋土は淡黄色土である。遺物が出土していないため時期は不明である。

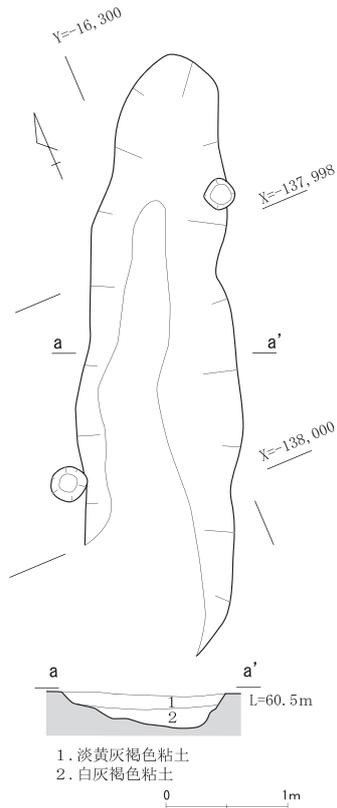
溝SD18(第8図) 幅1.2m、深さ25cm、断面皿状の溝で、5m分を検出した。埋土は上層が淡黄灰褐色粘土で、下層が白灰褐色粘土である。上層から須恵器短頸壺(第10図30)が出土した。時期は飛鳥時代と考えられる。

溝SD54 トレンチ南西隅で検出した幅10cm、深さ10cmの「L」字に曲がる溝である。この溝の南西部分から弥生土器が数点出土していることから竪穴式住居の周壁溝の可能性もある。

3) 出土遺物(第9・10図・図版17～19)



第7図 掘立柱建物跡SB01・02、柵列SA01実測図



第8図 溝S D 18実測図

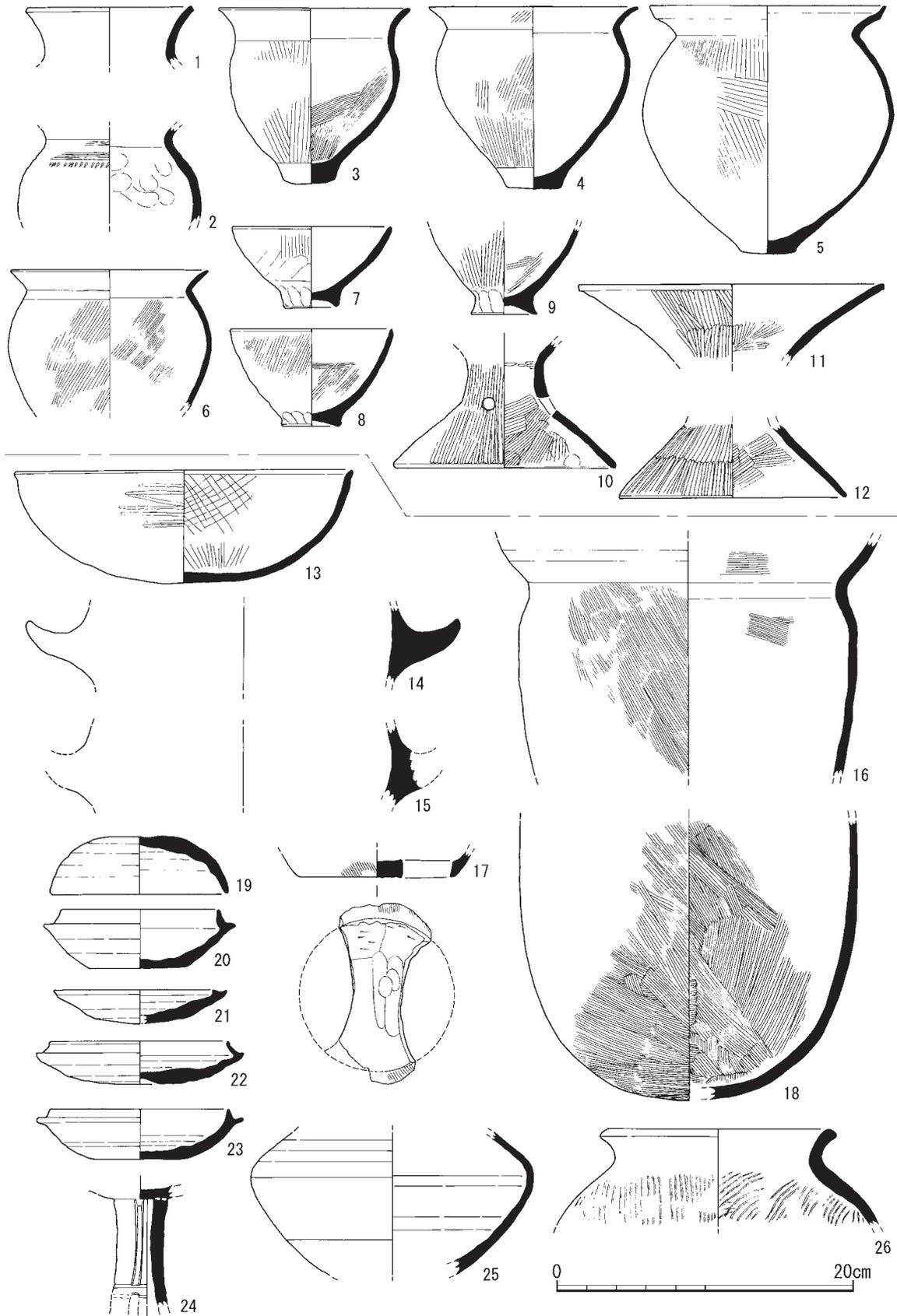
出土遺物には弥生土器、土師器、須恵器や瓦及び石鏃がある。これらの遺物の時期は、弥生時代・飛鳥時代そして中・近世である。瓦は鎌倉時代と近世のものが中心である。出土した遺物は、整理箱にして総数8箱である。

以下主な出土遺物について報告する。

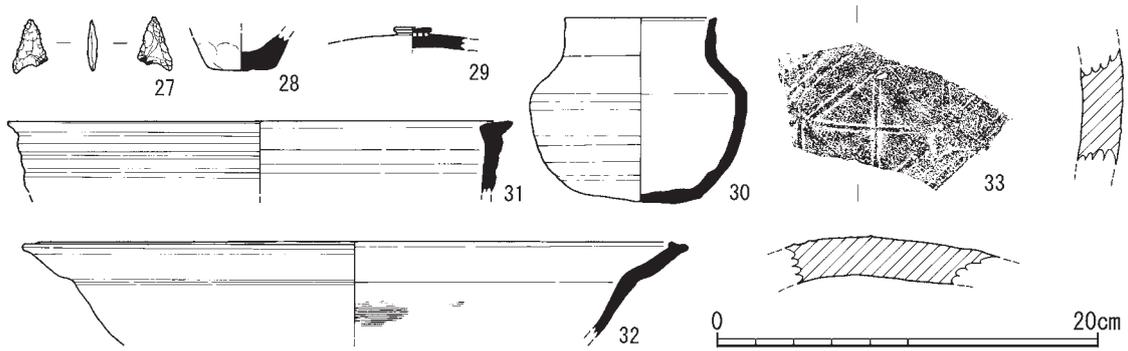
土坑S X 43(第9図1～12) S X 43の上層からは弥生土器がまとめて出土した。1は広口壺の口縁部である。口径11.0cm、残存高4.0cmである。2は近江系の甕または鉢である。口縁部は欠損している。肩部には列点文を施し、頸部の櫛描直線文は4条を数える。3～6は甕である。5が中型で、他は小型である。3は口径13.8cm、器高12.1cmである。口縁部は緩く外方に湾曲し、端部は丸く納まる。内外面ともハケ調整をする。4は口径14.0cm、器高12.5cmである。口縁部は「く」字に屈曲し、端部は丸く納まる。内外面ともハケ調整をする。5は口径15.1cm、器高17.0cmである。口縁部は「く」字に屈曲し、端部は受け口状である。外面はハケ調整をする。内面は摩滅が著しく不明である。6は口径13.3cm、残存高9.6cmである。口縁部は「く」字に屈曲し、

端部は丸く納まる。内外面ともハケ調整をする。7～9は小型鉢である。いずれも直口口縁で、底部を上げ底ふうに仕上げる。甕の分割成形下半を基礎に製作された可能性がある。7は口径10.6cm、器高5.6cm、8は口径10.8cm、器高6.7cmである。10は高杯の脚部である。底径14.6cm、残存高8.7cmである。3方向に透かし孔が施される。外面は丁寧に磨かれ、内面はハケ調整をする。11・12は器台である。11は口径20.6cm、残存高5.3cmで、内外面ともにミガキで調整する。12は底径14.6cm、残存高8.7cmである。外面はミガキ、内面はハケで調整する。両者はほぼ同じ地点で出土していること、胎土や調整が非常に良く似ていることから同一個体と考えられる。これらの土器は第V様式の後半に属すると考えられる。

溝S D 44(第9図13～26) 13～18は土師器である。13は土師器の杯Cである。口径22.6cm、器高7.8cmである。口縁部は底部から湾曲しながら立ち上がり、口縁端部は内側に面をもつ。口縁部外面はミガキ、底部外面は不定方向のケズリを施す。内面には暗文を施す。口縁部は放射状及び格子状の暗文である。飛鳥IもしくはIIに併行するものである。14は甑、15は甕の把手である。16は甕である。口縁部は受け口状に立ち上がる。内外面ともハケで調整する。17は甑の底部である。底径は10.5cmで、穴は2つである。18は長胴甕の下半部である。内外面ともに細かいハケで調整する。19～26は須恵器である。19は杯Hの蓋で、口径11.8cm、器高3.9cmである。20～23は杯Hの身で、深手のもの(20・23)と浅手のもの(21・22)がある。底部は丸みがなく平底に近い。20は口径10.6cm、器高4.0cm、21は口径11.6cm、器高2.3cm、22は口径12.0cm、器高2.9cm、23は口径12.0cm、器高3.4cmである。これらは、口縁部の形態及び法量から7世紀前半

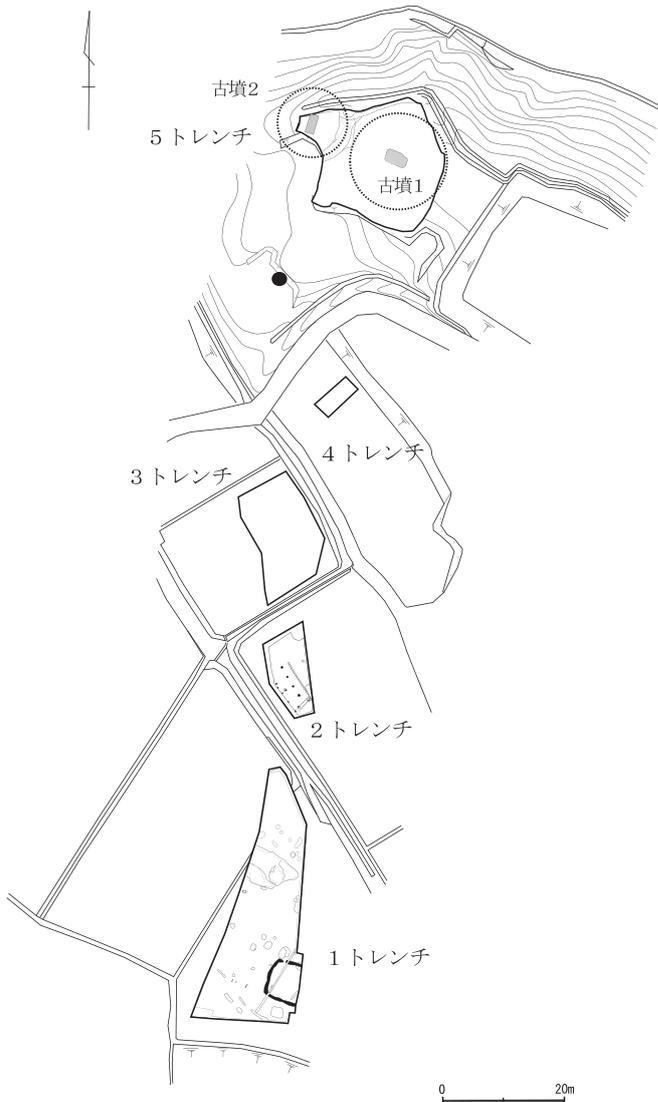


第9図 第3次調査出土遺物実測図(1)



第10図 第3次調査出土遺物実測図(2)

のものと考えられる。21は返りが極端に小さく、杯Gの蓋の可能性はある。24は方形2段透かしをもつ高杯の脚部である。25は短頸壺の体部である。26は甕である。外面には平行タタキ、内面には同心円のタタキが見られる。これらの土器は、土師器杯及び須恵器杯の時期から飛鳥時代前半のものと考えられる。



第11図 第4次調査トレンチ配置図

27は石鏃である。2トレンチの攪乱から出土した。28は弥生土器の甕の底部である。小土坑から出土した。29は須恵器杯の蓋である。2トレンチの攪乱の一つから出土した。30は須恵器短頸壺である。3トレンチのS D18から出土した。口径8.0cm、器高9.8cmで完形品である。肩の張りは弱くなで肩である。31は近世の信楽焼の盤である。包含層から出土した。32は近世の土師器鍋である。2トレンチ南部の窪みより出土した。口径33.2cm、残存高5.05cmである。胎土は精良で外面は乳白色であるが、断面は橙色である。内面は細かいハケで調整する。33は鎌倉時代の瓦である。2トレンチのS K09から出土した。平瓦の破片であろう。厚みは2.2cmと分厚く、外面には格子目(×)のタタキの痕が見られる。

4)小結

第3次調査では、弥生時代・飛鳥時代そして中・近世の遺構や遺物が見つかった。弥生時代については、比較的

残りの良い土器がまとめて出土したものの、竪穴式住居跡が複数分布するような状況は確認できなかった。後述の飛鳥時代ごろに大部分が削平されたためと考えられる。S B01・02及びS A01からは遺物が出土していないが、S D18・44などと同時期の飛鳥時代の遺構と考えたい。飛鳥時代の溝や建物については、椿井遺跡で同時期の遺構が確認されたのは今回がはじめてである。白鳳期に創建されたとされる松尾廃寺よりも古い遺構であることから、寺の造営と何らかの関係があると考えられる。また、中近世の遺構や遺物については、松尾廃寺や伝興寺に伴うものと考えられる。建物等は確認されず、寺の建物がある区画の外側であった可能性がある。

4. 第4次調査

1) はじめに

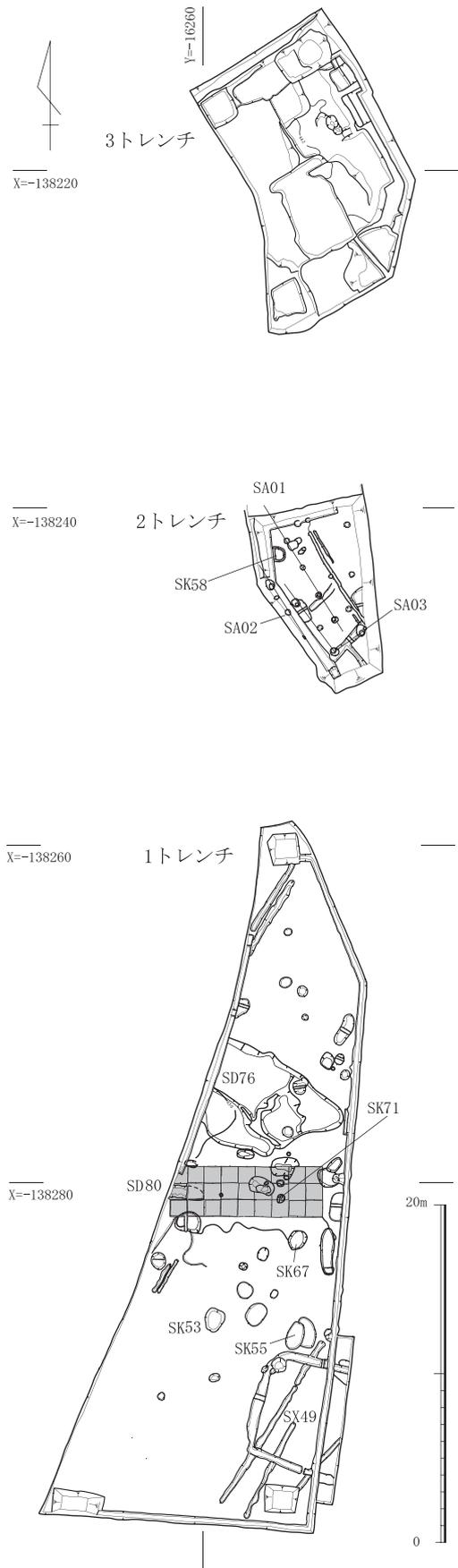
第4次調査地点は、椿井遺跡の南東隅、第3次調査地の南方100m付近に位置する。木津川の低位段丘上に立地しており、平地との標高差は約20mである。地形は北に向かって高くなる。調査対象地の現況は水田や筍畑であった。調査地南端の西側には前期の前方後円墳である御霊山古墳が隣接し、東側の丘陵上には寒光坊古墳群や切ヶ敷古墳群、高築山古墳群などの後期古墳が多く分布している。南東には後期の前方後円墳を含む上狛天竺堂古墳群がある。

今回の調査では、集落の縁辺部の様子や隣接する椿井御霊山古墳の周溝の有無、寒光坊古墳群に連なる丘陵先端部における古墳の有無の確認を目的として調査を実施した。

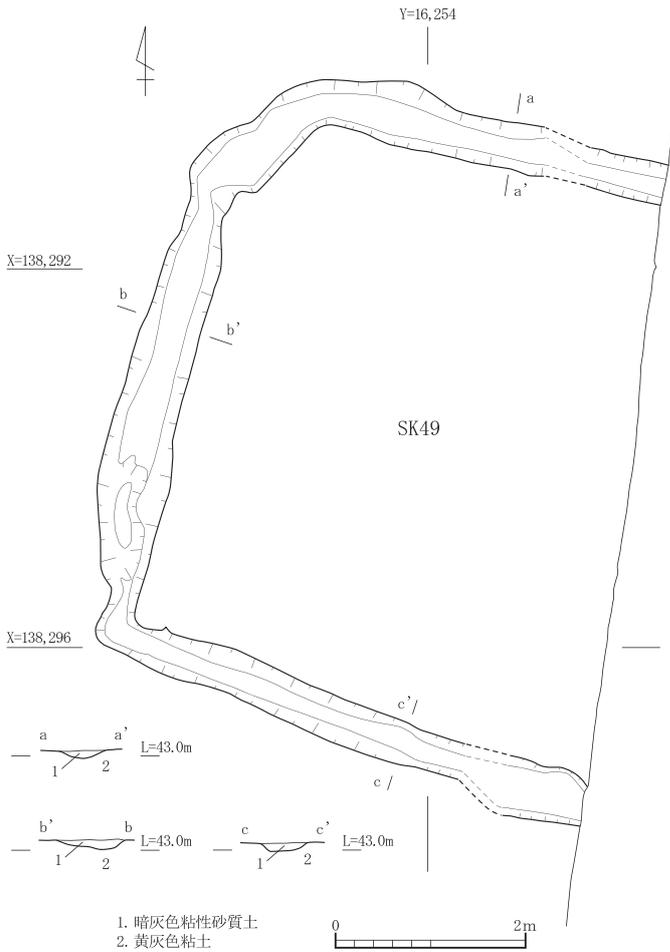
調査にあたっては、事業予定地内に5か所の調査区を設定し、南から順に1～5トレンチとした。調査の結果、弥生時代の方形周溝墓状の遺構、土坑、新発見の古墳2基、中世の柵列と土坑を確認した。

2) 検出遺構

(1) 1トレンチ(第11図・図版第9・10) 御霊山



第12図 1～3トレンチ平面図

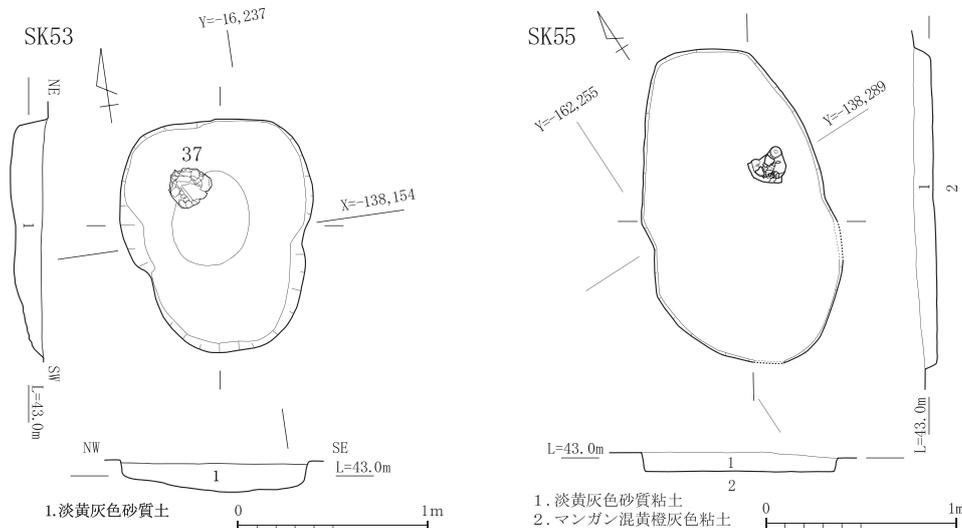


第13図 方形周溝墓状遺構 S X 49実測図

古墳の東側の水田に設定したトレンチである。同古墳の周溝の有無及び集落の縁辺部の様子をを確認することを調査の目的とした。表土直下で遺構面である黄褐色粘土及び黄灰色粘土に達した。検出遺構には、弥生時代後期の方形周溝墓や流路・溝・土坑のほか、中世以降の耕作溝などがある。なお、御霊山古墳の周溝と考えられる溝は検出されなかった。また、トレンチ中央部は周辺より若干窪んでおり、灰白色砂質土が浅く堆積していた。この灰白色砂質土より旧石器時代のナイフ型石器(第18図1)が出土したため、3×9mの範囲で1mグリッドを設定して(第12図網掛け部分)石器の調査を行った。その結果上層5～10cmの黄白色砂質土から縄文時代の石器が総数18点出土した。それより下位からは

遺物は出土しなかった。

方形周溝墓状遺構 S X 49 1辺6m、幅0.4～0.8m、深さ0.1mの「コ」字状に巡る溝である。トレンチ南東部で検出した。主軸は北から15°東に傾く。埋土は、暗灰色粘性砂質土である。埋土から弥生土器片がわずかに出土したこと、溝の内側にピット等が見られないことなどから方形



第14図 土坑 S K 53・55実測図

周溝墓の可能性が考えられる。

土坑 S K 53 長軸1.2m、短軸0.7～1 m、深さ0.2 mの楕円形土坑である。トレンチ中央部南寄りで見出した。埋土は淡黄灰色砂質土で、弥生土器の甕(第17図37)が出土した。

土坑 S K 55 長軸1.6m、短軸1 m、深さ0.1mの楕円形土坑である。埋土は淡黄灰色砂質粘土で、弥生土器の甕が出土したが、図化できなかった。

土坑 S K 67 長軸1.3m、短軸1 m、深さ0.1mの楕円形土坑である。埋土は淡黄灰色砂質粘土で、弥生土器の甕(第17図36)が出土した。

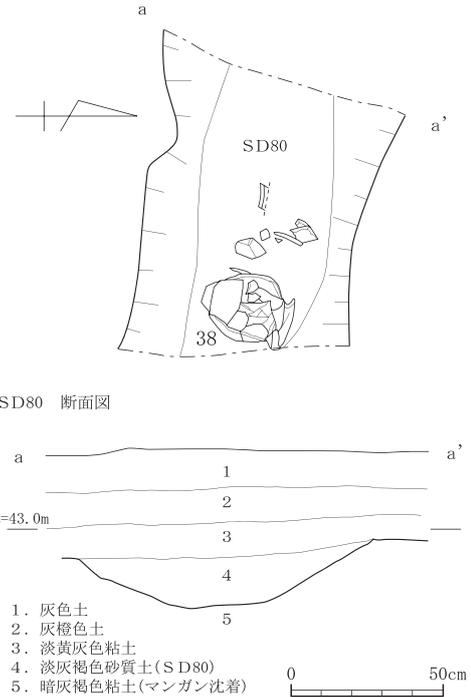
土坑 S K 71 長軸1.6m、短軸1 m、深さ0.1mの楕円形土坑である。埋土は淡黄灰色砂質粘土で、弥生土器の甕(第17図34)が出土した。

流路 S R 76 長さ8 m、最大幅6m、深さ0.1～0.5 mの流路である。トレンチ中央北よりで見出した。流路の底は、東から西に向かって傾斜する。埋土は灰褐色砂質土及び黄灰色砂質土で、弥生土器のほか縄文時代の石鏃や剥片が出土した。弥生土器は遺存状態は良くなかった。

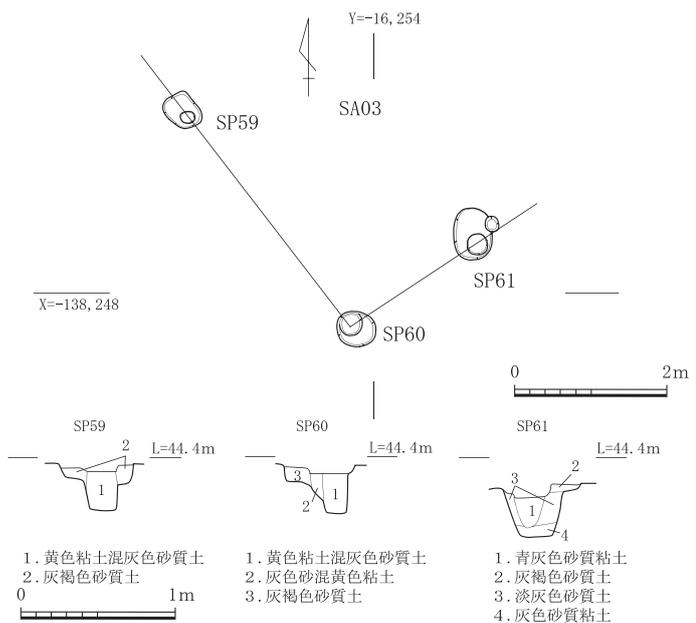
溝 S D 80 幅0.7m、深さ0.15～0.2mの東西方向の溝で、1 m分を見出した。埋土は暗灰褐色砂質土で、ほぼ完形の弥生時代後期の甕(第17図38)が1点横位で見出した。

(2) 2 トレンチ(第12図・図版第11) 1 トレンチの北側の1段高い水田に設定したトレンチである。表土下0.5mまで暗灰色粘質土、灰色砂混黄橙色砂質土、橙色砂質土の順に堆積しており、その下の明黄橙色砂質土上面で、上層遺構である室町時代以降の耕作溝を見出した。その下層には灰褐色系の砂質土が堆積しており、表土下1.2mで地山である黄褐色粘質土に達する。下層遺構である中世前期の遺構は地山面で見出した。見出遺構は中世の柵列3条と土坑や溝である。

柵列 S A 01 トレンチ中央で見出した柵列である。主軸は北から32°西に傾く。3間分(5.4m)を見出した。柱穴は直径0.25mの円形で、深さは0.4 mである。柱間は1.8m等間である。



第15図 溝 S D 80実測図



第16図 柵列 S A 03実測図

柵列S A02 トレンチ西端で検出した柵列である。主軸は北から33°西に傾く。3間分(5.4m)を検出した。柱穴は直径0.2mの円形で、深さは0.2mである。柱間は1.8m等間である。

柵列S A03 トレンチ南部で検出した「L」字に曲がる柵列である。主軸は北から38°西に傾く。東西1間分(2m)、南北1間分(3.4m)を検出した。柱穴は直径40cm前後の円形ないし隅丸方形で、深さは0.4m前後である。柱間は不揃いである。

土坑S K58 トレンチ西北壁際で検出した土坑である。検出長0.4m、検出幅0.7mで深さは0.2mである。埋土から土師器の羽釜(第17図45)が出土した。

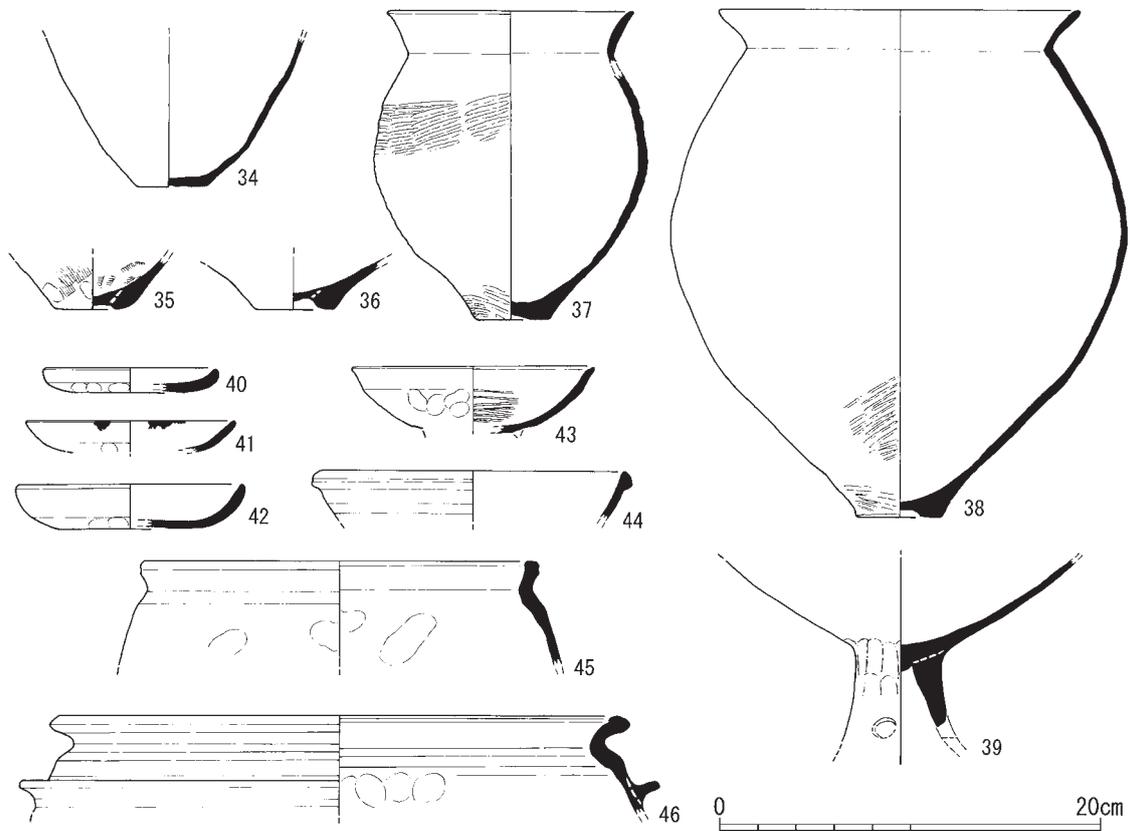
(3) 3トレンチ 2トレンチの北西に隣接する水田に設定したトレンチである。地表下で地山である黄褐色粘土層に達した。近世以降の土取り穴以外に顕著な遺構は検出されなかった。土取り穴からは中世の土師器や瓦器椀、近世陶磁器が出土した。

(4) 4トレンチ 3トレンチの北東側の1段高い平場に設定したトレンチである。表土下2mまで掘削したが、安定した遺構面はなく、顕著な遺構・遺物は確認されなかった。

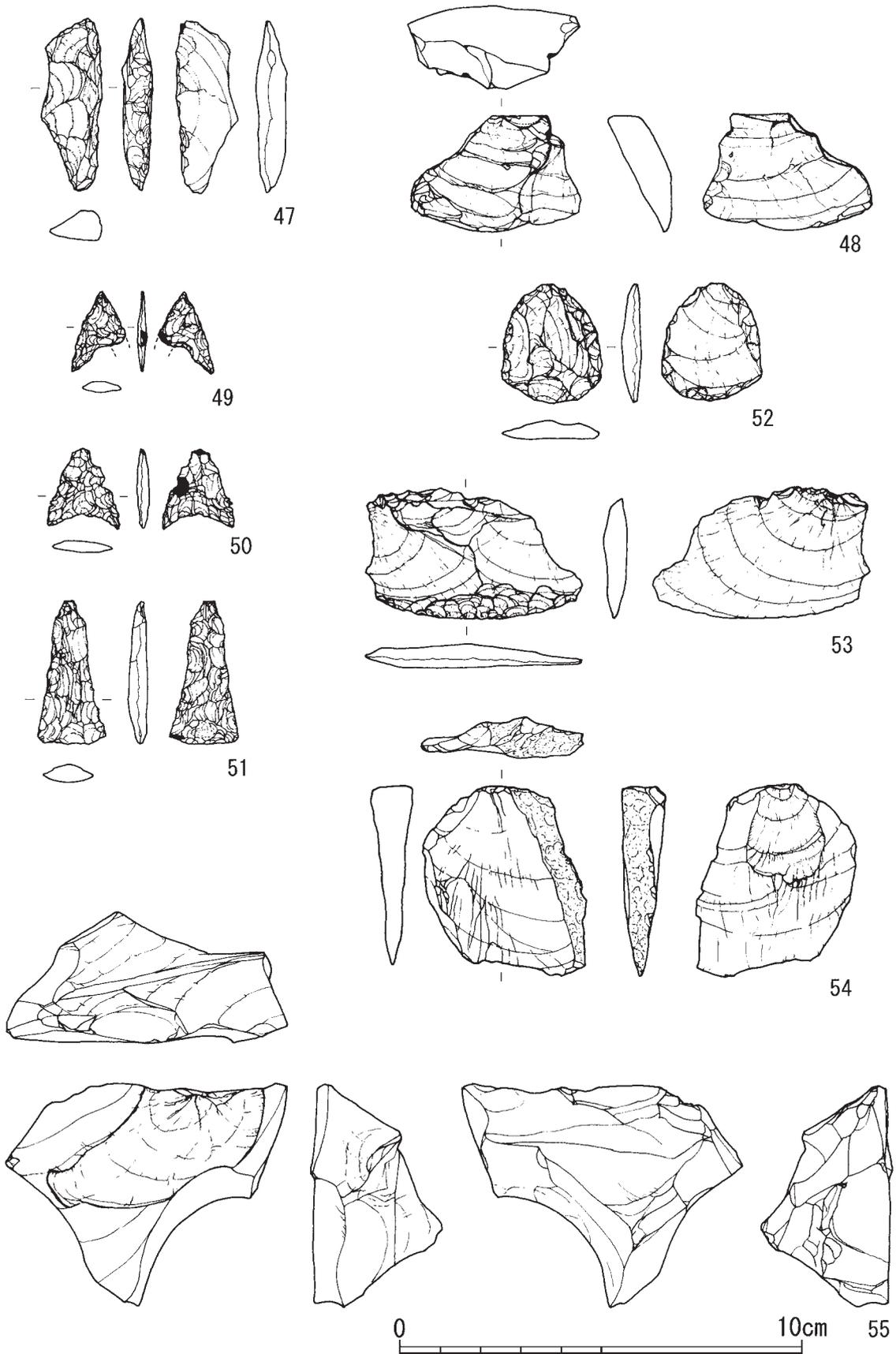
3) 出土遺物(1～3トレンチ)(第17・18図、図版第19・22)

出土遺物には弥生土器、古墳時代の須恵器、中世の土師器、瓦器、陶磁器、近世陶磁器などがある。出土した遺物は、整理箱にして総数6箱である。

34～38は弥生土器である。34～36は甕の底部である。34はS K71から出土した。摩滅がひどく、調整は不明である。35はS R76から出土した。内外面共にハケで調整されており、底部外面



第17図 第4次調査出土遺物実測図(1) 1～3トレンチ：土器



第18図 第4次調査出土遺物実測図(2) 1トレンチ：石器

はわずかに窪む。36はS K67から出土した。摩滅がひどく、調整は不明である。底部外面は大きく窪む。37はS K53で出土した小型の甕である。口径12.8cm、器高16.4cmである。外面は肩部から底部までタタキによる調整の痕跡が残る。38はS D80で出土した甕である。口径19.0cm、器高27.0cmである。内外面とも摩滅がひどく底部にタタキの痕跡がわずかに認められる。39は高杯である。トレンチ中央部の包含層から出土した。脚部と杯部は粘土円盤を充填して接合する。脚部には3方向の透かしが施される。摩滅がひどく調整は不明である。

40～42は土師器皿である。40は3トレンチの土取り穴より出土した。口径9.0cm、器高1.3cmである。13世紀ごろのものである。41・42は2トレンチの排水溝掘削時に出土した。41は口縁部が外上方に開く。薄手で胎土は白っぽい。口径11.0cm、器高1.6cmである。灯明痕が2か所認められる。42は口縁部が内湾する。口径11.8cm、器高2.4cmである。43は大和型瓦器椀である。3トレンチの土取り穴から出土した。口径12.7cm、残存高3.5cmで、高台は剝離している。見込みには螺旋状暗文が施される。外面には指圧痕が見られるのみである。13世紀後半のものである。44は白磁椀である。横田・森田分類のIV類椀の口縁部で、端部は玉縁状を呈する。12世紀のものである。2トレンチの壁面整形時に出土した。口径16.0cm、残存高2.7cmである。45は土師器羽釜である。2トレンチのS K58から出土した。口径20.6cm、残存高5.6cmである。胎土は精良で淡黄褐色を呈する。大和I型羽釜の古手のもので、15世紀の所産である。46は土師器羽釜である。口径29.4cm、残存高5.3cmである。2トレンチ西側排水溝掘削時に出土した。(松尾史子)

石器は少量ながら、後期旧石器時代のナイフ形石器をはじめ、縄文時代の石鏃、削器がある。石材はすべてサヌカイトで二上山産とみられる。剝片や石核の出土もみられ、若干の石器製作が行われていた形跡がある。なお、旧石器時代のナイフ形石器は南山城地域で断片的ながら出土が知られている。八幡市美濃山丘陵の金右衛門垣内遺跡、西ノ口遺跡、城陽市芝ヶ原遺跡など、立地上の共通性が認められる。平野部を見渡せる段丘上や低い台地状の丘陵など、沖積面よりひときわ高く、等高線の幅がばらけるように広がる丘陵頂部はこうした旧石器資料の存在に注意が必要である。

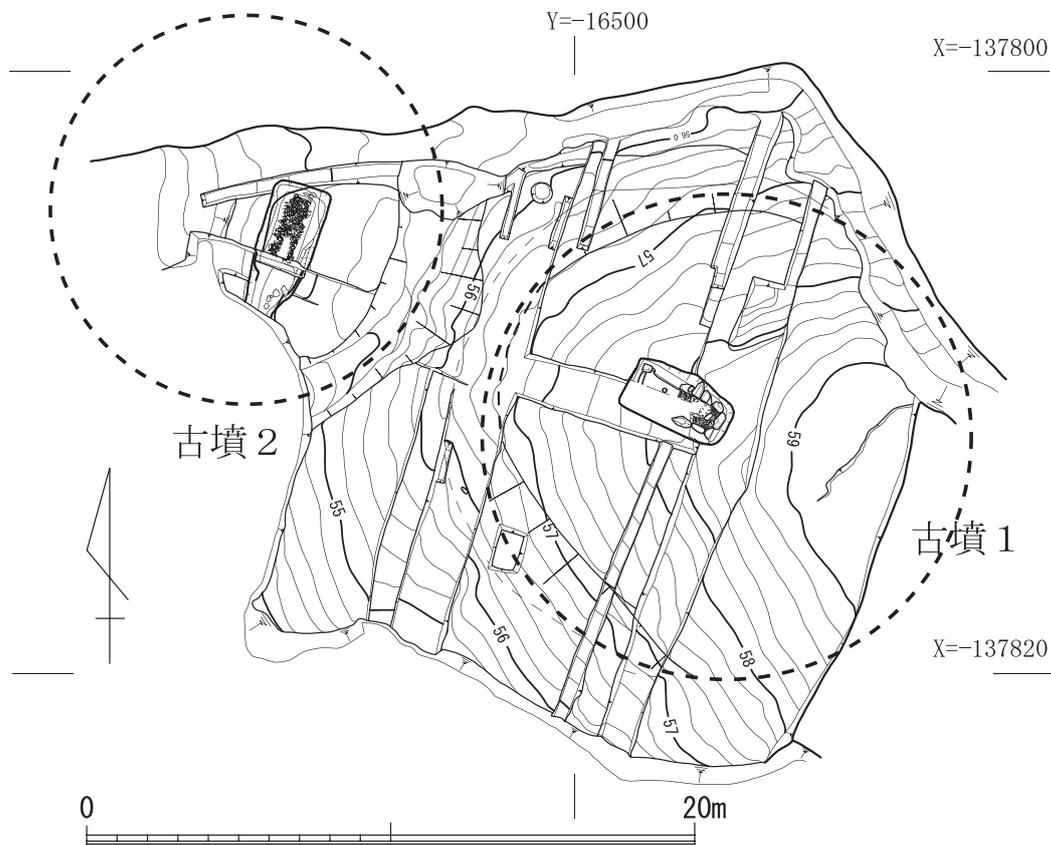
47はナイフ形石器である。1トレンチ中央東側から出土した。長さ4.35cm、幅0.9cm、厚さ0.75cm、重さ4.3gを測る。腹面側の長辺中間部を加撃して得られた横長剝片を素材に、2側縁に入念なブランディング加工を施している。背面は長辺に直交する数面のネガ面となっている。先端部は尖らず、鋭利に薄くなった部分を未加工のまま残し、そこを刃部としている。48は厚みのある横長剝片である。1トレンチから出土。長さ3cm、幅4.25cm、厚さ0.85cm、重さ13.1gである。加工や形状の特徴からではなく、他の縄文時代の石器と比較して風化度が著しく進んでいる点から後期旧石器時代とした。

49から55は縄文時代の石器類、剝片、石核である。いずれも1トレンチ中央部の灰白色砂質土及び黄白色砂質土から出土した。49は基部に深いえぐりをもつ凹基式石鏃である。長さ2cm、幅1.35cm、厚さ0.25cm、重さ0.1gである。基部片側は欠損しているが、先端、基部とも非常に鋭利に尖り、表裏の調整剝離は細かく入念である。50も凹基式石鏃である。長さ2cm、幅

1.8cm、厚さ0.3cm、重さ0.7gを測る。49と比較して幅広で基部のえぐりは浅い。先端は欠損するが、基部の両端部は鋭利に仕上げられている。表裏の剝離は非常に丁寧である。51は、基部が平らな平基式石鏃である。長さ3.6cm、幅1.7cm、厚さ0.45cm、重さ2.1g。側縁および基部の細かく丁寧な調整剝離と比較し、先端部の加工は鋭利さを欠いている。基部を機能部とする小型の削器とみることもできる。52は片面の周縁部から中央部全体を丁寧に調整・整形した石器である。長さ3cm、幅2.5cm、厚さ0.45cm、重さ3.8gを測る。石鏃の未成品か削器と考えられる。53は、幅広の横長剝片を素材とする削器である。長さ3.3cm、幅5.4cm、厚さ0.6cm、重さ10.4gである。下端の長辺に細かな調整によるスクレーピングエッジが形成されている。54は側縁部に自然の礫表を残す幅広剝片である。長さ4.8cm、幅4cm、厚さ1cm、重さ14.2gを測る。55は厚みのある剝片素材の石核である。幅7cm、高さ5.6cm、厚さ3.3cm、重さ78.3gを測る。上面の側縁部を調整して打面とし、正面のポジティブ面で横長剝片を剝離している。削器などの素材を得たものといえる。(黒坪一樹)

4) 5 トレンチ (第19図・図版第12)

松尾神社の谷を挟んで南側の丘陵先端に設定した調査区で、標高54～59mである。新たに古墳2基を確認した。調査地は、埋蔵文化財包蔵地に含まれていないが、同丘陵の頂部に寒光坊古墳群が分布していることから古墳の有無を確認することを目的として調査を実施した。調査地は、筍栽培等により地形が大きく改変されており、古墳状隆起等は認められなかった。調査にあたっては、まず、丘陵の尾根筋に沿って幅2mの試掘トレンチを「キ」字状に設定して掘削した。そ



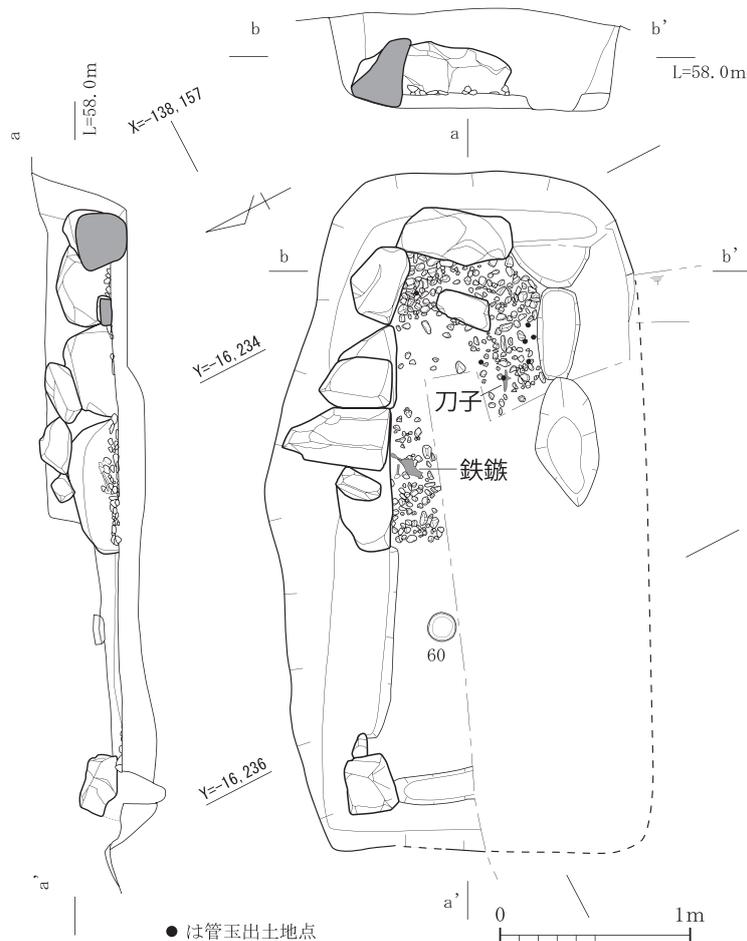
第19図 5 トレンチ平面図

の結果、古墳の埋葬施設(古墳1の石室)と溝状落ち(古墳2の周溝)が検出されたため、京都府山城北土木事務所と協議の上、面的な調査を実施することとなった。なお、古墳の名称については、木津川市教育委員会で検討中である。5トレンチの基本層序は、地表から0.5～0.6mまで表土及び近世以降の筍栽培に伴う置土である灰黄色土が堆積しており、その直下で古墳の埋葬施設や周溝を確認した。

(1)古墳1(第20図・図版第12～14) 墳丘は後世の削平によりほとんど失われており、わずかな地形の変化から直径16mの円墳と考えられる。埴輪や葺石は出土していない。

①埋葬施設 埋葬施設は1基で、北西に入り口を設ける竪穴系横口式石室である。主軸は西から17°北に傾く。玄室は幅0.8m、長さ2.7mで、床面には親指大の礫が敷かれている。石材は花崗岩の切石で、付近で採れるものである。石材はほとんど抜き取られており、基底部の奥壁と右側壁の一部が残存していた。また、奥壁の手前に長さ30×15cmの方形の石が1点出土した。礫床の直上で平らな面を上にして出土していることから棺台や枕石の可能性が考えられる。

石室の床面からは、刀子1点、鉄鏃5点以上と碧玉製の管玉が8点出土した。刀子は奥壁付近の左側壁寄り出土した。鉄鏃は、右側壁の第2石の脇で出土した。床面から若干浮いていること、向きにばらつきがあることから原位置は保っていないと考えられる。管玉は、奥壁付近で散乱して出土した。また、石室床面の少し上で須恵器杯蓋(第21図60)1点が内面を上にして出土した。



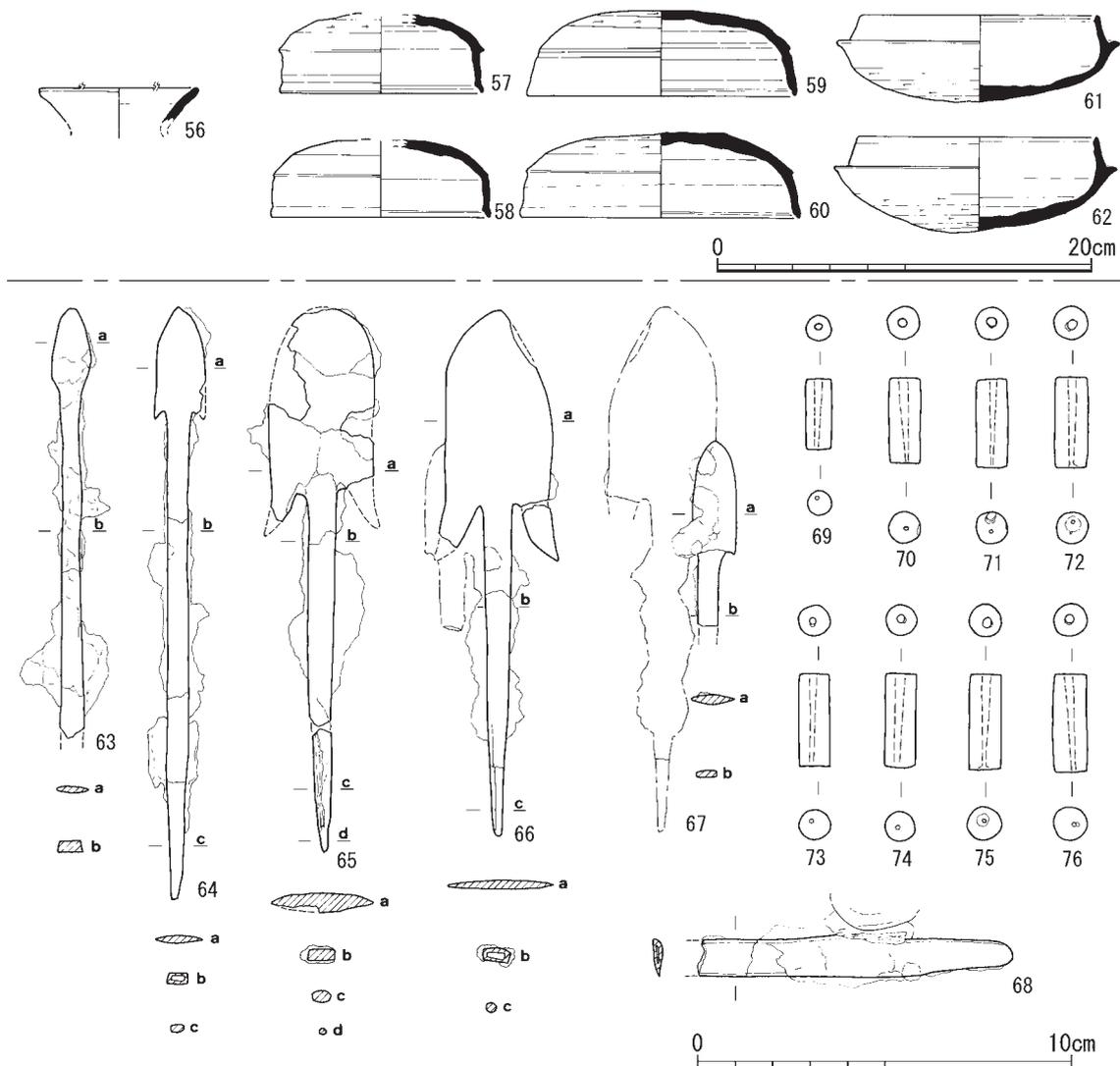
第20図 古墳1石室実測図

た。その他石室の埋土から須恵器の杯身が1点と土師器甕の口縁部片が出土した。石材の抜き取り痕からも土師器の甕(第21図56・図版第22a))が出土している。

②出土遺物(第21図・図版第20)

56は土師器甕の口縁部である。石室の埋土から出土した。57～62は須恵器である。58と60は石室から、他は墳丘から出土した。57～60は杯蓋である。57は口径10.8cm、器高4.25cm、58は口径10.6cm、器高4.2cmである。いずれも色調は濃灰色で、端部の段が明瞭である。57は口縁部と体部との境の段が明瞭で古い様相を持つ。TK47型式と

併行か。59は口径14.3cm、器高4.6cm、60は口径14.8cm、器高4.65cmと大型である。口縁部はやや外側に開き、口縁端部の処理や体部との境の陵が甘くなっている。MT15～TK10型式と併行するものである。61・62は杯身である。61は口径12.6cm、器高4.7cm、62は口径12.8cm、器高5.2cmである。いずれも口縁端部の段が甘くなっており、底部内面には同心円のタタキ痕が見られる。MT15型式と併行するものである。63～67は鉄鏃である。63・64・67は尖根系の鏃で64はほぼ完形である。63は刃部長2.1cm、刃部最大幅1.1cm、残存長10.4cm、64は刃部長3.0cm、刃部最大幅1.3cm、長さ16.0cm、67は刃部長3.0cm、刃部最大幅1.2cm、残存長5.0cmである。65・66は平根系の鏃で、ほぼ完形である。65は刃部残存長5.8cm、刃部最大幅2.8cm、長さ14.7cmである。66は刃部長6.8cm、刃部最大幅2.9cm、長さ14.2cmである。68は刀子である。身幅1.0cm、残存長6.0cm、茎部長2.4cm、茎部幅0.7～0.8cmである。69～76は碧玉製管玉である。直径0.7～0.95cm、長さ1.9～2.65cmの太いもので、大きく3つのサイズに分けられるようである。穴は片面穿孔で、穿孔の入口の径は2mm、出口の径は1mmである。72や75には出口側に穿孔時の剝離が見られる。これらの遺物の時期は、6世紀前半と考えられる。



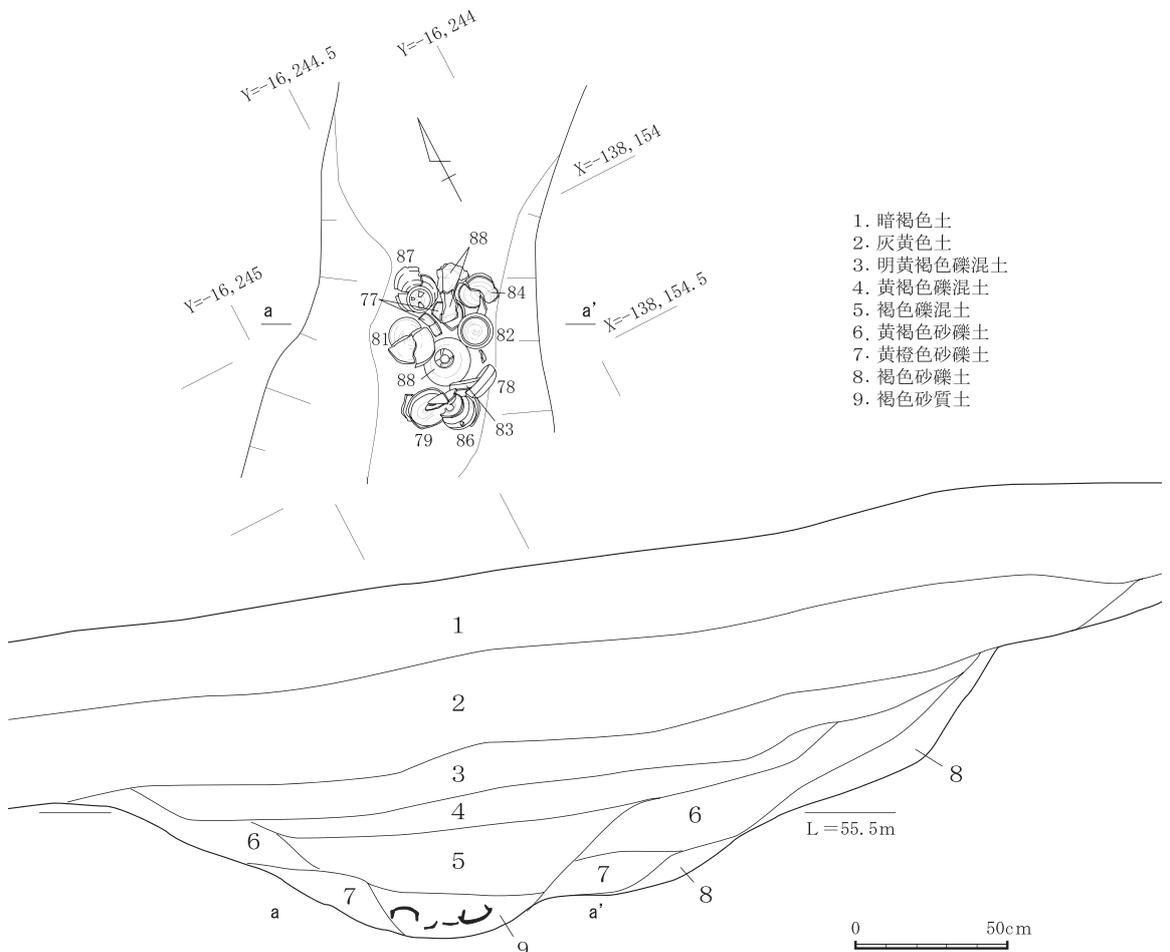
第21図 第4次調査出土遺物実測図(3) 古墳1

(2)古墳2(第22・23図・図版12・15・16) 墳丘は削平により多くが失われているが、周溝の一部が残っており、直径13mの円墳に復元できる。周溝は幅2m、深さ0.6mである。溝底中央付近で須恵器がまとまって出土した。埴輪や葺石は出土していない。

①埋葬施設 埋葬施設は1基で、南西に開口する横穴式石室である。主軸は北から20°東に傾く。玄室は幅0.8m、長さ2.2m分を検出した。床面には子供の拳大の礫の隙間を埋めるように親指大の礫が敷かれている。墓壙および礫床の規模から古墳1の石室とほぼ同規模に復元できる。石材はすべて抜き取られており、構造は不明である。開口部付近に基底石と思われる石材が数点並ぶが詳細は不明である。石室床面からの出土遺物はなく、埋土から須恵器の甕片が1点出土したのみである。また、奥壁近くの床面で骨片がわずかに出土した。

②出土遺物(第24図・図版第21・22)

77～88は須恵器で、すべて周溝から出土した。77～81は杯蓋である。77は口径10.9cm、器高4.35cm、78は口径11.7cm、器高4.4cm、79は口径11.9cm、器高4.1cm、80は口径12.4cm、器高4.15cmである。口縁部は直線的で、口縁部と体部の境の陵や口縁端部の段は明瞭である。81は口径14.1cm、器高4.1cmと他よりも一回り大きい。口縁部は直線的で、体部との境の陵や端部の段は明瞭である。82～85は杯身である。82は口径9.7cm、器高4.7cm、83は口径10.1cm、器高4.65cm、84は口径10.2cm、器高4.7cmである。82・83は口縁端部の段が明瞭であるが、84には段

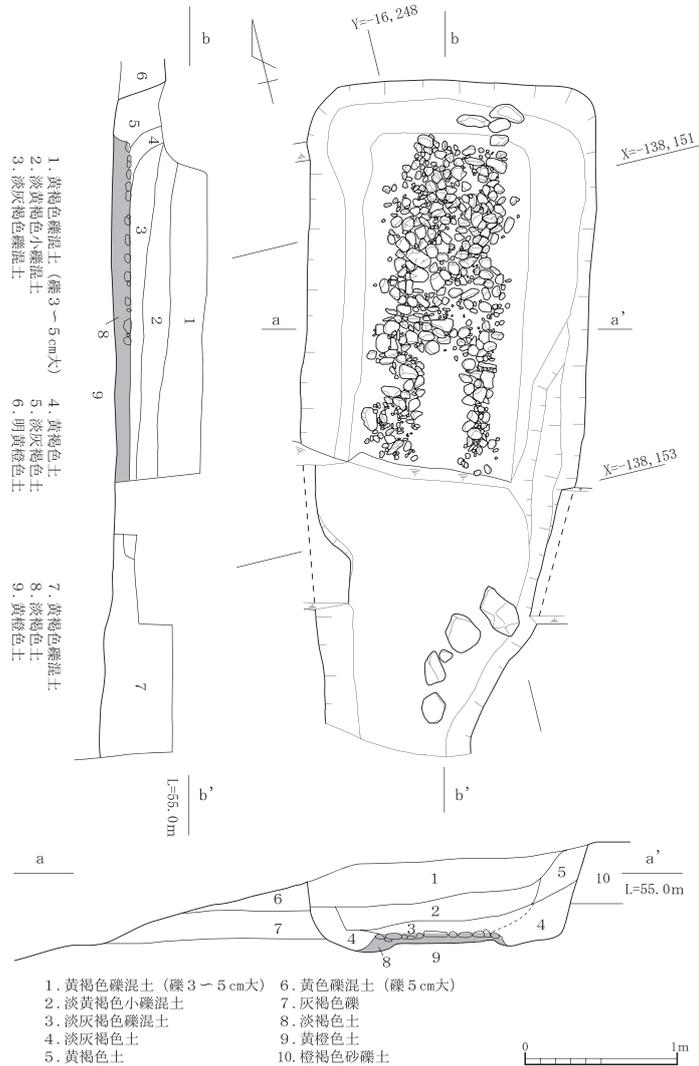


第22図 古墳2周溝遺物出土状況実測図

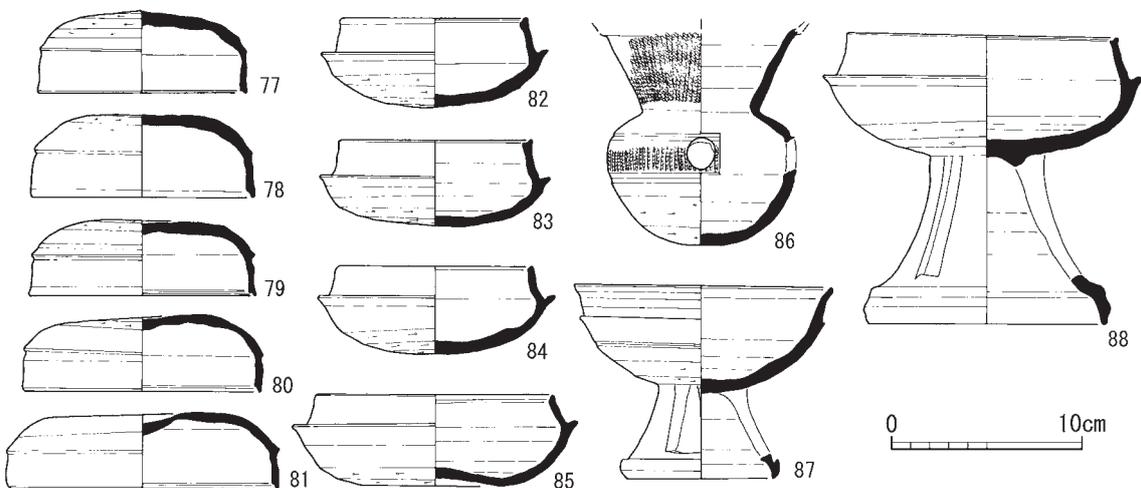
が認められない。85は口径12.35cm、器高4.9cmで、他の身より一回り大きい。口縁端部の段は不明瞭となっている。86は甗である。口縁部外面には細かい波状文を、体部には刺突文を施す。口縁端部は欠損しており、打ち欠いて使用していたようである。色調は外面が濃灰色で、断面は紫灰色である。MT15型式併行期のものである。87は短脚の高杯である。口径13.5cm、器高10.2cmである。脚部には3方向に透かしが施される。88は有蓋高杯である。口径14.2cm、器高15.4cmである。脚部には3方向の透かしが施される。蓋は出土しなかった。

(3)小結

第4次調査では、新たに古墳2基の存在が明らかになった。古墳の築造時期は古墳1が6世紀前半、古墳2が6世紀初頭であると考えられる。調査地の南東約500mにある後期の前方後円墳上狛天竺堂古墳では5世紀後半に横穴式石室が導入されており、南山城ではもっとも古いものと考えられている。今回確認した石室は、それに続く



第23図 古墳2石室実測図



第24図 第4次調査出土遺物実測図(4) 古墳2

時期のものであり、山城地域の横穴式石室導入過程を考える上で貴重な事例となる。

5. まとめ

椿井遺跡の第3・4次調査では、それぞれ大きな成果を得ることができた。

第3次調査では、これまで遺構が検出されていなかった飛鳥時代の溝や建物が見つかり、白鳳期に松尾廃寺が創建される契機となるような土地利用の状況が想定される。残念ながら奈良時代の遺物が出土しておらず、まだ推測の域は出ない。

第4次調査では、新たに古墳が2基見つかり、他にも丘陵の尾根筋に後期古墳が分布する可能性が想定される。周辺古墳群でも横穴式石室が確認されており、この地域では城陽の久津川車塚古墳群と異なり早くから新しい墓制である横穴式石室を積極的に採用した地域であることがよりいっそう明らかとなった。特に古墳1の石室は、小型で、羨道部と玄室とに段差がある竪穴系横口式石室であり、導入期の石室の一つのバリエーションであると考えられることから、南山城地域の導入期の石室の様相を考える上で貴重な資料といえよう。南山城の竪穴系横口式石室については、木津川市相楽の音乗谷古墳や同吐師の白山古墳・坊谷古墳、同加茂町の草が山1号墳、和束町の坂尻1・2号墳等の例があり、相楽郡に分布が限られているようである。平良泰久氏は、竪穴系横口式石室の分布と渡来系氏族の居住という点で相楽郡と近江の湖東地域との共通点を指摘し、和束道を通して竪穴系横口式石室が伝播したのではないかと考えている。

今年度、椿井遺跡の南西に位置する上狛北遺跡の発掘調査で、これまで木津川右岸では見つけていなかった古墳時代中期から後期の集落が見つかった。今回見つかった古墳の造墓集団の集落である可能性がある。また、碧玉製管玉は、製作技法から出雲の忌部による製作の可能性が高いと考えられ、被葬者像を考える上で興味深い資料である。

また、今回見つかった石器には1点ではあるが旧石器時代のナイフ形石器が含まれていた。南山城における旧石器の出土点数は少なく、木津川市内では本例で2例目である。縄文時代の石器についても遺構に伴うものではないが、当時の人々の生活の一端が窺える貴重な資料といえる。

(松尾史子)

参考文献

高野陽子・柴暁彦「椿井遺跡第1・2次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第117冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2006

上田真一郎「Ⅰ 椿井天上山古墳第1次調査Ⅱ 松尾廃寺第1次調査山城町内遺跡発掘調査概報Ⅸ」(『京都府山城町埋蔵文化財報告書』第22集 山城町教育委員会)2000

島軒満「椿井天上山古墳-第2次調査-山城町内遺跡発掘調査概報Ⅹ」(『京都府山城町埋蔵文化財報告書』第26集 山城町教育委員会)2001

『京都府登録有形文化財(建造物)松尾神社表門修理工事報告書』松尾神社 1997

中島正「車谷古墳群」(『京都府山城町埋蔵文化財報告書』第31集 山城町教育委員会)2003

鈴木重治「山城出土の旧石器」(『考古学ジャーナル』167 ニューサイエンス社)

平良泰久「精華の古墳時代」(『精華町史本文篇』精華町)1996

内田真雄「山城の横穴式石室」(『研究集会近畿の横穴式石室』横穴式石室研究会)2007

圖 版



(1) A・B地区全景(北東から)



(2) A・B地区全景(上が南東)



(1) C・D地区全景(北西から)



(2) C・D地区全景(上が北西)



(1) A地区溝S D01完掘状況(北西から)



(2) A地区溝S D01完掘状況(東から)



(1) A地区溝S D01自然木出土状況
(東から)



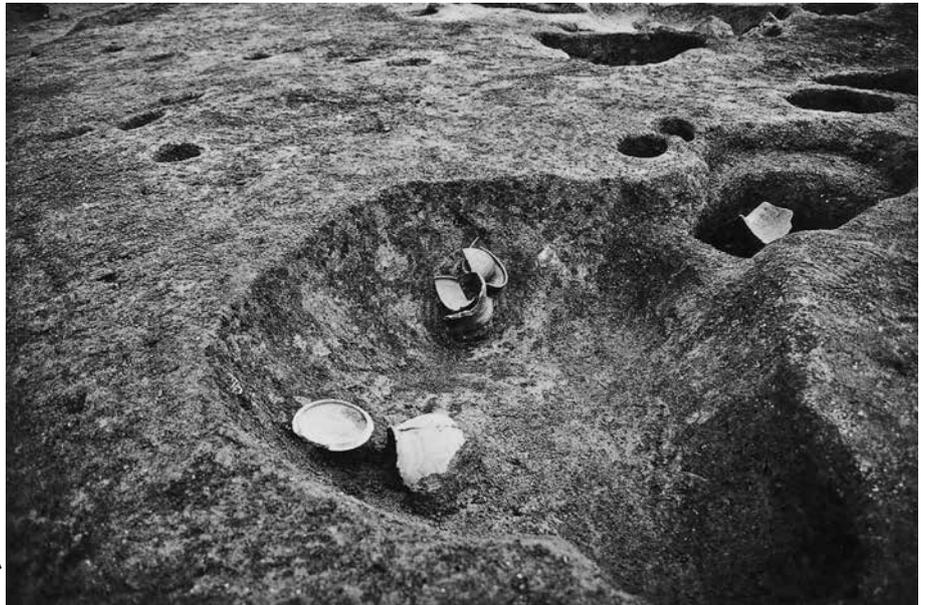
(2) A地区土坑S X02完掘状況
(南から)



(3) A地区溝S D03完掘状況
(北東から)



(1) A地区溝S D03南壁土層断面
(北東から)



(2) A地区土坑S K15遺物出土状況
(北から)



(3) A地区土坑S K15完掘状況
(北東から)



(1) A地区ピットS P16遺物
出土状況(南西から)



(2) A地区ピットS P16完掘状況
(北西から)



(3) A地区南西部検出遺構完掘状況
(南西から)



(1) B地区東壁土層断面(北西から)



(2) B地区溝S D01a土層断面
(北西から)



(3) B地区溝S D01b土層断面
(北西から)



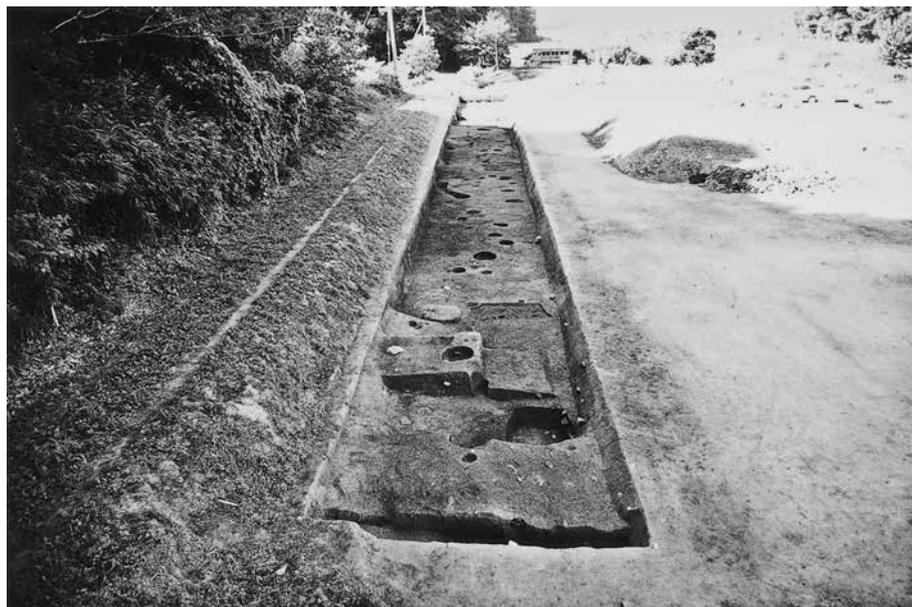
(1) B地区土坑S X07・S K08
完掘状況(北東から)



(2) B地区土坑S X07・S K08
完掘状況(北西から)



(3) B地区土坑S K11完掘状況
(北西から)



(1) C地区全景(北東から)



(2) C地区全景(南西から)



(3) C地区南壁土層断面(北東から)



(1) C地区溝SD03完掘状況
(北西から)



(2) D地区全景(北東から)



(3) D地区全景(南西から)



(1) D地区南壁土層断面(北東から)



(2) D地区土坑S K 01完掘状況
(南西から)



(3) D地区土坑S K 01遺物出土状況
(東から)



(1) D地区上層遺構完掘状況
(北西から)

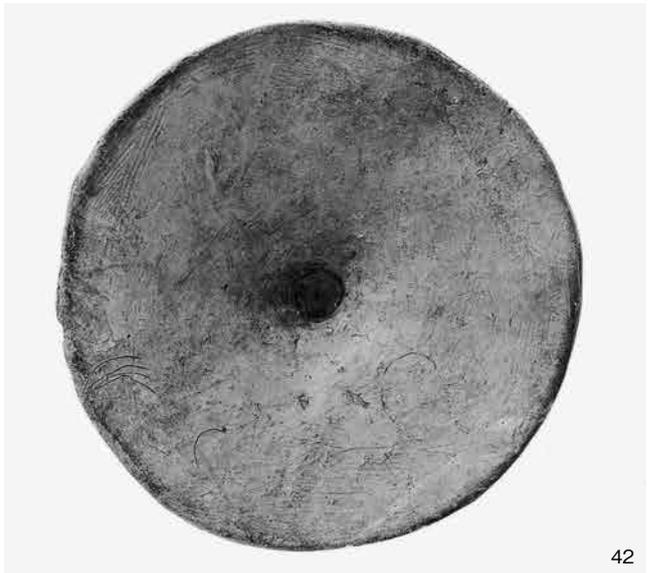
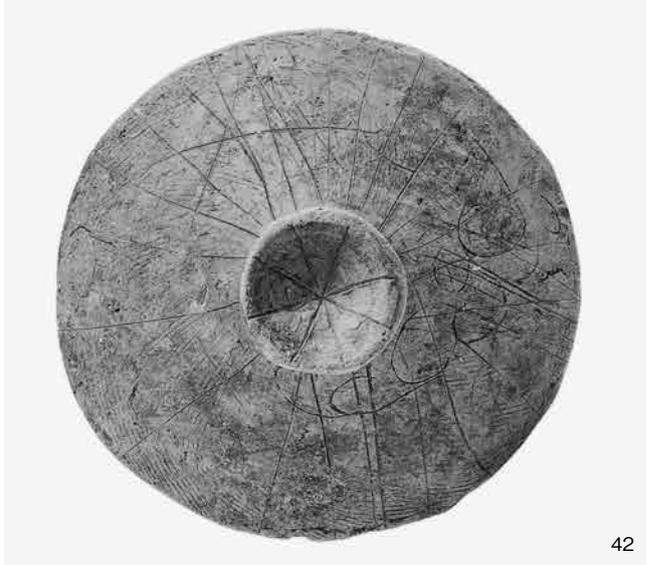


(2) D地区34号支線排水路地点全景
(北西から)



(3) D地区34号支線排水路地点
南壁土層断面(北東から)











151



217



154



218



212



219



216



228

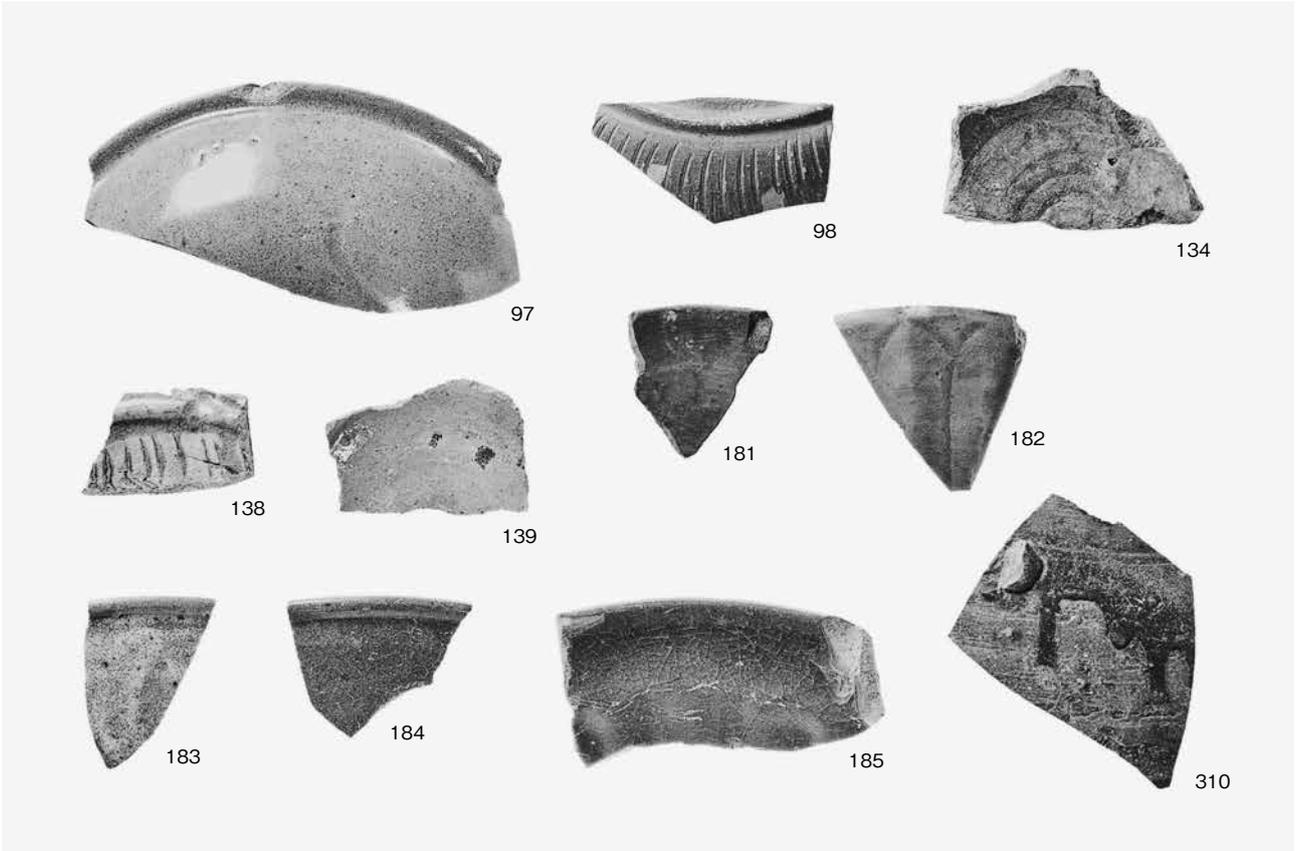




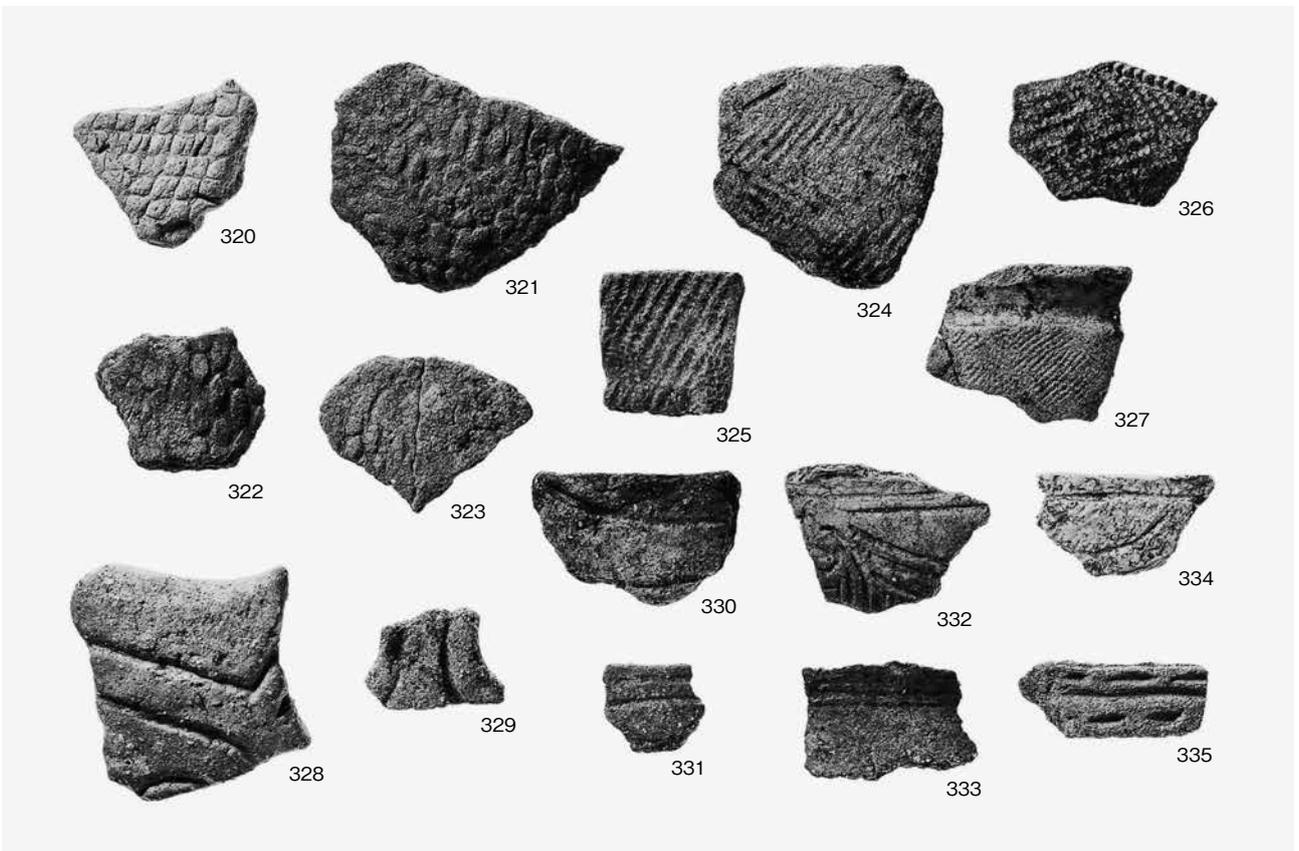
(1) 出土遺物 7



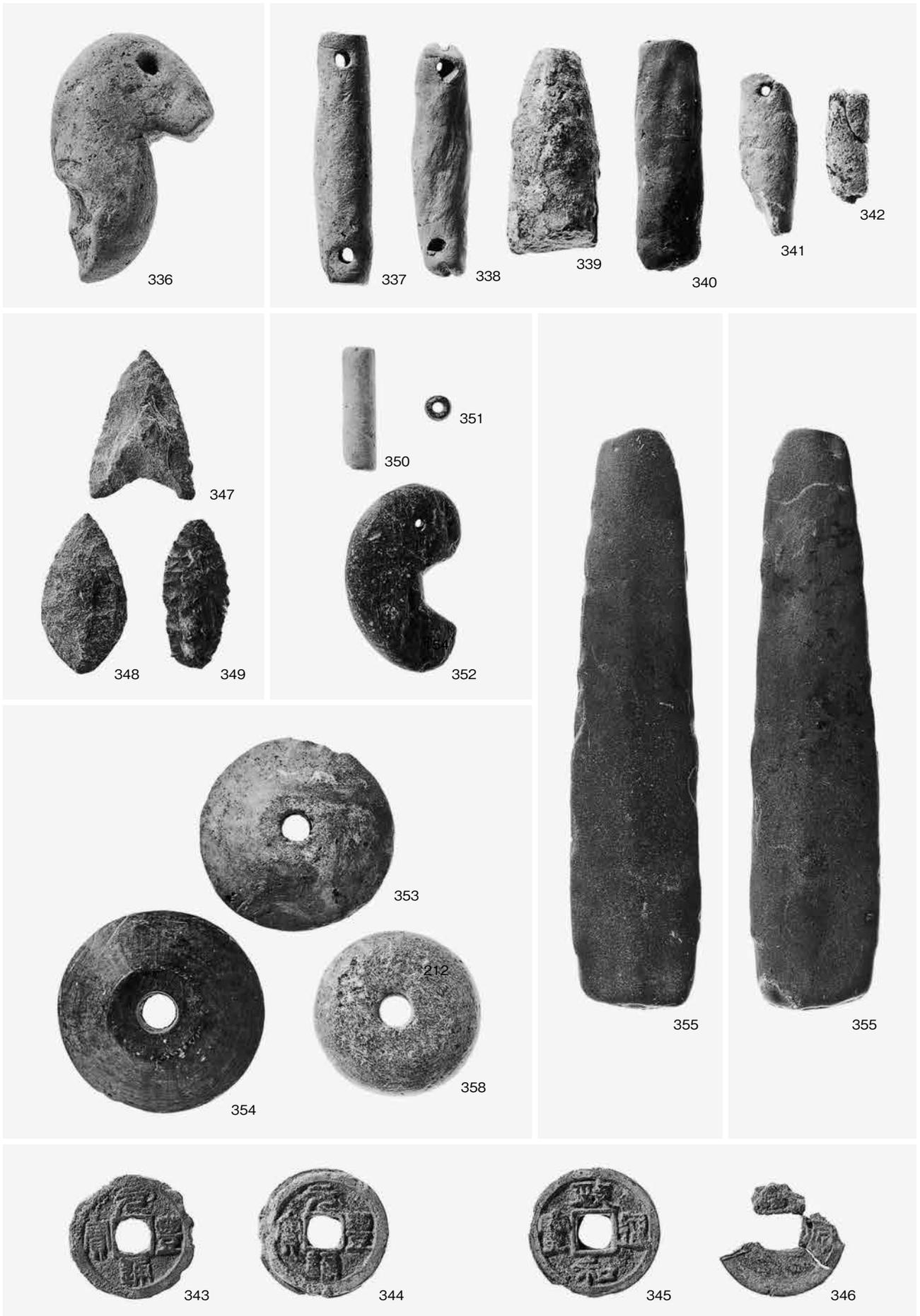
(2) 出土遺物 8



(1)出土遺物9

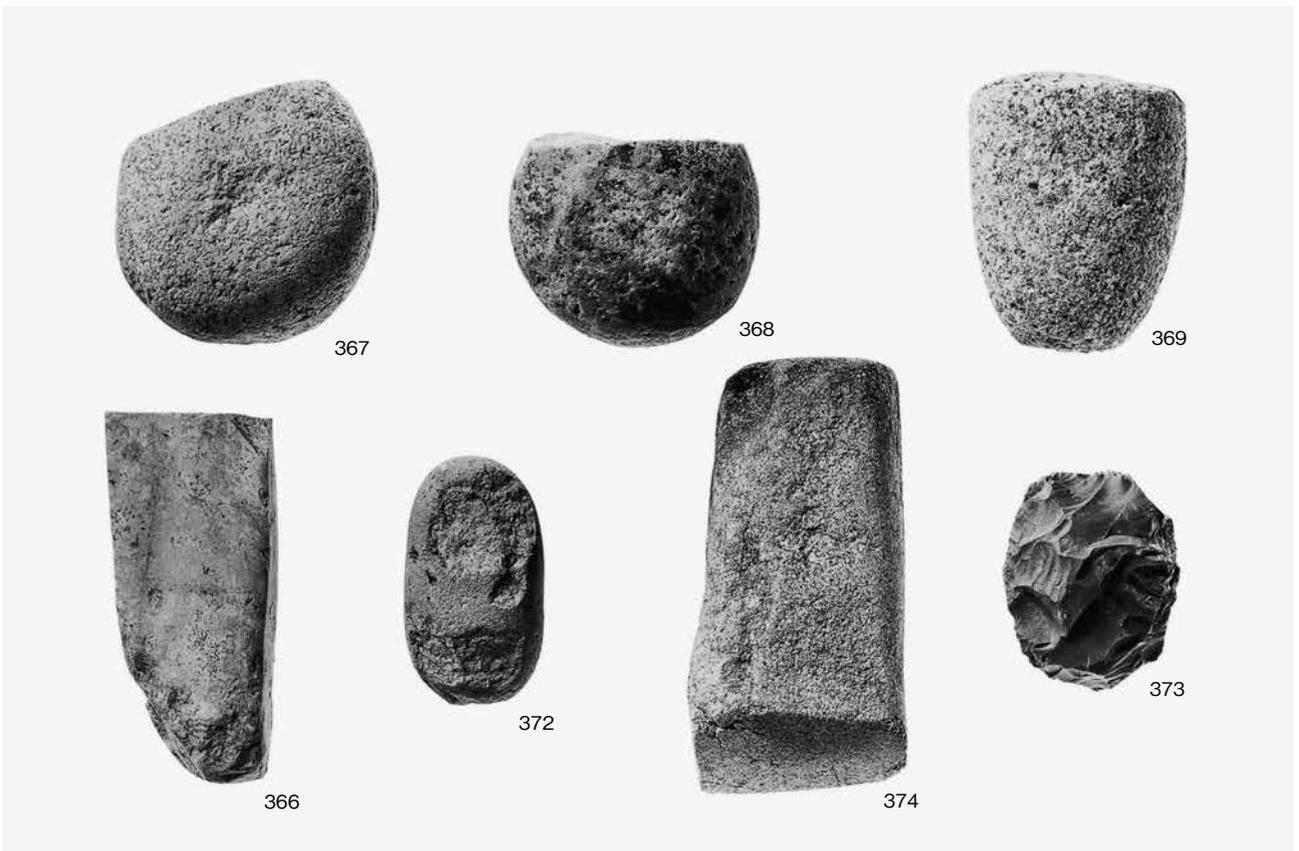


(2)出土遺物10





(1) 出土遺物12



(2) 出土遺物13



(1) 柿谷古墳・美濃山遺跡A地区調査前全景(西から)



(2) 柿谷古墳・美濃山遺跡A地区調査前全景(北西から)



(1) 柿谷古墳調査前全景(南西から)



(2) 柿谷古墳全景(西から)



(1) 柿谷古墳墳頂部石造物
(北東から)



(2) 柿谷古墳墳丘南断面(西から)



(3) 柿谷古墳墳丘北断面(東から)



柿谷古墳第 1 主体部(西から)



(1) 柿谷古墳第 1 主体部(北から)



(2) 柿谷古墳第 1 主体部西側遺物出土状況(東から)



(1) 柿谷古墳第2主体部(西から)



(2) 柿谷古墳主体部完掘状況(南西から)



(1) 柿谷古墳第3主体部(東から)



(2) 柿谷古墳第3主体部甕棺内部(東から)



(1) 柿谷古墳・美濃山遺跡A地区(北西から)



(2) 柿谷古墳・美濃山遺跡A地区(南西から)



(1) 柿谷古墳第1 主体部鉄製品出土
状況(南から)



(2) 柿谷古墳旧表土上土器出土状況
(東から)



(3) 柿谷古墳下層墳丘(西から)



(1) 柿谷古墳下層墳丘(南西から)



(2) 柿谷古墳下層墳丘(北西から)



(3) 美濃山遺跡B地区調査前全景
(北西から)



(1)美濃山遺跡B地区(北東から)



(2)美濃山遺跡B地区土壙S K 7
(北から)



(3)美濃山遺跡B地区溝S D17
(南西から)



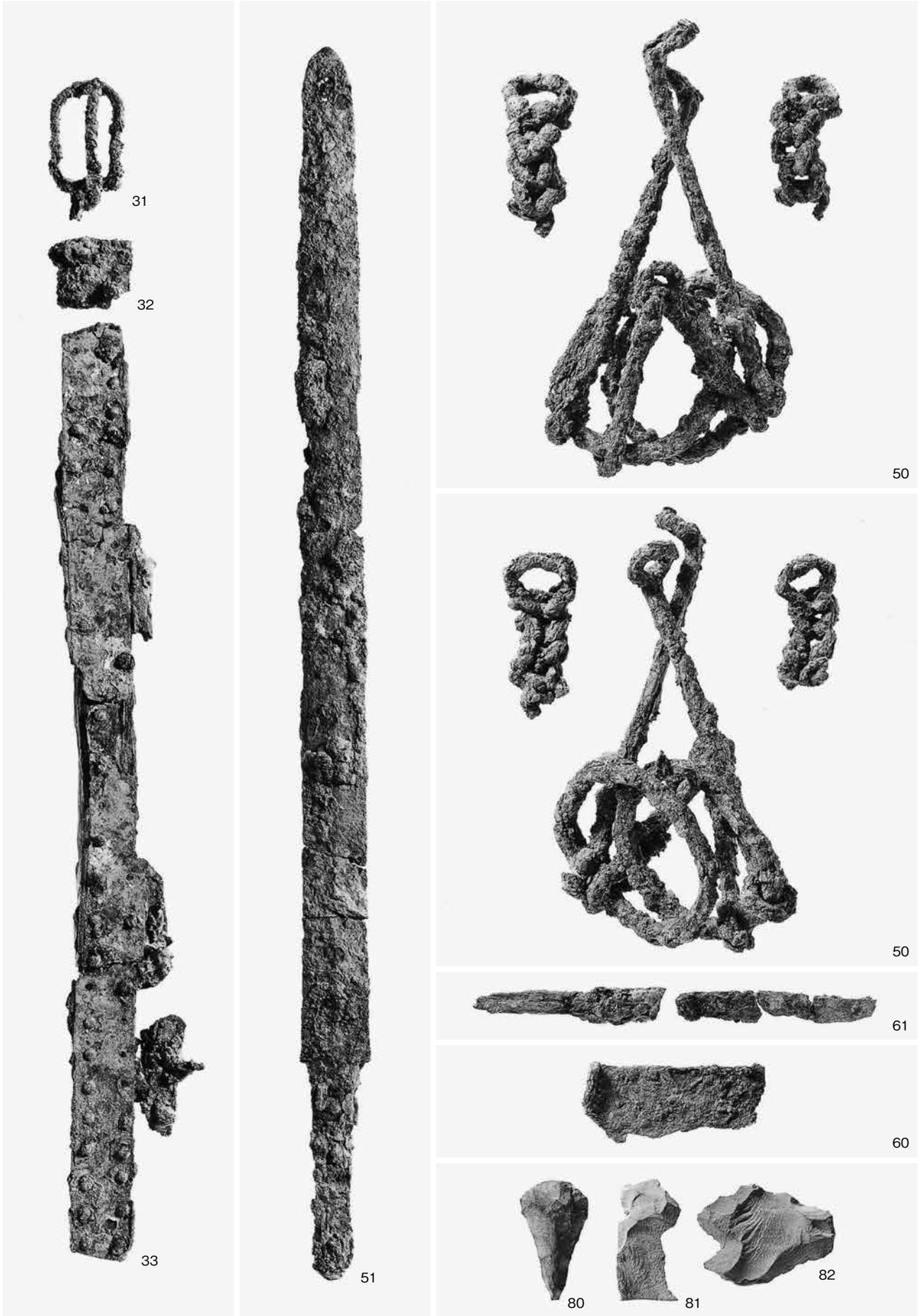
出土遺物 1 (第 1 主体部：土器)



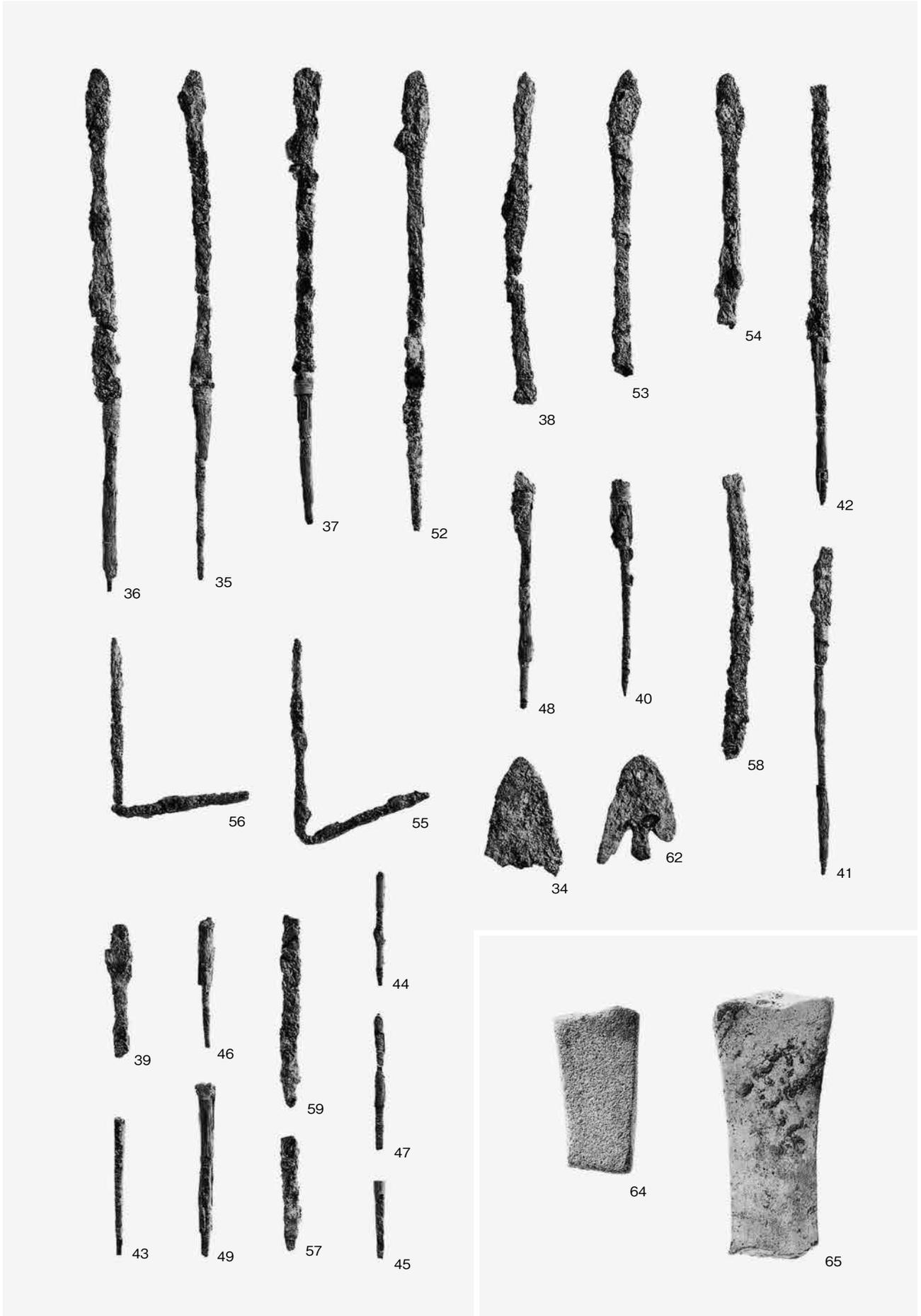
出土遺物 2 (第 1 主体部：土器)



出土遺物 3 (第 2・3 主体部、墳丘内：土器)



出土遺物 4 (鉄・石製品)



出土遺物 5 (鉄・石製品)



(1) 調査地全景(南から)



(2) 第1～3トレンチ全景(真上から：上が西)



(1) 第1トレンチ上層遺構全景
(東から)



(2) 第1トレンチ土層断面(東から)



(3) 第1トレンチ上層溝SD24
遺物出土状況



(1)第1トレンチ作業風景(東から)



(2)第2トレンチ上層遺構全景
(北から)



(3)第2トレンチ作業風景(北から)



(1) 第2トレンチ下層遺構全景
(北から)



(2) 第2トレンチ下層溝S D21
遺物出土状況(東から)



(3) 第2トレンチ下層溝S D21
遺物出土状況(東から)



(1) 第2トレンチ下層溝 S D21
土層断面(北から)



(2) 第3トレンチ上層遺構全景
(南東から)



(3) 第3トレンチ作業風景(南から)



(1) 第3トレンチ下層遺構全景
(西から)



(2) 第3トレンチ下層溝S D21
遺物出土状況



(3) 第4トレンチ調査前状況
(北から)



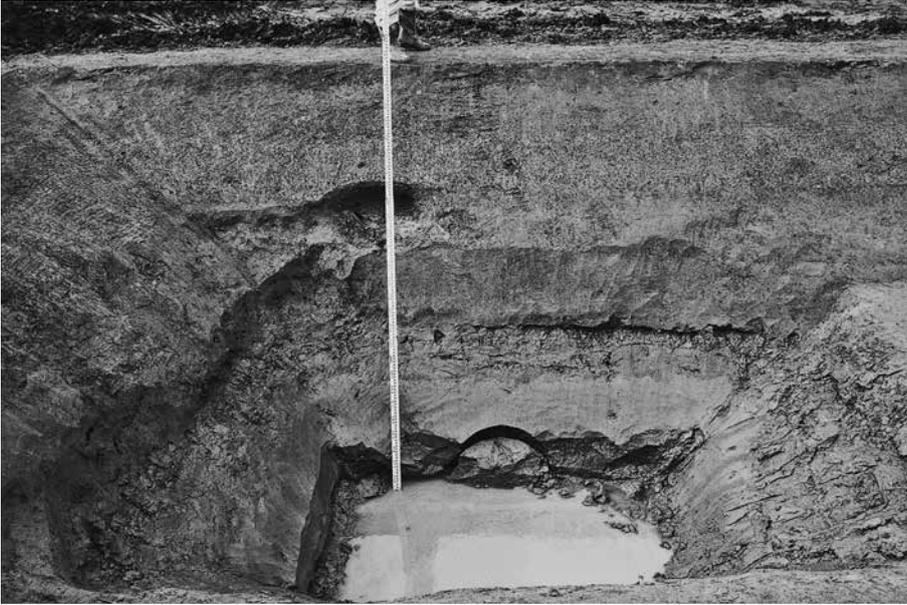
(1) 第4トレンチ全景(北から)



(2) 第4トレンチ西壁土層断面



(3) 第5トレンチ全景(北から)



(1) 第5トレンチ南端西壁土層断面
(東から)



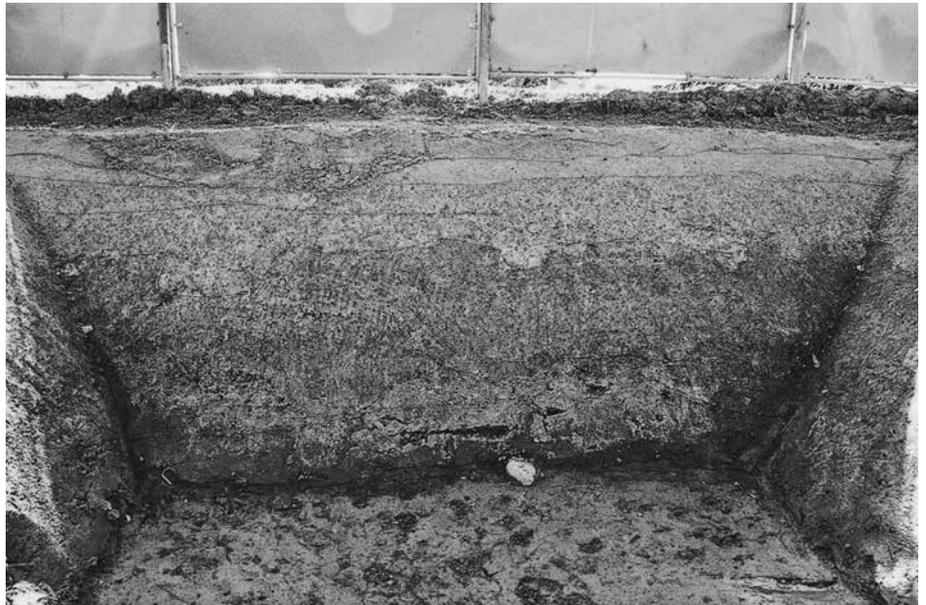
(2) 第6トレンチ重機掘削作業
(北東から)



(3) 第6トレンチ北壁土層断面
(南から)



(1) 第7トレンチ全景(北から)



(2) 第7トレンチ南壁土層断面
(北から)



(3) 第8トレンチ全景(南から)



(1) 第8トレンチ断ち割り作業
(南西から)



(2) 第9トレンチ全景(南から)



(3) 第9トレンチ北壁土層断面
(南から)



(1) 第9トレンチ作業風景(西から)



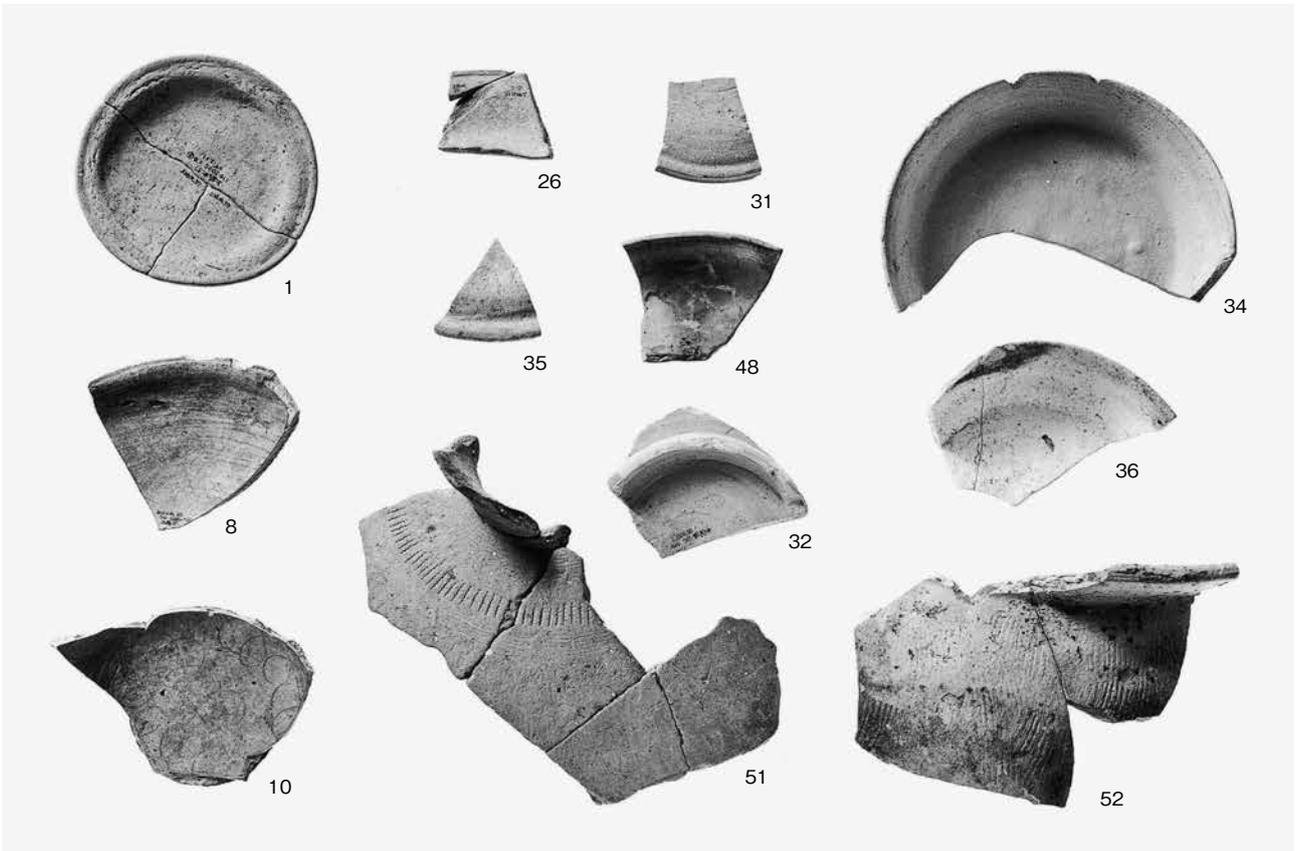
(2) 第10トレンチ全景(南から)



(3) 第10トレンチ北土層断面
(南から)



(1)出土遺物1 (S D21出土土器)



(2)出土遺物2



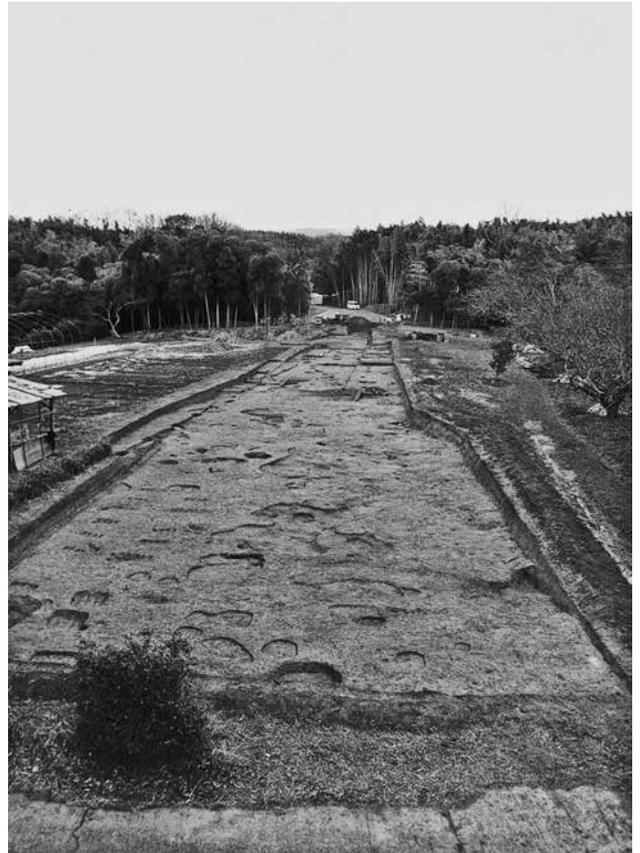
調査地近景(北東から)



(1) 調査地近景(西から：奥は松尾神社)



(2) 1 トレンチ全景(南から)



(3) 2 トレンチ全景(南から)



(1) 2トレンチ中央部(上空から)



(2) 掘立柱建物跡S B01・02(南東から)



(1) 溝 S D 49 全景 (東から)



(2) 溝 S D 49 完掘状況 (東から)



(3) 溝 S D 49 断面 1 (北から)



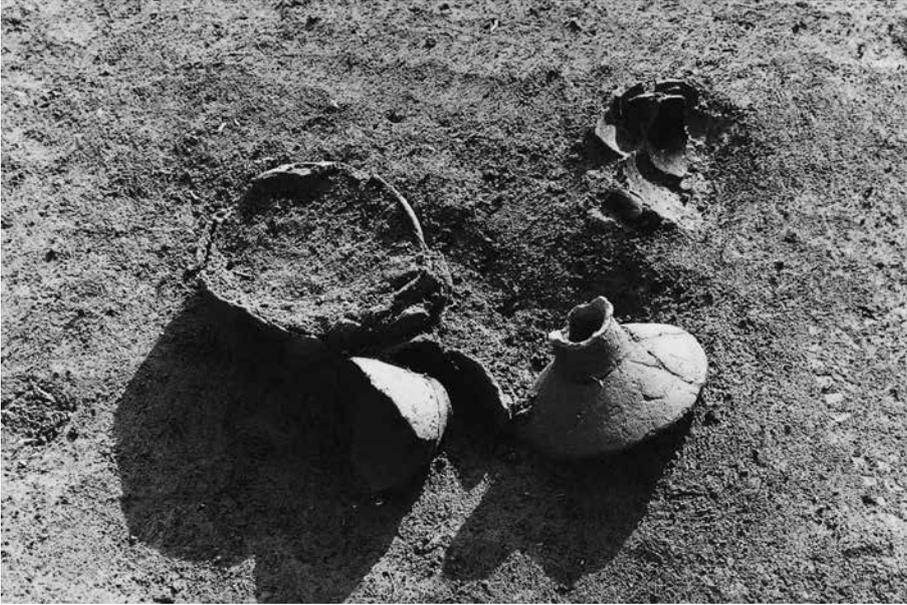
(4) 溝 S D 49 断面 2 (北から)



(1) 炉跡 S X 43 上層柱穴群 (北東から)



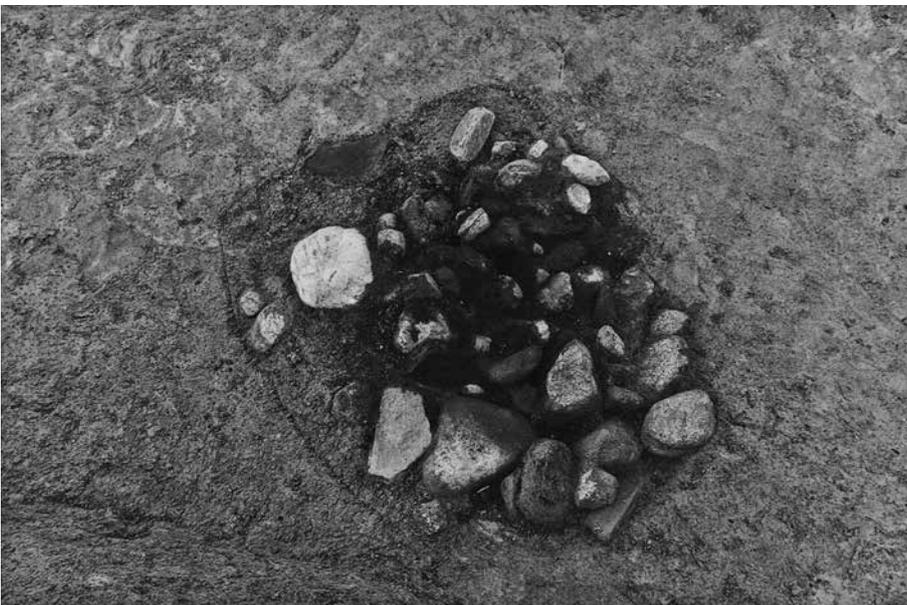
(2) 炉跡 S X 43 完掘状況 (南東から)



(1) 炉跡 S X 43上層遺物出土状況
(北西から)



(2) 炉跡 S X 43(北から)



(3) 土坑 S K 46(北東から)



(1) 3トレンチ全景(北から)



(2) 溝S D18全景(北東から)



(1) 調査地遠景(北から)



(2) 調査地遠景(南から)



(1) 1 トレンチ全景(北から)



(2) 方形周溝墓状遺構 S X49
検出状況(南から)



(3) 流路 S R76全景(東から)



(1) 土坑 S K53遺物出土状況
(北東から)



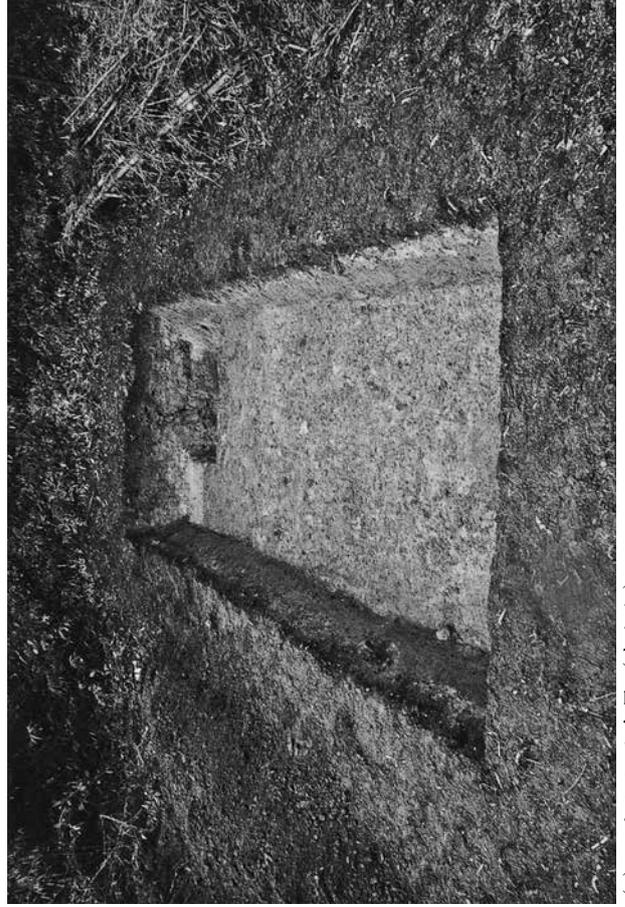
(2) 土坑 S K55遺物出土状況
(西から)



(3) 溝 S D80遺物出土状況
(南東から)



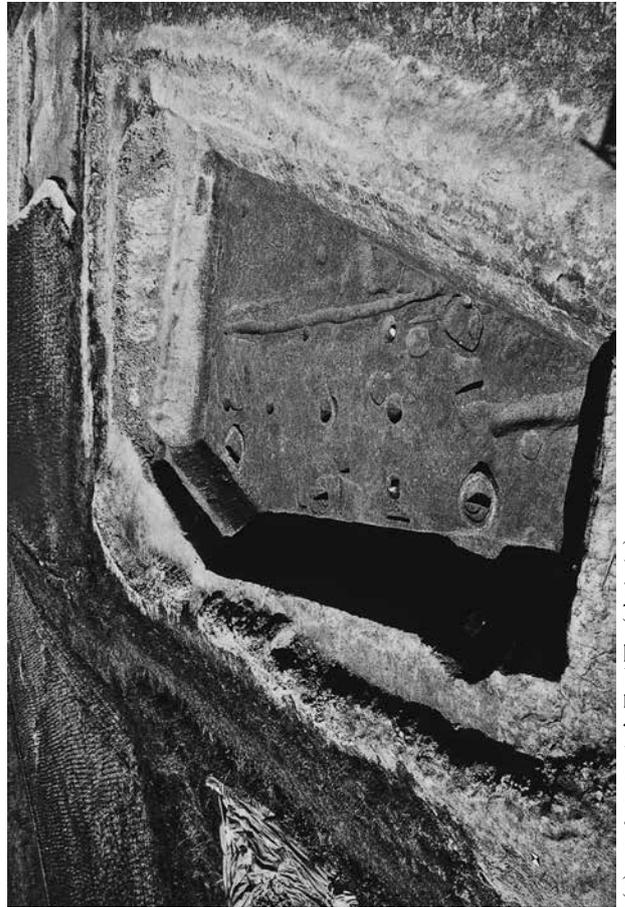
(3) 3トレンチ全景 (北から)



(4) 4トレンチ全景 (南から)



(1) 2トレンチ全景上層 (南から)



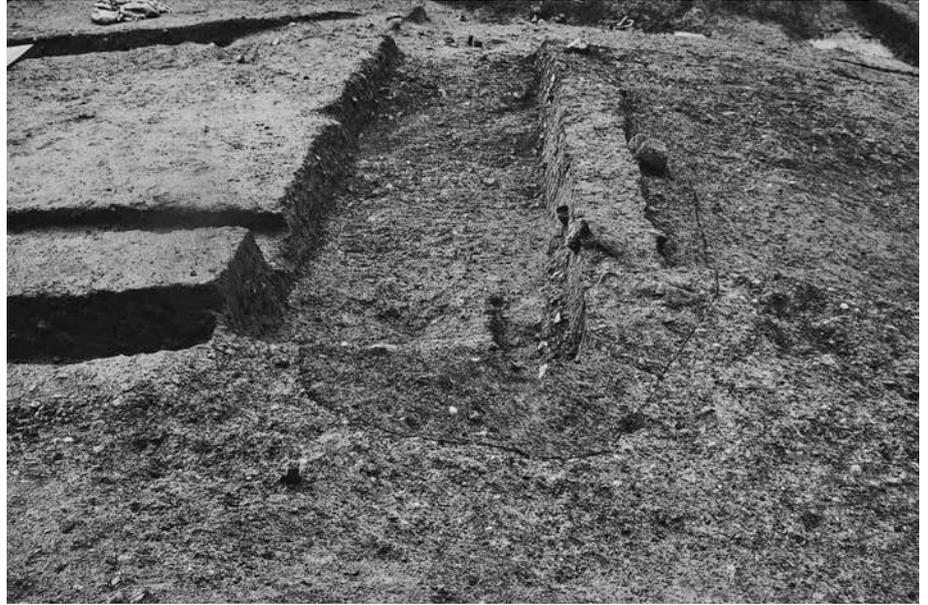
(2) 2トレンチ全景下層 (南から)



(1) 5トレンチ全景(西から)



(2) 古墳1全景(西から)



(1)古墳1 石室検出状況(南東から)



(2)古墳1 石室全景(南東から)



(3)古墳1 石室完掘状況(南東から)



(1) 古墳1 鉄鍬出土状況(南から)



(3) 古墳1 刀子出土状況(南から)



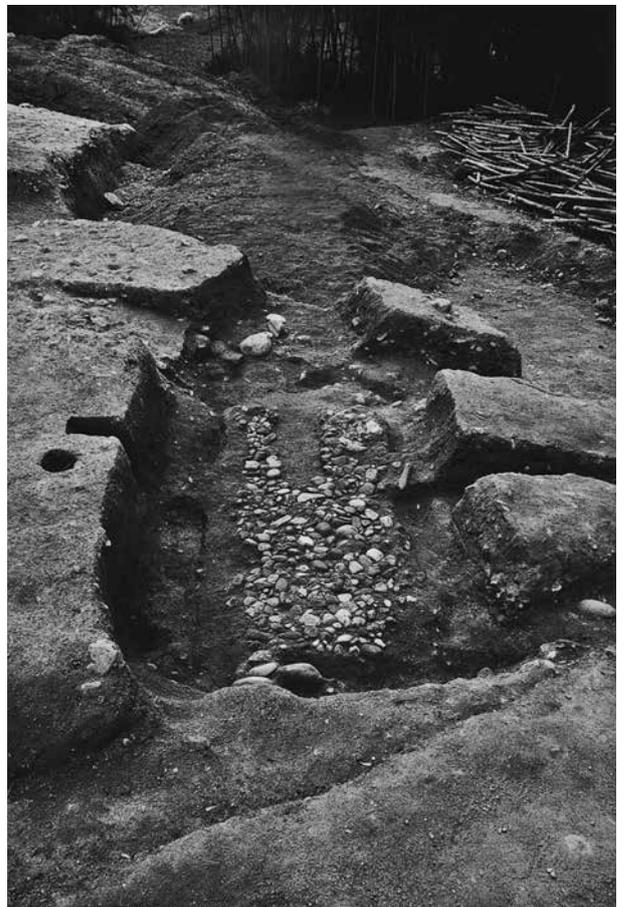
(2) 古墳1 須恵器出土状況(西から)



(1) 古墳2 全景(北東から)



(2) 古墳2 石室全景(南から)



(3) 古墳2 石室全景(北から)



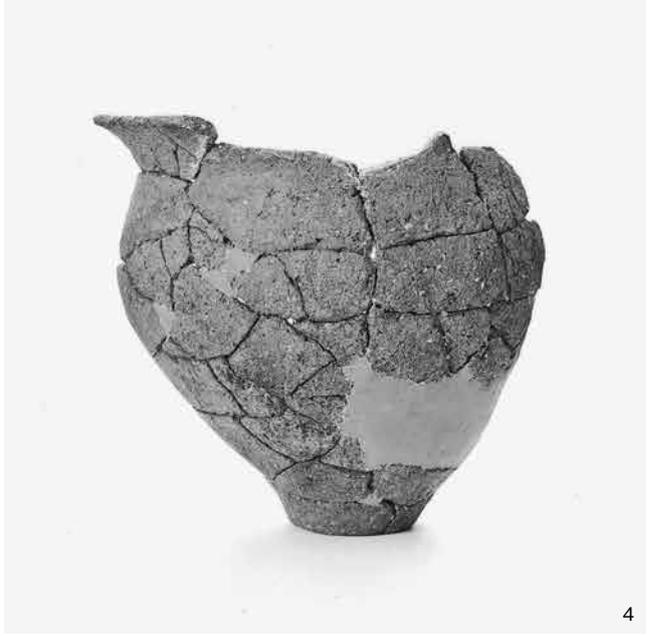
(1) 古墳2 石室完掘状況(北から)

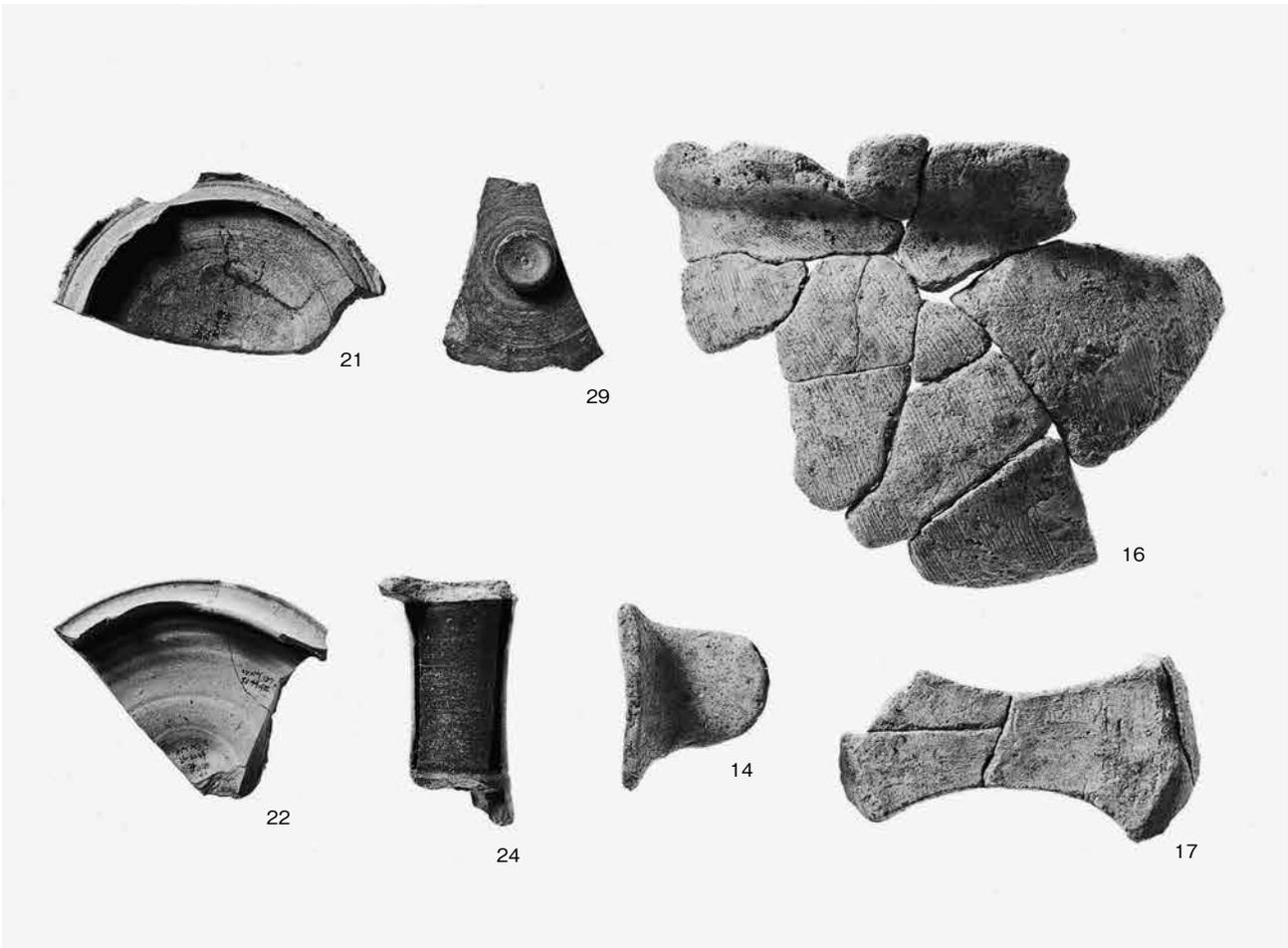


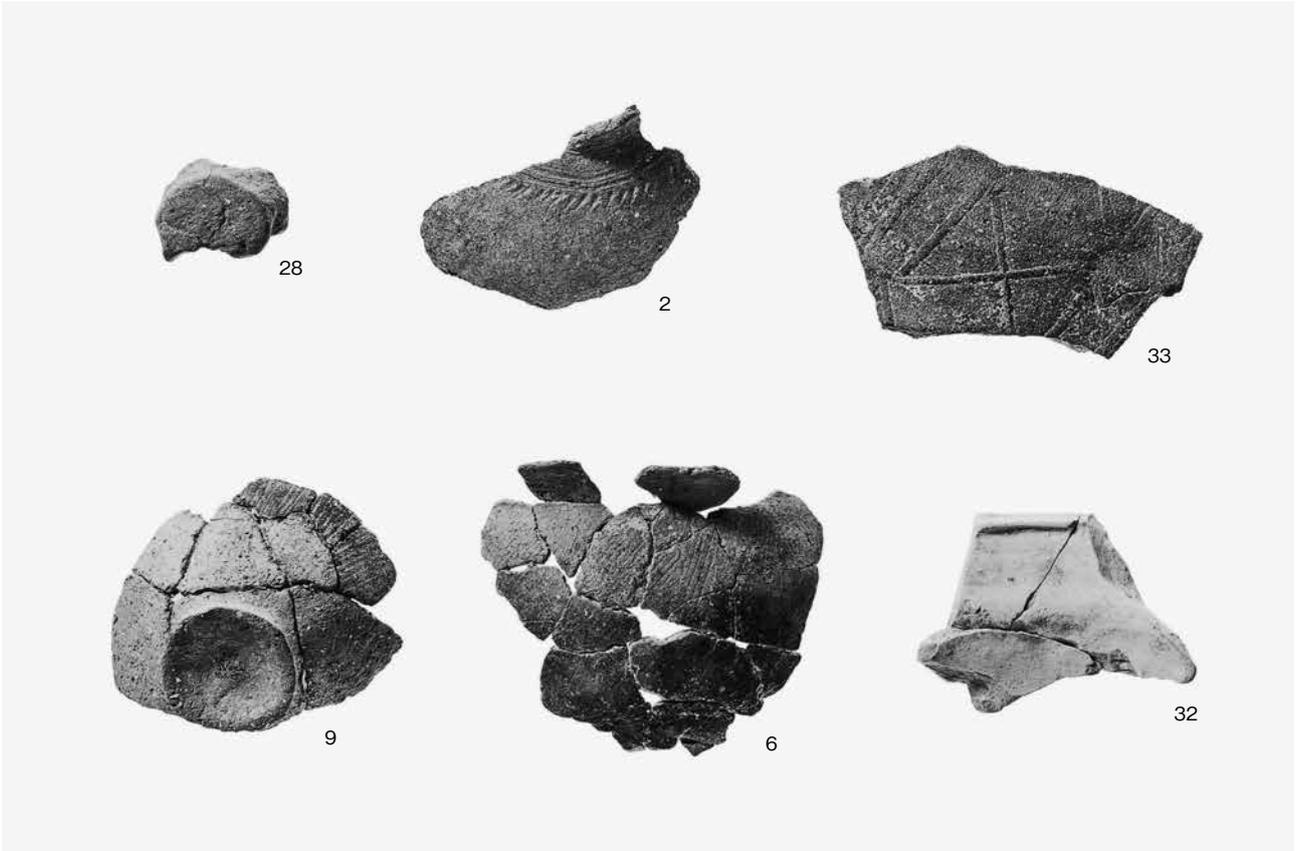
(2) 古墳2 周溝遺物出土状況
(南から)



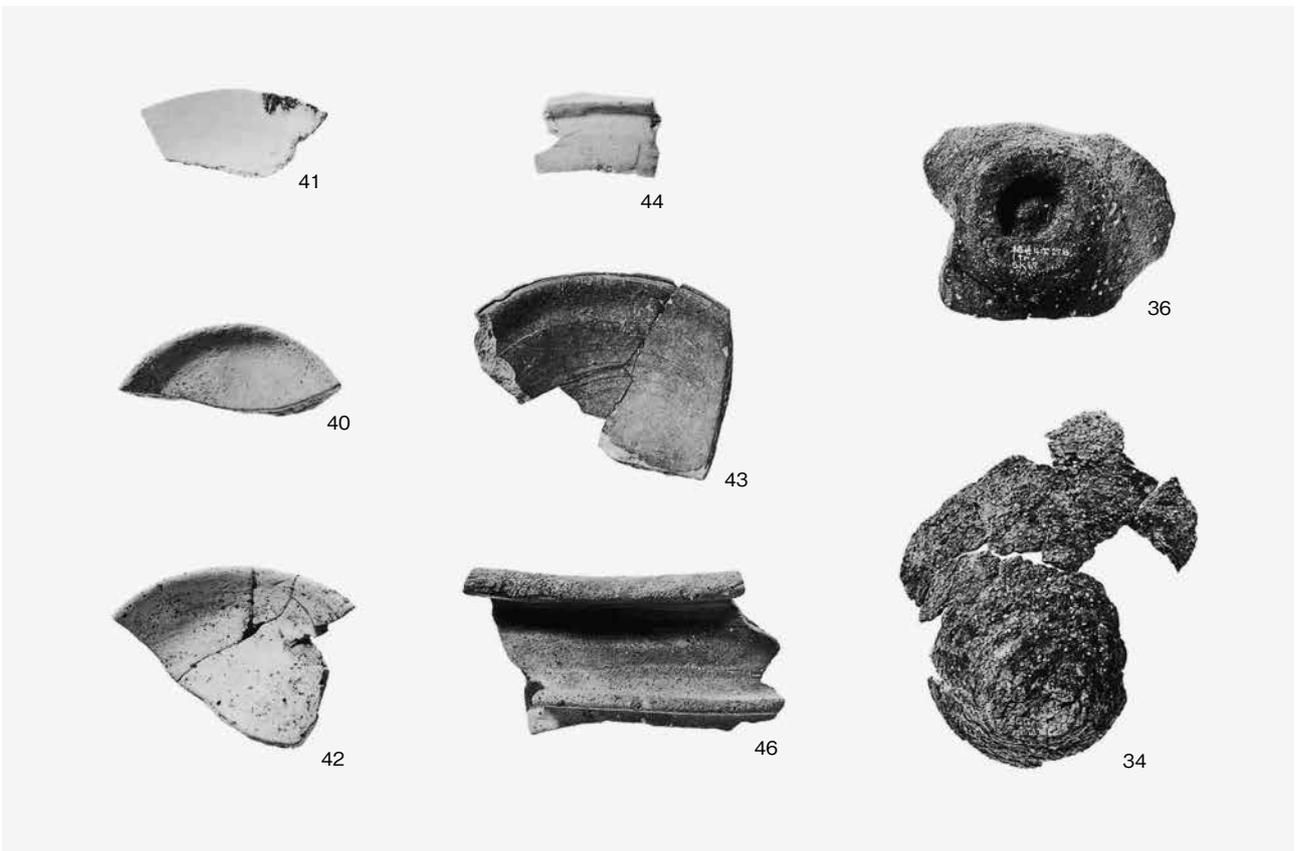
(3) 古墳2 周溝断面(南から)



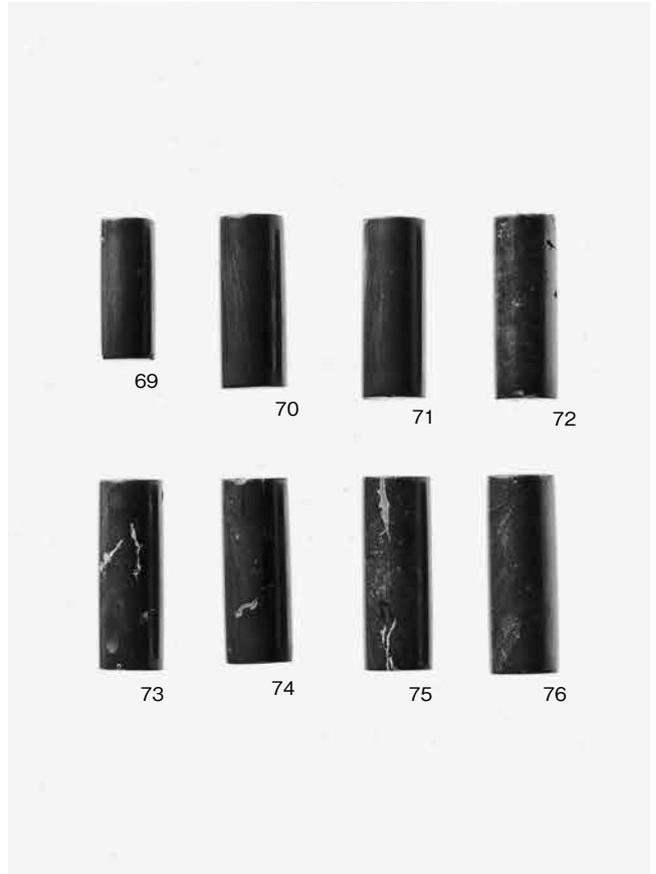
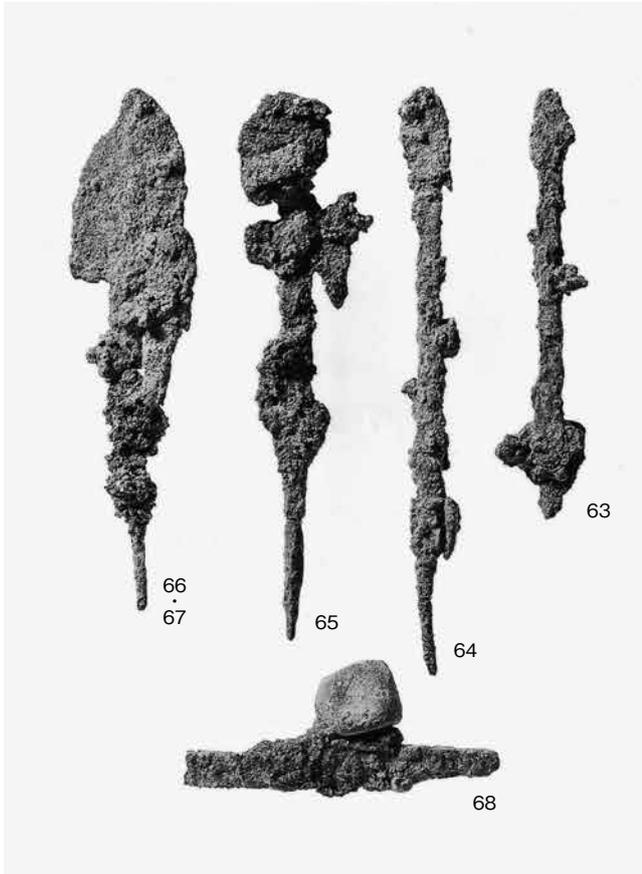




(1) 第3次調査出土遺物 3



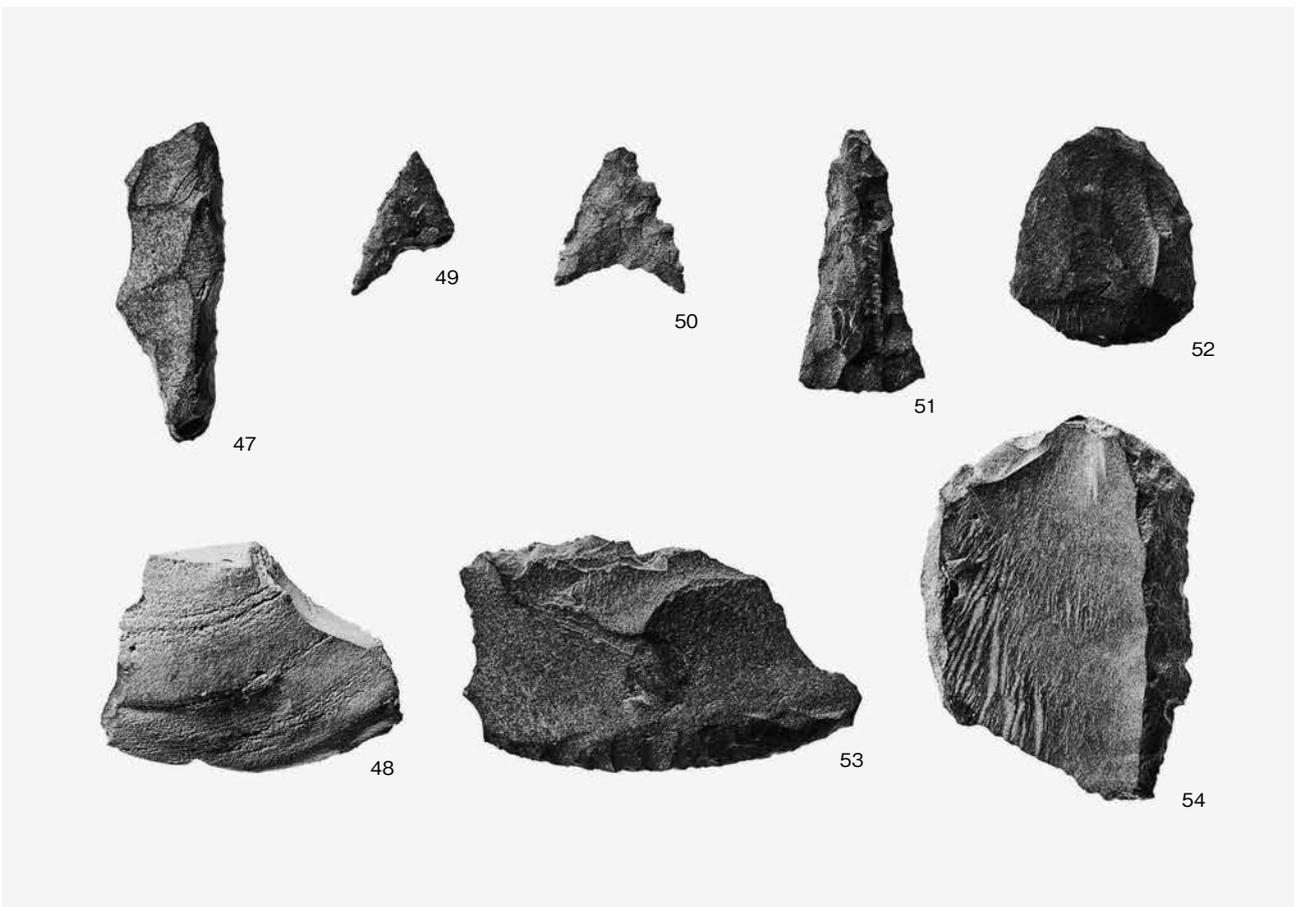
(2) 第4次調査出土遺物 1







(1) 第4次調査出土遺物 4



(2) 第4次調査出土遺物 5

報告書抄録

ふりがな	
書名	
副書名	
巻次	
シリーズ名	京都府遺跡調査報告集
シリーズ番号	第146冊
編著者名	
編集機関	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
所在地	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40-3 Tel. 075(933) 3877
発行年月日	西暦2011年3月30日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		m ²	
まつやまいせきだいよじ	きょうたんごし おおみやちょう もりもとちない							
松山遺跡第4次	京丹後市大宮町 森本地内	26212	6536	35° 35' 14"	135° 08' 02"	20100525 ～ 20101028	1,850	ほ場整備
かきたにこふん・みのやまいせき	やわたしうちさと かきたに、みの やまおおつか							
柿谷古墳・美濃山遺跡	八幡市内里柿谷、 美濃山大塚	26210	24・25	34° 50' 44"	135° 43' 29"	20100726 ～ 20110113	古墳1 400	道路建設
かみこまきたいせき だいいちじ・やなぎ だいいせき	きづがわしやま しろちょうかみ こまたからもと・ にしうらだいほ か、つばいやな ぎだ							
上粕北遺跡第1次・ 柳田遺跡	木津川市山城町 上粕宝本・西浦 代ほか、椿井柳 田	26214	41・84	34° 45' 13"	135° 48' 56"	20091027 ～ 20100225	1,000	道路建設
つばいいせきだいさん・よじ	きづがわしやま しろちょうつば いまつお・ごりよ うご							
椿井遺跡第3・4次	木津川市山城町 椿井松尾・御霊 後	26214	42	34° 45' 35"	135° 49' 09"	20091028 ～ 20100218 20100810 ～ 20101121	1,200 1,050	道路建設

備考：北緯・東経の値は世界測地系に基づく。

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
松山遺跡第4次	集落跡	縄文	溝	縄文土器・石鏃・石斧・石錘 弥生土器・石鏃・石剣・石斧・砥石	
	集落跡	弥生			
	集落跡	古墳	土坑・土石流	土師器・須恵器・仿製鏡・紡錘車・勾玉・管玉	
	集落跡	奈良中世	火葬墓	土師器・須恵器 土師器・須恵器・陶器・中国製陶磁器・鉄釘・中国銭	
柿谷古墳・美濃山遺跡	古墳	古墳	木棺墓・甕棺墓・土壙	須恵器・土師器・胡籙・鉄鏃・刀子・鉄剣・轡・鎌・砥石 須恵器・瓦 瓦器・石造五輪塔・中国製白磁	
	集落跡	平安	溝		
	集落跡	中世近世	溝		
上粕北遺跡第1次・柳田遺跡	集落跡	弥生	溝 柱穴・土坑・溝	弥生土器 土師器・須恵器 土師器・須恵器・瓦 土師器・瓦器・陶磁器・瓦質土器	
		古墳 奈良中世			
椿井遺跡第3・4次	集落跡	旧石器	流路 方形周溝墓・竪穴式住居跡か？・土坑・流路 横穴式石室 溝 柵列・土坑	ナイフ型石器 石鏃・剝片 弥生土器 須恵器・鉄器・装身具 土師器・須恵器 土師器・瓦器	
	集落跡	縄文			
	古墳	古墳			
	集落跡	飛鳥			
	集落跡	中世			

所収遺跡名	要約
松山遺跡第4次	検出した溝から、縄文時代から近世に到るまでの多量の遺物が出土し、縄文時代から中世まで、調査地の近隣で断続的に人々の生活が営まれていたことが判明した。また、遺物包含層からは、古墳時代前～中期にかけての遺物が中心に出土し、小型丸底壺・ミニチュア土器・高杯等の器種が多く、赤色顔料を塗布したもの、2次的に火を受けたものも散見されることから、祭祀的性格の濃い遺物群であると言える
柿谷古墳・美濃山遺跡	柿谷古墳は、6世紀中頃に築造された木棺を直葬する方墳であることが判明した。八幡市地域では古墳時代後期には横穴が数多く造られており、この地域の古墳時代を考える上で、重要な資料となる。美濃山遺跡では、古墳時代から中世にかけての遺構を確認した。遺構密度は疎らであるが、調査地点が集落遺跡の縁辺部であることも関係しているものと考えられる
上粕北遺跡第1次・柳田遺跡	調査の結果、古墳時代・奈良時代・中世の各時代の遺構・遺物を検出した。次年度以降に調査区を拡張して全面的な調査を実施することになった
椿井遺跡第3・4次	旧石器時代のナイフ型石器が1点出土し、木津川市内では2例目の事例となった。縄文時代の石器も出土し、当地域の歴史を知るための貴重な資料である。また地表面では観察できない古墳が2基見つかかり、丘陵上に後期古墳が分布する可能性がある。古墳1の石室は、羨道部と玄室とに段差がある竪穴系横口式石室で、導入期の石室の一つと考えられることから、南山城地域の導入期の石室の様相を考える資料となる。飛鳥時代の溝や建物は、白鳳期に松尾廃寺が創建される契機となるような土地利用の状況が想定される

京都府遺跡調査報告集 第 146 冊

平成23年 3 月30日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141